二次元ドリームノベルズ

有機企画
挿絵／火愚夜



天煌聖姫 ヴァーミリオン

フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン

18 未満

◉小説 *yuukikikaku*

有機企画

ノクターンノベルズでフタナリ変身ヒロインに感銘を受けた淫語が大好物な生き物。夢は田舎でフタナリ娘と暮らすこと。最近、家庭菜園をはじめホウレンソウを育てている。まだ芽が出たばかりなので今後に期待。宿敵は虫と雑草。

◉挿絵 *kaguya*

火愚夜

挿絵やりませんかと誘われて、生えてるんですかと聞いたところ生えてますよと言われたもんだから、今日私はここにいます。お楽しみいただければ嬉しいです。





◊天煌聖姫◊ ヴァーミリオン

フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン

小説 有機企画
挿絵 火愚夜





登場人物紹介
Characters



天煌聖姫ヴァーミリオン



神城愛華（かみしろあいか）

天王寺学園に通う心優しき少女。母親の冴子に託されて天煌聖姫ヴァーミリオンとなり、デモンコアと戦う。



神城冴子（かみしろさえこ）

愛華の母親。デモンコアとの戦いから一線を退いていたが、ダルルゴアとの戦いのために復帰する。



天煌聖姫セルシアン



エリス

Sクラスのデモンコア。《色欲の夜天》の二つ名を持ち、人間を従順なペットにするのが生きがい。

第一話　参上！　天煌聖姫ヴァーミリオン！
正義の勝利と悪魔幼女の罠！　006

第二話　囚われた紅髪ヒロイン！　触手チンポで屈辱アクメ！　016

第三話　屈辱のフタナリ変身！　スライムに嬲られる美少女の秘口！　034

第四話　羞恥の落書きプレイ！
淫語で汚されていく天煌聖姫の裸体！　049

第五話　参上！　天煌聖姫セルシアン！
Hカップパイズリ&恥垢を舐めとられる人妻ヒロイン！　063

第六話　淫辱のオナホクイズ！
感触をレビューさせられる蒼髪ヒロイン！　081

第七話　汚辱の着衣お漏らし！
息子のそばで辱められる熟れた肢体！　098

第八話　淫辱に侵される学園生活！　触手制服で羞恥オナニー！　118

第九話　恥辱のちんぽチャンバラ！
オークの群れに輪姦される正義のヒロイン！　138

第十話　最悪の痒み責め！
幼女にチンポを掻いてもらう美熟女ヒロイン！　160

第十一話　屈服のコスプレ撮影会！
強制ハイグレ&メイド姿で尿道イジメ！　183

第十二話　這いよる魔手、下着女装で赤面足コキ！
園児幼女に犯される少年の尻穴！　214

第十三話　外人墓地の決闘、そして新たなる調教の幕開け　234

第十四話　学園でブタ鼻綱渡り！
鼻フック羞恥制服で歩く母娘ヒロイン！　243

閑話　恥辱のザーメンクッキング　265

閑話　ゴブリン輪姦と夫の写真にぶっかけ　292

第一話　参上！　天煌聖姫ヴァーミリオン！　正義の勝利と悪魔幼女の罠！

太陽が沈み、空にインクをぶちまけたように暗い夜。
高層ビルの窓に灯る光がオフィス街をぼんやりと照らしていた。地上では様々な人々が家路を急いでいる。どうということはない街の一風景。
しかし、異常は確実に起こっていた。ビルの屋上をすっぽりと覆うように、ドーム状の建造物が出現したのだ。
紫色でクリアな六角形が集まってアーチを描き、まるでSF映画に登場するバリアのようである。明らかに普通ではないが、隣の建物や地上から騒ぎ立てる人間は一人もいない。
建造物はこの次元の物ではないからだ。

「はぁっ……はぁっ……」
屋上へ繋がる扉を開き、学生服の少女がドームの中へ現れた。小柄でスタイルもよく、可愛いという形容詞がよく似合う。
水を含んだ桜色の唇からは熱のこもった息が吐き出される。階段でここまで昇ってきたのか息が苦しそうだ。栗色のロングヘアーがふわりと揺れ、ブレザー制服に玉のような汗が落ちる。
少女は息を整えると、
「わたしはここにいます！　今すぐその人たちを解放しなさい、ダルルゴア！」
決意を込めた眼差しで対面した相手を――いや、侵略者を正面からしっかりと見据えた。
「ゴハハハハ！　よく来たなヴァーミリオン、今日が貴様の最期だ！」
大口を開け返事をしたのは、体長八メートルもあるブタの怪物。巨大な体躯にスパイクのついた鎧を装備

し、手には大斧とモーニングスターが握られている。ドーム型空間隔離領域、エデンフィールドを展開した張本人だ。

　ダルルゴアと呼ばれたそれは魔界からの侵略者、デモンコアの一体であった。デモンコアとはおとぎ話に登場する、悪魔やモンスターの正体だ。彼らは闇に潜み血肉を喰らうために、時として人間の次元へ現れるのである。

　足元には気絶した会社員たちがロープで一括りにされ、囚われていた。

「安心しろ、手など出さん。こいつらは誘い出すためのエサにすぎんからな。さあさあさあっ！　我と全力で戦え！　変身しろ！」

「言われなくても！　セイクリッドギア、セットアップ！」

　スマートフォンめいた小型のデバイスを取り出し叫ぶ。

　次の瞬間、デバイスの中心にある金色の宝石が輝き、目の眩むような閃光が放たれた。

　身に着けていたブレザー制服が光に溶けて消え、一糸纏わぬ生まれたままの姿に戻る。露わになった白い肌をオーロラのベールが包み少女の身体を戦士へと変えていった。

　髪の色が燃えるような深紅に変わり、衣装に変化したベールが可憐に肢体を包む。しなやかな身体にはぴっちりと肌に貼りつく白色のレオタードスーツ。股間にはひらひらとした緋色のマイクロミニスカート。たおやかな手足には白銀のメカニカルなガントレットとブーツ。ロングの紅髪には太陽をモチーフにした髪飾り。最後に張りのある胸部に金色の宝石が装着され、目の眩むような輝きを放つ。

　同時に少女は変身を完了した。

「光は光に！　闇は闇に！　悪いデモンコアは星屑に！　魔を討つは正義の拳！　天煌聖姫（てんこうせいき）ヴァーミリオ

ンここに参上！」

凛とした口調で名乗りを決める。

彼女こそが父の開発したセイクリッドギアの適合者であり、大気に満ちる神聖粒子（しんせいりゅうし）を集約して超人的な身体能力を得た人物。人知れずデモンコアと戦う、天煌聖姫ヴァーミリオンなのだ。

ヴァーミリオンは両の拳を握りしめ、敢然と敵へ突進する。細い脚からは想像もできないトルクが生み出され、瞬く間に距離が縮まっていく。

「そうだこい！　こい！　こい！　ゴハオオオオッッ！　ハァッ！」

疾駆を見たダルルゴアは巨大な魔法陣を展開、紅髪ヒロインを迎撃する。六芒星から出現するのは棍棒を携えたオークの集団だ。豚鼻をひくつかせ緑色の肌からは悪臭が漂う。メスならば同族以外にも襲いかかる危険な種族である。

一体一体が大人の三倍の筋力をもつ怪物で、踏みしめたコンクリートにヒビが入るほどだ。

ヴァーミリオンは速度を落とさない。アクセル全開で突っ込み、オークの群れを薙ぎ払う。

ガッ！　ガッ！　ガガッ！　ガッ！　ドカッ！　ゴシャッ！

「シャインパンチッ！　シャインキックッ！」

「グギャアアア！」「ギャウウウウ！」「グハアアア！」

「ブギイイイ！」

少女が拳や蹴りを放つたびにオークの身体に穴が開き、光と共に塵へ還（かえ）っていく。天煌聖姫の圧倒的なパワーに魔界の怪物でも歯が立たない。一分とかからずに群れが駆逐される。

しかし、デモンコアの強さにもランクがあり、当然序列が存在する。オークの戦闘力はレートBだが、指揮するダルルゴアは現在六体しか確認されていないレートSの強敵だ。しかも少女の母にして先輩である天煌聖姫セルシアンは、サラマンダーの自爆トラップに

巻き込まれ消息不明。ヴァーミリオンはこの戦いを自分の力だけで乗り切らなければならない。

　不安を抑え余力を十分に残しつつ、正義のヒロインは強敵に挑む。

「これ以上は無駄な犠牲が出るだけです。恐れていないのなら直接かかってきなさい！」

「ゴハハ！　いいだろう、《暴食の凶獣（ぼうしょくきょうじゅう）》ダルルゴアいくぞ！」

　怪物の得物と少女の拳が打ち合わされ大気が振動する。凄まじい轟音が鳴り響くが、エデンフィールドのおかげで地上の人々が気付くことはない。

　火花を散らせながら両者は屋上を駆けていく。八十三センチDカップ美乳をプルンと弾ませながら、鋭い拳撃が巨体に突き刺さる。レオタードスーツから桃尻が見えるたびに、華麗なキックが弧を描いて直撃する。幾多の攻防があり、先にチャンスを掴んだのはヴァーミリオンだ。シャインパンチが武器を砕き、鎧を正面から完全粉砕する。何度も強敵を打ち破ってきた実力はついにレートSを上回ったのだ。みぞおちを殴られたダルルゴアは、苦しそうに呻きながらコンクリートの床へ倒れこんだ。

「ゴ……ゴハァッ！　ググ……おのれ……おのれえッ！」

「勝負ありです。二度と人を襲わないと誓ってください。そうすれば命まではとりません」

「グウウ……ウウ……我が……我が……我が敗れることなどあってなるものか！　かくなる上は！」

「!?　ダルルゴアなにを!?」

　一目散に人質へ向かうダルルゴア。どんなに威厳のある態度をとっても所詮デモンコア。勝つためなら手段を選ばない。

「その人たちに手は出さないと言ったはず！　卑怯です！」

「ゴハハハ……知ったことか！　結果こそがすべて

よ！　勝てばいいのだ、勝てば！」

乱暴に人質を掴み笑みを浮かべる。が、しかし、その表情はすぐさま対極のモノへと変化した。なんと人質が水になり溶けてしまったのである。

「なっ!?　ば……バカな！　何が起こった!?」

驚愕するダルルゴアに背後から迫る影。

蒼髪をたなびかせロングスピアーを肩に乗せながら、もう一人の天煌聖姫が登場した。

「予想通りの行動、まったく見下げはてた下種ね。もうしゃべらなくていいから潔く死になさい」

「きっ……貴様はセルシアン！　あの爆炎で生きていたのかッ！」

「ママっ！　よかった……無事だったんだ……」

「ヴァーミリオンその呼び方はやめなさい。ダルルゴア、お仲間ごと爆発させるなんて方法じゃ私は殺せないわよ。娘に心配かけたお礼、たっぷりさせてもらうわね」

「ぐう……ぐううう……！」

鋭い視線を投げかける天煌聖姫セルシアン。コスチュームはヴァーミリオンと同じだが、彼女のレオタードスーツは黒。スカートや装備も蒼を基調として揃えられていた。

艶やかな前髪をまっすぐ切り揃え、後ろ髪は腰まで伸ばしている。月をモチーフにした髪飾りが夜闇に淡く光る。引き締まった肉体はモデルのようで、子供を産んでいるとは思えない。さらに胸の存在感が抜群で、スーツに押さえつけられた九十八センチHカップ巨乳が少し苦しそうである。

セルシアンはロングスピアーを一回転させると力を行使した。

「ハアアァァッ――――、アクアバインドッ！」

槍を中心に水流が巻き起こると鎖の形になり、ダルルゴアの体躯を締め上げ拘束する。神聖粒子を水に変換し操る彼女は変幻自在のスキルを使えるのだ。人質



を音もなく救出し、水人形とすり替えたのもこの技である。
「が……グオオオオオッ！　離せっ！　はなせええぇッ！」
「あきらめなさい。あなたに待つのは虚無だけよ」
いよいよ決着の時だ。ヴァーミリオンは神聖粒子を手のひらに集中させると、まっすぐ、ダルルゴアへ向けた。ガントレットが熱を帯び、エネルギーの余波が地鳴りを起こす。
「ご……や、やめろォ！　わ……わかった、我が悪かった！　もう人間に手出しはしない！　だ、だ、だからっ！」
「天上の光が魔を滅ぼす！　必殺ッ！」
「ま……頼む待て、わ……我は暴食の凶獣だぞ！　こんな……こんな……こんなところで、ちっぽけな小娘なぞにイイイイイイイイッッ!!」
「セイクリッド・シャイン・バーストッッ!!」
太陽のごときエネルギー波を束ねヴァーミリオンは撃ち出した。衝撃でエデンフィールドに亀裂が入るほどの高出力だ。それは一直線にダルルゴアへ殺到し、爆発を巻き起こした。
ズドオオオオオオオオオンッ！　オオオオオオオオンッ！
「グッ……グ、グッッギャアアアアアア!!」
強烈に迸る光の奔流を受け、ダルルゴアの肉体がこの次元から消滅する。あとには黒ずんだ塵だけが残り、魔力の反応が完全に消失する。こうなっては再生もかなわない。
「はぁ……はぁ……か、勝ちました！」
緊張と安堵がないまぜになりながら、勝利の声を上げる。
紅髪ヒロインは年頃の少女の表情に戻ると、セルシアンに抱きついた。豊満なバストに顔を埋め、力いっぱい母親に甘える。目元にはうっすらと涙が浮かんで

いた。一人での戦いはまだまだ不安が大きく、内心ブルブルだったのだ。

「ありがとう、ママのおかげだよ！　わたし……わたし一人じゃ……」

「なに言ってるの。レートS相手に見事な戦いだったわ。さあ、帰りましょう」

「うんっ！」

エデンフィールドを解除し家へと帰る天煌聖姫。

しかし、二人は気付いていなかった。

雲の狭間で一部始終をうかがっていた者がいることを。

「ふーん……あれが天煌聖姫……親子なんだ。キャハ、キャハハハハ！　い～～っぱい楽しめそう♪」

闇の中で少女の形をしたデモンコアが、三日月のように口を歪めて笑った。

◆◆◆◆

「うわーん、遅刻ですっ！」

ヴァーミリオンこと神城愛華はいきなりピンチに陥っていた。昨晩の疲れでぐっすり眠り、無意識の内に目覚まし時計を止めてしまったのだ。

急いで制服に着替え身だしなみを整えると、階段を降りダイニングルームに転がり込む。テーブルにはパンや目玉焼き、サラダの入った食器が並べられていた。椅子に座ると急いで口に運び、手品のごとくお腹にしまっていく。

その様子を見て愛華の母、セルシアンこと神城冴子が苦言を呈した。髪の色は蒼ではなく艶やかな黒に戻っている。

「もう、眠りすぎよ。疲れているのはわかるけど、学校へ行くのも立派な使命なんだから」

「ごめ～んママ。ベッドが気持ちよすぎて～」

「物のせいにしちゃダメだよ姉ちゃん。だらしないなー」

姉ちゃんと呼ぶのは弟の陽一だ。まだ時間に余裕が

あるのか、のんびりと食パンを食べている。大人しい印象を受けるが、彼もまたデモンコアとの戦いに関わっている。

適性値の関係で変身はできないが、冴子と共同でアイテムを開発しバックアップを担当している。愛華に悩みを相談されることもあり、一家になくてはならない存在だ。

「わかってるよー、陽一。あ、もういくね！　いってきます！」

「いってらっしゃい」

「遅れるなよー」

何気ない会話を愛おしく感じながら、愛華は玄関のドアを開けた。この生活を守るために変身して戦ってきたのだ。たとえどんなに敵が強大でも。

神城家は四人家族で父親は海外でデモンコアの研究をしている。愛華がヴァーミリオンに変身したのも父の書斎でセイクリッドギアを発見したからだ。すでに天煌聖姫として人類を守っていた冴子は反対したが、学園の友達や街のみんなを助けるために、彼女は変身することを選んだ。

「がんばれ、わたしっ！」

自転車に乗って春から通いはじめたばかりの、天王寺学園への道を走る。河川敷を通り商店街を進んでいく。身体を鍛えている愛華はかなりのペースでペダルをこいでいった。

このペースなら始業のベルに間に合いそうだ。

と、廃工場の前を通りかかったところで栗髪少女はペダルから足を下ろした。中から女の子の声が聞こえたのだ。ショートカットするために裏道を選んだので、周りに人がいる気配はない。

門をくぐって様子を見ると、

「いやあああ、助けてー！　パパー！　ママー！」

声は悲鳴へと変わった。

緊急事態が起きていることはわかる。遅刻を気にし

ている場合ではないと、愛華は工場の扉に手をかける。幸いカギはかかっていなかったので、すぐに中へ入ることができた。

そこにあったのは打ち捨てられてホコリを被った機材と、怪物を前にした女の子の姿だった。

怪物はウェアウルフのデモンコアで、ナイフのような爪を立て、今にも幼い身体を引き裂きそうだ。

もはや一刻の猶予もない。セイクリッドギアを取り出し変身する。

「セイクリッドギア、セットアップ！」

瞬きの内に愛華はヴァーミリオンへと変わった。灼熱を想起させる紅髪を風になびかせ、ガントレットをウェアウルフの顔面に叩き込む。

「シャインパンチ！」

「グギャアアアア！　アアアアア！」

頭部を爆散させ塵になるウェアウルフ。レートCの下位デモンコアだったようで簡単に勝負は決着する。

女の子に駆け寄り怪我はないかとヴァーミリオンは心配した。

「だいじょうぶ？　どこも痛くない？」

「ヒック、エッグッ……う……うん、平気だよお姉ちゃん。あの……助けてくれてありがとう。こ……怖かったよぉ」

「よかった……無事ですね」

ホッと胸を撫で下ろし、勝利の余韻に天煌聖姫が警戒心を緩めた。早朝から子供がこんな場所にいる不可解さに気が回らない。

そして、その一瞬が命取りになった。

「なーんてね☆　油断しちゃったかな？　ヴァーミリオンのお姉ちゃん」

「えっ!?　あなたは――」

急速に高まる魔力反応を警戒したがもう遅い。

女の子の牙が首筋に食い込み、そこで意識は途切れた。

第二話　囚われた紅髪ヒロイン！触手チンポで屈辱アクメ！

「んっ……っ、わたし、は……い……一体……？」

重い目蓋を開きヴァーミリオンは目を覚ました。少女を助けた時からの記憶がなく、身体には鉛でも飲んだようにぶ厚い倦怠感が纏わりついてくる。視線を下に向けると白いシーツが映り、床から少し高い位置にいることがわかる。どうやらベッドの上で仰向けになっているようだ。

起き上がり事態を把握しようと思ったところで異変に気が付いた。両手両足がロープのようなもので固定され、身動きが取れないのである。X字に拘束された紅髪美少女は力を込めて引き千切ろうとしたがビクともしない。体内から神聖粒子も感じ取れず、天煌聖姫としてのスペックをまったく発揮できない。わけがわからず困惑するヴァーミリオン。

セルシアンに連絡しようと考えたその時、助けたはずの少女が現れた。

「おはよう、愛華お姉ちゃん。気分はどう？」

「ど、どうしてわたしの名前を……？」

「ちゃ～んと下調べはすませたからね。天煌聖姫ヴァーミリオンのプロフィール♥　今は三人暮らしで母親は天煌聖姫セルシアン。趣味は料理とぬいぐるみ集め。カワイイな～」

（わ、わたしたちの情報がバレてる!?）

正体を知られ動揺するヴァーミリオンに、人懐っこい調子で微笑みかける。顔や身体の大きさは先ほどと変わりないが、発散させる魔力はまったくの別物であった。コールタールのようにドス黒い力の渦が背後に見える。衣装も煽情的になり、まるでサキュバスのようだ。

肩の高さに揃えられ、左右を赤いリボンで結ばれた金色のツインテール。耳は細長く尖り、口からは小さなキバも見える。小柄な身体を覆うのは夜闇のような漆黒。胴にはエナメル質のボンデージスーツにスカート、手にはロンググローブ、脚にはガーターベルトとストッキングにニーハイブーツ。可愛らしいヒップからは先端にハートのついた尻尾がヘビのように伸びくねっている。

その格好がコスプレではないとヴァーミリオンはすぐに確信できた。湧き上がる魔力がレートS、ダルルゴアと同等だったからだ。

見た目は十歳くらいだが、幼い言葉づかいの中に何百年も生きてきた者が持つプレッシャーを感じる。

「その魔力……ッ!?　あ、あなたまさか……デモンコア!?」

「キャハ☆　驚いた？　正体を隠すのは得意なんだよね～スゴイでしょ」

「隠すとかそういうレベルじゃありません！　レートSは六体しか発見できていないはず……なのにどうして、どうしてダルルゴアと同じ魔力量なんですか!?」

「レート？　ああ、お姉ちゃんたちが決めた基準ね。あのブタと一緒にされるのはイヤだけど、ていうか次言ったらぶっ殺すけど、実力も年齢もフツーに上だからね。この次元に来たのは最近だから知らないのもムリないだろうけど、Sっていうのならその通り。七人目かな」

「ッ……と、とにかくこれを外してください！　正々堂々と勝負です！」

「や～だねっと、なんでそんなことしなくちゃいけないの？　戦いなんていかに楽してヨユーで勝つかが重要じゃん？」

「くっ……うぅ……」

敵の飄々とした態度に歯噛みする。デモンコアには目的の達成に手段を選ばないタイプが多いが、彼女も

例に漏れないようだ。
「それより左のオッパイを見てよ、おもしろいマークが見えるから♥」
「左の……胸……？　スーツの下に何か……うっすらと……？」
「それはね淫紋っていうの♥　刻まれた人間は魔界の住人に反抗的な行動ができなくなるんだよ。だ・か・ら、お姉ちゃんは逆らえないし、こっちで命令を送る限りセイクリッドギアの能力も使えないってわけ♪」
　魔界の幼女が言うと左胸が淡く光り、ピンク色のハートマークが浮かび上がった。そこから伸びる魔力がツタのように天煌聖姫の自由を奪っているのだ。
「くっ……しゃ、シャインパンチ！　キック！　うそ……ほ、ほんとにでない……！」
「ね、ホントでしょ？　これがあるといろいろ便利なんだよね～」
「あ、あなたは何者なんですか……？」
「聞かれたら自己紹介しないわけにはいかないよね。キャハ、デモンコア《色欲の夜天》、エリスだよ♥　今から天煌聖姫ヴァーミリオン、お姉ちゃんをい～っぱい可愛がってペットにしてあげるね♪」
「えっ!?　か、かわいがる……？　ペット……？」
「もー、にぶいなぁ。これまでさんざん侵略の邪魔してくれた恨みを晴らすって言ってんの。そのためにわざわざ次元を渡って来たんだから。もちろんエッチなエッチな悪戯で、エリス専用の変態ペットにしちゃうから楽しみにしててね♥」
「――――ッ!!　さ、最低です！　わたしに触ったら許しませんから！」
「いいよ～別に♥　すぐにそんな口もきけなくなるから♥」
　悪魔幼女の宣言にゾワゾワと産毛が逆立つ。生き物としての本能が全力でアラートを告げているが、逃げる手段がない。個人情報もすべて知られてしまい、仮

にここを切り抜けても捕まってしまうだろう。
　戦い続けることで敵の恨みを買うことは理解していたはずだが、いざ自分が復讐される立場になってみると怖くてたまらない。それに性的な拷問を予感させるならばなおさらだ。
　アイドル顔負けの容貌に冷たい汗が流れる。
「それじゃはじめるね～。最初は～えっと、ここかな♥」
「んっ――あ、そ、そこはっ！」
　エリスが触れたのはレオタードスーツの下で息づくDカップ美乳だ。指先で乳頭をつまみコリコリと転がしていく。お風呂場以外では触ることのない部分を擦られる。むず痒い生まれてはじめての感覚に、紅髪ヒロインは身をよじった。
　コリッ♥　コリッ♥　コリコリッ♥　コリリッ♥
「ひぅ……ンッ、や、やめてください！　さ、触らないで……うぅンッ！」
「あれ？　お姉ちゃん乳首オナニーとかしたことないの？」
「し……しませんっ！　するわけないです！　お、オナ……ニーなんて……そんなこと……」
「あれあれ～？　ひょっとしてオッパイもおマンコも初体験なのかな～？　これじゃエッチとかもしたことないっぽい～～♥　キャハハ、お姉ちゃんって処女なのかな？」
「い、言いません……ア、ふぅ……ああ……そ、それより早く解放しなさい！　い、今ならまだ許してあげます！」
「んー、ま～～だ自分の立場がわかってないみたいだね。お姉ちゃんを生かすも殺すもエリスの指先一つなんだよ？　質問に答えないならこのオッパイ潰しちゃおっかな～♥」
「いやぁっ……ううぅ……！　む、胸やめてぇ……ッ！」

乳首を引っ張り上げ爪を立てる悪魔幼女。針で刺したような痛みが走り、しなやかな肢体がビクンッビクンと跳ねる。

身体の奥底でこそばゆい快感が生まれ、未知の扉を開かれてしまいそうだ。桜色の唇からは知らない内に甘い吐息が漏れ出していた。

生殺与奪権を握られ唇を噛む正義のヒロイン。だが、身体の疼きは増すばかりで、質問に答えなければ頭がどうにかなってしまいそうだ。戦いばかりで性の知識に乏しい少女は、顔を真っ赤にして羞恥質問に答えてしまう。

「もう一度聞くね。お姉ちゃんオナニーの経験は～？」

「っ……な……です……」

「聞こえな～～い♥　はいっ、もう一回！　もう一回！」

「な……い……っ、です……」

「も～～っと、もっと大きな声で♥　早くしないと乳首なくなっちゃうよ～？」

「んっ……あぐっ……な……ないです！　オナニーなんてしたことありませんっ！　そ、そういうのよくわからないんです……あ……うくうぅう……いやぁ……」

「やっぱりね♥　トーゼン、エッチもまだだよね？　おしっこ臭い処女なんでしょ～～？」

「うぐっ……そ、そうです……しょ、処女です……処女です！　処女です！　い、一度もエッチしたことありません！　付きあった男の人もいません！　だ、だから……ンぅぅ……お、オッパイいじめないでぇ……あうぅ……んっ、ぐうぅ……へ、変になっちゃうぅぅ……っ！」

「やっぱりそうなんだ～～、真っさらな女の子を調教できるなんて興奮しちゃうな♥　キャハハハ♥　正直に言えたご褒美に、次は～お股、おマンコを触ってあげるね♥」

「はう……あ……ぇっ⁉　い、いや……いやあぁぁぁっ！」

女性器を弄ばれると知り、イヤイヤとかぶりを振る紅髪ヒロイン。エリスは気にする様子もなく白いレオタードスーツの上から乙女の秘裂を撫で上げた。

割れ目にそって指をすべらせていくと、ピクピクと魚が跳ねるように肢体が痙攣する。それを何度か繰り返していくと。ヴァーミリオンの股座がじわりと湿り気を帯び、薄いシミが広がった。

シミは動きが速まるにつれて広がり、いやらしい水音を奏でる。やがて愛液と一緒にクリームチーズのような牝臭が部屋に発散されはじめた。

しゅり♥　しゅり♥　こしゅりっ♥　しゅしゅり♥　ふにっ♥　ふにっ♥　ぷににっ♥

「ふ、ふぐうぅ……あっくっ……そ、そこダメですぅ……ッく……」

「不思議だね～～お股が湿ってきてるよ♥　どうしたのかな？」

「こ、これは……あの……その……」

「もしかして気持ちいいの？　エリスの指でおマンコ感じちゃってるのかな♥　お姉ちゃんって真面目な顔してスケベなんだね♥　エロ女なんだ♥」

「ち、ちがっ……そんなことないです！　わたしエッチな女の子じゃありません！　指で触られたくらいで感じてなんかいませんっ！」

「じゃあ、このお汁は何かな～？　指がベタベタするんだけど♥」

「えっと……あ……ううぅ……」

「答えられないんだ～♥　具体的に説明しないとスケベ聖姫決定だよ♥」

「ううっ……あ……ぐ……あっ、汗です！　そ……そう、汗をかいただけです！　何もいやらしいことなんかありません！　緊張による発汗で湿っているだけです！」

「ホントかな～？　嘘だったら罰を与えちゃうよ～？」

「ほ、ほんと！　本当です！　ぜ、絶対に感じてなんかいません！」

必死に股シミを否定するヴァーミリオン。膣孔から淫蜜がこぼれだしているなど、何が何でも認めたくない。幼女に軽く愛撫させただけで濡れる淫乱だなんて信じたくなかった。正義の天煌聖姫は決してスケベではないと、自分に言い聞かせる。

だが、妖しい疼きはどんどん大きくなり、紅髪ヒロインは秘めていたマゾヒズムを開花させようとしていた。口から漏れ出る喘ぎ声も少しずつ大きくなっている。

おヘソの辺りがジクジクと熱を持ち、股の淫臭が脳を溶かしていくようだ。

「ふ～ん、まっいいよ。今は信じてあげる♥　エリスはピュアだから、人を信じる気持ち忘れてないよ♥」

「そ、そうですか……」

「次はこれをヤッてあげるね♥　エリスの秘密を見せてあげる♥」

「秘密……？」

「うん！　は～～い、スカートぺろ～～ん♥」

「――――え？　き……き、きゃあぁぁぁっ!!」

悪魔幼女が晒した鼠蹊部（そけいぶ）を見て、ヴァーミリオンは悲鳴を上げた。なぜならそこにあるはのボンデージスーツの布地でもなく、ツルツルの恥丘でもなく、グロテスクな赤黒い触手の塊だったからだ。

まるでイソギンチャクのような触手たちはウネウネと蠢き、表皮は粘液でヌメヌメと光っていた。先端部は男性のペニスそのもので、先走りの透明な液体も見ることができる。

全体からおぞましい魔力が感じられ魂まで凍りつくようだ。戦闘で触手型のデモンコアを倒したことはあ

ったが、そのどれもが戦いの最中に秘所を狙って攻撃してきたことは気付いていた。
なるべく考えないようにしていたが、自分が欲望のはけ口に見られていると思うとゾッとする。
牝の性欲を具現化したような存在に天煌聖姫は震え上がった。
「かわいいでしょ？　お姉ちゃんのために生やしたんだよ♥　エリスは女の子だけどこれでエッチができるんだ～♥　エヘヘ、フタナリおチンポ触手で遊んであげる♥」
「い……いやあぁぁぁぁっ！　ち、近寄らないでっ！　触手なんてイヤです！」
「好き嫌いはよくないな～♥　触手チンポ。レディーゴー！」
「あ……や、やめてえぇぇぇぇっ!!　いやあああぁぁぁぁっ!!」
紅髪ヒロインの悲鳴を無視してフタナリ触手は襲いかかった。悪臭を放ちながら乙女の肢体を駆け上がっていく。ぬるついた動きで狙いを定め、最初のターゲットはDカップ美乳だ。エリスが粘液の濃度を調整すると、レオタードスーツの生地の部分だけが溶け落ちた。やわらかなオッパイが露わになり、サクランボ乳首とその下にある小ぶりな乳輪が外気に晒される。
細い触手が一番乗りと螺旋状に巻き付き、ギュムギュムと乳房を圧迫していく。雪白の肌を蹂躙されヴァーミリオンは苦悶し、背筋をのけ反らせた。
くにゅっ♥　ふにゅっ♥　むにゅっ♥　むにゅっ♥
ふにゅにゅっ♥　もにもにゅっ♥
「んん～～～っ！　はぅ……んくぅ……や、やめ……オッパイ揉まないでぇ、あっ……ひゃうぅぅ……あくうぅぅぅ～～！」
「乳首たくさん弄ってあげるね♥　ほらほら触手キャ～～ッチ♥」
「はうぅぅぅ～～～！　ンッ……き、キツイぃぃ

いぃ！　締めないでえ……くうぅ……ひっく……乳首がせつないぃぃ……」

乳頭を吊り上げられ美乳が釣鐘のように歪む。痛みと快悦が同時に襲来し紅髪ヒロインは歯を食いしばることしかできない。

身体が別のモノへと変えられていく恐怖と戦いながら、不快感のある粘液に耐える。どんなに陵辱されても心までは屈しない。

だが、その想いは長続きはしなかった。

急速に身体が熱くなり肉欲が沸騰したのだ。

「んっ……あぐうぅぅぅッッッ！　ひぅぅ……な、何を……あんっ……か、身体が熱い……っ！」

「エリスの触手には媚薬の効果があるんだよ♥　ほ～ら、どんどんエッチな気分になってきたでしょ♥　お姉ちゃんをこれからエッチなマゾ牝に作り替えてあげるからね♥」

「ひぐうぅぅぅぅ～～～～！　は、あぐっ……わたしは……ま、負けない……ま、マゾ牝になんてなりません……！」

「はいはい♥　あ、そうだキスの経験もないよね？　大事なことなのに忘れちゃってた☆」

「な、ないです、けど……それがどうしたんですか……」

「せっかくだからキスの仕方を教えてあげようと思って♥　やったぁ、エリスがはじめての相手だ♥」

「ま、まさか……」

「うん♥　触手チンポとキスしてもらいま～～す♥」

「や、やあああぁぁぁ～～～～！　き、キスはダメ！　ダメ！　ダメぇッッ！」

唇を奪われると知り抵抗するヴァーミリオンだが、四肢が拘束されては避けようがない。フタナリ触手は大蛇のようにかま首をもたげ、みずみずしい桜唇に接近する。

亀頭部分が透明な涎を垂らしながら距離を縮め、数

秒後二つが重ね合わされた。

ちゅっ♥　ぷちゅっ♥　ちゅくんっ♥

「んんん～～～～!!　んっ！　んぐうううぅぅぅぅ～～～～!!」

「ファーストキスおめでとうお姉ちゃん♥　唇より先にチンポに口づけする女の子なんて滅多にいないよ♥　やったね、これで変態に一直線だね♥」

「や、やあ……んぐっ、むううう～～～～!!」

「あ、クチビルだけじゃつまんないよね♥　ディープキスのやり方も教えてあげる♥」

「ふううぅぅ～～～～！　おぐっ……ごっ……はぐっ……おごおおぉぉおおぉぉ～～～!!」

ヴァーミリオンのリップガードを突き破り、口内へチンポ触手が侵入した。生臭い精臭がいっぱいに広がり、胃の中のモノを吐き出してしまいそうだ。

けがらわしい汚臭をまき散らしながら、触手はくねり内壁に、舌に、歯茎にと淫靡なお汁を塗り付けていく。呼吸するには鼻で吸うしかなく、フゴフゴと荒らげる鼻息が余計に惨めさを倍増させる。自分が汚されていく感覚に、正義のヒロインは涙を浮かべた。

ズボッ♥　ジュボッ♥　ググググッ♥　ズチュッ♥　グズチュチュチュッ♥

「ああ～～ん♥　お姉ちゃんのお口気持ちい～～い♥　おチンポ蕩けちゃいそう♥　あ、これってディープキスじゃなくてフェラチオの練習かな？　いっけな～～いエリス間違えちゃった♥」

「ふぐっ……うぐ、うぐうううぅぅぅ～～！」

「ちゃ～～んと舐めてね♥　でないと一晩でもこのままだから♥　チンポの匂いがとれなくなっちゃうよ♥」

「はぐっ!?　んん～～！　んっ……ちゅ……うむ……ちゅ……」

「そうそう舌をよ～～く絡めてね♥　歯は立てちゃダメだよ♥　ンッ♥　ふううぅぅぅ～～♥　あんっ、

上手っ♥　上手だよ♥　はぁんっ♥」
「んく……ちゅば……く、くちゅちゅ……ちゅぷ……はぷう……っ」
「やぁんっ♥　いいよぉ～～♥　カリ首の裏側もきっちりお掃除してね♥　チンカスチーズもキレイキレイしてぇ♥　触手チンポディープキスがんばってぇ♥」
「うぐぐ……はぐ……ちゅ、くっ……じゅくっ……ちゅぷり……あむん……ちゅぐ……ひゅぐう……」
「ふぁあ～～ん♥　ァっ♥　もう出ちゃいそう♥　射精は知ってるよねお姉ちゃん♥　もうここで出しちゃうね～～♥」
「ふぎゅうううぅ～～～～!?　んんんん～～～～!!」
　突然の射精宣言に紅髪ヒロインの瞳が見開かれる。男性にそういう器官があることは少女漫画などで知っていたが、まさかここで出すつもりとは思わなかった。初心なヴァーミリオンにとって精液などオシッコと変わらない、いやもっと汚くて恐ろしいものだ。それを口の中に発射されるなどたまったものではない。
　唇を肉竿から離そうとするが、頬にも触手が這いより顔の位置を固定されてしまう。
　焦燥とは裏腹に悪魔幼女のフタナリ肉茎はどんどん膨れ上がり、浮かぶ血管と肉幹で口の中は覆い尽くされてしまった。
「あんっ♥　ふううっ♥　あっ、もうイキそう♥　おチンポ汁でる♥　ザーメンでるぅ♥」
「んんんん～～～～！　むぐっ、ふぐ～～～！　ぐううううぅぅぅ～～～～!!」
「エリスの濃厚フタナリチンポエキス全部残さず飲んでね♥　残したらもう一回出しちゃうから♥　はうっ♥　あうっ♥　あんっ、いいっ♥　チンポいいよぉっ♥」
「ふ……ふぐうううぅぅぅ～～～～!!　んぐ、んんん～～～！　むぐんっ！　む、はぐううううぅぅぅ



～～～～!!　おぐうううぅぅぅ～～～～!!」

「きゃは～～ん♥　あ、イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イク♥　フタナリチンポ最高っ♥　チンポ♥　チンポ♥　触手チンポ♥　ハウッ♥　で……でるでるでるでる～～～～♥　エリスのチンポザーメンでるうううぅぅぅ～～～～♥♥　イッッックううううぅぅぅぅ～～～～♥♥」

　ド、ドピュッ♥　ドピュッ♥　ドピュッ♥　ドピュッ♥　ドピュピュピュピュウウゥゥゥ～～～～♥　ブピュッ♥　ボビュビュッ♥　ブビュルルルル♥　ボビュビュビュビュビュウウゥゥゥ～～～～♥　ブピ♥　ドッピュンッ♥

「ン……んぐうううぅぅぅぅ～～～～!!　はぐ、んんぐうっ！　ふ、ふぐうううぅぅぅぅ～～～～!!　ごぶっ！　ごぶっ！　ごぶっ！　ぶぶぶぶぶぅぅぅぅ～～～～!!」

　下品な射精音と一緒に濃厚な白粘液がヴァーミリオンの口内を満たしていく。目が痛くなるほどの精臭があふれ出し、スペルマのイカ臭い匂いと苦みが乙女の舌をイジメぬく。

　すぐにでも吐き出して水で洗浄したいが、こんなことをもう一度されてはたまらない。言われた通り必死でザーメンを嚥下する紅髪ヒロイン。

　最悪の形でファーストキスを終えてしまった。

　エリスはフタナリ触手を引く抜くと、満足そうにお腹を撫でた。射精の余韻でしばらく動けず、恍惚の表情で虚空を見つめている。

（――――く、くさい！　汚い！　も……もういやぁ……わ、わたし……汚されちゃった……男の人のアレで……ううう……ひどいです……）

　可憐な心をズタズタに引き裂かれていく。惨めで恥ずかしくて消えてしまいたい。生臭い匂いが一生とれない気がした。

　残ったのは、射精を終えたのだからもうこれ以上責

められることはないという希望。それだけがヴァーミリオンの支えであった。

しかし、当然のごとく彼女の希望は打ち砕かれる。

悪魔幼女がひときわ大きいフタナリ触手をくねらせ、股座に押し当てたのだ。布ごしに伝わる亀頭の感触が不安を煽る。

「は～～気持ちよかった♥　じゃ、あとはおマンコに挿れてあげるだけだね♥　キャハハハ、初体験がんばってねお姉ちゃん♥」

「や、ウソ!?　ひ……ひぃっ、だ、ダメですっ！　い、今出したばかりじゃないですかっ！」

「だって～お姉ちゃんウソつきだし、罰を与えないといけないでしょ？」

「なにを……わ、わたしは嘘なんて……」

「またまたとぼけちゃって～～、汗なんて大ウソじゃん♥　フェラチオでおマンコびしょ濡れだよ♥　いやらしいな～～スケベヒロインちゃん♥」

レオタードスーツのシミは大きくなり、白い股布はもうびしょ濡れだ。おねしょをしたように、内側の媚肉もはっきりと見える。触手フェラチオで感じていたという、決定的な証拠である。

恥ずかしい現実を突きつけられ、しどろもどろになってしまう紅髪美少女。

「あっ……やあぁぁ……これは……そ、その……」

「言い訳は聞きませ～ん♥　エリスの極太チンポ触手を突っ込んじゃいま～す♥　イエ～イ♥」

「や、そ、そんなの入らない……大きすぎます！　い、いやあぁぁぁぁぁッッ！　やめてえぇぇぇぇッッッ!!」

懇願もむなしくレオタードスーツの股布が粘液に溶かされる。マイクロスカートの下にある、絶対に人に見せたくない秘所が丸見えだ。ぴったりと閉じられていたクレヴァスは、満開の花のように咲き誇り、愛液でビショビショである。秘口からはクリームチーズの

ような牝臭が発せられ、肉棒を虜にせずにはいられない。

エリスは躊躇なく巨大な肉キノコを媚肉へ挿入した。十分に水気を帯びた膣壁は触手粘液の効果もあって、いともたやすく陵辱者を迎え入れる。

（――――あ、ああ……わたしの中にペニスの怪物が入ってくる……うぅ……は、はじめては好きな人とするって決めてたのにぃ……）

最悪のカタチで初体験をしてしまう紅髪聖姫。大切なところを嬲られる悔しさに涙を流す。だが、少女の気持ちとは裏腹にマゾ快感に目覚めた肉体は、貪欲に勃起陵辱者を咥えこむ。お腹の中を満たす肉悦にヴァーミリオンははしたなく喘ぎ、膣内壁はフタナリ触手を喜ばせようと淫靡に動く。

（ひっ、ひうぅぅ……な、なんでこんなのが気持ちイイのぉ……触手に犯されるなんていやなのに、いやなのに、いやなのに！　か……感じちゃうぅ……はぅぅ……っ！）

嫌悪感を覚えながらも魔悦の大海に翻弄される天煌聖姫。エリスの巧みな触手コントロールで理性が砂糖菓子のように崩れていく。

身体の芯がぼうっと熱くなりますます肉棒を求めてしまう。性の知識に乏しい変身ヒロインは未体験の肉欲に翻弄される。

だが、快感ばかりが長く続くわけではない。ヴァーミリオンは気持ちよさばかりに気をとられ、一番大切なことを忘れていたのだ。

そう、自らが処女であるということを。

触手チンポは薄い膜に到達すると一気に純潔を引き裂いた。電流が走るような強烈な痛みが少女の意識を覚醒させる。

ブチッ！　ブウチッ！　ブチブチブチッ！　ブチビチイイィィィッ！

「ひ……ひぐううぅぅぅ～～～～！　い、いたい

っ！　いたいっ！　いたいっ！　いぎいいいいいいいい～～～～！」

「処女喪失かんりょ～～う♥　心配しないでお姉ちゃん、粘液に媚薬効果もプラスしてあげるから♥　これですぐにまた気持ちよくなれるよっ♥　あんっ♥　んっ……あ……ンン♥　はぁんっ……おマンコすっごい♥　んくん♥　ふぁぁ♥　お口より好きかも♥」

「あうう……ひどいぃ……わ、わたし……ぅぅぅ……」

股間から鮮血を垂らしながら唇を噛む貫通ヒロイン。大事なモノを失ってしまい純情なハートを細切れにされる。さらに嫌なのはエリスの言葉通り、もう身体が痛みに慣れ、媚薬の効果で快感を得ようとしていることだ。

触手のテクニックに子宮が下り、男性の子種汁を求めてしまう。金髪幼女も腰の動きを速め、射精への階段を昇っていく。

「あんっ♥　あんっ♥　あんっ♥　ハァ～～ン♥　もうダメッ♥　ザーメン出ちゃいそう♥　いいよね変態お姉ちゃん♥　初マンコにた～～くさん注いであげる♥」

「は……はぐうぅぅっ！　も、もう許してっ！　お、お願いだから中はやめてぇ！　妊娠しちゃうっ！　触手の赤ちゃんできちゃいますからぁっ！」

「エリスがママになってあげるからダイジョウブだよ♥　あ、ひゅぅぅ……うんっ♥　もうイクッ♥　イクイクイクッ♥　イクッ♥　一緒にイこっ♥　初エッチで感じまくっちゃうスケベお姉ちゃん♥」

「あ、やぁ、だ……だめ……き、きちゃうっ♥　わたしもきちゃうっ♥　あひゅ……ふぅぅ～～ッ！　ふあああぁぁぁぁ～～～～♥」

嬌声に合わてフタナリ触手が亀頭を膨張させ、凄まじい勢いで精を吐き出した。水道の蛇口を捻ったような激しさで白濁液が噴出する。

紅髪ヒロインの膣孔は真っ白に満たされ、二人は同

時に淫猥アクメを極める。
　ドクンッ♥　プピュ♥　ブリュ♥　ブ、ブリュリュリュリュウウゥゥ～～～～♥　ブチュッ♥　ボビュビュッ♥　ドピュッ♥　ドピュッ♥　ズビュビュッ♥　ビュリュリュリュウウゥゥ～～～～～♥　ドビュビュビュビュウウゥゥ～～～～♥
「キャハアァァ～～～～ン♥　アン♥　ぁんっ♥　チンポチンポチンポチンポ触手チンポイクううううぅぅぅ～～～～♥♥　エリスの濃縮ザーメンミルク出まくるうううううぅぅぅ～～～～♥♥　処女マンコに中出ししちゃううぅぅ～～～～ッ♥♥」
「――――ひぐっ♥　ふあっ♥　あっ……ふあああアアアァァァ～～～～♥　イクっ♥　あ……熱いのがきちゃうっ♥　ンくうううぅぅぅ～～～～♥　はじめてなのにぃ♥　はじめてなのにイッちゃうううぅぅうぅぅ～～～～～♥♥」
　フタナリ触手からスペルマを撃ち出し絶頂する悪魔幼女と、膣内射精で初絶頂する紅髪ヒロイン。淫靡な香りを漂わせ、互いに淫悦に溺れていく。
　肉竿からスペルマを撃ち出す気持ちよさと、膣内をスペルマで満たされていく心地よさが理性をトロトロに溶かしていった。
　ぱっくり開いたピンクの割れ目からは、ドロリとした白粘液がこぼれ。陵辱の様を如実に語っている。
　そして、一足先に余韻から戻ったエリスは容赦なく言葉で変身ヒロインを責めていく。レートSデモンコアの圧倒的な嗜虐心はこの程度で収まらない。
「ふう♥　これでファーストキスも触手チンポ、初エッチも触手チンポだね♥　ねぇ、お姉ちゃん今どんな気分？　大切な処女膜を化け物チンポに奪われるってどんな気分？　触手で中古マンコにされるってどんな気分？　この先彼氏ができても一生触手チンポと比べることになるんだね♥　キャハハハ♥　かわいそ～～～う♥」

「あぁ……うぁ……えっぐ……う、うぅ……」
「ほらほら～～、なにか言いなよ♥」
「け……ません……」
「ん？　なんて～～？」
「負けませんっ！　わたしは絶対に屈したりなんかしません！　この胸の煌めきがある限り必ずあなたに勝ってみせます！」
「キャハ、そうでなくっちゃ♪　まだまだこれからだよね、お姉ちゃん♥」
最悪の事実にうつむいても、太陽の心で復活し、気丈に宣言する紅髪ヒロイン。
正義は決して負けないと知っている。
だが、悪魔幼女の姦計ははじまったばかり。
戦え！　勝利せよ、天煌聖姫ヴァーミリオン！

第三話　屈辱のフタナリ変身！　スライムに嬲られる美少女の秘口！

ヴァーミリオンは拘束を解かれ、埃っぽい床にへたり込んだ。自分の非力さに歯噛みしたところで、膣内射精のダメージでまともに立つこともできない。

このまま殺されるのだろうかと、紅髪美少女の胸中を不安の雲が覆い隠す。淫紋がある限り反撃することもかなわず、状況は依然ピンチのままだ。

エリスはその様子を楽しげに眺めると、金髪ツインテールを指先で弄びながら、さらなる恥辱を与えようと動き出した。

「ねぇ……エリスとゲームをしない？」

「ゲーム……？　な、何を企んでいるんですか……ま、またわたしにいやらしいことをするつもりですね！」

「もー、怖い顔しないでよ。たしかにエッチなことはするけど～～、ちゃんとお姉ちゃんにもメリットのあるゲームだから♥」

「メリット……？」

「ルールを説明するね。今日から一か月の間お姉ちゃんにい～～っぱいエッチな調教をします。それで心が折れて『変態ペットになります』って言ってしまったらエリスの勝ち。言わなかったらお姉ちゃんの勝ち。簡単でしょ？」

「勝ったらどうなるんですか……？」

「エリスの場合は新しくて強いペットが一匹増えるってこと。他にもたくさんいるんだよ、お友達は多いほうが楽しいから☆　お姉ちゃんの場合はエリスがこの次元から消えてあげる。それで二度と手は出さないよ。魔界から遊びに行けるのはここだけじゃないしね」

「……」

「ね？　悪くないでしょ？」

「ど……どうしてそんなゲームを……？　わたしを倒したくないんですか？　今が絶好の機会だと思いますけど……」

「いーじゃんべつにー、好きにさせてよ。ペットの調教はエリスの趣味なの。人間だってただ生きるだけじゃつまらないでしょ？　色欲の本能がエッチで楽しいことを求めちゃうの♥」

「そんな……理由で……」

「早く決めてね。気が長いほうじゃないし、つまんないペット候補は気が変わったら処分しちゃうかも♥」

「ッ……」

一方的な提案に瞳を閉じて考え込む天煌聖姫ヴァーミリオン。

しかし、他に打開策も見当たらず今は少女の言う通りにするしかなさそうだ。

命さえあればチャンスもきっとくるはず。必ず反撃して勝利すると紅髪ヒロインは胸に誓う。コバルトブルーのような瞳が強い光を宿す。人々の平和を守るためにあきらめるわけにはいかない。

立ち上がり、細面をキリリと引き締めエリスをにらむ。

「わかりました、そのゲーム受けて立ちます！　ただし、一つだけ約束してください！」

「なにかな？」

「家族には手を出さないで！　ゲームを受けるのはわたしだけで十分です！　それなら絶対にあなたには負けません！　最後には必ず正義が勝つんです！」

「オッケー、お姉ちゃんの家族には手を出さないよ。交渉成立だね♪　それじゃさっそくゲームを開始するね。心の準備はいいかな～～？」

「いつでも平気です！」

「は～い、ゲームスタート！　では、はじめにお姉ちゃんの肉体を改造しま～～す♥　これから一か月はそのままだからがんばってね♥　すぐに堕ちたらつまん

ないし♥」
「!?　か、改造……!?」
「そうだよ♥　フタナリ術式はっつど～～う♥」
「えっ？　え……き……きゃ、きゃあああぁぁぁ～～～～！」
　エリスの声に反応し淫紋がピンク色の閃光を放つ。体内が燃え盛るように熱くなり、ヴァーミリオンは悲鳴を上げた。虫が這い回るような気持ち悪い感覚が全身に広がっていく。
　やがて、熱は秘所に集束し異変が起こった。股間が盛り上がり、レオタードスーツに空いた穴から肉の塊が現れたのだ。
　塊はぐねぐねと姿を変え男性器とまったく同じ肉竿に変貌する。見事な勃起を魅せ長さは十七センチもあるだろうか。びくびくとヒクつくそれはシャチホコのように反り返っていた。肉竿の先端部分では皮を剥かれ、薄桜色にテカる亀頭がプクリと張り出し、カリ首を元気いっぱいに持ち上げている。
　その下には満月のように丸い玉袋が並んで揺れていた。毛は一本も生えておらず表面は滑らかだ。もっちりとした質感を想起させ、プニプニという擬音がとても適切に思えた。
「や、え……？　なっ、あ……？」
　驚愕に目を見開き紅髪ヒロインは呻くことしかできない。男性器を股間から生やされ血の気が引いていく。デモンコアとは何度も戦ってきたが、ここまで悪趣味な敵に出会ったのははじめてだ。
　可愛らしい外見とは裏腹にエリスの残虐さは底知れない。
「な、なんですかこれはっ！　い、今すぐ外してください！」
「何ってチンポに決まってるじゃん。見たことくらいあるでしょ？」
「そ、そういうことじゃありません！　男の人のモノ

がわたしにくっついているなんて……気持ち悪い……は、早くとって！　とってくださいっ！」

「む～りで～す♪　お姉ちゃんにはゲームの間ずっとその格好でいてもらうからね。あ、オシッコはチンポから出るから気をつけて♥」

「う、くうううぅぅ……そんな……最低です……！」

弟のペニスを見たことはあったが、実際にモノを生やされた経験などあるわけがない。陰茎を股間にぶら下げ、恥辱に悶えるフタナリヒロイン。まともな女の子の身体でなくなってしまった現実が、心の太陽を曇らせていく。

このまま一か月も暮らさなければならないと思うと気が重い。

しかし、マゾ開花させた肉体はフタナリ変身に妖しく悦び、下腹部から早くも淫猥な疼きがあった。

牡の淫欲がヒロインの身体を蝕んでいく。

「ゲームにはチュートリアルがつきものだよね。フタナリ先輩のエリスが射精の仕方を教えてあげる♥　はい、腰を突き出して♥」

「あぐっ……か、身体が勝手に……っ！」

淫紋が光るとヴァーミリオンはフタナリペニスを突き出した。セイクリッドギアが機能しないため、操り人形のごとく、ツインテール幼女の言いなりになってしまう。

立派な肉勃起にエリスはフッと息を吹きかけた。生まれたばかりのフタナリペニスはそれだけで感じてしまう。ピリピリと背中に静電気が走るようで、天煌聖姫ははしたない声を出した。

「ひっ、ひゃうううぅぅぅッッ！　な、なにこれぇ……あ、アレがぁ……♥」

「すっごいでしょ、男の人のって♥　全身が痺れちゃうよね♥　でも……アレって言うのはよくないなぁ。ちゃんと言わないとゲームオーバーだよ？」

「うぅ……ペ……そ、その……」

「エリス、とろい子は嫌いだな～～」
「う……ぐううぅぅ……ぺ……ぺ……ぺニスです……」
「ぜんぜんダ～メ。おチンポでしょ？　しっかりしてねお姉ちゃん♥」
「ち……その……ぽ……あの、ち……ぽ……ぅぅ……や、や、やっぱり言えません！　お、男の人のアレなんて言えないです！」
「ん～～、言うこと聞かない子にはお仕置きが必要かな？　今から三十秒以内にチンポ♥　って十回言って、あとに『ヴァーミリオンはフタナリのマゾヒロインで～す♥　ザーメン射精するのが大好きなオナニーバカで～す♥』ってつけなかったら、その舌切っちゃおうかな♥」
「ま、待ってください！　いきなり――」
「いち、にい、さん、しい、ごお、ろく、しち、はち」
「い、言います！　言います！　ちっ…チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポおっ♥　う……ヴぁ、ヴァーミリオンはフタナリのマゾヒロインで～す♥　ざ、ザーメン射精するのが大好きな……お、オナニーバカで～す♥」
「キャハハハッ♥　へ～～、お姉ちゃんってフタナリでマゾでオナニーバカなんだ～♥　信じらんな～～い♥　正義のヒロインの知られざる素顔っ♥　エリスもびっくりだな～♥」
「はうぅぅ……くうぅ……あ、あなたが無理矢理言わせているんじゃないですかっ！」
「人にせいにするのはよくないよ♥　お姉ちゃんが自分の意思で言ったんだよね？」
「グ……くぅ……あ、あなた……っ！」
「ね？」
「そうです……わたしはフタナリのマゾヒロインです……！」

屈辱的な口上を言わされる紅髪マゾヒロイン。自分の非力さがこれほど悔しいと思ったことはない。肉竿を震わせながら屈辱に耐えるばかりだ。

悪魔幼女はその瞬間、フタナリペニスがさらに硬くなったことを、見逃してはいなかった。ヴァーミリオンにマゾの素質があると敏感に感じ取り、肉棒嬲りを開始する。

「まずは手でオナニーする方法だね♥　はい、おチンポこっちに向けて♥」

「や、あ……あの待って――」

可愛らしい手のひらを勃起ペニスへ伸ばしていく。

一度オスの快感を知ってしまえば、あとは一直線だと理解している。五本の指で筒の形をつくり根元から肉竿をシゴいていった。

いきなりの手淫に紅髪ヒロインは動揺してしまう。

こしゅっ♥　こしゅっ♥　しゅりっ♥　ごしごしっ♥　ごしごしっ♥

「ひ……ひうううぅぅ～～♥　そ、そこ……おチンポダメぇ♥　さ、触らないでぇっ♥」

「マゾヒロインちゃんを精通させてあげるね♥　ザーメンぴゅっぴゅっ気持ちいいよ♥」

「しゃ……射精って……や、やっぱり……あんっ♥　あくううぅぅぅッッ♥」

「うん♥　エリスの触手チンポみたいに吐き出させてあげる♥　女の子なのに男の子の快感を味わえるなんて、お姉ちゃんはラッキーだね♥」

「んきゅうぅぅ……♥　あっ♥　やぁっ♥　そ、そんなのイヤです！　や、やめて……んっ♥　くううゅ♥　ふぃうぅぅ～～♥」

脳裏に浮かぶのは先ほどの陵辱体験だ。触手チンポから噴出する白濁液の色、味、匂い、熱さ、どれもおぞましいものばかりである。

身体を汚された液体をこれから自分も出すなんて想像したくもない。男の絶頂を刻み込まれてしまったら、

もう普通のセックスはできないだろう。
「無駄な抵抗はやめてよね♥　エリスのテクニックはスゴイんだから♥　ほらほら透明なお汁がでてきたよ～～♥」
「ふぁっ♥　ぁぁッ♥　ッ……くううぅぅぅッッ♥　んんっ♥」
「感じてるんだねお姉ちゃん♥　我慢してる顔もカワイイよ♥」
「か……感じてなんか……へうぅぅッ♥　きゅっ♥　はふっ♥　きゅふうぅぅ～～～～♥」
悪魔幼女の可憐な手さばきに悶絶する紅髪ヒロイン。股間のもどかしさはどんどん大きくなり、サーモンピンクの亀頭が淫らに煌めく。
陰嚢が精子を大量生産し肉竿がビクンビクンッと脈動する。血管が存在感を強調し、海綿体に血液をポンプのように送っていく。鈴口が鯉のように口を開閉しだした。
「もう我慢も限界だね♥　童貞チンポにしてはもったほうかな♥　ほ～～らザーメン出しちゃえ♥」
「くっ……ぐうううぅぅぅ～～～～♥　くぅっ♥　ふあぁぁぁッ♥　ま、負けない♥　わたしは射精なんて♥　んくうぅぅぅッッ♥　ひぅッ♥　ぜ、絶対にしません……♥」
「強情だな～、素直じゃない子にはイジワルしちゃうぞ☆」
「ひぐうううぅぅぅッッッ♥　いたっ♥　痛いッッ♥　くひゃあああぁぁぁぁ～～～～んッ♥」
エリスは爪を立てヴァーミリオンの陰嚢を刺激する。針で刺されているような痛みに快美神経が反応し、身体が弓なりに反り返る。
別方向からの攻撃で緊張の糸が切れ、勃起肉竿は射精に向け引き絞られていく。
（も、もうダメ……が、我慢なんて……我慢なんてできないっ！　あんっ♥　んむ♥　ひぅっ♥　んんん～

♥　あうううぅぅぅ～～～～♥）

頭の中でいくつもの星が瞬き、意識が白く塗りつぶされていく。幼女の指先の感覚と掻き毟られるような快美感がないまぜになり、紅髪ヒロインは初体験の射精アクメへ突き進む。

「くるくるくるよ～～♥　ザーメンどっぴゅんタイム♥　おチンポ射精タイム♥」

「はぐっ、ん……んんんん～～～ッ♥　ぁうっ♥　ほひっ♥　きゅぅぅ、くうううぅぅぅッッッ♥　しゃ……射精ぇ♥　きゅうううぅぅぅ～～～～～～ッッ♥」

「キャハハハッ♥　エリスの手コキで派手に射精しちゃえ～♥　フタナリチンポから涎たらしまくりの変態マゾお姉ちゃん♥」

「ひゃあああぁぁぁぁ～～～～んッッ♥　あっ……ダメッ♥　はぐッ♥　で……出るっ♥　出るっ♥　出るっ♥　出るっ♥　あふうううぅ～～～～んッッ♥♥」

猛り狂う肉巨根の奥底から嵐のような射精衝動が沸き上がってくる。恐怖と快感への期待がミックスされ、天煌聖姫の理性を焼却していく。

快悦の塊と化した肉竿は小刻みに震え、白濁したスペルマが鈴口のすぐ近くまでせりあがってくる。充血した亀頭は大きく張り詰め一呼吸の余裕もない。

何もかもが限界に達した時、紅髪ヒロインは欲望の象徴からマグマのように熱い白濁ザーメンを噴出した。

ビクッ♥　ビクビクビクウウウウゥゥゥ～～～～♥　ビュクッ♥　ビュクッ♥　ドプウウッ♥　ドクドクドクッ♥　ビュウビュウッ♥　ドオプッ♥　ドビュッ♥　ドビュルルルウウウゥゥゥ～～～～～～♥　ビチュルッ♥　ブブビュル♥

「あくううううぅぅぅ～～～～んッッ♥　ひ、ひぐうううぅぅぅんっっ♥　で……でるっ♥　でるっ♥　でるっ♥　止まらないいいいぃぃぃ～～～～ッ♥　ん

ッ♥　あッ♥　あ……あは～～～～ん♥　止まらないっ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　おチンポイク♥　ザーメンでりゅ♥　おチンポ射精でイッちゃうううぅぅぅ～～～～♥♥　はぅっ♥　きゅひゃあああぁぁ～～～～んッ♥♥」

美しい紅髪を乱れさせながら、淫猥に喘ぐ天煌聖姫ヴァーミリオン。びゅく、びゅくと勃起ペニスから精液を放出する姿に、太陽のような煌めきはまるでない。

発情しケダモノめいて射精絶頂に酔いしれていく。正義のヒロインとしての誇りや矜持など大切な物が、どこかへ消え去ってしまいそうで、恍惚と悪寒が同時に華奢な身体へ到来する。

悪魔のフタナリ調教に飲み込まれ、マゾヒズムを開花させた身体は呆れるほどに魔悦を貪っていく。甘美なザーメンシャワーは一分以上続いた。

（はぁ、はぁ、はぁ……こ……こんなに男の人の絶頂が気持ちいいなんて……はうぅ……だ、出すのすごい……おチンポってすごい……んん……）

荒く息を吐きながら余韻に浸る。しかし、股間の勃起ソーセージはまったく衰えを見せておらず、海綿体がギシギシときしみ、肉幹はパンパンに怒張していた。

今出したばかりだというのに、また射精欲求が昂ってくる。フタナリ初心者のヴァーミリオンにもこれが異常な事態だということは理解できるが、下腹部の疼きがどうにも止まらない。

「すっご～～い♥　お姉ちゃんのおチンチンやる気まんまんだね♥　ちょっとスケベすぎな～い？」

「こ、こんなのおかしいです……ぐ……わ、わたしに何を……？」

「あれ、わかっちゃう？　エリス特製フタナリチンポはねノーマルチンポの三倍の精力があるんだよ。一日三回以上はシコシコしないと夢精しちゃうくらいにね♥」

「なんてことを……もう許しません！」

「せっかくだからもう一回戦しよっか♥　オナニーだけじゃつまらないし、今度は二人でやってみようね♥」
「あなたと……ですか……？」
「ん～ん、それも楽しそうだけど今回はエリスのペットがパートナーだよ♥　はいっ、しょうか～～～ん♥」
ツインテール幼女が人差し指を振ると、床に魔法陣が展開した。レートA以上ができる無詠唱での召喚術だ。六芒星が紫色に発光し、魔界からペットという名の眷属が現れる。
大型犬ほどのサイズで半透明の肌をオレンジ色に彩（いろど）るソレは、スライムであった。プルプルと表皮を揺らし、どこが目かもわからないがフタナリヒロインにすり寄ってくる。
「まさか……これと……？」
「せいか～い♥　オークとかラミアでもよかったけど、お姉ちゃんフタナリに慣れてないから手加減しちゃった♥　エリスやっさし～～い♥」
「んうぅ……き、気持ち悪いけど……スライムならまだ……」
デモンコアはどれも悪逆卑劣だが、スライムはかなりマシな部類だ。主人の命令でもなければ悪さをすることもない。レートもEで場合によっては変身しなくても倒せる。
全身やわらかい生き物なら苦しめられないかもしれない。ヴァーミリオンは内心ほっとしていた。また触手のような怪物の相手など絶対にごめんだ。
「この子は天然のオナホールみたいなモノだから安心だね♪　チンチン勃起したまま待つのもかわいそうだし、スライムくん突撃～～～♥」
「えっ……あっ、あんんん～～～～♥　んきゅっ♥　ふぐうぅッ♥　くううぅぅ～～～～♥」
スライムは見た目より俊敏な動きを見せ、紅髪ヒロインの下半身を飲み込んだ。ゼリー状のボディをブニブニと流動させ、フタナリペニスに纏わりつき愛撫し

ていく。
　苦しめられないという願望はここで崩壊した。冷たい肌触りとゼリー内壁のコンビネーションが、射精直後で敏感になった肉竿を容赦なく責めだしたのだ。
　人間や道具では絶対に不可能な軟体マッサージで、陰嚢から亀頭の先っぽまで舐めまわされていく。手淫の比にならない快美の炎が股間へ襲いかかった。
　淫紋の影響で逃げることもできず、暴力的な下半身攻撃を受け入れるしかない。
　ぬちゅっ♥　ずちゅっ♥　にゅろんっ♥　ぬめろんっ♥　にゅるっ♥　にゅるにゅるっ♥
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ♥　くひゅうっ♥　んっ♥　んっ♥　っ……くあああぁぁぁぁ～～～～ん♥　こ、これ……すごいぃ♥　ち、ちょっと待ってぇ……♥」
「スライムくんは顔に似合わずテクニシャンなんだよね♥　並のおマンコよりヤバイんだから♥　これで思う存分射精できるよお姉ちゃん♥」
「は……ハウウウンッッ♥　んぐっ♥　きゅひゅう……っ♥　ヒグッ♥　へグッ♥　こ……腰がぁ♥　お……おチンポが溶けりゅうゥッ♥　ンンッ♥　ふひゅうううぅぅ～～～～ッ♥」
「その中なら掃除も必要ないし、好きなだけザーメン出していいよ♥　お姉ちゃんのスケベ子種が詰まった変態ミルク大盛りでね♥」
「はぐうぅぅ～～♥　ち……チンポ♥　チンポ♥　チンポぉ♥　く……うううぅぅうぅうぅぅんっっ♥　ふひっ♥　す……スライムがエッチすぎて変になっちゃうううぅぅうっ♥　ま、またはしたなく射精してしまいますううぅぅぅ～～～～♥」
　スライムの全身愛撫で子猫のように喘ぐフタナリヒロイン。一度射精してしまったことで、我慢する気力が残っていない。あの快感をもう一回と言わんばかり

に自ら腰まで振ってしまう。
　巨肉竿と軟体ボディが触れ合い、ぱちゅんっぱちゅんっといやらしい抽送音が奏でられた。再び血管が脈動しエラが張り詰めていく。パクパクと口を開ける鈴口からは、水あめのような透明の粘液が糸を引いてこぼれ出た。鼠蹊部に淫靡な熱が集まり、すぐにでも射精してしまいそうだ。
「で……でるっ♥　でるっ♥　でるっ♥　でるっ♥　あぐうううぅぅぅッッ♥　せ、精液ミルク我慢できませんっ♥　出ちゃうっ♥　きちゃふうううぅぅ～～～～♥　き、汚いザーメン出ちゃいますっっ♥　だ、出してもいいですか♥」
「キャハハ♥　なっさけない早漏チンポだねお姉ちゃん♥　恥ずかしいな～～♥　でも、いいよ～～ちゃんとエリスに聞いてるし、許可してあげる♥」
「ありがとうございます♥　ヒグ……ンムッ♥　へうぅ♥　んんっ♥　はん♥　は……ひゃ……はあああぁぁぁ～～～～ん♥」
「お行儀のいいペットにはご褒美あげるね♥　え～～と、ここと、そこと、あそこと、やっちゃえスライムくんっ♥」
「ふ……ふえぇぇぇ？」
　エリスは指でスライムに指示を出した。何をしたのか理解できずに戸惑う天煌聖姫だが、異変に気付くのに時間はかからなかった。
　フタナリペニス愛撫だけではなく、膣孔、それにアナルへゼリーの肉体を動かし侵入してきたのだ。膣内壁と肛内壁をオレンジ色のゼリーが埋め尽くし、中から擦りだした。
　内臓を直接クンニされる魔悦に少女ヒロインは嬌声を上げる。
「ああっ♥　あ……ひゃう、あぁぐぅっ♥　っ……はぁ♥　ん……んはあああぁぁぁぁ～～～～ん♥　あ、アソコにぃ……お……お尻もしびれてぇ♥　んんんん

ん～～～～♥」

「お腹の中をシェイクされる気分はどうかな～♥　気持ちよすぎてアタマがおかしくなっちゃうかもね♥　それと、マンコとクソ穴って言わないと射精許可取り消しちゃうよ？」

「そ……そうですマンコですぅ♥　それにクソ穴ぁ♥　わたしのマンコとクソ穴がペロペロされてます♥　や……やあぁぁぁぁッッ♥　いやあっ♥　ち、おチンポもせつなくてぇ……はぅぅ……しゃ、射精するぅ♥　も、もうでるうぅぅぅ～～～～♥」

三か所同時責めで苛烈に身悶える正義の紅髪ヒロイン。動物が吠えるようなエロボイスでスライム快美に溺れていく。工場が人気のない場所で幸いした。人通りの多い場所なら確実に人に見られて、変態痴女だと思われていただろう。

そして、甘い痺れが何度も訪れ腰を動かすスピードもどんどん速くなっていく。

下半身が弛緩し細胞の一つ一つが魔悦を求めてしまう。

限界を見計らって悪魔幼女はフタナリペット候補に淫語を覚えさせる。

「イク時は『わたしはチンポとマンコとクソ穴犯されて感じる淫乱ドマゾです♥　フタナリ聖姫ヴァーミリオンちゃんはザーメン狂いなの♥　スライム異種姦でイッちゃう変態で～～す♥』って言うんだよ♥　間違えちゃダメだからね♥」

「は……はいいいいいいいいッッッ♥　言います♥　言いますぅ～～♥　わ、わたし変態宣言しますっ♥　何でも言います♥　射精できるなら何でもします♥　おう♥　お、オッッグ～～♥　でるでるでるでるッッ♥　しゃ……また射精しちゃうぅぅぅ～～～～♥」

下半身をすべて性感帯に染め上げられ変態聖姫ヴァーミリオンは精を放出した。汚らしい音と共に子種汁



をスライムボディに解き放つ。
　ビュクビュクビュクビュクウウウゥゥ～～～～～♥♥　ドビュ♥　ブビュル♥　ドクンドクンドクンッ♥　プピュルルルルッッ♥　ドビュウッ♥　ドビュウッ♥　ブビュルルルルウウウウウウゥ～～～～～♥♥　ボピッ♥
「は……はぐうぅぅっ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　わ……わたしはち、チンポとマンコとクソ穴犯されて感じちゃう♥　い、淫乱ドマゾです♥　んっ♥　きゅうぅぅッッ♥　ふ、フタナリ聖姫ヴァーミリオンちゃんはぁ♥　ザーメン狂いなのぉ♥　おほっ♥　ンッ……ア、あは～～ん♥　す……スライム異種姦でイッちゃう変態で～～すうぅぅぅッッッ♥♥　ンン……ぁぁぁッ♥　い、イクイクイクいくうぅぅぅぅ～～～～♥　チンポいく♥　チンポいくぅ♥　マンコいく♥　マンコいく♥　マンコいいのぉ♥　クソ穴最高です♥　ウンコの穴でもイッちゃいます♥　んあっ♥　きゅふ……ン、はぁ～～ん♥　スライムエッチでトリプル変態アクメするうぅぅぅ～～～～♥♥」
　言わなくていいことまで言ってフタナリ絶頂する正義のヒロイン。スライムの体内が純白のスペルマで満たされていく。
「うわ～、バカみたいに射精してる～♥　スライムくんがかわいそう♥　お姉ちゃんってホントフタナリマゾの変態だよね♥」
「ふぁ……はくぅぅ♥　んんんっ♥　あっ……ち、ちが……違います！　わ、わたしは変態なんかじゃないです……！」
　どうにか正気を取り戻しふたなり快感を否定する。しかし、オスとメスの悦びを同時に味わい、その顔は淫靡に蕩けていた。

第四話　羞恥の落書きプレイ！　淫語で汚されていく天煌聖姫の裸体！

「こ、これでいいんですか……？」

「そうだよ～、じっとしていてね♪」

ヴァーミリオンは胸と股間が丸出しの羞恥衣装のまま、ゴテゴテとした悪趣味な鏡の前に立たされていた。スライム射精させられた後、間を置かずに新しい調教を受けさせられているのだ。

わずかに残る神聖粒子のおかげで体力はまだ大丈夫だが、欲望の化身ともいえるフタナリペニスは大変危険だ。今は平時のサイズに戻っているが、股間の熱は確実に残っている。また変態射精させられるかと思うと涙が出そうだ。このままでは女の子なのにフタナリオナニー大好きなチンポ中毒になってしまいそうだ。

（ううぅ……み、みっともなさすぎます……あんなにはしたなく喘いで射精なんて……くぅぅ、変態みたいじゃないですか……ひぅっ！　あっ、ま……またおチンチンがぁ……早く治まってぇ……）

名状しがたい牡性欲に振り回される正義の変身ヒロイン。できることならもう二度と射精なんかしたくない。あの解放感はクセになりすぎる。

だが、気持ちとは裏腹に下腹部はジクジクと疼き、疲れ知らずの肉男根は精力を取り戻しつつあった。

奥底のマゾヒズムも再び動き出し、目の前の装飾過多な鏡にどこか淫靡な期待をしてしまう。この鏡もエリスのペットで、レートCのデビルミラーという種族だ。家具に化けて人をたぶらかすが積極的に動くタイプではないので、ヴァーミリオンも実物を目にするのはこれがはじめてだ。

もう三分は同じ体勢だが特に何かが起きる気配はない。このまま何事もなく終わってほしい。

と、その時デビルミラーが目の眩むような閃光を放った。紅髪ヒロインはカメラのフラッシュめいた光を浴び、とっさに目蓋を閉じる。

魔力の高まりを感じ少女の第六感が嫌な予感を告げる。

恐る恐る目を開くと、そこには想定外の恥辱が待ち受けていた。

「――――ッ!?　なっ……なっ、なんですかこれはっ!?」

「キャハ☆　よくできているでしょ～、これがデビくんの便利スキルだよ☆」

ヴァーミリオンの眼前にあるのは、自分そっくりの人形であった。身長や瞳の色、肌の質感、紅髪の滑らかさなど、どれも本人に瓜二つの精巧さだ。

違う点といえばレオタードスーツを身に着けていないことである。若くみずみずしい肌が晒され、Dカップ美乳と張りのある桃尻を乗せた裸身が露わになっている。

さらに言えば、ガニ股で手を頭の後ろで組む羞恥ポーズをとらされていた。フタナリペニスも勃起状態のまま忠実に再現され、ビンッと天を仰いでかなり恥ずかしい格好だ。悪魔幼女の嗜虐心がそのまま表れているようである。

自分の裸身をオモチャにされ変身ヒロインは声を荒らげる。

「悪趣味がすぎます！　こんなことをして何がおもしろいんですか！」

「あれ～～？　エリスにそんな口のきき方していいのかな～～？　自分の立場わかってないペットは殺処分だよ？」

「っ……ご、ごめんなさい……」

「わかればよろしい。それじゃクイズだよ♪　今からこのヴァーミリオン人形で何をするでしょ～～か？」

「さ、さぁ……知りません……」

「も～～ノリが悪いなぁ。正解は～～～～落書きプレイでした♥　お姉ちゃんには今から人形に落書きしてもらいま～す♥　はい、これペンね♥」

「ら……落書き……？」

「書くことはエリスが指示するから間違えないようにね♥　魔界のペンだから簡単に落ちないし書き直しできないよ♥」

「……？」

手渡された黒マジックを見つめ戸惑う。これの何がフタナリ調教と関係あるのかまったく見当もつかない。自分が落書きされるのならともかく、人形を汚すことに意味があるとは思えない。

困惑しつつ指示を待つ。

「それじゃ、人形の額に『バカ』って書いてもらおうかな♥　大きくよく見える字でね♥」

「はい……ば、バ……カ……」

きゅっ♥　きゅっ♥　きゅううっ♥

自分そっくりの人形にバカと書いていく紅髪ヒロイン。直接肉竿を嬲られるような苦しさはないが、自分で自分を貶めているようで心がチクリと痛む。

見た目幼女に命令されているのも屈辱を倍増させる。そして、レートSのデモンコアはただ落書きさせるだけで満足するほどヌルい相手ではない。恥辱セリフを強制しさらに辱めを加える。

「バカって書いたけどお姉ちゃんはどうしてバカなのかな？　自分のことなんだからわかるよね？」

「あ、えっ……えっと……それは……」

「もうわかるだろうけど、エリスが望む答えをちょうだい♥　言えなかったらお仕置きだよ♥」

「ううぅ……こ、この悪魔……っ！」

悪魔幼女の思惑は痛いほどよくわかる。ここまでの調教で慈悲の心など微塵もないと理解していたが、今回も最悪のプレイを用意していたのだ。正義の心を徹底的に陵辱するために。

よくここまで下劣な発想ができるものだと驚くしかない。

少しの逡巡の後、ヴァーミリオンは口を開いた。灼熱のような屈辱に焼かれ、戦えるなら今すぐにでも戦いたい。

「す、すぐに騙されて捕まってしまうバカ変身ヒロインだからです♥　それにフタナリチンポ調教でアヘ顔晒しちゃうバカ女だからですぅ♥」

「大正解～♥　よくわかってるじゃん、バカお姉ちゃん♥」

「は、はい……♥　わたしはフタナリ変態のバカペットです♥　こ……これまでエリスさまに偉そうな口をきいてすいませんでした♥」

「次はお口の横に矢印を引っ張ってぇ、その上に『ザーメン大好き♥』って書いてもらおうかな♥　もちろん理由も忘れずに♥」

「ざ、ザーメン……大……好き……♥　お口はザーメンさま専用の……お、おトイレです♥　チンポ舐めるくらいしか取柄のない淫乱聖姫に、ど、どうかくっさいザーメンをお恵みください♥」

「キャハハハッ♥　キャハハハハッ♥　あ～あ、お腹いたい♥　よくそこまで下品なことが言えるね♥　エリスだったら、こんな変態ヒロインに守られたくないな～～♥」

「ぐっ……くううぅ……い、言わないでください……」

「三つめはおっぱいだね♥　乳首の周りに十センチくらいの円を書いて♥　あ、左右両方のおっぱいにね♥」

「んっ……きゅっ……こ、こうですか……？」

「書けたら乳首の上を通るように縦線を一本引いてね♥　それができたら円に十本くらい短い線を書き足してみて♥」

「んん……きゅ……きゅ……きゅっ……きゅッ……か、書けました……これでいいですか？」

「上手上手♥　このマークの意味お姉ちゃんはわか

る？」

「いえ……な……なんですかこれは……？」

「これはね～～～『おまんこマーク』っていうんだよ♥　お姉ちゃんは女性器の記号を胸に書いちゃったってわけ♥　うわっ、キモッ！　キモ～～イ♥　おマンコの落書きを胸にするなんて、アタマがおかしいのかな～～♥」

「や、そんな……わたしそんなつもりじゃ……やっ、い、いやあああぁぁぁぁぁッッッ!!」

最悪の女性器落書きで悲鳴を上げる紅髪ヒロイン。自分そっくりの人形に膣穴変態マークを書かされ、カアアッと顔が赤くなる。

純情な美少女にとって泣きたくなるくらいの屈辱だ。惨めで恥ずかしくて悔しくて、ペンを握る指が震えてしまう。

自らの手で辱めている分、より多くの恥辱を感じてしまうのだ。しかも最低なことに、マゾ牝としての本能が刺激され、肉竿を半勃起させてしまった。

可憐に戦う天煌聖姫は淫靡なペニス欲求を見られまいと、スカートの裾を下げる。

（くっ……くやしいっ！　セイクリッドギアさえ使えれば負けないのにっ！）

己の弱さにギュッと拳を握る。悪魔の陵辱者はその様子を嘲笑いながら、次なる落書きを命じた。今度のターゲットはすべすべのお腹だ。

「四つ目はお腹に～『変態ガバガバマンコ目指してます♥』と『ファック・ミー♥』ね♥　どんどん淫乱人形に染めちゃうよ♥」

「へ、変態……が、ガバガバマンコ目指して……ます♥　ふぁ、ファック、み……ミー♥　い……いつでもおチンポを受け入れます♥　年中無休でザーメン募集中で～～す♥　わ、わたしのおマンコを無茶苦茶にしてほしいのッッ♥♥」

「太腿からお股に矢印引っ張って、『汚物ザーメン無

料配布中♥』も追加ね♥」

「お……汚物……ざ、ザーメン……無料配布中です♥い、いくらでもおチンポしこしこ、ぴゅっぴゅっしますので、毎日一番搾りのマゾ精液をもらってほしいですっ♥」

「へ～～そうなんだ♥　毎日ザーメン配っているんだね♥　でも～～、エリスは臭くて汚ったない童貞ザーメンなんてタダでもいらないけどね♥」

「は、はぅぅ……くぅぅぅ……もういやぁ……」

悔しがる紅髪ヒロインをどんどん追い詰めていく。変態落書きプレイで膣肉からは愛液がこぼれだし、腋やうなじからは牝の淫臭が放たれる。

倒錯的なシチュエーションに理性が溶解し、マゾヒロインの媚肉は快楽を求め続けていた。フタナリペニスも人形と同じようにフル勃起状態だ。

そして、落書き調教はついにフタナリペニスと陰嚢まで達してしまった。

フタナリ男性器に屈辱的な文言を書かされてしまう。

「五つ目はデカキンタマに、ん～、何にしようかな～」

「ど……どうせ卑猥な言葉でしょ……」

「そうだ♥　お姉ちゃんは正義のヒロインだよね？みんなを守るために戦っているんだよね？」

「あ、当たり前です！　人々を苦しめるデモンコアを倒すのが、わたしの使命、そして正義です！」

「だったら、忘れないように『正義』って書いとかないとね♥　これでず～～っと忘れないよ♥」

「ぐっ……あ、あなたっ！」

「ん？　どうしたの？」

「ッ……んくぅぅ……せ、正……義♥　わ、わたしは絶対悪には屈しませんっ♥　こ……この正義のキンタマに誓って戦い抜きますっ♥」

「エリスも変身ヒロインはいっぱい見てきたけど～、キンタマに正義って書いてある女の子は初めて見たよ

♥　ヴァーミリオンって信じられないド変態なんだね♥　キモすぎ♥」

「あぁ……へ、変態で申し訳ないです♥　で、でもこれは平和を守るために必要なことなんです♥　淫乱キンタマに書いて決意を忘れないようにしているのですっ♥」

「うわっ、ドン引きだよお姉ちゃん♥　キャハハハ♥　最後は勃起チンポね♥　そこに～『エロチンポ万年発情中♥』だよ♥　淫乱マゾのお姉ちゃんにピッタリなチンポにしようね♥」

「え、エロ……ち、チンポ……万年……発情中です♥　わたしのチンポは……勃起してばかりのスケベチンポです♥　射精することしか考えていない猿チンポです♥　変態オナニーばかりして、ティッシュを無駄使いしているエロチンポですぅ♥」

「すっご～～いバカみたいなフタナリチンポの完成だよ♥　よく似合ってる♥　オッケー、これで終了かな♥　恥ずかしい落書きだらけの変態ヴァーミリオン人形が完成したね♥　お疲れさま♥」

嬉しそうに落書き人形を見つめるツインテール幼女。一方、ヴァーミリオンは安堵のため息をついた。もうこれ以上の屈辱はないだろう。

しかし、その瞬間デビルミラーが再度光った。まぶしい光が屋内を埋め尽くし、また目を閉じる紅髪美少女。

次に目蓋を開いた時には、すべてが変わっていた。人形の晒された裸身、羞恥ポーズ、変態落書きのすべてが本物のヴァーミリオンにそっくりそのまま転写したのである。

ガニ股開脚で、額には『バカ』、口元には『ザーメン大好き♥』、Dカップ双乳には『おまんこマーク』、お腹には『変態ガバガバマンコ目指してます♥』と『ファック・ミー♥』、太腿から股間には『汚物ザーメン無料配布中♥』、金玉には『正義』、勃起肉竿には『エ

ロチンポ万年発情中♥』のエロ落書きが書き込まれているのだ。

もはや変態以外の説明ができない紅髪ヒロインの痴態がデビルミラーの鏡面に映されてしまった。おまけに魔力で金縛りにされ、指一本動かすことができない。嫌でも正面に映された自分の痴態を見てしまう。

「ヒッ……き、きゃあああぁぁぁッッ!!　やっ、い……いやあああぁぁぁ～～～!!」

「アハッ♥　キャハハハハハハハッッ♥　デビくんもう一つの便利スキルは、人形の状態を本人に移し替えることなんだよね～♪　自分で書いた落書きよく似合ってるよお姉ちゃん♥」

「な、なんで!?　なんでぇ!?　こ、こんなの嫌ですっ！　け、消してっ！　消してっ！　消させてくださいッ！」

「そんなにイヤかな～～？　変態ヒロイン専用コスチュームって感じでカワイイけど♥　誰が見ても一目で痴女だってわかるしね♥　フタナリマゾにはぴったりだよ♥」

「嫌に決まっています！　わたしはフタナリマゾじゃありません！　どこまで辱めれば気がすむんですか！」

「勃起しながら言っても説得力ないな～～♥　それにもう射精したくなっているでしょ～～？」

「え、あ……♥　ふ、ふあぁ……あぐっ……ち、おチンポ熱いい♥　ど、どうしてぇ♥　は……はうぅぅぅっ♥」

「実はそのペンって催淫効果があるんだよね♥　文字の意味通りに淫乱になっちゃうの♥」

「んくうぅぅ～～～♥　そ、そんなぁ……あっく……いまさらぁ♥　ズルイぃ……っ……はぐうぅっ……お、おチンポぉっ♥　おチンポ射精したいいぃぃっ♥」

「ダメダメ♥　エリスが射精していいって言うまで我慢だよ♥」

湧き上がる肉棒衝動に翻弄されてしまう。ペンの催淫魔力で頭が沸騰しそうだ。ギンギンに張り詰めたメス勃起からザーメンを出したくて仕方がない。

天煌聖姫は腰をガクガクと震わせながら、射精許可をおねだりしてしまう。

「あ……ぐぅぅ♥　ひゃう♥　ひゃふううぅぅ～～ん♥　だ……ださせてえぇぇぇぇっっ♥　射精っ♥　射精っ♥　射精っ♥　射精っ♥　おチンポどっぴゅんしたいです♥」

「どうしようかな～」

「お願いしますエリスさまぁ♥　おチンポが熱くて苦しいっ♥　んぁぁ♥　きゅふぅぅ～♥　あんっ、キンタマも熱くなってる♥　ンンッ♥　し……おチンポをシコシコさせてくださいぃ～♥」

「も～、しょうがないなぁ変態お姉ちゃんは♥　いいよ、射精させてあげる♥　でも今から言うことを守ってね♥」

言うとエリスはフタナリ触手をタコの足に似たイボ触手に変化させ、ヴァーミリオンの肉竿に巻き付けた。

「ひゃう！　ひうううぅぅうん♥」

イボ突起のコリコリとした感触と粘液のひんやりとした感触に、短く呻き声が上がる。粘液の媚薬効果がさらに感度を高めた。

射精欲求がまた大きくなり、正義のヒロインは苦悩する。

陵辱者は触手をゆっくりと前後させながら耳元で囁いた。

「今から十数えてあげるから、エリスがゼロって言ったら射精していいよ♥　それと、途中で言う言葉はぜ～んぶ復唱してね♥　間違えたら最初からやりなおしだよ～？」

「は、はいっ、復唱しますっ！　なんでも！　なんでもしますから早く射精させてください！　も……もうおチンポがパンパンなんです♥」

「じゃ、カウントはじめるね♥　十～～九～～」
「はうぅぅぅ～～～～♥　ぐっ♥　くぅ♥　きゅうぅぅ～～～～♥」
肉竿をフタナリ触手でしごかれながらカウントされ、快楽が股の間を貫いていく。
粘液と先走り汁が混ざり合い、卑猥なハーモニーを奏でた。
ぬちゅ♥　ぬちゅ♥　こしゅ♥　こしゅ♥　にちゅぬちゅ♥
「え～っとね『わたしは身体に落書きするのが大好きな変態露出マゾです』はい復唱♪」
「わ、わたしはぁ……身体に落書きするのが大好きな♥　へ……変態露出マゾです♥　ンッ♥　へうっ♥　くうぅぅ～～～～ん♥」
「八～～七～～、『正義のヒロインとか偉そうなことを言ってすいません。本当は平和よりもフタナリチンポが大好きな射精ジャンキーです』キャハッ、おちんちんビクビクしてるよ～♥」
「正義のヒロインとかぁ♥　え、偉そうなことを言ってすいません♥　んふうぅぅ～♥　はぐっ♥　ん……は、本当は平和よりも……フタナリチンポが大好きな射精ジャンキーですぅ♥」
変態セリフを復唱するたびにヴァーミリオンの疼きは大きくなっていった。顔から火が出るくらい恥ずかしいのに淫語で興奮してしまう。
フタナリちんぽは歓喜の涎でベトベトになっていた。
「六～～五～～、『キンタマに正義って書いて興奮するバカ女です。チンポにも日替わりで変態ワード書いちゃう負け犬聖姫です』あ～あ、触手がもう我慢汁でベトベト～♥　最悪～♥」
「くふうぅぅぅぅんっ♥　き、キンタマに正義って書いてぇ♥　こ……興奮するバカ女ですぅ♥　は、恥ずかしい♥　恥ずかしい♥　恥ずかしい♥　ち……チンポにも日替わりで変態ワード書いちゃう負け犬聖

姫ですううぅ～～～～♥」

自らを卑下するたびに灼けた吐息が口からこぼれる。瞳を淫妖に潤ませ落書きだらけの羞恥姿を見ていると、薄紅色に染まった肉竿がさらに硬さを増した。

カウントと共に射精衝動が膨れ上がり、お預けにマゾ肉体が喜びの動悸に陥る。イボ触手に男性の部分を弄ばれるのが心地よい。

金縛りにあっていなければ、膝から崩れ落ちてしまいそうだ。

「四～～三～～、『どうかこの情けないマゾ犬にスケベ射精をさせてください。鏡で自分の痴女ヌード見ながら屈辱ザーメン出させて』もう少しだよ♥　がんばれ♥　がんばれ♥」

「ど……どうかこの情けないマゾ犬にぃ♥　あんっ♥　スケベ射精をさせてくださいぃ♥　か、鏡で自分の痴女ヌード見ながらぁ♥　ひぁっ♥　あっ♥　あっ♥　あっ♥　く、屈辱ザーメン出させてぇ♥　あぐぅぅ…

…もう、もうムリぃ……♥　は、早くぅっ♥」

終わりが近づきフタナリ肉竿の脈動はさらに激しくなる。我慢に我慢を重ねた牡の欲望が吠えているようだ。

最悪の羞恥に心臓の鼓動がペースを上げ、自分の変態姿を眺めるという倒錯シチュエーションに性的興奮を鼓舞される。

そして何もかもが限界に達した瞬間――

「二、一、ゼロ！　ゼロ！　ゼロ！　ゼロッ！『んほおおぉぉお～～～～。変態ザーメンでちゃうううぅぅ～～～～ッ。ジャスティスチンポアクメするううぅぅ～～～～』だよ♥　最高にみっともなく射精してね変態ドマゾのお姉ちゃん♥」

カウントがゼロになり、我慢を重ねたフタナリペニスはついに限界を迎えた。緩んだ口元から舌を出し、淫蕩に喘ぐヴァーミリオン。

全身の筋肉が弛緩し、すべての快美が股間に集まっ

ていく。全身落書きの最低痴態を晒しながら天国へ上っていく。

『エロチンポ万年発情中』と書かれた肉竿は凄まじい勢いで白濁液を吐き出した。

ビュルッ♥　ビュルッ♥　ブビュルルルルウゥゥ～～～～ッ♥　ボビュッ♥　ビュ♥　ビュ♥　ドッピュウウウゥゥウゥ～～ッ♥　ドプッ♥　ドプッ♥　ドプッ♥　ドプンッ♥　ビュウッ♥　プビュルルルルウウゥゥゥ～～～～ッ♥♥

「ふぁっ♥　んんんん～～っ♥　ぐっ……んほおおおおおぉぉぉぉ～～～～ッ♥　へ、変態ザーメンでちゃうううぅぅ～～～～ッ♥　でるでるでるッ♥　イクイクイクイクうううぅぅぅッッ♥♥　ヴァーミリオン正義キンタマと下品マゾチンポでジャスティスチンポアクメするうううぅぅぅ～～～～ッッ♥　身体に自分でスケベ落書きしてぇ♥　カガミ見ながら恥さらしザーメンだしちゃいますううぅぅ～～～～ッッ♥♥」

「うわっ♥　バカみたいにザーメン出しちゃってる♥　臭くて汚いザーメンびゅーびゅー出しちゃってる♥　自分の恥ずかしい姿でイクのそんなに気持ちよかったんだ♥　変態♥　変態♥　変態♥　変態♥　変態お姉ちゃん♥　触手チンポでおチンポしごかれて、女の子の前でブザマに射精するなんてさいて～～い♥」

「や、ひゃうううぅぅ～～～～ッ♥　いやぁ♥　言わないでぇ♥　変態でごめんなさい♥　ごめんなさい♥　ごめんなさい♥　でもマゾ射精気持ちいいんです♥　わたし最低の痴女プレイでチンポ射精しちゃいます♥　人に見られたら人生終了のド変態プレイでザーメン出しちゃいますぅぅ～～～～ッ♥　あん♥　ま、またイク♥　イク♥　イク♥　イク♥　イクうっ♥　お、おほおおおぉぉ～～～～～～ッッッ♥♥♥」

自分を貶め白目をむきながら、魂が抜けるような変


バカ
オーメン大好き
変態心がガバガバマシコ目指します♡
ラブラブ♡
Hot淫乱発情中♡
正義
ちんぽ無深配布中♡

態絶頂をしてしまう正義のヒロイン。
　デビルミラーで恥辱落書きを鑑賞しながら果ててしまう。
「キャハハハハッ！　アッハハハハハッ！　チョー受けるよお姉ちゃん♥　ププ、エリスは帰るから掃除しといてね♥　それとこのことは誰にも言えないから、気が変わっても相談しようとか余計なことは考えないほうがいいよ♥　あとは～、うん、淫語も覚えてもらおうかな♪」
「ひゃぅぅ……い、淫語ぉ……？」
「そうだよ、エッチな言葉をいっぱいね。次に会う時にテストもするから♥　それじゃ、あと三十日がんばってね♥」
「はいぃ、は、はぁ……はぁ……んはぁ……♥」
　ようやくガニ股ポーズを解除され、床に手をつく。
　顔を上げるともうエリスの姿は消えていた。
　窓の外からは茜色の空が見える。
　天煌聖姫ヴァーミリオンのフタナリ調教はようやく一日目を終える。
（あと一か月もこんなことを……？　い、いえ負けません！　必ず勝利してみせます！　ママ、陽一、わたしがんばりますから！）
　太陽の輝きを胸に宿し、決意を新たにする天煌聖姫ヴァーミリオン。
　ロングの紅髪が炎のごとく揺れ動く。
　果たしてこの先に待つのは最悪の淫辱かそれとも希望の勝利か。

第五話　参上！　天煌聖姫セルシアン！　Hカップパイズリ＆恥垢を舐めとられる人妻ヒロイン！

「ママ、いってきます……」
「いってらっしゃい。気をつけてね」
神城冴子はキッチンから愛娘に声をかけた。
彼女の正体は天煌聖姫セルシアン、魂を喰らうデモンコアを倒し人の世を守る変身ヒロインだ。古式ゆかしいかぐや姫のような髪型で、腰までかかったロングの黒髪が今日も美しい。Hカップの豊満バストはプルンッと揺れ、エプロンの下からでも存在感を主張している。お腹の肉は若干増えているが、それでもスタイルは崩れていない。二児の母とは信じられない美貌であった。

ダルルゴアとの戦いから五日が経過し、街に漂う魔力反応も減少していると感じられる。少し気がかりなのは、ここ最近愛華に元気がないことだ。天煌聖姫ヴァーミリオンとして、今や自分の全盛期以上の活躍を果たしているが、まだ年頃の女の子。正義のヒロインとしてのプレッシャーに疲れているのかもしれない。
今度休みが取れたら親子三人で旅行でも行こうと冴子は考える。
「母さん、ぼくももういくね」
「忘れ物はない？　あなたそそっかしいから」
のんびりとした口調で階段を降りてきたのは息子の陽一だ。マイペースでどこか抜けたところが夫そっくりである。愛華と違って勉強も運動も平均点。対デモンコアの装備を開発できること以外は、中等部に通う一般的な男子生徒である。
手のかかる子ほど可愛いというのか、ついつい世話を焼いてしまう。

「平気だよ。ほら携帯もハンカチも……あれ？」
「もう、ハンカチはここよ。しっかりしなさい」
「あはは、じゃあいってきま～す」
「はい、いってらっしゃい。怪我しないようにね」
息子を見送ると朝食を食べ、家事を終えると買い物に行く準備をする。ダルルゴアに嵌められ、時限爆弾つきサラマンダーで爆破された時は死ぬかと思ったが、大分体力も回復してきた。最近は自宅で治療に専念していたので、外に出たくなったのだ。
エコバッグを片手に玄関を開け、園路を通って外へ出た。冴子たちが住んでいるのは伝統的な日本家屋で、すぐ隣には空手の道場もある。
冴子も空手の実力者であり、表向きには道場で生計を立てていることになっている。実際は門下生も少なく、収入源はデモンコアの研究をしている夫によるところが大きい。
今夜の献立を考えながら空を見る。あいにく天気は曇り空だが、肌に感じる風は悪くない。
「やっぱり、じっとしているのは性に合わないわね」
主婦ヒロインは一人つぶやきながら商店街へと向かった。

◆◆◆◆◆

食材や日用品を買いその帰り道。家の近くまで来たところで違和感を覚えた。道場の中からデモンコアの魔力を感じるのである。
奴らが日中活動するのは珍しいが、それよりも問題は所在地を突き止められている可能性があるということだ。追跡妨害のスキルは使っているが、絶対に防げるというものではない。
感じる気配は二つ。ベルトに収まっているセイクリッドギアを確認し、静かに道場の扉を開く。そこにいたのはグールであった。本来は夜行性のデモンコアだ。
二体はボロ布を纏い腐臭を漂わせながら、
「ゲゲゲゲ、オレたちの姿を見て驚かないってか」

「ギギギギ、こいつはビンゴだぜ兄者。情報通り天煌聖姫だな。コイツを倒せば賞金をゲットだぜ」

冴子は鋭い目つきで状況を観察する。正体がバレているだけでも不味いが、情報の提供者が気がかりだ。ピリピリとした緊張感が畳を走る。

「不法侵入しておいてずいぶんな態度ね。誰にこの場所を？」

「答えるかよ。オレたちの仕事はてめえを殺すことだけだ。ゲゲゲゲ」

「ギギ、そうだぜ。覚悟しな天煌聖姫！」

「ッ……」

二体のグールは話もそこそこに襲いかかる。動きも見た目に似合わず俊敏だ。セイクリッドギアを取り出すよりもスピードが速い。

冴子はそれに嘆息しながら、流麗に脚を振るった。

「ゲガッ!?　なにぃ!?」

「ギギイッ!?　いでぇ！」

前蹴りと裏拳打ちを食らいグールが畳に倒れる。痛覚のない肉体にも冴子の体内に残った神聖粒子がダメージを与えるのだ。

さらに彼らは生身の人間が自分たちの動きについてこられると想定していない。それ故に簡単にカウンターが決まる。ヴァーミリオンに格闘術を教えた実力は伊達ではない。

「ガアアッ！　お、オレの金玉がアアアアッ！」

「く、首がヘンな方向に曲がっちまってるゥゥゥ～！」

「弱いわねあなたたち。私、軟弱な男は大嫌いなの。その腐った身体を鍛え直してきなさい。もう機会はないでしょうけど」

隙を作り出した神城冴子は変身する。

「セイクリッドギア、セットアップ！」

身に着けていたセーターが光に溶けて消え、冴子はしなやかな裸体を惜しげもなく晒した。いやらしいくらいに大人の色香が漂う肌をオーロラのベールが包み

淑女の身体を戦士へと変えていく。
　髪の色が黒から透き通るような蒼に変わり、ベールは衣装に変化、凛として肢体を包む。むっちりとした胴体にはボディラインを強調する黒色のレオタードスーツ。股間にはひらひらした蒼色のマイクロミニスカート。たおやかな手に握られているのは、白銀のロングスピアー。足にはメカニカルなピンヒール。ロングの蒼髪の上には月をかたどった髪飾り。最後に存在感ある胸部に金色の結晶が装着され、月光のように輝きを放つ。
「光は光に！　闇は闇に！　悪しきデモンコアは虚無の中へ！　蒼き神槍が魔を貫く！　天煌聖姫セルシアンここに参上！」
　セルシアンはロングスピアーをタクトのように振り名乗りを決める。さらに神聖粒子を穂先に集中させ、水流の槍を何本も生み出した。
　槍は弧を描きながらゾンビに迫る。
「クソッ！　小細工を！」
「なめんなゴラアアアアッ！」
　一体は辛うじてガードし、もう一体は回避したがもう遅い。美熟女ヒロインの前で足を止めてしまった時点で敗北は決定した。
「やれやれ。知性のない化け物はこれだから」
　背後に回りこんだセルシアンが、水流を大鎌に変化させ、横一文字に払ったのだ。
「この次元から消滅しなさい！　アクア・デスサイズ！」
　ギンッ！　ザッ！　ザシュウウウウウウウッ!!
「ま、待て、げ……ゲガアアァァァ～～～～ッッ！」
「ちょ、た、タンマッ……ぎ、ギゴオオォォォ～～～～ッッ！」
　聖なる水での一撃にグールたちは両断され霧散した。
　セルシアンは大鎌を解除し、ふぅっと息を吐く。久しぶりの単独での戦闘。勝利の安堵が心身を包む。今の

体調では長く戦えないため、速攻でカタをつける必要があったが、上手くいったと思う。

そして時間にしてコンマ一秒もない一瞬、人妻ヒロインはわずかな隙を作ってしまった。魔力に対する注意を怠ってしまったのだ。

蒼髪ヒロインの緩みをつき、畳の下から無数の触手が絡みつく。

「――――なっ!?　ぐ……あ、アアアアアア～～～～ッ！」

手足に巻き付かれ中空に固定されてしまう。触手に込められた魔力が膨大なため、引き千切ることもできない。ロングスピアーも手の届かない場所に移され、反撃する術を奪われてしまう。己のうかつさに歯噛みするセルシアン。

そこへ金髪をツインテールにした幼女が現れた。股間からはフタナリ触手を生やし、変身ヒロインの動きを完全に封じている。

外見は年に不相応なボンデージ衣装を着た可愛らしい子供にも見えるが、立ち昇る魔力の前に常人なら発狂してしまうだろう。

「はじめましてセルシアンのオバサン。《色欲の夜天》エリスだよ♪　あ、レートSって言ったほうがわかりやすいかな？」

「くっ……高位レートのデモンコアっ！　なるほど……今の奴らはあなたの差し金というわけね……」

「そうだよ。目的は言わなくてもわかるよね？」

「天煌聖姫……私への復讐ね」

「正解☆　これまでの恨み晴らさせてもらうんだから。エッチな変態ペットにしてあげるね」

「このッ……馬鹿にしないでっ！　何をされても私はデモンコアなんかに屈しないっ！」

「無理む～～り、だって知ってるもん。オバサン昔フタナリ調教されたことがあるんだよね？　また前みたいに射精中毒にしてあげる♥」

「くっ、な……な、なぜそれをっ!?　あの時の敵はすべて倒したはずよっ！」
「それは企業秘密かな。エリスの情報網はすごいんだよ、っとだけ言っておくね」
二十年前、《憤怒の鉄槌》アルバリオスと戦った時に囚われ、フタナリ調教を受けた時のことが思い出される。
あるミスから淫紋を刻まれ肉竿を生やされたセルシアンは、牝奴隷という名のフタナリ玩具にされてしまったのだ。
辛くも牢獄から脱出し、最終的には勝利したのだが、あの時の恥辱と屈辱は今も忘れていない。夫の治療で直したはずのペニスの疼きを思い出してしまう。
「また辱めるつもりっ!?　こ……この外道、正々堂々立ち合いなさいっ！」
「や～～だねっと。は～～い淫紋でお人形にしてあげるからじっとしていてね♥」
「ハゥッ!?　く……ふうううぅぅぅぅっっ!!」
悪魔幼女はヘソの下に指を押し当て魔力を注入する。
身体中を巡る快美の疼きに耐えるが、すぐに過去の陵辱の跡を見つけ出されてしまった。
「なるほど～、股間に淫紋があって、そこでフタナリペニスも管理してるんだ。手間が省けてラッキー♥じゃあアクメで二つとも再起動するようにしてあげる。フタナリチンポ生活にカムバックだねマゾオバサンっ♥」
「ん……♥　いううっ♥　や……やめなさいっ！　もう二度と……あんな真似ぇ……♥　さ、させないっ！　私はマゾじゃないっ！　アクメなんて絶対にしないわっ！」
蠢く触手に艶めかしい声を出してしまう蒼髪ヒロイン。触手ペニスはミミズのように身体をくねらせると、レオタードスーツの上を這いずり、Hカップ巨乳に巻き付いた。

先端は刷毛のごとく細かい触手になっており、乳房と乳首を同時に責め立てる。粘液に混じる媚薬が感度を上昇させ、敵の前で痴態を晒してしまう。

むにゅ♥　むにゅ♥　ぐにゅにゅ♥　こり♥　こりゅりゅ♥　ふにに♥　ふにゅ♥

「んっ♥　は……はうううっっ♥　ひうっ♥　きゅうううぅぅ～～～♥　や……やめなさいっ♥　はぐッ♥　ンアア～～♥」

「すっごいオッパイだね、オバサン。何を食べたら巨大メロンみたいになるのかな？」

「し、知らないわよ、そんなこと……♥　ん……んくうううぅ～～♥　ひくっ♥　ひきゅうんっっ♥」

「だってホントにメロンみたいだよ？　男の子はこれでメロメロだね。秘訣を教えてほしいな～～♥」

「だ……だから知らないってぇ♥　く……うううぅぅうっっ♥　んあっ♥　ハグウウッッ♥　はうううぅぅぅ～～～～♥」

胸乳が人よりも大きいのは、人妻ヒロインのコンプレックスだ。生まれつき発育がよく、学生時代はよくからかわれた。

空手をはじめて身体を鍛えているのも、下衆な男から言い寄られないためだ。実際今の夫と出会うまでは異性と付きあったことがない。

女を性欲の対象としてしか見ていない相手は全員敵だ。欲望に滾った目で見られると怖気が走る。見た目幼女に巨乳を弄られバカにされ、セルシアンの顔がリンゴのように赤くなった。

「その大きさだとHカップだね。近所の学生やおじさんのズリネタになってそう♥　エリスだったら絶対に妄想オナニーしちゃうな～～♥」

「こ、このお……ご、ご近所の皆さんを馬鹿にしないでっ！　わ、私はズリネタなんかじゃ……ないっ！」

「またまた～、ウソついちゃって。デカ乳ぶら下げて何言ってるの。男なんてオッパイに顔埋めて、おチン

チン抜いてもらいたいに決まってるじゃん♥　自分がエログラビアと同じ扱いって……ププ、エリスだったら自殺しちゃうかも♥」

「だ、黙りなさいッ！　頭に性欲しかないあなたと一緒にしないでっ！　んぁ、はあああ～～～～んッ♥　こ、この……触手っ……ヒグッ♥　ひゃあああぁぁぁ～～～～んっ♥」

「おっぱい揉まれながらにらんでも怖くないよ～～。それでダンナさんもゲットしたんでしょ。ホント冴子オバサンはドスケベだね♥　パイズリもやってたりして♥　うわっ、エロエロ～～♥」

「ぐんぐんぐん～～～～ッ♥　し、してないわよっ！　パイズリなんて下品なこと……お、はんっ♥　くぁっ♥　ひぁぁぁっ♥　くはあぁぁぁ～～～～ンッ♥」

夜の情事まで馬鹿にされ羞恥に悶える蒼髪ヒロイン。太い触手に力強く肉房を揉みしだかれ、細く糸のような触手に乳頭をコリコリと捻られる。

母なる二つの膨らみが熱を帯び、桜色に染まっていく。男性器を思わせるフタナリ触手の愛撫で子宮が歓喜し、頭が色欲で埋め尽くされていく。

夫の不在で熟れた身体を持て余し、毎晩自慰に耽っていたセルシアンに、たくましい触手男根の感触は甘美すぎた。

口から漏れる吐息の回数が増し、淫臭が混じった汗をかいていく。秘裂の奥が熱を帯びて潤んでいき、股座からは蜂蜜のような蕩け汁が滲みでた。

「へぇ～、じゃあ、エリスの触手チンポをパイズリさせてあげる。特に太い子を選んであげたから感謝してよね♥　ほらっ、デカチチでイッちゃえ！　ドマゾオバサンっ♥」

「ひゃあああぁぁぁぁぁぁぁッッンッ♥　しょ、触手チンポなんて挟みたくないッ♥　んんっ♥　アッ♥　嫌ぁ……や、やめなさいっ♥　あっ、はあぁ～～～～ん」

豊満巨乳の間に巨根チンポ触手が入ると、ピッチリ

とした生地をなぞるように上下させはじめた。赤黒い亀頭がヌルヌル、ジュルジュルと柔肉を蹂躙する。

先走り汁の牡臭と人妻ヒロインの汗が混じり合い、何とも言えない淫靡なスメルを醸し出す。勢い余った先端が唇に触れ、汚辱快美にマゾヒスティックな悦びを思い出してしまう。

以前フタナリ調教された時の被虐快感をまた求めだし、正義の天煌聖姫は理性と快楽の狭間で苦悩した。

「い、イかないっ♥　ンアッ♥　ふぁぁッ♥　ン……んキュウウゥゥゥ～～～ン♥　絶対にイかないっ♥　パイズリなんかに負けないっ♥」

「オッパイもオマンコもドロドロで強がってもね～♥　ほらほら～～乳首ピ～ン♥」

「はうっ♥　ひやうううぅ～～～～♥　ち……ち、乳首い♥　乳首引っ張らないでぇ♥　おっぱいおかしくなっちゃうからあぁぁ～～♥　ぐひぃぃッ♥　あっアッアッアッ♥　勃起乳首イジメないでえええぇぇ～～～～♥　んんぁぁ～～～～ッ♥」

細い触手が大粒のサクランボをつまみ、ギリギリと引き伸ばしていく。鋭い痛みと共に快美の火花が飛び散り、人妻ヒロインは絶頂までの階段を昇らされる。

理性の糸が数本まとめて引き千切られ、喘ぎボイスが高まっていく。触手亀頭の感触が心地よくなり、母性が男根奉仕を求めていく。

Hカップ巨乳の肉厚で膨れ上がった海綿体をサンドイッチさせられるのが心地よくなってしまう。血管からドクンドクンッと鼓動が伝わり、牝の本能が極限へと向かっていく。

触手チンポを豊かな巨乳クッションで包み込み、むにゅむにゅと揉んでいく。汗ばんだ肌が甘ったるいフェロモンを放ち、人妻ヒロインの肢体を煽情的に彩っていった。

ふに♥　ふに♥　ふにゅん♥　むにゅ♥　むにに♥　ふにに♥　ぱふぱふん♥

「ハァ～～ン♥　エリスもうでちゃいそう♥　パイズリされてザーメンでちゃう♥　一緒に変態アクメしようね♥　デカ乳オ・バ・サ・ンっ♥」

「あぁンッ♥　ひゃあぁぁんっ♥　だ……ダメッ♥　ダメッ♥　ダメッ♥　ふあぁぁぁぁぁ～～～～ンッ♥　ふぁっ♥　ほおおおっ♥　ダメぇ♥　い……イクッ♥　いやあああぁぁぁぁ～～～～♥」

男根をドプンッと飲み込み巨乳愛撫させられるマゾ熟女ヒロイン。九十八センチのバストは乳悦の熱でおかしくなっていた。もう肉房でイクことしか考えられない。

触手チンポも激しく脈動し、鈴口から噴き出す白濁ゼラチンに合わせて、セルシアンはついに絶頂してしまった。

ドビュッ♥　ブビュルルルルッ♥　ボビュビュビュッ♥　ドッッッビュビュビュビュ～～～～♥　ドプウウッ♥　ドクドクドクドクンッ♥　ドクンドクンッ♥

「アハッ、キャハ♥　きゃは～～～～ン♥　イクイクイクイクッ、おチンポイクううぅぅ～～～～♥　エリス巨乳パイズリでイッちゃうぅぅ～～～～ん♥　ふうぅぅ～～～～ん♥」

「くふうぅぅ～～～～ん♥　あ……くぁんっ♥　い、イク♥　あああああっ♥　オッパイに出されてイクううぅぅ～～～～♥　胸にチンポザーメンぶっかけられてイクうぅぅ～～♥　おっぐっ♥　イク♥　イク♥　イク♥　イク♥　デカパイズリアクメするううぅぅ～～～～ッ♥」

糊状の汚濁を肉果実いっぱいに受け止める人妻ヒロイン。乳首と乳房を触手チンポマッサージされながら果ててしまう。

そして、アクメをトリガーに股にある漆黒の茂みが発光し、恥丘に淫紋が現れると同時にフタナリペニスが出現した。治療でミクロのサイズにまで縮め、恥丘の奥底に封印していたモノが二十年ぶりに復活したの



だ。

サイズも大きく勃起状態で二十センチはあるだろう。しかし、包茎なのか亀頭は先端までぶ厚い表皮で覆われていた。皮の中からプンと生臭い匂いが漂う。肉竿の下ではピンポン玉のような陰嚢がぶら下がり、陰毛と同じで黒黒とした毛が何本か生えている。全体的にヴァーミリオンよりも成熟した男性器だ。

「フタナリ化おめでとう♥　このグロチンポをた～～っぷりイジメてあげるね♥」

「ハァハァ……こ、このっ……調子に乗らないで！私はこの程度で屈したりしない！」

再びフタナリ調教に身を堕とすことになってしまった天煌聖姫セルシアン。しかし、どんなに劣勢になろうとも、瞳の輝きは失われていない。双眸を吊り上げ強気に悪魔幼女をにらむ。

エリスは敵意すらも愛おしく感じながら、フタナリ陰茎に顔を近づける。

そして美熟女ヒロインが一番言われたくなかったことを言ってしまった。

「うわっ、くっさ～～い♥　ねえ、チンカス溜まってるんじゃないの？」

「やっ!?　っ……そ、それは……その……！」

「それは～～？」

「に、二十年も前に付けられたフタナリペニスだからしょうがないでしょ……ず、ずっと封印していたし、ち、チンポに垢が溜まっているのよ……」

「つまり二十年も皮の中に恥垢を熟成させてきたってこと？　うわっ気持ちワルッ、最悪～～♥」

「しょうがないのよっ！　私だって二度と出したくなかったのに！」

「とりあえずオチンチンの中見てみよっか♥　もう今の状態でも臭いんだけど♥　これって、ちょっとしたホラーだよね♥」

「ひぐぅっ！　いやぁっ……や、やめてっ！　汚いか

らっ！　本当に汚いからぁ！」

セルシアンの制止を振り切り、悪魔幼女は包皮に手を伸ばす。人差し指と親指で亀頭をつまみ、ゆっくりと根元に下ろしていく。

空いた手で鼻をつまみ、いかにも汚物を処理しているという態度をとる。その姿が羞恥を煽り、セルシアンも股間から目をそむけてしまった。

皮が剥けるとそこで赤黒い亀頭とこびりつく恥垢が露わになった。クリームチーズのように白く黄ばんだ垢がカリ首の周りに沈着している。

立ち昇る匂いも凄まじく、普通の人間なら吐いてしまうだろう。

「ウエッ……オエエ……♥　うわ、なにこれ汚な～～い♥　くさい♥　くさい♥　くさい♥　くさい♥　くさい♥　くさい♥　くさすぎ～～♥」

「ひぁ、や、やあああああああああっ！　み……見ないでっ！　見ないでっ！　見ないで！　匂い嗅がないでええぇぇぇ～～～～！」

「いまさら遅いよチンカスオバサン♥　鼻を押さえてもこの匂いってヤバすぎない？　公衆便所のほうがよっぽどキレイだよ♥　ホント最悪♥」

「も……もう、いやあああ……うう、恥ずかしい……くううぅ……」

「こんなのでよく正義のヒロインやってたね♥　エリスだったらチンカス臭いババアには頼りたくないな～♥　マジキモい♥」

「ううぅぅ……ゆ、許してぇ……くぅ……言わないでぇ……！」

「これもっと近くで嗅いだらどうなるんだろ？　よし、やってみよ～～♥」

「!?!?!?　う、うそでしょ!?」

驚愕する人妻ヒロインを無視して亀頭に鼻を近づける。ヒクヒクと鼻を動かし恥垢の匂いを肺の中まで吸い込んだ。汚臭を実況し、さらなる恥地獄へ叩き落と

すつもりなのだ。
　くんっ♥　くんくんっ♥　くんくんくんっ♥　けほっ♥　くんくんくんくんっ♥
「う……ウエエエエッ♥　オエッ♥　オゲエエエエエエッ♥　ちょ、ヤッバいっ♥　なにこれ死ぬっ♥　臭すぎて死んじゃいそう♥　うげえええ～～♥」
「ひっ、ヒイイイイイイイ～～～～～～ッ！　ひやぁっ！　あ、あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」
「危な～い♥　チンカスの匂いで絶命寸前だったよ♥　オバサン今度からこれ必殺技にしたら♥　レートS以外は耐えられないと思うな♥　臭すぎて～～♥」
「あぁぁ……いやぁ……ううぅぅ……」
「鼻の中でくっさい匂いがとれなくなっちゃったよ♥　ほら、謝ってよね♥」
「そ、そんなことまで知らないわっ！　勝手にやったくせにっ！」
「ん？　ご主人様に逆らうつもり？　悪い子にはお仕置きだよ♥」
「アンッ♥　きゃふっ♥　ひゃうううぅぅぅ～～～ん♥」
　エリスが魔力を込めると淫紋が発光し、凄まじい射精の疼きが下腹からせりあがってくる。肉竿がバキバキに勃起し、すぐにでも射精しなければ気が狂ってしまいそうだ。
　だが、両手両足は拘束され、腰すら自由に動かすことができない。蒼髪ヒロインはスペルマ放出を禁じられ、淫欲に悶える。
「どう？　自分の立場がわかったかな？　ちゃんと謝るなら射精させてあげてもいいよ♥」
「いぎいいぃぃ～～♥　あ、謝りますっ♥　謝るからもう許してぇ♥　チンポが変になるぅう～～っ♥」
「はい、それじゃチンカスを謝罪してね♥」
「はいいっ♥　て……天煌聖姫セルシアンは包茎フタナリチンポの変態ヒロインです♥　皮の中に臭くて汚

いチンカス溜めている汚物マゾです♥」
「え～～と、何年溜めてたんだっけ？　五年？　十年？」
「に、二十年です♥　二十年もチンカスチーズを熟成させてました♥　不潔なババアで誠に申し訳なく思っているわ♥」
「にじゅうねんっ!?　バカじゃないのオバサン。グールのほうがよっぽど清潔だよ」
「うぅぅ……恥垢溜めまくりの変態ヒロインで、ご……ごめんなさい♥　私のチンカスチーズで不快な思いをさせてしまい、本当にご迷惑をおかけしました♥　も、もういやぁ……」
「キャハハハハッ♥　いい謝罪だったよ♥　でもこのままじゃ臭くて遊べないから、エリスがパイズリのお礼に掃除してあげるね♥」
「へぅっ!?　そう……じ？　やっ、はあああぁぁ～～～ん♥　そんなお口にいいぃぃ～～ッ♥」

恥垢で汚れた肉竿を口に含む悪魔幼女。チロチロと舌を動かし、汚れを舐めとっていく。娼婦顔負けのテクニックに人妻ヒロインは腰を引いてしまう。
　チュパッ♥　チュっ♥　クチュチュッ♥　ヌロッ♥　クチュッ♥　ハムチュッ♥
「んむ……ちゅっ♥　はむん……ぺろ♥　あん……きったないなぁ♥　これは大掃除が必要だね♥」
「ひいあああぁぁぁ～～～ん♥　あぁん、ふくううぅぅッッッ♥　はぅぅん♥　そ、そこ敏感なのおおぉぉ～～～～♥　ち、チンポがぁっ、むずむずするのおおぉぉ♥」
「はふ……んくちゅ♥　くちゅっ♥　ちゅっ♥　ふぉら……きれいにしてあげてるんだから感謝してよね♥　お礼くらい言わないと射精させてあげないよ♥」
「あはあぁぁぁ～～～♥　あ……くぅっ♥　わ、私の汚物チンポをペロペロしてくれてぇ♥　あ……ありがとうございます♥　エリスさまのお慈悲に感謝で

す♥　はぐうう～～～♥　も……漏れちゃうぅぅ～～♥」

「ちゅぱ……れろれろ♥　んぐ……ほかには？」

「け、結婚しているくせに、ち……チンカスの掃除もできないダメな人妻をどうか躾けてください♥　だらしない主婦ヒロインにどうか下品マラ掃除をご教授お願いします♥　あぐ……も、もうでるううぅぅ～～♥　はぐうう～～～っ♥」

「はう……んちゅ♥　ちゅく……ンン……汚(お)チンポの上に我慢もできないんだね♥　カッコつけてるだけで情けないオバサンだね♥　ちゅ……ぬめろ……いいよ♥　んぷ……エリスにチンポフェラされて射精しちゃえッ♥」

口内で肉竿がよりいっそう大きくなり、射精に向けて走り出す。小さなベロの感触を思う存分楽しみ、恥垢をこそぎ落とされる快美に陶酔する。

二十年ぶりにフェラチオされたメス肉棒に耐久力があるはずもなく、あっさりと濃縮精液が噴き出した。

ブビュルッ♥　ブビュルッ♥　ブビュルッ♥　ボビュビュウウウウゥゥゥ～～～～～ッ♥　ドピュッ♥　ビシャア♥　ビシャア♥　ビュクビュクビュクウウゥゥ～～～～ッ♥　ドプッ♥　ドプドプドプドプウウウゥゥウゥゥゥ～～～～～～ッ♥

「きゅ、く……くふううぅぅ～～～～♥　んっ♥　はぐ♥　あぁぁんっ♥　イクイクイクイク♥　イッてしまううぅ～～♥　アンッ♥　ハウウッ♥　ふあああぁぁぁ～～～～ん♥　フタナリ汚物チンポをペロペロされてぇ♥　恥垢聖姫セルシアンはマゾ射精しちゃうのおおぉおおぉぉ～～～～ッッ♥♥　チンポ練乳キレイキレイにされて♥　チンカスだらけの不潔マラから熟成黄ばみザーメンでるううぅ～～～～ッッ♥♥」

スペルマの洪水を巻き起こしながら絶頂する恥垢聖姫。悪魔幼女のお口にたっぷりと白濁ゼラチンを注ぎ

込む。あまりの勢いに端から子種汁がこぼれてしまう。
　エリスは窒息しない程度に精液を飲み込むと、セルシアンに顔を近づけ、唇を重ねた。そのままザーメンと恥垢のミックスジュースを流し込む。
　想定外の汚物注入に人妻ヒロインは目を見開いた。
「んぐっ!?　ふぐうううぅ～～～～！　んぷうううぅ～～～～！」
「ちゅく……んん……♥　どう？　自分のザーメンとチンカスは美味しい？」
「……ッ……おぶっ！　ごぶっ！　ごううう～～～～っ！」
　熟成された恥垢とザーメンを口移しされ、セルシアンは辱悦に悶える。強烈な臭気で味覚、嗅覚を陵辱され、胃の中からすっぱいものがこみあげてくる。
「お、お願い吐き出させてぇっ！　臭くて気持ち悪いのぉっ！　じゅぐ……ぐむむむ……！」
「し～らない♪　自分のチンカスなんだから責任もって処理してよね汚物オバサン♥　ちゅぐ……じゅりゅううん♥」
　小さなベロが動き回り、最低の汚濁を喉に歯茎に塗りたくっていく。絶望的な状況に意識が遠のいてしまいそうだ。
「んぐっ！　いぐぅぅ～～っ！　も、もうやめてっ！　うぐっ、汚いぃ……！　許して……許してぇぇ……」
「ム・リ♥　こんなに汚いモノをエリスは舐めてあげたんだから♥　ホントッ最悪～～♥　ふむ……ぶじゅりゅりゅんっ♥　感想でも言ってくれないとこの唇は離せないな～♥」
「むぅぅ……言うわっ！　はぶっ……何でも言うから口を離してっ！　おぅぐぐ……あ、洗わせてぇぇぇえぇッ！」
「と～ぜんエリスの期待に応える内容でだからね。失望させないでよね♥」

「ぶぐ……ごぶっ……ひゃいい……っ！」

恥垢ドリンクで窒息しそうになりながら、作り笑顔で羞恥にまみれたコメントを強要される。

ヴィンテージチンカスと濃縮ザーメンの感想を。

「こんなの……まず……あ、いえ、おいしいわよ……♥　とってもとっても♥　私のチンカスとザーメンとっても美味しいのぉ♥　積もりに積もったフタナリ下品汁♥　ゴミ以下の廃棄汁がたまらなく美味しいのっ♥　ババア聖姫特製チンクズジュースおかわりしたいくらい大好きなのおおぉおおぉおおお♥　おぶっ♥　ぐぶっ♥　んむうう～～～ッ♥」

「キャハハハハッ♥　よく言えました♥　ん、ぷはぁ……♥　はぁぁ……悪魔も後ずさりするくらい最低だったよ♥」

「んむっ、ハァ……ああ……わ、私なんてことを……」

「これで終わったと思わないでよね。これからもっと、い～～っぱい可愛がってあげるんだから♥」

唇を離し比喩ではなく悪魔の笑みを浮かべるエリス。

こうして天煌聖姫セルシアンは最悪のフタナリ調教の闇へ沈んでいく。

だが、正義の人妻ヒロインは決してあきらめてはいなかった。

（私は負けないっ！　愛華、陽一、お母さん必ず勝ってみせるから！）

蒼いロングヘアーを煌めかせ、絶対にエリスを打ち倒すと胸に誓った。

第六話　淫辱のオナホクイズ！　感触をレビューさせられる蒼髪ヒロイン！

「ハァハァ……ッ……」

膝をつき肩で息をしながら、身体の状況把握に努めるセルシアン。なんとか反撃する手段がないかと思考を回転させる。だが、やはり淫紋の起動でセイクリッドギアを操れず戦うことができない。

エリスに立ち向かおうと思っても身体が動かないのだ。

（ダメね……この子の害になる行動はとれない。淫紋を除去しないと何もできない……っ）

悔し気にうつむく姿を見て悪魔幼女はゲームを提案した。ヴァーミリオンと同じように心を折って、自分のペットにしたいのだ。

深紅の瞳にサディスティックな光が灯る。

「ねぇ、オバサン。エリスとゲームしてみない？　二十五日の間フタナリ調教に耐えられたら解放してあげる♥　ただし、途中でギブアップして、『変態ペットにしてください』って言ったら負けね。前に調教されてるなら説明しなくてもわかるかもだけど♥」

「ええ……でも二十五日とはずいぶん中途半端ね。そんなに短くてもいいの？　あとで自分の愚かさを悔やむことにならないといいけど。それに」

「それに？」

「何があっても家族には手を出さないでちょうだい。それさえ守ってくれるならゲームをしてあげてもいいわ」

「キャハッ☆　自信満々だね～。ま、こういうタイプのほうが堕としがいあるけど。いいよ、愛華ちゃんや陽一くんには手を出さないであげる。これで契約成立だね♥」

「なにかするなら早くしなさい。私もヒマではないのよ」

「じゃあ、さっそくゲームスタートだね。これからやってもらうのは～～、オナホ当てクイズだよ！　イエ～イ、ドンドンパフパフ～～♪」

二十五日の期限はヴァーミリオンの調教終了日に合わせた設定なのだが、今のセルシアンには知る由もない。愛娘がフタナリ調教を受けていることも。

そして、エリスが指をパチンッと鳴らすと床に魔法陣が展開し、中からテーブルとその上に乗せられた円筒形の性具、すなわちオナホールが現れた。

半透明のオナホールは全部で七つあり、表面にAからFのアルファベットが刻印された物が六つ。刻印のない無印の物が一つある。その中から無印の物を手にとり、エリスは説明をはじめた。

「目隠しをしてこの無印のオナホールと同じ物を当ててもらうよ♥　AからFの内一つだけがコレと同じオナホなの♥　でも時間制限、二十回シコシコするまでに答えてね。できないとゲームオーバーになっちゃうよ♥」

「……性根の腐ったデモンコアらしい内容ね。まぁいいけれど、ルールそれだけなの？　簡単すぎて欠伸がでそうだわ」

「あっそうだ、途中で射精してもアウトだからね。負けたらキッツイ罰ゲームを受けてもらうからがんばって♥」

「いいわ。さっさとしなさい」

「まずはカタチを覚えてもらうね♥」

蒼髪ヒロインは直立の姿勢で手を腰の後ろへ回し、股間を突き出すポーズをとらされる。早くも硬さを取り戻し、怒張したフタナリ陰茎を無印のオナホールが包み込んだ。

温かな疑似蜜壺が亀頭の先から根元までを淫猥に抱擁し、抽送するエリスの手の動きが急速に射精衝動を

高めていく。キツさとやわらかさのバランスが絶妙で、一擦りごとに魂が天国へ導かれるようだ。魔界で作られた逸品は圧倒的な挿入快感を提供する。

想定外のオナホ快美に調教経験のある人妻ヒロインも目を見開いた。

ずぶ♥　じゅぶっ♥　じゅぶっ♥　ずじゅぶっ♥　もにゅっ♥　じゅぷじゅぷ♥

「ひぐっ♥　きゅふうううぅぅ～～～～♥　な……こ、なにこれぇいいぃぃ～～♥　ち……チンポがトロけりゅうううぅぅ～～～～♥　ひゃうううう～～♥」

「スゴイでしょ～、エリス手作りのオナホだよ♥　ていうかまだ射精しないでよね。ゲームにならないでしょ？　まだま～～だ我慢だよ♥」

「わ、わかってるわよ……ふぐうぅ♥　こ……こんなものに私は負けないわっ！　んっ♥　んきゅううう～～♥　か、必ず正解してみせるわっ！」

「その調子だよオバサン♥　今の感触をよ～～く覚えておいてね♥　目隠しをしたらゲームスタートだから♥」

すぐに黒布で両目が覆われる。なにか魔法を使っているのか光の気配さえない。真夜中の海に投げ込まれたような感覚だ。

視界を封じられたことにより、他の感覚が鋭くなっていく。相手が見えない不安からフタナリペニスの勃起強度が増し、肌に触れる空気の流れさえも過敏に感じてしまう。

「どのナンバーかはオバサンが選んでいいからね♥　はじめはどれにする？」

「Aよ。Aのオナホールにするわ」

「オッケー♪　Aからゲームスタート！　回答は○か×でお願いするよ♥」

金髪ツインテール幼女が嬉しそうに嗤い、オナホ当てクイズがはじまった。一つ目のオナホールが肉竿をすっぽりと抱きかかえる。

入り口は狭く中は肉厚なオナホールが人妻ヒロインの肉竿を刺激する。コリコリと肉をかき分けていく感触が心地よく、細かな突起が敏感亀頭を撫で上げ、早くも絶頂に達してしまいそうだ。

ぬちゅっ♥　ぶにゅっ♥　ふに♥　じゅぷ♥　じゅっぷじゅっぷ♥

「んっ♥　っ……はううぅぅっ♥　きゅふっ♥　ひぐううぅぅぅッッ♥」

「オバサンのくせにカワイイ声♥　ガッチガチの勃起チンポも嬉しそうだよ♥　うんしょっと、はいこれで一回目♥」

「んひいいいぃぃ～～♥　はぁ……はぁ……ッ♥　くうッ♥　あううっ♥　くっ……あぐうううぅぅぅぅ～～～～♥」

「二回目だよ♥　うわっ、おチンチンがビクンッビクンッってなってる♥　先っぽから透明なお汁が垂れてるよ♥　感じすぎ～♥」

「い……いわないでっ♥　ん……ぐふぅっ♥　アンッ♥　アンッ♥　アアン～～ッ♥　ッ……ヒグウッ♥　んぐううぅぅ～～～～♥」

「うんしょ、うんしょっと♥　これで五回目だね♥　早く答えないとタイムアップだよ～～♥」

一回ごとにフタナリペニスが鼓動を打ち、心身を紙やすりで削られていくようである。皮を剥かれた包茎亀頭は、極端に刺激に弱く、ライチのようにプルプルと震えてしまう。

身体の内奥に灼熱の溶岩が溜まり吐き出したくてたまらない。セルシアンの強靭なメンタルでなければ、一分と我慢することもできないだろう。

神経を走り回る快美の電流に耐え、無印との違いを見つけ出す。

選んだ答えは、

「違うっ、これじゃないわ！　正解のオナホールじゃないぃッ、こ……答えは×よ！」

「本当に～～？　その答えでいいのかな？　うんしょっと」

「ええっ！　ん……んくうぅぅ～～♥　そ、それでいいわ！」

「オッケー♪　はーい、正解は～」

「んん……ッ♥　あふうぅぅぅ～～～～♥　んっ♥　は……はやくしてぇっ♥」

「×！　はい、第一問クリア～～♥　あと十四回シコシコしたら第二問いくね♥」

「はあああぁぁぁぁぁぁんッ♥　と、当然よ……っ……くっ♥　くふうぅぅぅ～～～～♥　んんんんん～～～～ッ♥」

正解してもフタナリペニスを嬲られることには変わらない。二十回は絶対に抽送されるのだ。正解を見つける以前に、射精を耐えられるのだろうかと蒼髪ヒロインを不安が襲う。

だが、それでも決してあきらめない。セイクリッドギアを手に取った時から、どんな屈辱にも恥辱にも耐える覚悟をしてきたのだ。

娘に手ほどきをしてきた自分が早々にあきらめて、敗北するわけにはいかない。心を刃のように鋭く研ぎ澄まし、二つ目のオナホールに挑む。

「Dのオナホールよ。次はDでお願いするわ」

「ご注文ありがとうございま～す♥　D、いっくよ～♥」

DのオナホールはAと違って入り口が広く、あっさりとフタナリ陰茎を迎え入れた。長さもかなりあって、セルシアンの巨根でも窮屈しない。

エリスは快悦を与えるために先ほどより速く手を動かした。

ローションと先走り汁が混ざり、卑猥な水音を立てる。

しゅこっ♥　ちゅこっ♥　ぬちゅっ♥　ぬちゅっ♥　ぬちゅっ♥　ぬちゅっ♥

「どうかな～？　Dのオナホールは気持ちいいかな～？　キャハハ♪」
「ひぅっ……は、はぐうう～～～♥　あ……アアン♥　ンッ♥　クウウゥッ♥　んぐうううぅ～～～～♥　あぁぁぁぁ～～っ♥」
「ほらほら、喘いでばかりいないで説明してよ～。中の具合とかさ～。エリスつまんな～い♥」
「ん、んんっ♥　あふぅっ♥　な、中はヌルヌルしていてぇ……気持ちよくてぇ……♥」
「他には、他には？」
「穴がまっすぐで……ひ、ヒダが深いのおおおぉぉぉ～～～～♥　んっ♥　ング……ッ♥　ハウウゥウ～～ッ♥　く、クセになっちゃう♥　おほおおおォオォ～～～♥」
「うわ～、亀さんがプルプルしてるよ♥　トロトロお汁垂らしてエッチすぎ♥　ん～、先っぽが特にイイのかな～？」
「あっ、ひいいいぃ～～～～♥　そ、そうなのっ♥　皮かむり包茎亀頭がイイのぉっ♥　引く時にチュッチュってバキュームされちゃううぅぅッッ♥」
悪魔幼女にオナホコキされ、さらに恥辱レビューまでさせられてしまう。Dのソフトな刺激と強烈なバキューム力に肉竿の耐久力が削られていく。
頬が紅潮し膝がガクガクと震える。各オナホールのタイプが違うため、まったく異なる快美感が蒼髪ヒロインのフタナリ衝動を責め立てる。
快楽の奔流が思考を支配し考えがまとまらない。
十回をすぎたところでようやく答えを決めることができた。
「答えは……×よ！　これも違うわ！」
「はーい、正解は～」
「あ……あぐうううっ♥　ひうううぅ～～♥　んひいいいいぃぃぃぃッッ♥　お、おチンポがぁ……♥」
「×！　やったね、二つ目もクリアー♥　次はどれに

する？」

「はぁ、はぁっ♥　ンぁ……つ、次はEよ」

「オッケー♪　E、いっきまーす♥」

手早く入れ替えEのオナホールにフタナリペニスが包み込まれる。今度はサイズが小さいのか根元まで入るのに時間がかかった。

素材はやわらかいが中は窮屈だ。

ずくっ♥　ぎゅっ♥　ぎゅっ♥　ぎゅっ♥　きゅぅぅ～～♥

「アウッ♥　ひぐうううぅ～～～～ッ♥　せ…せまいぃぃッ♥　うっ♥　あふうっ♥　あ、あまり動かさないでぇっ♥　んんん～～♥」

「え～、さっきは早くって言ってたじゃん♥　自分勝手なお願いは聞きませ～ん♥　は～い、スピードあ～～っぷ♥　ゴシゴシゴシ♥」

「ンッ……んほおおおぉオオォ～～～～～ッ♥　ふひ、はううっ♥　くぅぅ……んっ、やめてぇっ♥　射精する♥　オバサンザーメンでちゃうからああァァ～～～～ッ♥　チンポ汁でちゃうからああ～～ッ♥」

「説明してくれるならスピード落としてもいいよ♥　でも、も～～っと恥ずかしく、いやらしくエッチに言ってね♥」

「ひゃいいッッ♥　い、言います♥　言います♥　言いますからぁ♥　だ、だからゆっくりにしてぇ♥　んくぅぅ～♥　な、中はぁ……♥」

「中は～？」

「し、締まりがすっごくキツイの♥　カリ首も裏スジもギュウギュウに締めつけてくるう♥　キツマンでおチンポつらいぃィ～～～～ッ♥　んぁぁ～～♥」

「へ～、例えるならエリスみたいなロリマンコなのかな？」

「くふぅぅ～～～～ン♥　そ、そうなの♥　ろ、ロリマンコなのおぉっ♥　幼女のプニプニマンコを私の巨チンでカタチ変えちゃう♥　ぽっこりさせちゃううう

うぅ〜〜〜〜ッ♥」

小さく可愛らしい内壁に嬌声を上げる蒼髪ヒロイン。非日常の幼女膣穴に勃起ペニスが圧迫されていく。一歩間違えれば性犯罪者になりかねない凶悪なオナホールだ。

唇を噛んで射精を我慢して、八回目でどうにか答えを言うことができた。

「答えは……ッ……×よ！　このオナホじゃない！」

「はーい、正解は〜」

「く……ふうぅっ♥　ンンッ♥　あぐん、くううぅぅ〜〜♥　んっ、んんんん〜〜〜〜♥」

「×！　やったね、三つ目もクリアー♥　今度はどれにする？」

「はぁ、はぁっ♥　くッ……はぁ……つ、次はCよ」

「オッケー♪　C、いっきまーす♥」

Cのオナホールがズリズリと肉竿を飲み込んでいく。内部にはヒダが多くまるでナマコの裏表を逆にしたようだ。

細かい突起愛撫に蕩けた肉竿がさらに怒張する。

ずちゅ♥　ずずちゅ♥　むちゅ♥　こりゅ♥　ふに♥　むにゅる♥

「あ……アン、あぐうううぅぅぅ〜〜〜〜ッ♥　い……イボイボ擦れるううぅぅッッッ♥　ふひゅウウウ〜〜〜〜♥　お……おあぁァ〜〜ッ♥」

「どこが一番気持ちいいのかな〜？」

「ぜ、ぜんぶ♥　ぜんぶ気持ちいいのおぉおぉぉッ♥　んっ……んふ♥　き……亀頭も幹もジョリジョリされてぇ♥　キンタマが精子作りまくるううぅぅ〜〜〜〜♥」

「例えるならどんな感じ？」

「も……モデル♥　美人なモデルさんのマンコなの♥　くぅぅ……ひぃ……ハグウッ♥　やぁ……カズノコ天井のエロマンコぉ♥　おチンポぜんぶスケベにされるううぅ〜〜〜〜ッ♥」



美人相手にピストンしているような、刺激快感に悶えるセルシアン。強烈な挿入感からのピストンが心地よくてたまらない。名器を再現したオナホールに身体が火照る。

無印と遜色ない快美に十八回目でようやく回答することができた。

「答えは……×よ……このオナホでもないわ……ッ……♥」

「はーい、正解は～～」

「ンッ、はふっ……うう……お、おチンポがぁ……つ、つらいいっ♥」

「×！　やったね、四つ目もクリアー♥　あと二つだね～、どれにしよっか？」

「く……はぁ……はぁ……ひぐうぅッ♥　ッ……はぁ……つ……つ、次はBよ！」

「オッケー♪　もう限界って感じだね♥　B、いっきまーす♥」

度重なるオナホール挿入で精神力はもう限界だ。フタナリ陰茎も先走り汁でヌルヌルになり、いまかいまかと射精を待ち望んでいる。

恐らくこれが最後のチャンスだ。ここで無印を引き当てられなければ、たとえ正解しても射精してしまうだろう。嗜虐心が振り切れているデモンコアの罰ゲームなど、絶対にお断りである。

祈るような気持ちで挿入を待つ。

そして――

ずぶ♥　じゅぶっ♥　じゅぶっ♥　ずじゅぶっ♥　もにゅっ♥　じゅぷじゅぷ♥

「こ……これよ！　このオナホールだわっ！」

「お～、ついに正解かな～？　答えは○でいいんだね？」

「ええ、○よ！」

「はーい、正解は～～」

「ヒグ……も、もう……ムリぃ♥　お……お願い当た

ってぇ……おチンポつらすぎるぅ……ひゃうふうう～～ッ♥　んくぅぅ～ッ♥」

「○！　やったね、大正解♥」

「や、やった……」

「それじゃ、あと十六回ゴシゴシするから待っててね♥」

「え、ええ……」

ようやく終わりが見えてきて意識が緩む。だが、彼女は気付いていなかった。今までエリスはオナホールをただ前後させてきただけということを。

悪魔のテクニックを何も使っていないということを。

色欲の夜天は最後になって本気で指を動かした。これまでとはまったく異なる辱淫がセルシアンを襲う。

ずぶ♥　ずっぶ♥　じゅじゅぶっ♥　ずぶっ♥　ちゅじゅぶっ♥　もにもにゅっ♥　じゅぷじゅぷ♥

「うっ、ン、んほおおおォォォ～～～ッッ♥　やぁ……だめぇ♥　な、なんで……!?　なんでこんなにしゅごいのおおおぉぉ～～～～ッ!?　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポがアアアアア～～～ン♥　ひゃ……射精耐えられないっ♥　で……でちゃうからああァァ～～♥」

「えへへ☆　エリスのマジオナホコキすごいでしょ～♥　ほ～らあと十回だよ♥　ガマンガマン♥」

「無理無理無理無理無理無理無理いぃッ♥　んんん～～♥　お……おほっ♥　おほおぉぉ～～ッ♥　ざ、ザーメン漏らしちゃうぅぅ～～ッ♥　牡チンポスケベ汁でるううぅ～～ッ♥」

「も～、なっさけないオバサンだね♥　え～となんだっけ？　簡単すぎて欠伸がでそうだっけ？　ププッ♥」

「ごめんなしゃい♥　ごめんなしゃい♥　もうむりなのおおおぉぉ～～～～♥　指がすごすぎてぇ♥　オナホパワーアップしてるのぉ♥　オバサンチンポ限界なのおお～～～～♥」

絶妙な指使いでオナホールを前後させていく悪魔幼女。元々素晴らしい内壁がさらに強化され、男根が急速に搾られていく。

陰嚢から熱いモノがせりあがり、ドクンドクンッと肉茎が跳ねる。白い汚濁が噴き出ると同時に思考が明滅し、天煌聖姫セルシアンは屈辱のオナホアクメを極めてしまう。

ビュッ♥　ブリュ♥　ブリュ♥　ドピュッ……ピュ、ブ、ブビュルルル～～～～♥　ドビュビュビュビュ♥　ブバッ♥　ドクン♥　ドクンッ……ボビュビュ、ゴププププウウウゥゥ～～～～～♥♥

「ひゃぐっ♥　ひ、ひぐうううぅぅぅ～～～～ッ♥い、嫌ぁ♥　嫌ぁ♥　嫌ぁ♥　やぁ……ジ、んぐううう～～～～♥　ざ、ザーメンでるうぅぅ～～ッ♥　せ、正解したのにっ♥　正解したのにマゾチンポ負けちゃうのおおぉォォ～～っ♥　お……おっっぐぅ♥　オナホでシコシコされて淫乱アクメしちゃううう♥　玩具マンコに敗北ザーメンでるうぅぅ～～～～ッ♥」

お腹の底から湧き上がるフタナリ汁を解き放つ人妻ヒロイン。焦らしに焦らされたフタナリペニスが暴発し、快美の濁流に飲まれていく。

「あ～～あ、残念♥　これで罰ゲーム決定だね♥」

「ぐっ……あ……くうぅ……」

「負け犬オバサンにはこのアクセサリーを着けてもらうよ♥　準備ができたらもう一度ここに来てね♥」

「こ、この衣装は……」

エリスに手渡されたそれを見て人妻ヒロインは唇を噛む。そこにあるのが自分にはおよそ不釣り合いな装飾ばかりだったからだ。

こんなものを街中で身に着けていれば、確実に馬鹿にされてしまうだろう。いい年して恥ずかしくないのかと嘲笑されてしまいそうだ。

しかし、オナホクイズ勝負に負けた今、セルシアン

に拒否権はなく道場の脱衣所で羞恥着替えをするしかない。

すべて着け終わると、美熟女ヒロインはエリスの前におずおずと姿を現した。

「キャハハハ♥　アッハハハハハ♥　よ、よく似合ってるよ♥　ププ……♥」

「こ……こんな格好……屈辱だわ……ッ！」

セルシアンはレオタードスーツの胸と股間に穴を空けた秘部が丸出しの状態で顔を出す。さらに、頭には犬耳のカチューシャ、首には大型犬用の首輪、乳首には鈴のつけられたクリップ、お尻には尻尾タイプのアナルバイブが挿入されていた。

どこからどう見ても変態的な痴女の格好だ。

羞恥のメス犬衣装に頬が染まりもじもじと股間を押さえる。このままコスプレＡＶでも撮影するような変態コスチュームである。

悪魔幼女はニマニマと口の端を吊り上げると、罰ゲームの内容を発表した。

「罰ゲームの説明をするね♥　オバサンにおチンポ突っ込んでもらうのは～～、じゃーん、この子だよ♥」

「ッ――――、こ、これ……？」

「うん☆　今から動画撮影するからぁ、この子におチンチン突っ込んでザーメンぴゅっぴゅっしてね♥　もちろんコメントもしてもらうから♥」

「ぐ……この外道……あとで見てなさいよ……」

用意されたのは大型犬、ドーベルマンをモデルにしたオナホールであった。ピンク色の半透明で中が透き通りよく見える。お尻の部分に穴が開けられ、ペニスを挿入できるようになっていた。

これを使って犬オナホール交尾セックスをしろというのだ。趣味の悪さに吐き気を催すが、罰は受けなければならない。

蒼髪ヒロインはためらいがちに後ろへ回り、お尻の挿入口にフタナリペニスを押し入れる。内部はローシ

ョンで満たされ、ニュルニュルとした感触が竿をやさしく招き入れた。ヒダの感触も抜群で無印と遜色ない。早くも肉竿が硬さを取り戻し、陰嚢が精子を圧送する。射精直後で敏感になった亀頭がまた暴発してしまいそうだ。

「んん、くっ……はうぅうん……うぅ……」

ここまでならただのサイズの大きなオナホールだが、数秒して意識に変化が起こった。なんとローションに催淫薬が混ぜられており、外見だけでなく心までがメス犬へと作り替えられたのである。

意識に霞がかかり耐えがたい射精衝動が押し寄せ、セルシアンは犬の物真似をしながらしゃべらされてしまう。

「わんっ⁉　わ……わんわん、わおーん⁉　わ、私になにをしたわんっ⁉」

「キャハハ、そのオナホに突っ込んだらぁ～、本物のワンちゃんになっちゃうの♥　はーい、罰ゲーム犬オナホで獣（けだもの）セックスいってみよ～～♥」

「な、なにそれ⁉　わ……わん♥　ん、きゅうん……ん……わ、わん♥　わん♥　わん♥　わん♥　な……なんでぇ♥　こ、腰が止まらないいいぃ～～～～♥」

薬の効果で発情し交尾してしまう人妻ヒロイン。ドーベルマンのたくましい背中にHカップ巨乳を押し付け、カクカクと腰フリダンスをやめられない。

朱色の乳首ではチリンチリンと鈴が鳴り、羞恥を加熱させていく。口からはハッハッと舌を突き出し、浅ましくトロ顔まで晒してしまう。

ぱん♥　ぱん♥　ぱん♥　ぬちゅ♥　ぐちゅ♥　ずちゅ♥　ぱん♥　ぱんぱんぱん♥

「わんっ♥　わんっ♥　わんわんわん♥　わんっ……んぐ～～っ♥　こ、腰フリが止まらないワン♥　わん♥　わん♥　くう～～ん♥　おチンポぬるぬるになっちゃうワオ～ン♥」

「それじゃ、インタビューにいってみようかな♪　エ

リスのカメラをよく見てね♥」
「わん♥　わん♥　わうんっ♥　ひゃ……ひゃいワン♥」
「今日は犬オナホとハメてる変態さんがいると聞いてやってきました！　あ、すご～～い♥　昼間から盛りまくりですね♥　噂通りの淫乱フタナリマゾみたいです♥　オバサ～ン、気持ちいいですか～～？」
「わふん♥　き、気持ちいいワンッ♥　チンポハメハメ最高だワン♥」
「自分の家だからってハッスルしすぎだよね～～♥　ぱんぱんぱんってうるさすぎ♥　犬耳痴女コスプレまでして恥ずかしくないんですか～～？」
「は……は、恥ずかしいワン♥　でもいいのワン♥　わん♥　わん♥　ケダモノオナホ交尾やめられないワン♥　わん♥　わん♥　わんわん♥　交尾しゅきすぎるワフンッ♥」
「キャハハ、バカみたいですね～～♥　画面の前のい い子はこんなことしちゃだめだよ♥　あれ？　オバサンには子供がいるって情報が入っていますよ。いいお年みたいですね。え～と、今何歳だっけ？」
「わ、わん……そ、それは……」
「今何歳だっけ？　それと本名も追加ね♥」
「くぅん……うう、よ……あの、よ、四十一歳だワン♥　神城冴子は四十一歳だワンワン♥　子供も二人いますワン♥」
「うわ～、四十一歳にもなってフタナリ変態オナニーしてるんだ♥　犬みたいに発情して♥　うへ～、エリスどん引き～♥」
「あぅぅ……も、申し訳ありませんワン♥　い、いい年して変態センズリが大好きで申し訳ないワン♥　でも……でも、我慢できないワン♥　交尾オナニー気持ちいいワン♥　犬ハメハメハメ最高だワン♥　わん♥　わん♥　う～～わんッ♥」
「みなさ～～ん、このオバサン実は変身ヒロインもや

ってるんだよ♥　悪魔と日夜戦ってるんだって♥　すごいよね～♥　はい、自己紹介してみよっか♥」

「わん♥　て……天煌聖姫セルシアンだワン♥　魔界からの侵略者、デモンコアから人々を守るワン♥　ん……きゅぅ……あ、ああん♥　んん～♥　ひぅっ……わ、わんわんわん♥」

「へー、カッコイイね♥　でも正義の味方が変態センズリしてていいのかな？　画面の前のみんなが幻滅しちゃうかも♥」

「やぁぁ……わ、わん♥　わん♥　わん♥　仕方ないワン♥　コスプレセンズリ大好きなんだからワン♥　ん……んんん～～ッ♥　ひふぅぅ♥　へぅぅぅ♥　も、もうおチンポ苦しいワン♥　で、でるうぅぅ～～～ワン♥　わん♥　わん♥　わん♥」

「みんなー！　もう出ちゃうんだって♥　変態の上に早漏だなんてどうしようもないオバサンだね♥　いいよ、イッちゃって♥　四十一歳で交尾オナニーしてる淫乱コスプレオバサン♥」

「あ、ありがとうワン♥　ンぁ……ひぃう♥　あ、ん、んふう～～♥　わん♥　わんわんわんわんわんわんわんわんわん♥　犬ザーメンでるワオ～～～～ン♥」

パンパンと腰を振りながら、オナホ交尾に溺れる人妻ヒロイン。フタナリペニスを根元まで深く押し沈め、快美の肉圧を貪っていく。

陰嚢も犬尻に密着させ本格的な交尾気分に浸る。数秒に一度は熱い息を吐き出し、倒錯的な快楽に溺れていく。亀頭はエラを最大に反らせ、射精を待ち望む。

カメラで撮影させる屈辱的なシチュエーションなのに、やめられないし止めることができない。オス犬のように種付けを求めるのみだ。

そして、排尿の感覚に似た熱い滾りが股間を支配し、怒張した肉竿が精を暴走させた。

ドビュッ♥　ドビュッ♥　ビュルルルッ♥　ドピュッ♥　ボビュビュ♥　ビュクンッ♥　ドビュビュビュ

ビュウウウゥゥゥ～～～～～ッッ♥♥　ブバ♥
ドビュグウウゥゥ～～～～ッ♥
「わふ♥　わほおおおぉオォォ～～～～ン♥　イクイクイク、チンポイクううぅぅぅッ♥　四十一歳なのに交尾オナニーしてる変態がイクワン♥　イクわんっ♥　イクわんわんわんっ♥　正義のヒロインなのにメス犬マラがイックわんんん～～～～♥　わんっわんっ♥　恥ずかしいマゾニューロンがキュンキュンいってるワン♥　犬オナホ罰ゲーム絶頂しちゃうワオオオ～～～～～ン♥♥」
　涎を垂らしながら、盛大にメス犬アクメを極める天煌聖姫セルシアン。牡の快楽でいやらしい笑みを浮かべ、白目をむいてアクメする。
　最低のエクスタシーで射精するその姿は、本物の犬そのものであった。
「キャハハハハ♥　アハハハハハハハッ♥　あ～おもしろかった♥　今日はこれくらいにしといてあげる♥」
　また次の調教で会おうね変態オ・バ・サ・ン♥」
「わふん……へぅ……うぅぅ……」
　チリンッと鈴を鳴らしながら犬オナホールにもたれかかるセルシアン。
　残り二十四日。人妻ヒロインの家族とプライドを賭けた戦いがはじまった。

第七話　汚辱の着衣お漏らし！　息子のそばで辱められる熟れた肢体！

セルシアンのフタナリ調教から二日目。

神城家の地下深く。

そこにはデモンコアの研究施設があった。シェルターのような建物の内部には、ところ狭しと機材が並べられ、戦闘シミュレーションの部屋や東西の魔術本など、統一感のない品物が置かれている。セイクリッドギアの開発者、神城誠一郎（せいいちろう）が建造し魔界の侵攻に対抗するため、様々な装備が日々ここで開発されているのだ。

夫が海外にいる現在は冴子が指揮をとり、陽一と共に神聖粒子の応用技術を編み出していた。あいにく愛華はこの手の分野が不得手なため、もっぱらテストプレイ専門だ。

冴子と陽一はいつものように新装備を、今回は対魔ハンドガンの試射と、新しい戦闘プログラムを試す用意をしていた。愛華は別の用事で家を空けており、少し建物の中が静かである。

服装は二人ともTシャツにジーンズとカジュアルな格好だ。

陽一はハンドガンを手に取ると、

「姉ちゃんもいないし、今日はぼくがやるよ母さん。シミュレーションルームの起動をお願い」

「かまわないけど……無理は禁物よ。あなたは――」

「適性がない、だろ？　知ってるよ。だからって女の子に任せてばかりじゃカッコつかないからね。大丈夫、いつか裏方以外でもきっと役に立ってみせるから」

「……そこまで言うのなら任せるわ。がんばってね」

「うん！」

陽一は手を振りながら四方が白で覆い尽くされたシ

ミュレーションルームへと入る。中ではホログラムによる仮想戦闘を行うことが可能で、セルシアン、ヴァーミリオンもここで戦い方を学んできた。

仮想といっても本物と寸分違わないデモンコアが出現し、心身にかなりの負担がかかってしまう。一人息子を心配するのも無理はなかった。

冴子はパソコンの前に座り不具合がないか確認しながら先ほどの言葉を思い返す。家族のために戦いたいという息子の想いはやっぱり嬉しい。まだまだ不安なところもあるが、いつの間にか夫に似てきたと思う。成長を感じながら部屋に繋がるマイクのスイッチを入れる。起動中は外部の様子が見えないため、このマイクが唯一の連絡手段になる。

次に出現するデモンコアのレベルやステージを設定する。戦闘プログラムを最新の物に切り替え、陽一がプレイヤーのためレベルは一、ステージは夜の公園だ。

すべての手順を終えるとスタートボタンにカーソルを合わせクリックした。

内部の景色があっという間に塗り替えられ、街灯が灯る夜の公園にガーゴイルタイプのデモンコアが複数出現した。

「よし、いくぞ！」

トリガーに指をかけ、神聖粒子の弾丸を発射していく。

冴子はそれを見ながらエネミーのスペックを確認し、時に指示を出していく。

素人の陽一に何も助言しなければ、すぐにゲームオーバーになってしまうだろう。せっかくやる気を見せているのだからクリアしてほしいと思う。

『そこしゃがんで！　一度距離をとって！』

「はい！」

『リロード！　弾丸を無駄使いしないで！』

「了解！」

的確に指示を出し、撃破数を稼いでいく。

その一方で、銃の欠点も見過ごさない。
（もう少し連射速度を上げたほうがいいわね……今のままだと決定力に欠けるかも……）
しかし、三分がすぎたところで異変が起こった。陽一がミスをしたというわけではない。突如、冴子の息が乱れはじめたのだ。
息が苦しそうで、マイクから聞こえる声に甘いものが混じりだす。
常に冷静で眉一つ動かさず敵を撃破する彼女らしくない。
『ン……そ、そうよ……そこを躱（かわ）してぇ……♥　ン……んんっ♥』
「うん？　母さんどうかしたの？」
『くぅ……っ……な、なんでもないわ。集中しなさい……♥　んくぅ……♥』
「う、うん。わかった」
不思議がりながらも戦闘を続行する陽一。一方で、人妻ヒロインは快悦に苦しんでいた。
原因はHカップ巨乳の乳首とフタナリペニスにつけられたピンクローターである。冴子から離れたのを見て、色欲の夜天が調教に動きだしたのだ。
コウモリの姿に化けたエリスはキーボードの隣で囁く。
【キャハッ☆　今回の調教は三つのお願いだよ♥　エリスの言うことを必ず三回聞いてもらうからね♥　一つ目はローターをつけての羞恥プレイ♥　そのまま指示がんばってね～♥】
「わ、わかっているわよ……ン……ハグゥゥ♥　うん……♥　だ、だから陽一にだけは手を出さないで……んっ、くうぅ～～っ♥　はぁぁうッ♥」
【オバサンがお願い通りにするならね～。約束は守るよ♥】
そう、今日のテストプレイは悪魔幼女に仕組まれたものだったのだ。息子に隠れながら調教することで、

セルシアンを辱めようという算段である。
　エリスが念波を送るたびにローターの振動が激しくなっていき、先刻から何度ももどかしい快楽が訪れていた。すでに乳首は朱色になってそそり立ち、フタナリ陰茎はバッキバキに勃起している。狭いジーンズの中で滾った怒張が息苦しそうだ。
　それでも絶頂できないのは悪魔幼女の意地の悪さからくるものである。
　生殺しの淫悦に苛まれながら再び陽一へ指示を出す。できるだけ平常通りに話すしかない。フタナリの上に変態オナニーをしているなんて息子にバレたら一巻の終わりだ。
　これまで母親として積み上げてきたものが崩壊してしまう。
　ヴヴヴ！　ヴヴヴ！　ヴヴヴヴヴ！　ヴヴヴヴヴゥゥゥゥ！
『ひぐ……そ、そこターンしてぇ……♥　ほらァ……つ、あうっ♥　次の敵が……くるわよ……♥』
「う、うん」
『んぐゥゥんっ、と……トドメを刺す時はぁ……♥ン……ひゃっ……に、二発以上撃ち込みなさい……♥あぅぅ……♥』
「……こうかな？」
『そ、そうよ♥　デモンコアは生命力が強いから……ッ、あぐぅっ♥　くぅぅ……ぁ……あん♥　む……くぅぅぅ～～♥』
「母さんホントに平気なの!?　声が苦しそうだよ！」
『ご、ごめんなさい……きゅうん♥　あん♥　な、なんだか熱っぽくてぇ……あふ♥　ふうううぅぅぅ～～～♥　か、風邪でも引いたのかも……っ♥』
　必死に淫辱を誤魔化そうとする人妻ヒロイン。だが、勃起乳頭をブルブルと嬲られるローター振動の前では、快楽に悶えることしかできない。振動のたびに甘い痺れが訪れ、肉体を熱く熱く疼かせていく。

股間もぐっしょりと濡れそぼち、淫裂からは愛液がとめどなくこぼれてくる。肉竿から伝わる刺激がクリトリスに伝播し、女の部分が妖しくうねる。

肉竿本体もジーンズに浮かび上がり、快美バイブレーションで躾けられた亀頭部分は、包皮を剥かれ真っ赤に充血していた。鈴口からこぼれたカウパーがショーツに恥ずかしいシミを作っている。

欲情の羽音に蝕まれるフタナリペニスは早くも射精寸前だ。

【またまた～～、見え透いたウソついちゃって～♥　オモチャで変態オナニー中のくせに♥　チンチンいじめられてフル勃起中のくせに～♥】

「あ、あなたのせいでしょ……ハゥ……♥　んんっ♥　か、勝手なことを……」

【ん～？　そういう反抗的な子ってエリスは嫌いだな～♪　容赦しないよ～？】

「き、奇遇ね……私も大嫌いよ……あなたみたいな下衆悪魔はね」

【ふふ～～ん、強がるねオバサン♥　でもぉ……これでもまだそんな口がきけるかな？】

エリスはチロリと唇を舐め、ローターの出力を最大レベル近くまで引き上げた。

身体の芯まで響く高速振動が天煌聖姫の恥部を責め立てる。

ヴヴヴヴ！　ヴヴヴヴ！　ヴヴヴヴ～～～～ン！　ブヴヴヴ～～～～ン！

『ひぐぅッ♥　ン……んむうぅぅ～～～～んッ♥　あっ、ふあぁぁぁ♥　や、んんんん～～♥　くううっ♥　は、はあああぁぁぁぁ～～～～ん♥　嫌っ……ひゃぁぁぁぁんッッ♥』

「か、母さん!?　ぼくもうでるよ！」

『はひゅ、ひぎ♥　し、心配いらないわ……♥　ま、マイクの調子が……ッ……ひぅ……わ、悪いみたい♥　い、一度切るからぁ♥　んくううう、はう、ひぅうッ

♥　お……終わったら出てきてね♥　んふぅッ♥　ふうぅぅ～～ん♥』

どうにか取り繕いながらスイッチを切る。

ギリリと歯ぎしりするほどに口内を噛むが、その程度の痛みではローター振動にまったくかなわない。火照った肉体は快美を求め、溶岩めいた射精衝動がせりあがってくる。

肛門から膣に繋がる括約筋を引き締めての抵抗も試みるが、とても効果がありそうにはない。むしろ肉の疼きが激しくなり、肉竿全体が怪物になってしまったような気がした。

「ん、んぐ……は、はぐうっ♥　ン……んほおおぉおぉ～～～っ♥　も、もうらへぇ♥　らめ♥　らめ♥　らめらのおおぉ～～～♥　おチンポがぁ♥　止められないぃぃ～～～～ッ♥」

【偉そうなこと言うからだよ～、天煌聖姫のオバサン♥　変態チンポぶるぶるされて狂っちゃえ～～♥　もっと振動強くしちゃおっかな～♥】

「お、おへがい……ッ♥　もうやめへぇっっ♥　あ……アアアア～～♥　ひゃうぅぅぅんッッ♥　ひうぅっ♥　アンッ♥　し、射精しはうっ♥　ザーメンでひゃうかりゃあァッッ♥　よ、陽一がいるひょに漏らひはううう～～～～ッ♥」

【ん～、どうしよっかな～♥】

「ひいあああァァァ～～～ン♥　お願ひっ♥　おねがひだからぁっ♥　ローター止めてぇっ♥　オッパイもチンポもでひゃうう～～～～♥」

【しょうがないな～♥　そこまでお願いするならやめてあげるね。はい、スイッチオフっと♥】

「ん、あっ、は……ハアあァァァ～～～～ン♥　らへぇ♥　あ……んん……あ、あれ？」

突然の振動停止に拍子抜けする熟女ヒロイン。あのままでは確実に精液ミルクを漏らしていたのだから、助かったことは助かった。

だが、加虐心の塊のようなこのレートS幼女が手を緩めるとは思えない。

（ハァ……ハァ……ハァ……い、一体なにを企んでいるの……？）

心の中で疑問符が沸き上がる。

絶頂させられなかったことでかえって不安が大きくなった。

エリスは電話で長話しをするように気楽な調子で、【簡単には射精させないよ～♥　イク前に二つ目のお願いを聞いてもらわないと♥　メインディッシュは最後さいご♥　次はね――――】

「ッ……！　そ、それは……！」

明かされたお願いは卑猥で冴子のプライドをへし折るに十分なものであった。想像以上の恥辱に頭がクラクラしてしまう。

だが、当然エリスに逆らうことはできない。Hカップ巨乳とフタナリペニスに疼きを抱えたまま、次の恥辱に身を投じる。

丁度シミュレーションルームから陽一が退出した。

冴子を気遣い心配そうな視線を送るが、当の本人はそれどころではない。

二つ目のお願いに背筋がゾクリと震え、引きつった笑みで息子を迎えるだけだ。

正義の美熟女ヒロインをさらなる羞恥地獄が襲う。

◆◆◆◆◆

「そ、そう。その中に入ってくれないかしら」

「ちょっと狭いね……懐中電灯とってくれる？」

「はい、これね」

「サンキュー」

今二人はブロックを積み上げたような機械の前にいた。神聖粒子を集束させるシステムの調子が悪いと、冴子が陽一を呼び出したのだ。

テストプレイを一時中断してメンテナンスをはじめる。もちろん調子が悪いというのはウソだ。ここに来

たのはエリスのお願いを実行するために、できるだけ近くにいる必要があったからである。陽一が通気口のような通路に入っていくのを見届けると、人妻ヒロインは内腿をすり合わした。

耳まで赤くなり強烈な羞恥心とためらいが見受けられる。やらないという選択肢はないのだが、どうしても躊躇してしまう。

なぜならエリスのお願い二つ目は、

【陽一くんのすぐそばでオシッコを漏らしてね♥】

というものだったからだ。

そんな破廉恥なことはできないと一度は断った冴子だが、結局はコウモリ悪魔幼女の言いなりになってしまう。メンテナンスを頼んだのは苦肉の策だ。

さすがに顔を合わせてお漏らしなんて絶対にできない。もしそんなところを見られたら、恥ずかしくて生きていけない。

もうオムツが必要なのかと思われてしまうだろう。

（うぅ……は、恥ずかしい！　恥ずかしい！　恥ずかしい！　こ、ここでオシッコをお漏らしするなんてぇ……くぅぅ、も、もういやぁ……）

恥辱に悶える冴子はフタナリペニスに意識を集中させ、必死に尿意を呼び起こす。眉間には深い皺が刻まれ、焦燥感が身を焦がしていく。とにかく漏らすなら早く放尿しなければ。もし、何かのはずみで陽一が戻ってくれば一巻の終わりなのだから。

失禁する姿を息子に晒したくない。

【ほらほら、はやくおしっこシーシーしてよ～♥　逆らっても無駄だってわかってるでしょ～？】

「わ、わかってるわよ……で、でもそんなにすぐには……んん……」

【しょうがないな～、じゃあエリスが手伝ってあげるよ。ン～～エイッ☆】

「うぅぅ……ひぐぅっ！　はあああぁぁぁぁ♥　やっ、ち、ちょっ！　ま……待ってぇっ！　ぅんっ……ッ…

…は、はぐうう〜〜♥」

エリスの言葉をきっかけに何かがパチンと弾けたような音がした。同時に淫紋から魔力が送られ尿意が急速に高まっていく。股座に怖気が走り水風船のように膀胱が膨らんでいく。太腿の筋肉を引き締めなければ今すぐに出てしまいそうだ。

生娘めいた声を出しながら、冴子は股間を押さえる。

（あっ、ぐぅぅ……お、おしっこが漏れちゃうぅ！　や、やっぱり無理よこんなの！　陽一のそばで失禁なんてぇ……で、でも我慢できないぃぃ〜）

津波のような尿意に美貌を強張らせる人妻ヒロイン。使命感と羞恥心が混ざり合い、口の中がカラカラに乾いていく。

身体中が燃えるように熱いのに、心臓は凍えるようだ。

そして、ピクピクと痙攣するフタナリ尿道口に、最後のダメ押しが加えられた。

「ん？　母さんどうかしたの？」

「ひゃい!?　べ……べ、別に何も――――、ッッッ！　あ、ふくぅぅぅ〜〜〜♥　ふぁ、んん、あ、ぁぁぁぁッ♥」

「一度戻っていいかな？　懐中電灯の電池が切れちゃって」

「ま、待って！　今はダメ！　んっ♥　や、きゅふうぅぅ〜〜〜ッ♥　んん、はぅ……い、今こっちで用意するから……あ、ッ――――」

息子の呼びかけに股間から意識が離れ、限界を迎えた尿意はついに氾濫を起こした。艶めかしい声を上げながら、正義の美熟女ヒロインは失禁する。

尿道に痺れるような快美が流れると同時に、フタナリ陰茎からオシッコが噴き出しショーツやジーンズを汚していった。

ジョロ♥　ジョロ♥　ジョワ♥　ジワ♥　プシ……プシャアアアアッ♥　ジョボ♥　ジョボボボッ♥

ジョワワワァァァ～～～～～～♥

「～～～～～～っ♥　んっ、くぅぅ……♥　嫌ぁ……んんん……はぅぅ、で、でてるぅ……♥　おしっこ漏らしてるぅぅ……♥」

【うわ～、汚ったないなぁ。ジーンズがびしょびしょだよ♥】

「う、っく……ほ、本当に……も、漏らしちゃった……失禁しちゃった……う、ぅぅぅ……」

【あ～～、臭い臭い♥　くさすぎ～♥　え～～とぉ、もう一度聞くね。オバサンっていくつだっけ？　その年でお漏らしとか恥ずかしくないの？】

「あぅぅ……は、恥ずかしいわ……四十一にもなってこんなぁ……」

目を固く閉じ羞恥おしっこお漏らしに耐える人妻ヒロイン。しかも尿意は中々治まらず、泉のように黄金水がこぼれ流れ出ていく。

派手に漏らして陽一に気付かれるわけにもいかず、少しずつ放尿しているのが原因だ。結果、長い時間をかけて恥辱体験をさせられてしまう。

チョロ♥　チョロ♥　チョロ♥　チョロ♥　ジョオ～～～♥

「あれ？　母さんなんか臭くない？　スンッ、スンスン」

「そ、そうかしら……？」

「いや、絶対臭いよ。くんっ。なんかトイレみたいな感じ」

「ご、ごめんなさい。そういえば薬品の瓶をこぼしてしまったの。そ……そのせいだと思うわよ」

「そうなの？　戻って拭くの手伝おうか？」

「い、いいわよ。私一人で掃除しておくから……ンンッ……♥」

息子に匂いを嗅がれさらに身体が熱くなる。心が削られプライドがズタズタに引き裂かれていく。股下から漂うアンモニア臭が不快だ。

これが夢なら一刻も早く覚めてほしい。

（お、お願いはやく！　はやくはやくはやく終わってぇ！　うぅ……お、オシッコ止まらないぃぃ……お漏らしが止まらないぃ……んくぅぅ……♥）

苦しい言い訳をしながら、必死に音を立てないように放尿していく。ジーンズの色が空色から深い藍色に変わっていく。濡れた生地が肌に貼りついて気持ちが悪い。声を押し殺しエリスに嘲笑されながらも正義の人妻ヒロインは失禁し続ける。

永遠とも思える時間が流れ、実際には二分かけてようやくお漏らしが終わった。足元にはうっすらと黄色い水たまりができている。

恥ずかしいのは今の放尿でフタナリペニスが元気になっていることだ。尿の香りを嗅ぐたびに海綿体が膨らんでしまう。

膣孔からも愛蜜がしたたり落ち、蠱惑的な淫臭を放つ。あろうことか人妻ヒロインはお漏らしで感じてしまったのだ。

そして、それを見逃す悪魔幼女ではない。

口をニンマリと歪め、追い打ちをかけるように言葉責めを開始する。

【すっごい量だね♥　どれだけ溜め込んでいるのかな～？　この変態オバサンは♥】

「ひぁぁ……い、言わないで……こ、こんなの情けなさすぎるわ……」

【陽一くんに教えてあげようかな♥　キミのママはオシッコ漏らして勃起するマゾ人妻ですって♥　失禁しながらおマンコを濡らしちゃう淫売で～～すって♥】

「そ、それだけは許してぇ……陽一には知らせないでぇ……お願いだから……」

【じゃあ、ここで謝罪してもらうかな♥　神城冴子はお漏らしで感じてごめんなさいって♥　も・ち・ろ・ん素敵にアレンジしてエッチに言ってね♥】

冴子はできるだけ小声で悪魔幼女に謝罪する。

他人に見られているという事実がきれぎれな意識を覚醒させ、フタナリペニスがさらに怒張してしまう。

「んっ……か、神城冴子は子供もいるのにオシッコを漏らしてしまいました♥　ぅぅ……いい年して変態のマゾ主婦なんです♥」

【それからそれから？】

「しょ、小便の匂いで興奮してしまい申し訳ありません♥　私は息子の近くでシーシーしてしまう淫乱変身ヒロインです♥　恥ずかしいプレイでフタナリチンポをビンビン勃起させるマゾオバサンなの♥　はぅ……ん……んくうう～～♥」

屈辱的なセリフを言わされ泣き出しそうな天煌聖姫。見た目が幼い陵辱者に弄ばれ悔しくてたまらない。数多のデモンコアを葬ってきた自信にヒビがはいる。変身さえできれば今すぐにでも討滅してやりたい。

しかし、人妻ヒロインの気持ちとは真逆に過去の調教で植え付けられたマゾヒスティックな感覚は、完全に復活していた。

フタナリ陰茎は射精寸前で、女陰も妖しく火照り蜜をこぼす。

失禁地獄で苦悶しマゾヒロインに堕ちようとする冴子に、悪魔幼女は最後のお願いをした。

【三つ目はおまちかねの射精タイムだよ♥　と～ぜんだけどオナニーはここでしてね♥】

「わ、わかっているわよ。どうせそんなことだろうと思ったわ」

陽一の姿が見えないことを確認し小声で返答する。どうやら機械の奥まで進んだようで、戻ってくるには時間がかかりそうだ。

オナニーをするチャンスは今しかない。

エリスは恥辱を与えるために、さらなるスパイスを用意していた。

吸血鬼めいて尖った犬歯をチラつかせながら、

【ただし、陽一くんのパンツでおチンチンをシコシコ

してね♥　はい、ここに用意してあげたから♥】

「え、うそ……これって……」

いつの間にか冴子の手元にはボクサーパンツが握られていた。エリスが転送の魔法で取り寄せた物だ。息子の下着で自慰をさせようというのである。

「くっ……どこまで私を辱めるつもりなの……」

【はいは～い、エリスをにらんでる時間はないよ～。もうすぐ戻ってくるかもだし～】

「い、いいわよ……やればいいんでしょ……」

ジーンズとショーツをずらしフタナリペニスを露出させると、ボクサーパンツを巻き付ける。エリスに咎められないように、クロッチの部分を亀頭に当てることも忘れない。

下着の滑らかな肌触りを感じながら、竿を前後にシゴいていく。前にオナホールで擦られた時よりも早いペースだ。

しゅこ♥　しゅこ♥　ちゅこ♥　くちゅ♥　ごしゅごしゅ♥

【どうかな～？　陽一くんのパンツでするオナニーは気持ちいい～？】

「はぐ……ンン……ひぅ、ええ♥　き、気持ちいいわ……♥　んはぁぁぁあッ♥」

【キャハ、素直になったねオバサン。そうそうエリスに逆らっても無駄なんだよ～♥】

「うっ、あっ、ん……はふぅ♥　ンぁ……くうぅ～～～～ッ♥　あぁぁ～～～～ん♥」

見られるかもしれないという焦燥と、息子の下着でオナニーする倒錯的な快楽が混ざり合い、指の動きを加速させていく美熟女ヒロイン。

お預けを喰わされたフタナリペニスは天井に向かっていきり立ち、ミミズのような血管を浮かべている。ボクサーパンツに恥ずかしい汁が滲み、射精衝動が高まっていく。

【うわあ～、バカみたいにチンポおっきくしてる。息

子の下着で興奮するなんて真性のド変態だね♥】

「そ、そんな……親子なのにいけないわ……んっ♥　へ、変態……ひぐぅぅ、ア、ひゃはあぁぁ～～ん♥　ダメぇ……手が止まらない♥」

【変態だって認めたほうが楽になるよ。天煌聖姫セルシアンの趣味は息子のパンツオナニーだって♥　エリスは軽蔑するけどね♥】

悪魔幼女の囁きが理性を溶かし、禁断の快美が人妻ヒロインを支配していく。見つかる前に射精しなければならないプレッシャーを変態発言の言い訳にしてしまう。

「あ……ンン♥　わ……私は変態ママなの♥　息子の下着で発情する変態メスブタなの♥　んぐ、は……はぁぁ～～んっ♥　センズリ止まらないぃぃ～～～～♥」

【本当にキモすぎるよオバサン♥　ダンナがいないからって近親相姦願望があるんだ～♥　陽一くんがかわいそう♥】

「くふうぅぅぅぅ～～～ん♥　い、言わないで♥　だ、だっておマンコがせつないから仕方ないでしょ♥　あの人がいないなら息子のチンポ臭でシコシコするしかないじゃない♥」

【その分だと洗濯とかヤバくない？　こっそりシコってるんじゃないのかな～？】

「し、シコってるの♥　いつも洗濯する前は汗と精臭の染みついた下着で勃起メスマラをゴシゴシしているわ♥　毎日毎日マンコぐちょ濡れにしながらオナニー三昧なの♥　見られたら絶縁決定のド下品チンコ遊びしてるのおおぉぉ～～～～ッ♥」

神城冴子はやってもいないことまで告白しながら、手を高速で動かしていく。クロッチと亀頭が触れ合うたびに背筋に電流が流れ、海綿体が膨張する。

背徳感が快悦を増幅し母として最低のセンズリをがんばってしまう。すぐ近くに息子がいることさえ忘れ

て、Hカップ巨乳や豊満な尻肉を揺らしていく。
そこへ悪魔幼女は最後のダメ押しとばかりに、ローターのスイッチを入れた。
グヴヴヴ！　ヴヴヴ！　ヴヴヴヴヴ！　ヴヴヴヴヴヴヴヴ！　ブヴヴヴヴ～～ッ！
「――――つくふぅぅぅ～～～♥　ひぎゅっ♥　そ、それ反則……よぉ……♥　くぅぅ……♥　ハウウウウンッ♥」
【ほらほら変態オナニーでイッちゃえ～♥　子供のパンツで欲情する近親マゾオバサン♥】
「んひぃぃぃ～～～ッ♥　言わないで♥　言わないで♥　言わないで♥　嫌ぁ……はうっ♥　も、もうらめ♥　らめ♥　らめ♥　らめぇ♥　もうれちゃう♥　おチンポ射精しちゃうぅぅ～～ッ♥」
ローターの駆動音が耳から理性を蕩かしていく。母親失格の変態オナニーが心地よくてしょうがない。小水で濡れたジーンズの感触も今だけは愛おしく思えた。
人妻ヒロインはお願いだから、強要されているから仕方ないと、片手で口を押さえて喘ぎ身悶える。
そして、ついに恥辱射精をしてしまった。
ピュッ♥　ブピュッ♥　ドプッ♥　ビュ、ビュリュリュリュウウウぅぅ～～～♥　ドプドプッ♥　ヌチャッ♥　ヌチャッ♥　ジュブッ♥　ジュリュリュリュウウウぅ～～～～～ッッ♥♥
「ひ、ひゃうううっ♥　ん……ジ……んほおおおぉおぉ～～～ッ♥　やぁ♥　ら……らめ♥　らめ♥　らめ♥　らめえぇぇっ♥　パンツでイク♥　パンツでイク♥　陽一のパンツでイッちゃうぅぅっ♥　ママなのに変態センズリでイッちゃうのおおぉぉお～～ッ♥　ド変態マラから近親発情ザーメンびゅーびゅーでるうッッ♥　パンツに私のフタナリ汁マーキングしちゃうぅぅ～～♥　くっさいくっさいフタナリ包茎チンポの匂いが染みついちゃうぅぅッ♥　お……お、おほおおぉォォ～～～～ッ♥」



パンツの中に最低な淫語絶頂を吐き出す正義のヒロイン。

と、通気口の奥からガサゴソと音が聞こえはじめた。作業を終えた陽一が戻ってきているのだ。急いで下を履き直し、オシッコや精液を掃除したいが間に合わない。

考えた末に冴子がとった行動は、

「せ、セイクリッドギア、セットアップ！」

セルシアンに変身することであった。水流操作のスキルで周囲を清掃、消臭していく。そして出てきた陽一と顔を合わせた。

「あれ？　母さんどうしたの？　変身なんかして」

「あ、あの……ちょっと……き、気分でね！　あ、あなたに格好いいところを見せたくて！」

「いいよ～、そんなの。いつも見てるから」

「そ、そうね！　そうよね、アハハハ……」

引きつった笑みを浮かべる天煌聖姫セルシアン。

背後に隠した手にはザーメンで汚れた下着が握られていた。

幕間一　三人の夜

ヴァーミリオンのフタナリ調教開始から一週間が経過した。

初日以降エリスから呼び出されることもなく、神城愛華はどこか拍子抜けした気分で日々を過ごしていた。

「ふぅ……よかった……」

神聖粒子を用いた検査で触手精子が着床した様子はなく、胸を撫で下ろす。怪物の子を孕まずにすんだのは幸いだ。

しかし、フタナリペニスの疼きは日を追うごとに大きくなり、毎日自慰をせずにはいられない。

今日もすでに三回はオナニーしてしまっている。正

義のヒロインとしては情けない限りだが、射精しなければ肉竿が怒張し、まともに学園へ通うこともできない。スカートの上からでも勃起ペニスの形がわかってしまうだろう。

そうなったらもう外を歩けない。

（うぅぅ……恥ずかしいです……なんで、なんでおチンチンがこんなにぃ。あぁっ……またオナニーしたくなってきました……）

ピンクを基調にコーディネートされた自室で一人悩む愛華。夕食のあとベッドで横になったまま、悶々としている。

課題などしなければならないことはあるが、どうにもこうにも手につかない。フタナリペニスの昂りを抑えるので精一杯なのだ。

こんな調子で残り二十四日も耐えられるのか不安になってしまう。

「だ、ダメです！　わたしが弱気になってどうするんですか！　みんなを守るためにしっかりしないと。ヴァーミリオンは挫けません！」

声に出して決意を確認する天煌聖姫。

その瞳にはセイクリッドギアと同じ輝きがあった。

◆◆◆◆◆

「ふっ……は、ハアァァッ！」

同日夜。

人気のない道場で神城冴子は空手の演武を行っていた。精神を統一しエリスの調教に立ち向かうためだ。

昼間は冷静さを失い危うく陽一に痴態を見せるところだった。

過去にもフタナリ調教された経験があるため、ある程度疼きは抑えられるがそれにも限界がある。身体を動かせばそれだけ邪念を払うことができる気がした。

股間の巨根包茎ペニスも今はなりを潜めている。

（あんな無様はもう二度と晒さない！　待ってなさい色欲の夜天、その調子に乗った顔を必ず屈辱で歪めて

あげるわ！）

敵を思い描き虚空へ鋭い蹴りを放つ。

長い年月を一人で戦い抜いてきた人妻ヒロインに迷いはない。

（誠一郎さん、冴子は必ず耐え切ってみせます。どうか見守っていてください）

異国の地で研究に励む夫を想い、技を繰り出す。発せられる闘気は研ぎ澄まされた槍のようであった。

◆◆◆◆

同日深夜。

エリスは雲の上で三日月を眺めていた。この次元に来てまだ日の浅い彼女だが、月を鑑賞することは楽しみの一つになっていた。

常に曇天と闇が空を覆う魔界ではこんな風景を眺めることなどできない。ごちゃごちゃした街並みや、ひしめき合う人間には吐き気を催すが、これだけは称賛してもいいと悪魔幼女は思う。

「キャハ☆　天煌聖姫の二人もおもしろいしこの世界は愉しめそう♪　みっともないフタナリおチンチンに次は何をしてあげよっかな～」

嗜虐的な笑みを浮かべながら、金髪ツインテールの毛先を弄ぶ。早く次の調教をやりたくてしょうがない。

彼女は色欲の性質から生き物を魔悦で従わせることが大好きなのだ。

敵を倒したり殺すことよりも支配することが優先される。これまで他の次元でも数多の生物を変態ペットに変えてきた。

ただし、簡単に堕ちてしまってはつまらない。強くて美しいものが壊れる瞬間にこそ価値があるのだ。今回の相手は歯ごたえがありそうだと思ったその時。

近くに気配があった。

通常この高度で出会うのは航空機くらいのものだ。警戒レベルを引き上げ身体中に魔力をみなぎらせる。

気配の質から見て相手はデモンコアだとわかってきた。

同族に手加減するつもりはない。視界に入れば触手の溶解液でドロドロに溶かす準備はできている。

（どこの誰かは知らないけど、エリスの邪魔をするならやっちゃうよ）

魔力を枝分かれさせ周囲を探知していく。

だが、気配の主は拍子抜けするほどあっさり雲の隙間から姿を現した。散歩でもするような気軽さでエリスに近づいてくる。

シルクハットを被り、鳥のくちばしのようなマスクをつけた男だ。姿はペスト医師にとてもよく似ていた。同業者にはよくある格好だ。

感じる魔力からレートはAといったところだろうか。

「お初にお目にかかりますエリスさま。わたくし《骸（むくろ）の馬車（ばしゃ）》マンシアと申します」

「あっそ。で、そのマンシアちゃんが何か用？　エリス今忙しいんだけど」

「それは失礼しました。本日よりこの街で食事をはじめるのですが、天煌聖姫という邪魔者がいるとうかがったので。エリスさまは何か御存じですか？」

「あ～、その子たちならこっちで遊んでるとこだから、気にしなくてもいいよ。好きに食べれば？」

「そうでしたか。ありがとうございます」

「でも、エリスの邪魔だけはしないでよね。したら殺すよ？」

「承知いたしました。それでは今夜はこれで」

早々に話を切りあげるとマンシアは姿を消した。高位のデモンコアの前で、あまり長居はしたくないのだろう。気配が凄まじい速さで遠ざかっていく。

（まっ、しなくても殺すかもだけど☆）

再び三日月を眺める悪魔幼女。

彼女にとって自分以外の命はどれも同じなのだ。虫も人もデモンコアも。

第八話　淫辱に侵される学園生活！触手制服で羞恥オナニー！

空には雲一つなく、頬を撫でる風が心地よい季節。小鳥のさえずりが遠くから聞こえ、しんと冷えた空気が寝ぼけまなこを迎える爽やかな朝。

今日も天王寺学園には多くの生徒が登校していた。服装はみんな一様にブレザーだ。県内でも特に部活動に力を入れており、広大な敷地には種目別のグラウンド。何棟もある体育館。茶道部など文科系の部にも専用の部室が与えられていた。知らない人間が見ればあまりの敷地面積に目を丸くするだろう。

そんな天王寺学園の校舎の一室、窓際でため息をついている少女がいた。

「ふぅ……や、やっぱり飲まないとダメですか……？」

うつむき胸元に向かって話しかける。机の周りには誰もいない。見えない友達と話しているような姿はクラスに一人はいる不思議ちゃんにも見えた。

そこへ、少女の友達とおぼしきクラスメイトが近づいてきた。茶髪をサイドポニーでまとめ、活発そうな印象を受ける。胸は小ぶりだがスタイルはよく引き締まっていた。

「おっはよ愛華。どうしたの独り言？」

「あっ、茜（あかね）ちゃん、おはようございます。心配しなくても何もないですよ!?」

「別に心配はしてないけど……あんた最近ちょっと変じゃない？　天然なのはいつもだけど、なーんか違和感あるんだよね」

わざとらしく誤魔化すような態度に茜と呼ばれた少女は頬を膨らませた。彼女は四木茜（よつぎ）、愛華とは小学校からの幼馴染で親友だ。

顔も美形ですらりとした長身だが、男勝りの性格の

せいで言い寄ってくる男子はほとんどいない。真面目だがどこか天然の愛華とは互いに足りない部分を埋め合わせるようにいつも一緒にいる。

最近の不調を咎められた愛華はぎこちない笑みで言葉を返す。まさか自分が変身ヒロインで悪魔幼女にフタナリ調教されているなんて言えるわけがない。

そうでなくてもヴァーミリオンのことは秘密なのだ。デモンコアとの戦いに学校のみんなを巻き込みたくない。

「気のせいですよ！　わたしはいつも通り、いつも通りです！」

「ふーん、ならいいけど」

「それより茜ちゃん、この間借りたＣＤすごくよかったです。他にもあるんですか？」

「おっ、愛華もわかってきたじゃん。やっぱこのバンドはギターがさ――」

疑いつつもそれ以上は言及せず、他愛ない音楽の話に花を咲かせる。いまどきの学園生らしく和やかなおしゃべりが続いていく。

もうすぐ授業というところで、愛華が鞄からペットボトルを取り出した。中には濁った白色の液体が詰まっている。

一見すると甘酒のようである。

「ん？　なにそれ」

「あ、新しいスポーツドリンクなんです。ヨーグルトとか入っていて、運動したあとにいいってテレビでやっていましたから」

「あんた図書部だし文科系じゃん。意味あんの？」

「い、いいじゃないですか。今日は体育の授業がありますし、元気をチャージです！」

上ずった声で言いながら、ボトルキャップを開け中身を口内へ流し込んでいく。かすかに栗の花に似たすえた匂いがした。

ときおり咳き込みながら液体を喉に通していく。眉

間に皺を寄せながら飲む様子はどう見ても美味しそうではない。
　むしろ辛そうだ。
「ビミョーに変な匂いするんだけど……おいしいのそれ。ぶっちゃけマズそう」
「お、おいしいですよ……ちょっとクセがありますけど……健康にいいですから」
「あたしも飲んでいい？　青汁みたいのだったら興味あるな」
「だっ、ダメです！　けぷっ……こ、これはわたしだけの分です！」
　思わず大声を出してしまう。
　クラスメイトの注目を集めてしまって、なんでもないよと頭を下げる。
「おわっ、びっくりした！　そんな大きい声出さなくてもいいじゃん。ちぇー、まあいいけど」
「あ、ごめんなさい……でもこれだけはどうしても……」
「なんか事情あるみたいだしいいよ。あんたもお母さん帰ってきたばかりで、最近忙しいみたいだし。元気チャージだな！」
「は、はい！」
　好意的に解釈してくれるのはありがたいが正直いって申し訳ない。ペットボトルの中身が精液であることは絶対に秘密だ。イカ臭い白濁液を嚥下しながら微妙な笑みを浮かべる。さっきから舌に絡まる精子の味がかなり不快だ。エリスの命令でなければすぐにでも吐き出してうがいをしたい。
　そう、愛華は親友の目の前でザーメンを飲んでいたのである。早朝からオナニーして集めた一番搾りだ。日常の象徴である学園での変態行為に心臓はバクバクと高鳴っていた。
　もし茜やクラスメイトに気付かれたら最悪である。色情狂の変態女だと思われてしまうだろう。フタナリ

ペニスだけでも死にたくなるくらい恥ずかしいのに、食ザーメン大好きだなんて学園生活が終わってしまう。

まだ彼氏だっていないのに。

「やっぱ、先生来た。またな」

「はい、休み時間にお話ししましょう」

担任の入室とチャイムでおしゃべりは一時中断となった。愛華にとってホッと一息つける瞬間だ。ザーメン入りのペットボトルを鞄にしまい、教科書を取り出す。

口のなかではまだヌルついた感触が残っていた。

◆◆◆◆

放課後。階段の途中。

「んじゃ、あたし陸上部行ってくるから」

「わかりました、またあとでですね」

一緒に下校する約束をして愛華と茜は別れた。よほど忙しくなければ毎日部活のあとは二人で帰っているのだ。もっとも図書部のほうが早く終わるので愛華が校門で待つことのほうが多い。

建物同士をパイプラインのように繋ぐわたり廊下を通って図書室へ向かう。天王寺学園の図書室は建物まるごと使っているので、図書館と言ったほうがいいかもしれない。

他の部員たちとミーティングをしたあと、愛華は書架の整理をする。本棚の数も利用者も多いので、頻繁に並びが乱れるのだ。

左から右、上から下の順番で本を見て回り、本に貼られたラベルの番号を確認していく。今日はあまり乱れがないようだ。

そして、手記やルポルタージュの棚に目を移したところで、異変が起こった。

「あぅ、ひゅ、ひゃあぁぁん……んっ……くふぅぅ……はうっ、くぅぅ……」

愛華の頬が紅潮し息遣いが荒くなってきたのである。しなやかな身体からは牝の淫臭が漂い、近くで見ると

かなり煽情的な光景だ。
　たまらず胸元に小声で話しかける。今度も周りに人影はない。
「あの、ンっ……はぅぅ……や、やめてください……んきゅぅぅ♥」
【エリスに指図できる立場だと思ってるの？　フタナリチンポのマゾお姉ちゃん】
「っ……だからっ、ふう……んくあぁぁっ……ンンン～～♥　ああん♥」
　悪魔幼女の声に合わせて身をよじる栗髪の美少女。ぎゅっとブレザー制服のスカートを押さえ、淫辱興奮に耐えている。
　静かな図書室で声を上げればすぐ人に気付かれてしまうからだ。
　唇を一文字に結び必死に声を殺す。
【エリスがハグしてるんだから抵抗したって無駄だよ。ほ～らおちんちんスリスリ～】
「んぶっ、あぁぁ……んはぁっ♥　ひぅ……くふぅぅんっ……や、いやぁ……♥」
　そう、今愛華が着ている制服はエリスが変身した物なのだ。より正確に言うと触手チンポをメインに布地へ変化させているのである。
　見た目は一般生徒が着ている物と変わりないが、その内側には産毛のようにびっしりと、イソギンチャク型の触手が生えていた。
　しきりに胸元を見ながら話しかけていたのはそのためだ。
　フタナリ調教と称して一日中触手に嬲られてきた肢体は、すでに媚薬の魔悦でトロトロになっていた。Dカップ美乳もふたなりチンポも痛いほどに充血し、欲望吐き出す瞬間をうかがっている有様だ。
　許可なしでは絶頂できないため、官能的な肉体は生殺し状態である。
【それじゃ、前に言った宿題の成果を見せてもらおう

かな。い～っぱいエロワードを勉強してきたよね？】

「覚えてきました……うう、あ、あなたが言うから…仕方なくですけど……」

落書きプレイの翌日から必死に淫語を勉強していた。言いつけを守らなければ何をされるかわかったものではないし、逆らえばもっとひどい罰がまっているだろう。今までセックスどころかキスもしたことがない愛華にとって、変態表現を覚えるのは死ぬほど恥ずかしかったが、調教のない日が続いたので恥辱の学習には丁度よかった。

ネットなどで片っ端から卑猥な単語を覚えてきたのである。

【今からエリスがタッチするところの名前を答えてね。ちゃんと言えないとお仕置きだから】

「わ、わかってます」

生地裏の触手がウネウネと動き、透き通るような肌を舐めまわしていく。最初に触れたのは形のよいおっぱいだ。双乳を根元から先端まで揉みしだき、乳首をつねりあげた。

甘美な痺れが神経を走っていく。

【は～い、ここはなんて言うのかな～】

「お、おっぱいです……わ、わたしのエッチなお胸です……」

【他には？】

「マシュマロみたいな触りごこちで……えっと、や、やわらかいおっぱいです」

学園内で部活中ということを考えれば精一杯の淫語だ。だいたい知識として知ってはいても、変態みたいなことを言えるわけがない。愛華は緊張した面持ちで様子をうかがう。

しかし、エリスの声色は急速に暗いモノに変わっていった。

どうやら回答の内容がお気に召さなかったようだ。

【……はぁ。え～っとね、そんな言い方でい

いと思っているのかな？　お姉ちゃんふざけてる？】
「そ、そんなっ！　ほ、他の人もいますし、これ以上何を言えばいいんですか！」
【本当はわかってるくせに～。ちゃんとしないならここで変身解除して、スカートだけ消してあげてもいいんだよ？　みんなにフタナリおチンポを見てもらおうかな～】
「お、お願いします、それだけはやめてください！　もっとがんばりますから！　みんなにだけは知られたくないんです……おチンチンが生えてるなんてぇ……」
【じゃ、もう一度回答していいよ。失敗したら下半身丸裸になってもらうからそのつもりでがんばってね♥】
　バクンバクンと脈動する胸を押さえ、周りに人がいないことを確認する。悪魔幼女の期待にそうように、もっともっと、できるだけ淫猥な単語を思い浮かべながら愛華は口を開いた。
「い、いつも乳首ビンビンのドスケベおっぱいです♥　チンポのお友達、シコシコ専用Ｄカップで～す♥」
【うん、いいよお姉ちゃん。で、サイズはいくつなの～？】
「は、八十三センチです♥　ママより小さいけど感度は負けません♥　ちょっとつままれただけでもイッちゃいます♥」
【感度って乳首オナニーでもしてるのかな？　前はやってないって言ってたけど】
「う、ウソついてごめんなさい♥　本当は毎日乳首でオナニーしてます♥　ふ、フタナリになってからは片手でおチンポシゴいて、空いた手で乳首弄ってます♥　乳頭クリクリしちゃってます♥」
【へ～、お姉ちゃんって見た目に似合わずドスケベなんだね。クラスや部員のみんなは知ってるのかな？】
「し、知りません♥　学園じゃネコ被ってますから♥

愛華の正体が変態マゾのオナニーバカだって知りません♥　知られちゃったら人生終了です♥」

【キャハハハハッ！　いいよ～、チョー最低でウケル♥　じゃ、次いってみよっか】

触手が蠢き美少女の柔肌を撫で上げる。今度のターゲットはむちむちとしたヒップだ。割れ目の中に侵入すると、アナルの皺を舐め陰唇を弄ぶ。

甘やかな衝撃と共に臀部が跳ね、肢体が喜悦に悶えた。

「ア、はうくうぅ～～ッ♥　そ、そこはわたしのデカ尻です♥　男の子を誘惑するエロ器官です♥」

【たしかにお姉ちゃんってお尻大きいよね。贅肉つきすぎじゃない？】

「はいっ、無駄にデカい肉尻ですいません♥　デカすぎて……へ、変身した時もレオタードスーツに食い込んじゃってるんです♥　戦闘中にお見苦しいケツ肉フリフリしています♥」

【変態のお姉ちゃんらしい説明ありがとう。次からはアナルの皺まで見せてあげたら？　もっと男の子に人気でると思うな～♥】

「あん、はぁん♥　そんなぁ♥　け、ケツの皺を晒し者にする変身ヒロインなんて恥ずかしすぎます♥　絶対に痴女だって思われてしまいます♥　ンン……♥　ああ……そ、想像するだけでマゾ興奮してアナル疼いちゃいます♥」

媚を売りながら肛門恥辱を想像する美少女ヒロイン。若くて豊満な桃尻をふるりと揺らす。尻タブを蹂躙する触手に抗えず、二つに分かれた肉の山脈を震わせる。

他人に聞かれるかもしれないという緊張感が感覚を鋭敏にし、ますます自虐快感にのめりこんでしまう。

しっとりと息づく秘穴も湿り気を帯びていた。

続いて触手は股の間に向かう。

【ここはどうかな？　一番敏感なところだよ～♥】

「ひゃぐうッッ♥　アン、ヒ、んきゅゥゥゥ～～ッ♥

あ……あ、あくううぅ～～ッ♥　んぁぁ♥　そ、そこはぁ……♥」

掴まれたのはフタナリペニスすべてである。傘の張ったキノコ勃起から白玉のようにすべすべのキンタマまでが触手に満遍なく愛撫される。

蚊の鳴くような嬌声に何人かの生徒が訝しんだが、今の愛華に気にしている余裕はない。一日中嬲られた肉竿が再び勃起し、ピンク色の亀頭を晒してしまう。先端からは透明の露が滲み出し、掻痒感が股座全体に広がっていく。ここが自室ならすぐにでも自慰に耽りたい気分だ。

愛華は射精を我慢しながらなんとか淫乱ワードを紡ぐ。

「あぅぅ……や、やめてください……ま、また勃ってきちゃいますから……ここで勃起なんてできません……」

【ここにくっさいマゾ汁溜め込んでるでしょ～？　ほらほら～、カワイコぶってないで早く言いなよ～】

「ンンンン……♥　ひ、はくうぅぅっ♥　ここは……あの、うぅぅ……」

【急がないと全裸にしちゃうよ～。はやく、はやく、はやく～】

「っ……く、あの……ち、ち、チンポです！　チンポ、チンポ、わたしの淫乱チンポです♥」

【どんなチンポなのかな～？】

「せ、セクシーチンポです♥　淫乱ザーメン工場のドスケベおチンポです♥　こ、こってり濃厚ザーメンを吐き出すエロチンポです♥　くっさい童貞フタナリチンポです♥　も、もういいですか……？　学園でこんなの……み、惨めすぎます……」

【キャハハハハハ♥　いいよ、今日はこのくらいにしといてあげる。次もまたテストするからちゃ～～んと覚えてきてね。エリスとの約束だよ～♥】

無邪気な笑顔で微笑むツインテール幼女。思考回路

が自分の欲求を満たすことにしか向かないため、平気で淫猥な手段をとることができる。デモンコアが人間とまったく異なる生物であることがよくわかる。

と、快楽に悶える愛華の元へ一人の男子生徒が近づいてきた。

どうやら本を探しているようである。

「神城さん、この図鑑を探しているんだけど……場所はわかるかな？」

「は、はい。今案内しますね」

支給されたタブレットを器用に操り本の位置を検索する。目当ての本は少し歩いたところにあると表示された。淫辱に侵される身体を気力で押さえ、くるりと可愛らしい動きで振り向き案内する。

「きょ、今日はいい天気だね。こんな日は窓際で本が読みたくなるよ」

「いいですね。わたしも日向ぼっこしながらページをめくりたいです」

「だよね！　神城さんならそう言うと思ってたよ！」

「しー、声……大きいですよ」

「あっ、ごめん」

この男子生徒は愛華に好意があるようだ。なんとかきっかけを作ろうと、しきりに話をふってくる。愛華の可憐な容姿は男子生徒の注目を大いに集めていた。

普段は茜がそばにいるため近寄ってくる悪い虫はいないが、図書部として活動しているこの時は、外部の邪魔が入らない格好のチャンスなのだ。

「ぼくは生物部なんだけどこの図鑑は貴重な物なんだ。特に解剖図がよくできているんだよ」

「そうなんですか。あっ、んんっ、ッ……ひ、ひゃっんっ!?」

「ど、どうしたの神城さん？」

短く悲鳴を上げる姿を心配される。原因は当然触手ブレザーだ。エリスが内側からフタナリペニスを擦ったのである。嫌悪感が皮膚の上を這いずりまわり、ソ

ワリと鳥肌が立つ。
「い、いえ、平気です。ちょっと目まいがして……」
「大丈夫!?　探すのは中断して保健室に行こうか？」
「ひはぁ……♥　んん♥　きゅふ……♥　も、もう少しで着きますから。ンン……ぁぁぁ♥　し、心配してくれてありがとう♥」
「そう？　ま、まぁそう言うならいいけど……」
輪を作った触手が根元から先端まで肉竿を撫で上げていく。勃起の膨らみを見られないようについ前かがみになってしまう。
感謝されてデレデレの男子生徒は気付かないが、愛華の股間からは熱いモノがせりあがり、鈴口からとろりとした涎がこぼれはじめた。
触手から分泌される媚薬の効果で理性が追い込まれていく。マゾ肉体が歓喜に戦慄き恥ずかしい目にあわされるたびに、フタナリペニスと子宮が疼いていく。
そして、あと少しで目当ての本棚というところで、足がもつれてしまった。勃起ペニスを庇いながら歩いたせいだ。勢いで男子生徒に抱きつく美少女ヒロイン。
「はぅぅ♥　あ……ご、ごめんなさい♥」
「い、い、いや平気だよ！　や、や、や、やっぱり保健室に行ったほうがいいかもね！」
「あ……はぁん♥　そ、そうですね♥　少し休んでから……っぁぁんっ♥」
「か……神城さん!?」
肉竿を擦られさらに身体を近づけてしまう。牝ネコのような喘ぎが、ハァハァと漏れ出る吐息が男子生徒の耳たぶをくすぐった。恋人が寄りそっているのかと勘違しそうな光景だが、今の愛華にそんなことを気にしている余裕はない。
不格好でも腰を引きフタナリに気付かれないよう努力する。
色っぽいうなじを冷汗が流れた。
「はい、ありました。こ、この図鑑ですね。どうぞ…

…ん♥」

「うん、ありがとう。その……身体に気をつけてね」

「はひゃい♥　ンぁぁぁ……♥　はいぃ……♥　そうですね♥」

ぎこちない様子で返答し足早にその場を立ち去る。肉竿はパンパンに膨張し、これ以上は一分だって我慢したくない。案内をすませたところで人気のない書籍のコーナーに隠れる。

股間からは青臭いムワッとした淫臭が漂っている。スカートがむくりと持ち上がり、誰が見ても発情しているのは明らかだ。図書室を利用している生徒に見られたくはないが、射精しなければ歩くこともできそうにない。

「お、お願いです……あの……そ、その……させてください……」

【ん？　何がしたいのかなお姉ちゃん？】

「意地悪しないでくださいっ……し……しゃ、射精ですっ……も、もうおチンポがぁ……つらいんです……はくぅぅ♥」

【いいよ～させてあげる。でも～、ここでエアーセックスしながらね♥】

「え？　えあー……せっくす……ですか？」

【そっ、ごっこ遊びみたいなものかな。お友達のえっとなんて言ったっけ……あ、そうそう茜ちゃんだ。茜ちゃんのおマンコに突っ込んでるつもりで腰ふってよ。それなら射精許可してあげる♥】

「ええっ!?　で……できるわけないでしょう……あ、あぐぅぅ♥　ああっ♥　そ……そんな恥ずかしいことっ！」

【イヤなら別にいいよ～。スカートにぶちまけてザーメン染み作ったまま部活してもらうだけだし。股間からザーメン垂らして歩く女の子ってエリスも見たことないな～】

「っ……ぅぅ……わ、わかりました……やればい

いんですね。で、でもせめてエデンフィールドは使わせてください。き、きっと……声が漏れてしまいますから……」

【いいよ。でも遮断するのは声だけね。オナニーしてる姿は見えるようにね♥】

愛華は人気のないコーナーまで移動すると、セイクリッドギアを部分的に起動させエデンフィールドを展開する。これで音声が周囲に聞かれる心配はない。もちろん姿は丸見えなので、自慰をするなら気付かれないように手早くすませる必要はあるが。

「ん……あ……んんく……はぁん♥」

スカートをまくり上げ下半身を露出させる。姿を見せるのは落ち着いたデザインのショーツではなく、悪魔幼女に指定されたフタナリペニス専用変態下着だ。

キンタマにはピンクでフリルのついた玉ブラジャーが着せられ、竿の部分には同じくピンクのキュートなリボンが、プレゼントを包装するように巻かれている。性器を隠して保護する下着の役割を果たしていないどころか、淫猥に強調する最低のふたなりアイテムだ。これのせいで階段を昇るにも注意しなければならないし、先ほどの男子生徒にも警戒の必要があった。

（は、恥ずかしい……こ、こんな格好でオナニーなんて……惨めすぎます……）

変態以外の何者でもない自分を再認識し、カッと顔が赤くなる。

こんなに恥ずかしいチンポデコレーションなんて、誰にも知られてはいけないのだ。

【そうそう、手は使っちゃダメだからね。エリスもチンポにだけは触らないから。バカみたいに腰フリフリしてイメージだけで射精してね♥】

「くっ……言われなくても……！」

目を閉じ意識を前方に集中させる。そこにバックでお尻を突き出した制服姿の親友をイメージした。次に衣服をすべて取り去り、一糸纏わぬ全裸にする。運動

部で鍛えられた肢体が露わになった。一緒にお風呂に入ったこともあるので、イメージ自体は簡単だがまさか自慰に使うことになるとは思わなかった。最後にむき出しの膣孔を思い浮かべたら準備完了である。

美少女ヒロインは想像した茜の背後から勃起ペニスを突き出した。あまりの屈辱と罪悪感で涙が出そうである。しかし、今は人が来る前に射精するしかない。

ガニ股ポーズをとりながら虚空に腰を振る。

へこ♥　へこ♥　へこすこ♥　へこへこへこ♥　へ～～こ、へこ♥

「はぁぁ、ひぅ、ひゃうぅぅぅぅ♥　は、ンン、あああんっ♥　は……ハアハア……♥」

【うっとりしちゃって。どう？　気持ちいい？】

「ひゃ……ひゃい♥　ふぁぁ……気持ちいいです♥　く……んくふうぅぅ～～っ♥」

【そうなんだ～、でもでも一人じゃ気分が出ないかも。そうだ！　せっかくだしエリスがアテレコしてあげるね】

「ふぁぁ……んう……ハァ……あぁ……え、ええ？」

【コホンっ……ん……愛華ぁ……そこ……っ……す、すごいよぉ……♥】

「やはあああぁぁぁぁん♥　ひぃぃんっ♥　あ……あ、茜ちゃんの声!?」

愛華の記憶を読み取り茜そっくりの声を出す悪魔幼女。同時に触手チンポがDカップ美乳や桃尻に纏わりつき、女の悦びと男の悦びを味わわせていく。

楕円形になった乳房を揉みしだかれるたびに身体が燃えるように熱くなり、敏感な肉の突起が微弱に震える。たっぷりとしたヒップをくすぐられると、ますます肉竿が硬くなった。

【はじめてのエッチが愛華となんて嬉しいけど……これ……これヤバいい～～ッ♥　あ、アソコが……ムズムズするよぉ♥】

「あんっ♥　はじめて……茜ちゃんと初セックス♥

わたしのチンポで感じてるんですね……♥」

【そうだよぉ……あたしもう処女じゃないんだよ♥はぁん、ひゃ、あうううぅ～～っ♥　ハァハァ…アン……い、いっぱい♥　い～っぱい愛してね♥んんんっ♥】

「はい♥　今日はもうセックスしかしませんっ♥　えへへ、おマンコをトロトロにしてあげちゃいますね♥あ、ああ……ンくぅぅ……はひゅんっ♥　あ、はぁ…パコパコ祭りです♥」

親友との初体験を夢想し、さらに腰を振るスピードを上げてしまう。牝のヨガリ声が精衝動を高め何度も肉竿が痙攣する。エリスの巧みな演技によって愛華の煩悩にガソリンが注がれる。

倒錯的なオナニーに没頭して逃げられない。

【あぁ……そんなに奥まで……♥　はぁ、ん、ひぃあ♥　お……オチンチンやばいぃぃっ♥　くぅぅ～～～ん♥】

「あ、茜ちゃん♥　エッチな声出さないでぇ♥　わたし腰フリ止まらなくなっちゃいます♥　はひゃあああぁぁぁ～～～んっ♥」

【む、むりだよぉ♥　だってフタナリチンポが気持ちよすぎるって♥　はやあぁぁぁぁあああん♥　クリの裏ぁ♥　は、ひゅ、うくぅぅ、ふあああああああっ♥じ……Gスポットゴリゴリにゃめえええ♥　そこ敏感だからぁっ♥】

「はぁんっ♥　はぁん♥　はあああん♥　こ、ここがいいんですね♥　ここが感じちゃうんですね♥　ああん、ンン……あ、あああんっ♥　もっとイジメてあげちゃいます♥」

【う、うわぁっ♥　あ、アソコ変になるっ♥　変になるっ♥　変になるっ♥　変になるうっ♥　ひゃうううぅぅうううう♥　は、ひ、んきゅうううう～～、あ…あぉぉん♥　やだぁ……なんか上ってきちゃうからぁ♥】

「変になってください♥　そのきつきつマンコを蕩かしてあげますから♥　下のお口にわたしの性欲マシマシ種付けソーセージを食べさせてあげます♥　激熱チンポゼラチンご馳走しちゃいますね♥」

　嬌声にますます肉竿を硬くしてしまう愛華。フタナリペニスが過熱しひっきりなしに腰を前後させる。楽し気に淫語を口ずさむその姿に。普段のおしとやかさは欠片も存在しない。

　勃起肉を抽送することしか頭にないケダモノだ。誰かがここに来れば破滅してしまうのに、それを気にする様子さえもない。むしろどれだけ自分が変態なのか観賞してほしいくらいだ。

　そしてイメージだけのはずなのに、ぬちゃぬちゃと抽送音まで聞こえはじめた。

　最低の幻聴でヒートアップしてしまう正義のヒロイン。

　ヌチュ♥　ヌチュ♥　クチュ♥　グチュチュッ♥　グチュ♥　グチュ♥　ヌチュン♥

「あああん♥　チンポ汁とマンコ汁のハーモニー素敵です♥　もっとハメハメしますね♥　ン、んふふうぅぅ～～～ッ♥　きつくてぇ……すごいい♥」

【んひゃ、は、くひゅうぅぅぅ～～♥　さ、裂けちゃう♥　裂けちゃうよぉ♥　愛華……ペ、ペースを落としてぇ♥　は、激しすぎるう♥　アソコ壊れちゃうよぉ♥】

「ご、ごめんなさい♥　今止め……あ、ンング……はぁぁ……と、止められない♥　止められない♥　止められない♥　おチンポが止められないんです♥　ンアアアア～～ッ♥」

【やぁぁぁぁ♥　し、子宮の奥とんとん♥　ってされてぇ♥　にゃあああああん♥　ふひゅ♥　あっ、あっ、あん♥　だめだよお♥】

「ゆ、許してぇ♥　許してください♥　抜かないといけないのに♥　こんなので感じちゃダメなのにぃ♥

おチンポ我慢できないのおおぉぉ～～♥　わたしド変態フタナリピストン止められないいいいっぃぃ～～♥」

だらしなく舌を出しながらアヘ顔で肉竿を振り乱す。瞳はとろりと蕩け色欲がすべてを支配していた。もう亀頭を膨張させ、スペルマをまき散らすことしか頭にない。

仮想の肉壺の中で絶頂に向かおうと滾る。

【も、もうダメ♥　イク♥　イク♥　イク♥　あたしイッちゃうぅうううう♥　愛華♥　愛華♥　愛華ぁ♥】

「わ、わたしもです♥　茜ちゃんのエロマンコで中出ししちゃいますうぅぅ～～～～っ♥　はあああ～～～～ん♥」

親友の秘口をイメージしながら腰を振る美少女ヒロイン。エデンフィールドを頼りにして、バカみたいに嬌声を上げていく。勃起陰茎に何本もの青筋が浮き上がり、淫靡な獣の呻きが迸った。玉ブラジャーを着せられたキンタマがふるりと振れ、リボンの巻かれたフタナリ肉幹がいやらしく跳ねる。

同時に白濁液がマグマのように大量に噴出した。

ブ……♥　ブピュル♥　ピュ、ビュ、ドビュッ♥　ドビュビュビュビュウゥゥ～～～～ッ♥　ブピュルルルル～～～～ッ♥　ブブッ♥　ブブブッ♥　ビュクビュクビュクウゥ～～～～ッ♥

「あ、っっ、んく……あ、あはあぁぁぁ～～～～♥　でてる♥　でてる♥　でちゃってるぅぅ～～♥　茜ちゃんのおマンコに射精してるうぅ～～～～♥　わ、わたしのゴミザーメンがドックドクでちゃってますうぅうううう♥　ごめんなさい♥　ごめんなさい♥　ごめんなさい♥　ごめんなさい♥　最低なフタナリ親友でごめんなさいいぃぃぃ～～～～ッッ♥　でもやめられないんです♥　汚物マゾザーメン放ちたいんですううううぅぅうぅうッッ♥♥」



謝りながら最低射精をする変態ヒロイン。床にミルクのシャワーを浴びせていく。フィールドを解除すると、沈丁花のような生臭い匂いが周囲に漂った。

【キャハハハ☆　た～くさん射精したねお姉ちゃん。お友達のおマンコに中出しサイコーだったみたい♥妄想だけでバカみたいにエアーセックスしちゃって真性のド変態だね♥　茜ちゃんがかわいそう♥】

「あ、や……ああ……わ、わたし……」

我に返り自己嫌悪に陥る神城愛華。本当に手も使わず淫猥なオナニーをしてしまった。快美の高揚感は薄れ、寒いモノが心を覆っていく。もう親友に合わせる顔がない。

とにかくスカートを元に戻して、床にこぼした精液の処理だけでもしようと考える。少しでも汚れを落として消臭しないと、図書室は大騒ぎになるだろう。

そしてポケットからハンカチを取り出そうとした瞬間、エリスが囁いた。

【あれ～、誰かこっちに来てない？　足音が聞こえるな～】

「ひゃっ!?　ほ、本当です！　だ、誰か来てます！」

利用者の気配に急いでその場を立ち去る。

生臭い牡の精をそのままにして。

「うわっ、なんだこれ……オイ、これってもしかして……」

やってきたのは図書部の先輩だ。

驚愕の呻きが背後から耳に届いた。

（ごめんなさい先輩……うぅ……フタナリの淫乱でごめんなさい……ぅぅぅ……）

恥辱の跡を目撃され栗髪の美少女は目を伏せることしかできなかった。

◆◆◆◆

後日、教室。

愛華は席に座りいつものように茜と話していた。

話題に上ったのは先日の図書室であった件だ。

「ねぇ知ってる？　このまえ図書室に変質者がでたんだって。男の……ほら、アレのシミがあったらしいよ。マジやばいよな」

「そ、そうなんですか……こわいですね」

「そうだよ、愛華も図書部なんだから気をつけなよ。何かあったらあたしに言いな。変態野郎なんてぶっ飛ばしてやるからさ」

「あ、ありがとう茜ちゃん……う、うれしいな」

変質者の正体が自分とは言えず、つっかえながら返事をする。

それからまた、鞄から白濁液の入ったペットボトルを取り出し、中の液体を口に含んだ。

「んっ、んん、こくっ……こくんっ……くんっ」

「またスポーツドリンク？　好きだよねーそれ」

「はい、元気をチャージです♥」

エリスの命令でザーメンドリンクを常飲する正義のヒロイン。

羞恥と屈辱の学園生活はこれからも続いていく。

第九話　恥辱のちんぽチャンバラ！　オークの群れに輪姦される正義のヒロイン！

鬱蒼とした森の中。

緑がひしめき合っているその場所に、一か所だけすり鉢状の空間があった。空間の中央には土俵めいて土が盛られ、周りにはそれを取り囲むように腰かけるための岩が配置されている。

大勢の気配が集まり、あちらこちらから楽しげな声が聞こえてきた。平日の昼間だというのにたいそう盛況な様子である。

集まっているのは人間ではない。デモンコアの一員、オークたちだ。

緑色の肌をぬらりと光らせ、太鼓腹をブルリブルリと揺らす。風呂に入る習慣がないため身体から異臭を放ち、豚鼻からは熱く刺激臭のする鼻息が漏れ出る。

彼らが集合したのは自分たちの主人、エリスが呼びかけたからだ。天煌聖姫ヴァーミリオンの調教を手伝うようにとの命令である。

「ゴフフフ、ついにこの日がきたか」

「おうよ。オレの弟を一撃で塵にしてくれやがって。あの光景は絶対に忘れねえぜ」

「ああ、憎い天煌聖姫のヤツを嬲りものにしてやる」

「これもエリスさまのおかげだな」

「そうだぜ、見た目は小娘みてえだけど魔力が半端ねえからな。あの人についていけば安泰ってもんよ」

今までゴミのように討滅されてきた恨みを晴らそうと、大勢のオークが息を巻き、仇敵の登場をいまかいまかと待ちかまえていた。

口元からは涎が垂れ、我慢できない様子だ。

それから一時間が経過し、ようやくエリスが、それにヴァーミリオンが姿を見せた。悪魔幼女のほうはい

つもと変わらないボンデージ姿だが、紅髪ヒロインは羞恥衣装での登場だ。

白いレオタードスーツの胸と股間部分がハートマークの形に切り取られていた。Dカップ乳首とフタナリ亀頭には真っ赤な飾り紐が結び付けられ、勃起状態を強調されてしまっている。

ある意味全裸よりも恥ずかしい格好だ。

「お待たせ～、お姉ちゃんがグズだから時間かかっちゃって。ごめんね☆」

「くぅぅ……ま、また変態みたいな格好を……せ、せめてアソコだけでも隠させてくださいっ！」

「変態みたいっていうかお姉ちゃんは、フタナリマゾのド変態じゃん。いつものことだし気にしない気にしな～い」

「ッ……あ、あなたはいつもそうやって！」

ニコニコと嘲り笑う悪魔幼女に言い返せない。

（ち、違います、わたしはフタナリマゾのド変態なんかじゃありません！　こんな身体になっても天煌聖姫なんですから！　みんなを守るために戦う正義の味方なんです！　今までだって本当は感じてなんかいませんから！　あんなの気の迷いです絶対に！）

マゾではないと言い聞かせ心の平穏を保とうとする。まだ性経験の少ないヴァーミリオンにとって、自分が倒錯的なプレイで感じるような人間だとは信じたくなかった。

ド変態なんて嘘に決まっている。そう、きっとそうだ。

しかし、エリスはそんな胸中など無視して、フタナリ調教を開始する。最低で下劣な調教内容をオークたちに向かって、高らかに宣言した。

「今回やるのはちんぽチャンバラだよ。これでお姉ちゃんとオークのみんなに勝負してもらいま～す。喧嘩とか痛いのはなしね」

「ち、ちんぽ……チャンバラ……？」

「ど、どういうことですかいエリスさま？」
「ルールはぁ、おちんちんとおちんちんで叩きあって～、先に射精したほうが負け。これ以上の説明はいらないよね？」
「ま、また……悪趣味な……！」
「わかりましたぜ。要はチンポで擦ってフタナリ射精させてあげりゃあいいんですね。ゲヘヘヘ」
「ちなみに勝ったほうは負けたほうに何でも一つ命令できるから。がんばってね♥」
淫猥なゲームを笑って説明する悪魔幼女。正義のヒロインに恐怖や羞恥を植え付けたくてたまらない様子だ。口元から八重歯をのぞかせ、深紅の瞳に嗜虐の炎が揺らぐ。
また卑猥なゲームをさせられるのかとヴァーミリオンは唇を噛み、オークたちは早くも歓声を上げる。
しかし、次の言葉はエリスを除いてこの場の誰にも予想できなかった。
「あっそうだ。エリスは帰るからあとよろしくね～。ず～っと変態プレイになんか付きあってらんないし、好きなようにやってね」
「え、ええっ!?　かえ……る!?　う、嘘ですよね……わたし一人でここに……？」
「マジかよエリスさま！　オレたちが自由にやっていいんだな!?」
「ガフフ、ありがてえ」
「ヒャッハー！　やりたい放題だぜ！」
「いいよ～。でもエリスが今言ったことは守ってね。勝手なことする奴は消し炭にするから。そのつもりで☆」
氷でできたナイフのごとき一声に、しんと場が静まりかえる。あどけない容姿でもレートSのデモンコア。レートBの面々は己の立場を再認識した。
生まれ持った魔力の質が違うことを心身に刻み込まれる。

「それじゃバイバ～イ。三日後に迎えに来るから～、何回戦でもやっていいよ♥」

「待ってください！　三日後ってそんなに――」

「は、ハイ！　エリスさま！」

「ゴルルッ！　感謝しますぜ！」

「羽を伸ばしてきてください！」

空の彼方へ飛び去る姿を呆然と見送る紅髪ヒロイン。食料や住居は残してくれた魔法陣でなんとかなるが、三日も放置されるとは思わなかった。

敵地での孤立に不安が隠せない。淫紋経由でセイクリッドギアも抑えられ、ヴァーミリオンは通常の十分の一の力しか発揮できないのだ。

しばしの沈黙があり、オークの中でもリーダー格の男が口を開いた。片目に傷があり隻眼、肉体は筋骨隆々で見るからに頑強そうである。

隻眼オークは一瞥すると、

「ゴルル、さっそくはじめるぞ。土俵に上がってこい」

「そうですね。じっとしていても仕方ないですし、やりましょう！」

あっさりと敵の呼びかけに応じる紅髪ヒロイン。

毅然とした態度で土俵に入場する。

（体力のある内に一勝してこのオークを味方にさせます。リーダーがこっちの陣営なら他のメンバーも手を出しにくいはず。わたしはあきらめません……この三日間を耐えきってみせます!!）

腰を落としながら頭を巡らせる。敵地で支援もなしには戦えないし、今考えられる手はこれしかない。それに負ければ、何をされるかわかったものではないのだ。味方は一人でもほしい。

一敗でもすればこれまでオークたちに買ってきた恨みを一身に受けることになってしまう。天煌聖姫として数えきれない同胞を葬ってきたのだから、想像もつかない陵辱劇が待っていることだろう。

そんなのは絶対にイヤだ。

「最初に言っておきますが、わたしは強いですよ。レートBごときで天煌聖姫に勝てると思わないことですね」

「フンッ、いい度胸だ。かかってこい！　オレたちの怒りを教えてやる！　ゴルルル！」

強気に挑発するヴァーミリオン。自分の弱みは決して見せない。

隻眼のオークも唸り声を上げ、腰ミノを脱ぎ捨て下半身を露出する。深緑色のイチモツは怒張し天に向かってそそり立っていた。

幹も太く長さは二十五センチもある大業物だ。十七センチのヴァーミリオンをはるかに凌駕し、並々ならぬ威圧感を発している。

両者は土俵の隅に移動すると、腰を落として向かい合った。手を腰の後ろに回し、股間をできるだけ前に突き出す。両足首は互いにロープで結ばれ逃げることはできない。どちらかが射精するまで戦い続けるのだ。

そして、両者は自分のペニスを物干し竿のように掲げた。海綿体が膨張し血管がモコモコと浮かび上がる。

数瞬の後、試合開始の声がかかり、ちんぽチャンバラがスタートした。

「いきますっ！　えーいっ！」

「ゴルルルウッ！　オオオオオッ！」

試合序盤、先手をとったのはヴァーミリオンだ。フタナリペニスをぷりんっと振り抜き、側面からオークペニスを打つ。打つ。打つ。打つ。

どうやら竿の部分、特に敏感な亀頭を攻撃して射精させる作戦のようだ。

ペチ♥　ペチ♥　ペチン♥　ペチペチペチ♥

「たぁっ、たぁっ、やぁっ！　ど、どうですか、イッてしまいなさい！　降参も受けつけていますよ！」

「おいおい、あんた目え見えてんのか？　オレの亀頭をよく見てみろよ」

「ん……へっ、ええ!?　こ、これは……!?」

鳩が豆鉄砲を食らったように驚く紅髪美少女。よくよく見てみると隻眼オークの肉竿は勃起状態でも剥けていなかった。つまり仮性包茎だったのである。

これではどんなに打っても包皮に阻まれ感じるわけがない。

ズルムケ敏感チンポのヴァーミリオンとは条件が大違いだ。

「どうだっ！　この包茎ガードの前に人間のチンコなど通用しないってわけよ！　オラッ！　今度はこっちから行くぞ！」

「なっ……ひ、ひゃうぅぅうっ！　ひっ、は、ふあぁぁぁぁぁんっ！　は……はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

自分の肉竿をぴったりと密着させながら、天煌聖姫の剥け肉竿を容赦なく擦っていく。丁度竹刀で押し合うような状態だ。皮と皮が触れ合いヌチャニチャと不快な異音が発せられた。

生臭い精臭が両者から漂う。

こす♥　こすこす♥　こすこすこす♥　ぬちゅ♥　ぬちゃ♥　こしゅこしゅ♥

「あぁぁはぁぁぁん！　ひっ、はう、こ……こ、これはっ！　おチンポとおチンポがぶつかって……ゴシゴシしてます……！　ふあああ、で、でもこれくらいでっ……！」

「ホラホラホラッ！　どうだぁ！」

「ジ……んはぁぁぁぁぁぁぁぁ！　あ、熱い鼓動が伝わってきます……！　ぐうぅぅぅぅぅぅぅぅっ！　はぐうぅぅぅぅぅぅぅぅっ！　ぁあうう……！」

「ここもいいんじゃねえのか⁉　なぁっ、天煌聖姫サマよおっ！」

「か、カリ首……！　くうううううん！　そ、そこいけないです……！　ぁ、ぁ、ひぅ、ひゃうぅぅうう！　キノコさんスリスリは……ッ！　感じちゃ

う！　感じ……ん、ぐっ、ま、まだまだですっ！」
　オークの熱くぬめったモノで愛撫され、フタナリペニスが悲鳴を上げる。生まれて間もない童貞チンポでは耐久力が足りないのだ。
　サクランボ亀頭を攻撃され可愛らしい嬌声を上げてしまう。
「もうひと押しかぁ⁉　オラオラ！」
「ほごおおぉおおおおぉおおお！　ひゃ、ぐんぐん、く、くふうぅぅぅぅ～～～ん！　ぐ、ぁ、ぁあぁ～～～ッ！」
「フンフンフンっ！　もうキツそうだなあ！」
「ッ～～～！　だ、誰が！　寝言は……ベッドで言いなさい！　天煌聖姫は……チンポなんかに屈しませんっ……くうぅぅぅぅぅう！　は、ぐうぅぅぅぅぅぅぅぅう！」
　歯を食いしばりながらオークチンポの猛攻に耐える。戦闘力の差は圧倒的だ。射精衝動が金玉から上がってくるが、今漏らすわけにはいかない。
　正義のヒロインは相手が強いからといって逃げはしない。
「さっさと射精しちまいな！　フタナリマゾの変態さんよぉ！」
「くっ……ひ、やぁ、き、きゃあんっ！　ハウウゥウウゥウウン！　ぅ、ぐ、んのぉ……！　オークごときが調子に乗らないでくださいっ！」
「犬みたいに舌出しながら何言ってやがる！　そらぁっ！」
「ひぐっ……はぐうぅぅ～～ッ！　こ、こうなったらぁっ！」
　射精寸前の紅髪ヒロインは思い切って、フタナリ陰茎のポジションを変えた。腰を引き肉竿同士の密着を解除する。狙いはぶ厚い皮に覆われた包茎ペニスではなく、むき出しのキンタマだ。
　露出亀頭を押し当てて子種袋をノックする。

ふに♥　ふに♥　ぷにに♥　ふにふにふに♥　ふにゅりん♥　むにむにむにに♥

「ガアアアッ！　このっ、テメェッ！」

「チンポはガードできてもキンタマは違うみたいですね！　今度はこっちのターンです！　わたしのチンポラッシュでイカせてあげちゃいます！　えい、えい、えい！」

「ゴルルルッ、このおおおお！」

執拗なキンタマ連打に緑ペニスがビクンッビクンッと跳ねる。竿の部分に血管が浮き出し射精欲求が高まっていく。皮の中では先走り汁が溜まりはじめた。

実際の威力は大したこともないがどうしても刺激され感じてしまう。可憐な少女がチンポを振る変態シチュエーションが快楽を増幅させているのだ。

「このまま射精させてあげますね！　やぁっ！　やぁっ！　たぁっ！」

空手で鍛えたフィジカルで激しいチンポ攻撃をする正義のヒロイン。はたから見ると頭がおかしい以外に形容できない状況だが、本人はいたって真面目だ。

隻眼のオークを射精ギリギリまで追い詰める。しかし、あと少しというところで風向きが変わった。相手もヴァーミリオンと同じように体勢を変えたのである。

「グッ……この、調子に乗るんじゃねえ！　ゴラアアア！」

「え……ふえええっ!?」

隻眼のオークは腰を引くと下から上へ陰茎を跳ね上げた。ターゲットはフタナリちんぽ全部である。べちんっと勢いよく陰茎がぶつかり、肉音が土俵にこだまする。二人の幹が膨れ上がり、鈴口がヒクヒクと痙攣した。

変身ヒロインのふたなりペニスは、突然の衝撃に驚き硬直してしまっていた。金玉を含めてチンポ全体を刺激されたのだ。今までの比にならない快美電流が背筋を走り身体が疼く。

紅髪美少女の細面がビクリと強張った。
「は、ハッッッグウウゥゥッッ！　お、おチンポがビリビリします……！　ふぐうううぅうううう♥ひ……ひゃあああああん！　やぁ、でちゃうう……ッ♥」
「どうだコイツは効くだろ！　所詮人間とオレたちじゃチンポの強度が違うんだよ！」
「ふ、ふあああぁぁあぁぁあああ！　振り下ろしダメッ……うぐうううぅうううう！　チンポで……チンポビンタが……感じ、ちゃうう……っ！」
続けて今度は上から下へ振り下ろされる。チンポ衝撃のサンドイッチで一気にヴァーミリオンの肉竿が限界に迫った。
加速したチンポビンタは心地よい痺れを少女に刻んでいく。
フタナリ陰茎に血液が圧送され意識が白濁で埋め尽くされていく。
「そ、そんなぁ……我慢したのに！　我慢したのに！　我慢したのに！　いっぱい我慢したのにおチンポ負けちゃう……オークチンポにぺちぺちされてザーメンお漏らししちゃいます！　んきゅうううぅ～～～！　はふぐうううぅうううう！」
牡の象徴に叩かれマゾ快感が身体を支配していく。フタナリではない本物オス力に美少女ヒロインの心が蕩かされていく。
こんなにたくましくて熱いのだから負けても仕方ない。自分は女の子なんだからちんぽチャンバラなんてはじめから無理だったのだ。
極太のオークちんぽに敗北して惨めにザーメン排泄したい。変態マゾ牝という立場をフタナリチンポに、股間すべてに刻み込んでほしい。
（も、もう無理です！　お、おチンチンが熱くて……敵のチンポなのに気持ちよくてぇ……！）
そんな弱気がメスきのこ肉に伝わり、次の瞬間

ビュッ♥　ビュクッ♥　ビュク♥　ビュククククウウウウゥゥゥ～～～～ッ♥　ブビュルルルル♥　ドピュ♥　ビュルルルルルルッ♥　ドプルルルルルルッルルルルル♥

「んっ、ン、うう、はあああ～～～～ん♥　ダメダメダメイッちゃダメなのにいいいいぃぃっ♥　チンポ負けちゃう♥　チンポ負けちゃう♥　負けチンポ汁がビュクビュクでちゃうぅうぅぅぅ♥　わたしのチンポソードが一回戦負けしますうぅうぅぅう♥」

みっともなくチンポ放水しながらフタナリアクメする紅髪ヒロイン。濃厚なホルモン臭をまき散らし、射精快感に酔いしれる。

男の器官で打ち負けて、なけなしプライドもズタボロになってしまった。

自分が惨めで情けなくて、ロープをほどかれても立ち上がれない。絶対に負けてはならない一戦だったのに。オークたちの目の前で射精してしまった。

周りで隻眼オークを称える歓声がどこか別の世界からの声に思えた。

そして、敗者にふさわしい末路が迫る。

「それじゃあオレの命令を聞いてもらおうか。まさかいまさらイヤなんて言わねえよな？」

「くっ……し、仕方ないですね……どうぞなんでも命令してください！　でも心までは……あなたたちの思い通りにはなりませんよ！」

相手を正面から見据え己を奮い立たせる。一見すると虚勢にしか見えないが、ヴァーミリオンには奥の手があった。

神聖粒子を股間に集中させ避妊用のバリアを張る方法を編み出したのだ。以前エリスに陵辱された経験からである。これでデモンコアの子を孕むという最悪は避けられる。

もちろんバリアの効力には限度があり、心から快楽

に堕ちれば意味がないのだが。
「ずいぶん余裕だなヴァーミリオン。まあいいさ、オレの命令はな」
「っ……ゴク……」
緑色の陵辱者は少しの間考えてから口を開いた。
生臭い吐息と共に飛び出した言葉は、デモンコアらしい下劣なものであった。
「オレたち全員が飽きるまで輪姦させろ！　従順な肉便器としてなぁっ！」
「――――ッ、くっ……い、いいでしょう……さっさとしなさい！　そんなお粗末なモノでわたしを屈服させられると思わないことです！」
「オイ、てめえ……さっきからその態度がムカつくんだよ！　さっさとケツを上げやがれっ！」
「あ、んうううぅぅっ！」
抵抗するヒマもなく抱え上げられ太腿を開かされてしまう。M字開脚のポーズで、ヴァーミリオンは膝の上に乗せられてしまった。
さらに陰嚢の下に息づく膣孔に仮性包茎ペニスが差し込まれる。メチメチと肉が裂ける音が聞こえ、愛撫もなしに怒棒が肉壁を蹂躙する。
ずちゅ！　ぐちゅ、ぐちゅ！　ずりゅりゅりゅりゅ！　ずちゅずちゅずちゅ！
「ヒッ、ひぐうううぅぅぅ～～～ッ！　ん、ぁううううっ！　や、っ……ひ、ひゅぐうううぅぅうう！　ら、乱暴に……はひゃあああぁぁあぁぁあっ！」
「生娘でもねえクセにギャーギャー言うんじゃねえよ。ここがいいんだろっ！」
「んきゅうううぅぅうう……ら……らめえぇぇえぇぇえええッ！　んぐ、ひ、ひゃ、へうううぅぅう……ご、ゴリゴリしないでぇっ……お……オマンコ広がっちゃうからぁっ！」
「そいつはいい。ガバガバマンコにしてやるぜ！　天

煌聖姫サマ！」

「い、いやです……が、ガバガバマンコなんて！　も、もうエッチできなくなるじゃないですか！　はうう……くううぅぅッ！　ま、まだ好きな人もいないのに……ちゃんとキスもしてないのにっ！」

大きく媚肉を割り裂かれ怒張したモノを咥えこまされる。淡いピンク色の陰唇はちんぽチャンバラの影響で発情し、淫蜜が漏れ出て早くもドロドロだ。

こんなオーク陰茎で感じていることが悔しくてたまらない。

しかし、マゾボディに改造された肉体は今この時も快楽を追い求め、粘膜を擦られるたびに甘い快感が魂を震えさせる。愛液が泉のようにあふれ出し、キュンキュンと子宮が疼く。

目じりがトロリ垂れ下がり、瞳に浮かべた涙の理由は苦痛か歓喜か判別がつかない。

「はうっ、うう、あぐうううううっ♥　オマンコ変になるううううッ♥　ん、ぁ。ひ……ひゃあん♥　嫌なのに♥　嫌なのにお股が動いてしまいますううぅううう♥」

「へぇ、まだまともにキスもしてねえのかよ。だったらオレが教えてやるぜ」

「え……あ、いやっ……ふぐ⁉　んむうううぅううう♥」

背後から犯されながら口づけまでしてしまう正義のヒロイン。乙女の唇が触れると間髪入れずにオークの舌がねじ込まれた。

ドブのような口臭に吐き気を催すが逃げることもできず、口内を陵辱される。

ちゅ♥　ぶちゅ♥　じゅ♥　ちゅちゅ♥　んちゅ♥　ずぞぞ♥

（く、臭い！　汚い！　気持ち悪いぃ……ぅぅ……に、二回目も無理矢理なんて……キスは大切な人とって決めてたのに……）

触手チンポに続いてオークに唇を奪われる。さんざん恥辱を味わわされても、唇を奪われるのは特につらい。まるで心が切り刻まれるようだ。

そして、チューリップのような唇を堪能した隻眼オークは次なる辱めを加える。

「ぷ、プハァ……へへ、中々よかったぜ。ゴフフフ」

「この……悪魔っ！　あくぅぅ……ぜ、絶対に許しませんから！」

「そいつは楽しみだ……オイッ、お前らも見てねえで手伝いやがれ！　いつも正義ぶってる天煌聖姫サマを肉便器にしてやるんだろ!?」

リーダーの呼びかけに他のオークが応える。

目の前で痴態を魅せられ続け、誰の肉棒もギンギンになっていた。

「おうっ！　グフフフ！」

「ガルル、やってやろうじゃねえか！」

「ゲヘヘ、オレのチンポをきれいにしてもらうぜ」

「うっ……臭い……や、やめてください！　そんな汚いもの近づけないでっ！」

様子を見ていたオークたちも輪姦に加わっていく。

ヴァーミリオンに向かって多数の牡肉竿が突き出された。髪の毛、口、頬、腋、太腿、足裏に押し当て乱暴に自慰をはじめる。むせかえるような牡臭と共にオークペニスが扱かれていく。

不潔な陰茎からは我慢汁だけでなく恥垢もボロボロと出た。汚泥を全身に塗りたくられ紅髪ヒロインは涙をこぼす。

さんざん倒してきたとはいえこの扱いはつらすぎるのだ。

全身にチンポ汁を塗りたくられるなんて、自分が不甲斐なくて情けなくて泣いてしまいそうである。

こしゅ♥　ずちゅ♥　ぐちゅちゅ♥　こすこすこす♥　ぶににゅ♥　じゅりじゅりじゅり♥

「はぷっ♥　む、んんむ、ちゅ、ぷはぁぁぁ♥　ん

ぶうっ、くふ、ちゅくう♥　んぐうううぅ～～ッ♥」

「どうだオレのチンポは美味いだろぉっ!?」

「はぐ、むぐうぅぅぅうっ！　お、おいしいわけありません！　こんなの……く、臭くて苦くて……気持ちが悪いですっ！」

「おいおい、肉便器がなにほざいてんだあ？　正義のヒロインサマは約束も守れないのかよ」

「あうっ、くうう……それは……」

悔しいがこのオークの言う通りである。肉便器になったヴァーミリオンは汚らしい肉棒にも奉仕しなければならないのだ。

チンポキスしながら桜色の唇を開き、屈辱的な口上を言わされる。

「はう、うう……その、と、とってもおいしいです♥　ちゅ、くちゅ、チュウウ♥　ン……はぁんっ♥　あ、あなたのチンポさまとても素敵ですぅ♥　あむん……ちゅぷんっ♥　ちゅくん♥」

「ガハハハハ！　そうだ！　そうだろうが！」

「は……はい♥　こんなにたくましいチンポには出会ったことがありません♥　ぺちゅ、むぅ……んんん♥　わたしみたいな負け犬がご奉仕させてもらえてうれしいですぅ♥　ちゅ、んん。ちゅるん♥　こくん♥」

「そんなにチンポが好きかよこの変態！　偉そうなこと言っておいて、おしゃぶりに夢中じゃねえか」

「ちゅっ♥　はう、んぶぅ～、ふううぅぅぅうううん♥　ひゃい、変態です♥　ヴァーミリオンはフェラチオ大好きな便器ヒロインです♥　はぅむん、くちゅ、ちゅ、ちゅ……ちゅぷんっ♥　ぷはぁ♥　男性の象徴に媚びることしかできない便器女なんです♥　ん……ちゅぷん♥　ぺちょ、ちゅっちゅ♥」

肉竿へ積極的に舌を這わせ、奉仕の悦びに目覚めていくマゾ聖姫。幹を舐めたかと思うと亀頭にむしゃぶりつき、鈴口をちゅうちゅうと吸い上げる

ピンっと傘を張ったカリ首に舌を動かし、溜まった

チンカスをきれいに舐めとっていく。植え付けられたマゾヒズムが覚醒し、男根に染みついた匂いさえも愛おしくなっていく。

淫猥なセリフを口走っていると、本当に自分が肉便器だと思えてくる。わざと大きな音を立てながら肉竿にしゃぶりつき、カウパー汁を堪能した。

口腔内を犯されることが心地よくてたまらない。

「ガハハッ、こいつはとんでもねえ淫乱だぜ！　真面目な顔してチンポしゃぶりが好きなんてなぁ！」

「はむん、ちゅ、チュチュッ♥　ペロ、ペロリンッ♥　だってぇ、あんたのチンポがカッコイイのが悪いんです♥　わたしみたいな淫乱マゾがこのチンポ見せられたらぁ……♥」

「見せられたらなんだよ？」

「大好きになっちゃいます♥　んぷ、くちゅ、くちゅ、ンン……ちゅくん♥　い、イケメン勃起チンポを目の前にしてナメナメ我慢なんて無理です♥　じゅる、じゅる、べちゅろん♥　先走りのお汁もチンカスも美味しくてぇ……虜になっちゃいます♥」

蜜液をこぼれさせながらデカチンをぺろぺろする変身ヒロイン。膣内を侵されながら口内奉仕に没頭していく。フタナリペニスもオークのソレと同じように屹立していた。

そして、陶酔した表情で魔悦に溺れていくヴァーミリオンにさらなる恥辱が加えられた。オークの一匹がロング紅髪を手に取り、自らの陰茎に巻き付けたのだ。

「はぶちゅ、んくうう〜〜♥　ん⁉　やっ、そ、それはぁ！」

「嫌とは言わねえよなあ？　お前みてえな変態肉便器の髪の毛を使ってやってるんだぜ？」

「は、はいい♥　髪コキしてもらってかまいません♥　んぶ……ちゅうう♥　わたし自慢のロングヘアーで楽しんでください♥　ちゅ、ん♥　ふぁ……あ、はうぶん♥」

「かまいません？　そこは感謝するところだろうがよお!?」

「あ、ありがとうございます♥　マゾ牝の紅髪でオナニーしていただいて感激ですぅ♥　いっぱい、いっぱいシコッてくださいね♥　おチンチンに巻き付けてぇ♥　むぶ……ちゅくう♥　あんっ♥　はぐうううぅぅ～～っ♥　あ……お、おマンコもぉ……♥　そ、そろそろ限界ですっ♥」

子宮口が緩み魔物の子種を受け入れようとしてしまう。肉内壁を擦りオークペニスが蠢動し、肉体が小刻みに痙攣しながらオーガズムへ達しようとしていた。

隻眼オークは肉勃起をいっそう激しく動かし、最後の責めを加える。

「なんだぁ？　もうイキたいのかよ」

「ふぁぁ……い、イキたいです♥　おマンコを……子宮をノックされてキュンキュンしちゃいます♥　もうオークさまのチンポでメロメロなんですぅ♥」

「オレたちにやったことを謝罪するならイカせてやってもいいぜ。オラッ、今度はブザマに謝ってみなっ！」

「はいぃっ♥　謝罪します♥　誠心誠意謝りますからイカせてください♥　はくぅぅ、ひ、んくうう～～♥　ンンンン、やぁ、きゅふううんん♥　おマンコもチンポもせつないです♥」

命令を全面的に受け入れ淫猥に口を開く。すでに理性は溶解し快楽を求めることしか頭にない。穿たれた膣孔は淫蜜の洪水状態で、フタナリペニスもフル勃起モードだ。

身体中に陰茎を擦りつけられながら魔悦に飲まれていく。

「わ、わたし天煌聖姫ヴァーミリオン……んぷ♥　いえ変態のマゾミリオンは……これまでオークの皆さまにご迷惑をおかけしたことを深く謝罪します♥　ちゅ、ちゅくん♥　はあああ～～～ん♥　しゅぐ♥　ちゅちゅうううう、ん、ゴックン♥」

「ゴハハ！　なにを謝ってくれるんだあ？　マゾミリオンちゃんは」
「ほ、本当はレイプされるのが大好きな輪姦マゾなのに盾突いてすみませんでした♥　んむ……コクン♥　チンポしゃぶりしか能がないのに格好つけてましたぁ♥　ちゅ……ちゅぷん♥」
「それで？」
「これからはオークさまたち専用の肉便器になります♥　くちゅ、はうむ……んんむ♥　ぺろ♥　ぺろぺろ♥　チンポに奉仕するだけの牝ブタになります♥　で、ですからどうか……どうかイカせてください♥　んん♥　はぅぅ……も、もう淫乱マンコが苦しいんです♥　マゾミリオンのドスケベマンコに濃厚な子種汁を注ぎ込んでえ♥　はうぅぅぅぅ～～～ん♥」
　最低な謝罪をしながらも腰の動きを止められない。上の口で肉竿に舌を這わせながら、下の口でも肉竿を飲み込んでいく。
　倒すべき敵に頭を下げても何とも思わない。自身を卑下しながら快楽に溺れていく。
「へへ、よく言えたな。これはオレからのご褒美だ」
「ぐぐん!?　はぐうぅぅう～～♥　んくぅぅ……こ、これはぁ♥」
　フタナリちんぽを握られさらなる淫辱にはまっていく紅髪ヒロイン。ごしゅごしゅと肉竿を手コキされる。エリスとは違う男性の豪快な愛撫に射精衝動が高まっていく。
　しゅ♥　ごしゅ♥　ごしゅ♥　ごしゅごしゅごしゅごしゅ♥　ぢゅくぢゅくぢゅく♥
「んはぁあああぁあああぁッ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポコキすごいです♥　はやあああぁぁ～～～～ん♥」
「どうだぁ？　てめえでするよりイイだろう？」
「ひゃいい♥　ん、ふくうう、はぅぅ♥　お、オークさまの手淫さいこうです♥　自分でするより何百倍

もヤバいです♥　あンッ♥　あンッ♥　ああン♥」

「だよなぁ、マゾミリオンは男にヌイてもらうのが好きな変態だもんなあ」

「く、くふうぅ～～ん♥　へ、変態です♥　変態です♥　変態です♥　マゾミリオンはオマンコしながらチンポしごいてもらうド変態です♥　うっ、む、ぐぅぅ♥　やはあ～～ん♥　お、男の人にチンポ弄ってもらう淫乱ドマゾです♥」

武骨な手のひらコキで理性が崩壊していく。

だって今の自分は肉便器だからいいじゃないか。チンポに奉仕することが使命なのだ。公衆便所のように不特定多数に使用されて本望だ。カウパー汁もチンカスも気持ちイイ。

しかも大人の男にチンポまで触ってもらえるのだ。うれしいうれしい、もうここに永久就職してもいい。ふたなりの自分に恋人なんてできないのだから。おチンチンのついてる女の子を誰が好きになってくれるのか。そうだ、わたしは肉便器なのだ。

（はぁぁ～～ん♥　も、もうどうでもいいです♥　チンポ汁いっぱいください……フタナリしごいてください……や、あ、だ……ダメ！　ダメですそんなこと考えちゃ……で、でもバリアさえあれば妊娠しませんよね……ちょっとくらいなら中出ししてもらっても……いいですよね♥）

快美の濁流に翻弄される。わずかに残った理性までも欲望へ傾きはじめる。もはやヴァーミリオンの脳裏には淫欲しかなかった。

「ゴハハ！　ゴハハハハハ！　いいぞ、イッちまいな！　変態マゾの天煌聖姫サマよぉ！　輪姦されながらイキやがれ！」

「ひゃいいい！　もうイキますぅ♥　わたしイッちゃいます♥　たくさんのチンポに囲まれながらマゾイキしますううううぅぅ～～～～ッ♥」

オークたちの陰茎が最大限に怒張し、髪の毛、口、頬、

腋、太腿、足裏それに膣孔へおびただしいまでの精液が放たれた。

正義のヒロインは軽蔑していたデモンコアの白濁を全身に浴びてしまう。

ドビュッ♥　ブビュ♥　ブッ、ブジュルルル♥　ドバババアアアァァァ～～～～ッ♥　ドプ♥　ドプ♥　ドプ♥　ドプウウウ♥　ビュクビュクビュクビュク♥

「ほうううぅぅ～～～～っ♥　イクイクイクイクいっちゃいます♥　ザーメンシャワー浴びながらメスイキしますううぅぅッ♥　お、おマンコに熱いのいっぱい入ってぇ♥　中出しアクメするううぅぅうぅぅうう♥　オークさまのオタマジャクシが流れ込んできます♥」

さらに快感が伝播しフタナリペニスも暴発する。乱暴な手淫にソフトタッチでオナニーしてきた牝肉棒が耐えられるはずもなかった。

「はうう、ち、チンポもイキます♥　も、もうザーメンでちゃいますううぅぅ～～ッ♥」

己の意思とは関係なくキンタマから精衝動が昇ってくる。血管がビキビキと浮き上がり、ピンク亀頭が一秒ごとに痙攣する。

そして、ぱっくりと開いた先端から素麺のように細く、大量のザーメンが噴き出した。

ブ……ブピュル♥　ドビュッ♥　ドビュッ♥　ボピュルル♥　ピュ……プピュ♥　ブ……ブピュルルルウウウゥゥゥゥ～～～～～ッ♥　ドビュビュビュビュウウウゥゥゥゥッッ♥

「んあぁっ♥　あ、んく、ハウウウウン♥　ま……マゾチンポもいきますううぅぅうっ♥　おマンコハメられながら手コキちんぽイッちゃいますううぅぅぅ～～ッ♥　ザーメンで全身コーディネートされながらぁフタナリ絶頂しますううぅぅ♥　お、おほ♥　おほ♥　おほおおおぉぉぉぉ～～～～ッ♥



み、皆さまご覧ください♥　デモンコアに逆らった変態ヒロイン、マゾミリオンの噴水ザーメンです♥　皆さまよりも臭くて汚い負けチンポでみっともなく射精します♥　ごめんなさい♥　ごめんなさい♥　どうかゴミチンポの謝罪ザーメンで許してくださいいいいいいいいいいいいいッッ♥　んほ♥　い、イク、イク、またイッッックううううぅぅぅ～～～～ッ♥♥」

アヘ顔で謝り欲望のエキスを受け止めながら、膣孔、肉竿同時アクメする正義のヒロイン。オークの胸板に身体を預け、白濁液を享受する。

大勢の歓声と嘲笑にまみれ、そのまま意識は深く深く闇に沈んでいった。

◆◆◆◆

三日後。

土俵の上で生ゴミのように打ち捨てられたヴァーミリオンはエリスに発見された。飽きたのかもう手をつけるオークもいなかった。

身体にザーメンで汚れていない部分はなく、瞳には欠片ほどの生気もない。

「は～い、お家に帰る時間だよお姉ちゃん」

「……」

「あれ～、反応がないぞ～？　どうしたのかな～？」

「は、ふあ……ぁぁ……エリス……？」

「ん～、なんかお疲れみたいだね。そこのキミ、お姉ちゃんはこの三日間で何回負けたのかな～？」

近くにいたオークが口角を吊り上げ答える。

「グフフ、百回です。後半はチンポで打ちあうだけで射精してました。あの天煌聖姫がここまで雑魚に堕ちるなんて驚きですぜ。エリスさま」

「キャハハ☆　ホントお姉ちゃんは弱いね～♥　じゃ、帰ろうか負け犬ヒロインさん♥」

「ひゃい……かえりましゅ……♥」

エリスに自宅へ転送されていく正義の紅髪ヒロイン。着床だけはどうにか避けられたが、自力で立つ気力も

残っていない。
フタナリ調教、残る日数は二十日。
ようやく三分の一が終了した。

第十話　最悪の痒み責め！　幼女にチンポを掻いてもらう美熟女ヒロイン！

ヴァーミリオンがオークに輪姦されている最中、悪魔幼女はさらなる姦計を巡らしていた。

「う～んと、これくらいでいいかな」

レートSのデモンコアが強敵である理由は、現実を書き換えるほどの魔力にある。範囲はエデンフィールドの中に限定されるが、指定した空間内ならどんな世界でも自由に思うがままに構築できる。

学園でも遊園地でも大雪原でもオークが生息する森でも意のままだ。

そして、今エリスが構築した世界は、ヨーロッパの古城にありそうな拷問部屋である。石造りの室内には悪趣味な器具が吊り下げられ、カビとほこりの匂いが充満していた。

部屋の真ん中にはブロックが凹の字型に積み上げられており、血と愛液で濡れた表面からはこれまで数多の調教があったのだと見てとれる。

今日、拷問部屋に新たな生贄がやってきた。彼女はブロックの上で和式便器に座るような格好でしゃがみ込み、両手を背後で拘束されている。

正義の人妻ヒロイン、天煌聖姫セルシアンだ。

「くっ……こんな無様な姿を晒すなんて……あとで覚えておきなさいっ！」

「怖い顔しないでよ、オ・バ・サ・ン。おもしろそうなアイテムが手に入ったから～、試してみたくなっちゃって」

「アイテム……？　ふん、またくだらないことを考えているようね。その虫並みの脳ミソを少しはマシなことに使ったらどうかしら？　いずれ滅ぼされるしか価値のないあなたにも意味ができるかもね」

羞恥拘束されても気丈な姿勢を崩さない蒼髪変身ヒロイン。レオタードスーツには切れ込みが走り、Hカップ巨乳のルビー乳首と包茎フタナリちんぽ、やわらかな尻肉がまろびでているが、まったく恥じる様子もない。

二十年以上の戦歴と経験から敵をつけ上がらせるような弱気は見せないのだ。

（どんな魔法にも綻びはあるはず……淫紋の効力が薄れる瞬間さえあれば……）

股間のハート印へ目をやり忌々しげに歯噛みする。

これさえなければ醜態を晒すこともないというのに。

「も～、態度悪いなぁ。でも……まぁいいや。偉そうな態度をとれるのもあと数秒だろうし♪」

そう言って手のひらに魔法陣を展開し小瓶を取り出す。小瓶の中には紫色の液体がたっぷりと詰まっていた。底には目玉に似た物が沈んでおり、どう見ても安全なアイテムとは思えない。

見るだけでも怖気が走り産毛が逆立つ。

「気味が悪いわね……そんなのがおもしろいの？　ホント悪趣味ね」

「これはね『お化けナメクジの秘薬』っていうんだよ。蓋を開けたらちょっと垂らして～っと」

液体を指先に垂らしヌチャニチャと感触を確かめ、セルシアンの背後に移動するツインテール幼女。訝しむ天煌聖姫を無視し、雪白の桃尻をかき分けると、排泄孔に指を捻じりこんだ。

突然の肛門挿入に悲鳴が上がる。

「ひっ、ひゃうぅうっ⁉　な、なにをしているの‼」

「何って実際に使ってみるのが早いかと思って。説明書にはお好きなところに塗るといいって書いてあったし」

「だからって……ッ……そんなところっ……！　指を抜きなさい……！」

眉根を寄せる人妻ヒロインを気にも留めず、肛門に薬液をまぶしていく。異物の侵入に肛門括約筋が抵抗するが、結局は降参し幼女の細指を受け入れた。

人差し指の第二関節が腸壁へ沈んでいくと、淫肉を嬲り揉みほぐしていく。膣内とは違いもどかしい。せつない感覚にセルシアンはギュッと目を閉じる。

エリスは満遍なく液が染み込んだことを確かめると、ようやく指を引き抜いた。

「うくっ……ンン……い、一体何を企んでいるの……」

「キャハ☆　すぐにわかると思うよ～」

言葉通りたちまち効能は現れた。

はじめに肛門の入り口が疼きだし梅干しのような皺がヒクつく。そのあとにジクジクと腸内壁が脈打ちはじめ、淫靡な痒みが生まれた。

アナルに宿ったそれは卵から虫が孵化するように、少しずつ大きくなっていく。最初は肌がピリピリするだけだったのが増大し、掻き毟らずにはいられないほどの掻痒感が蒼髪ヒロインの菊門に広がっていく。

一分もすれば薬液が完全に効能を発揮し、肛肉はウルシでも触れたように痒くて痒くてたまらなくなった。

「ひっ⁉　あ、あくうううぅ～～～っ！　か……かゆいっ！　痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒いかゆいいいいいいっ！　こ、これ……かゆくてぇッ！」

「どうかな？　すごい？　すごい？　人間にしか効かないけど～、この秘薬を塗ったところはすごく痒くなるんだって♥　もうお尻の穴を掻いてほしくて我慢できないんじゃないかな～？」

「ク、くうううぅぅぅぅぅぅぅぅッ！　は、ハァハァ……ぐっ……このッ！　が……ぐ……ふぐううううぅぅぅ～～～～ッ！」

「あんまり無理してもいいことないよ？　ウンコの穴ビクビクしてるしね～。ほらほらエリスにお願いしてくれたら掻いてあげるんだから♥」

「ぁ、あっ、ぐうううぅうううぅッ！　お……ぁぁ、はっく……グゥゥウゥウウウ～～～～ッ！　こ、こんな痒さなんてぇっ！　ンアアアァぁアアぁぁアアアぁアッッ!!」

「フフ～ン、もちろんブザマにエッチなお願いじゃないと聞かないけどね♥」

「こ、このっ……なめないでっ……」

歯を食いしばり猛烈な痒みに耐える。懇願することは簡単だが正義のヒロインとしてのプライドがそれを許さない。

これまでも痴態を演じてきたが、まだプライドが消え失せたわけではないのだ。あんな恥ずかしい真似など二度とやるものか。

気力を総動員して淫辱に耐える。

「は、ハァ……ハァッ……グゥウ……い、意外と大したことないわね……こ、この程度なの？」

「あれれ？　我慢できるんだ。へ～、オバサンけっこうすごいね」

「当然よ……んく……はぅぅ……い、いつもいつも思い通りになんかならないわ！」

切れ長の双眸で悪魔幼女を挑発する。菊門からは気が狂いそうなむず痒さが襲ってくるが、人妻ヒロインの心を折ることはできない。

胸の宝石が月のように輝き、コバルトブルーの蒼髪が凛として煌めいた。人類を守る天煌聖姫が毎度毎度ブザマは晒せない。

一方エリスは感心した様子で、

「ちょっと感動しちゃったかも。常人なら絶対耐えられないって書いてあったからね。人間にも色んなタイプがいるんだね～」

「いまさら気が付いたの？　ンッ、ググ……はぐぅ……ハァ、ど、ドン亀並みのオツムね」

「そうだね。それじゃあ～、すっごい天煌聖姫のオバサンにはご褒美をあげないと。イヒヒ、エリスやっさ

し～♥」

「ゾ……ング、んあ……ウゥ、ご、ご褒美……？」

「そうだよ～、今お尻の穴すっごく痒いでしょ？　掻いてあげるね♥」

「ま、待ちなさい！　そんなこと望んでない――」

セルシアンが言い終わる前に細指がアナルへ挿入された。秘薬でヌルつく肉内壁をコリコリカリカリと掻いていく。

痒いところに手が届くとはまさにこのことで、直腸壁のヒダなど特に痒い箇所へ的確に爪を立てる。巧みな指の動きに爛れるような疼きが少しずつだが治まっていった。

しかし、この状況に蒼髪ヒロインはまったく別のベクトルから苦悶した。エリスのテクニシャンな指さばきが心地よいのである。過去にも変態調教された肉体は肛虐に反応し、快美を貪ろうと蠢きだしたのだ。

深層のマゾヒズムがかま首をもたげ、ルージュの塗られた唇からは甘い吐息がこぼれだした。

かり♥　こり♥　こりり♥　かりかりかり♥　くり♥　こりこりこり♥

「どう？　痒みが薄れてきたでしょ？」

「ンクッ！　ア、んあ……はぐうううぅぅうううぅ！　ふぐうううぅぅ～～～～！　や、やめ……ンアアァァアアア～～～～ッ！」

「掻けないのってつらいもんね～。うんうん、エリスもよくわかるよ♥」

「ぅあああぁあぁああああっ！　はっ、ッ、お……オグウウウゥウゥゥウウウ！　んきゅうううぅぅうぅうっ！　ハァ……アア……」

「あれ？　どうしたのオバサン。もしかしてもしかしてぇ～、お尻で感じてる～？」

「ば、馬鹿なこと言わないで……ひっ、ぅうん、はぁあ……ウクッ、お、お尻なんかで感じるわけないでしょ……ッ！」

「だよね～。いくらフタナリマゾの淫乱だからってお尻で感じるわけないよね。そんな人がいたら変態決定だし、まさかね～♥」

「うっ、くふぅう！　そこはっ……はぐぅ、ああんっ！　ハァ……え、ええ、そんな奴がいたら変態としか言えないわね……お尻で快感を得るなんて親の顔が見てみたいわ……」

美貌を歪め肛門恥辱に耐える人妻ヒロイン。額には汗が浮かびハァハァと荒い息が吐き出される。実際のところ菊門をほじられる快悦は凄まじいものがあった。

赤く腫れた腸壁を擦られるたびに尋常ではない気持ちよさが神経を走る。フタナリペニスも半勃起状態で、気をしっかり持たなければ射精してしまいそうだ。

それでも弱音を吐きはしない天煌聖姫セルシアン。身悶えながら淫猥の肛門快楽を抑え込む。

「キャハハハ♥　顔真っ赤にしちゃってカワイイ♥　でもでも～、あんまり我慢してると身体に毒だよ～？　正直に言ったほうがいいかも♥」

「お、大きなお世話よ……っ！　んぁぁ、ひぅっ、あうぐうううぅううっッ！　ふー！　ふー！　さ、さっさとその汚い指を抜きなさい……」

「もうちょっと奥までほじったらね。ほぉ～らここはどうかな～？　えいっ♥　えいっ♥」

「んぁぁぁはあああぁぁあぁぁぁあああッッ！　ぃひいいぃぃぃーッ！　な、なにをッッ⁉」

エリスが直腸壁ごしに押したのは前立腺の部分だ。そこを刺激されると上にある精嚢までが反応してしまい、結果、強制的に勃起状態にさせられてしまうのだ。

淫辱の前立腺マッサージに蒼髪ヒロインは苦悶する。

「はぁ、や、やあああぁああぁあああああっ！　か、勝手におチンポがぁっ⁉　ビクンビクンッて勃起してるううぅううぅう⁉」

「どう？　勃起スイッチを入れられちゃった気分は♥　このまま射精しちゃおうか♥　ねぇ～、イッちゃおう

よぉ♥」

「だ、誰がそんなことっ！　お……フウウゥゥ～～ッ！　や、やめっ、なさいっ！　んはぁぁあぁあああぁっ！　い、イキたくなんか……ないッ！」

アナルの痒みとフタナリペニスの勃起快感で、脊髄に牝痺れが走っていく。白磁のような肌には玉のような汗が浮かび、灼熱の射精衝動が襲ってくる。

ぴっちり肌に貼りついたレオタードスーツも汗ジミでベトベトだ。ねっとりとしたメスの芳香が部屋中に広がっていく。

特にHカップ巨乳は乳首を浮き立たせ、すっかり発情してしまっていた。

（お、お尻の穴で無理矢理に勃起させるなんて……このっ……最低のクズ悪魔ねっ！）

心の中で罵るが現状を打破する方法がない。

指で痒みが薄れていくのも心地よく、もう射精してしまっていいのでは？　これだけ我慢したからいいじゃない。と弱い考えが浮かんでくる。

それでもセルシアンは恥辱に耐える。

自分が無力だからといって簡単に白旗は上げてやらない。

「い……うぐうううぅうぅうぅぅッ！　あぎゅううぅうぅうッ！　ふぐ……ウグ、ンッ、んふ、あくふううくうぅうううぅう！　ぁっ、ぁううぅうううぅうううう～～ッ！」

「必死だね～オバサン♥　いいよ♥　そんなにイキたくないならやめてあげる♥」

「ン……やはあぁぁぁぁぁあぁッ！　きゅふんっ！　え、え？　やめ……る？」

突然の快美停止に驚く人妻ヒロイン。エリスは言葉通り指を引き抜くと、近くにあったタオルで拭った。これで前立腺強制チンポ勃起の苦悩からは解放だ。

肛門の痒みも治まりつつあり、セルシアンは呼吸を整えながら精神を研ぎ澄ませる。もちろん、これで油

断するほど彼女はマヌケではない。
　肛虐を一時切りあげたということは、次の調教が待っているはずだ。
「ハァ……ハァ……ハァ……で、次は何をするつもりなの？　私もヒマじゃないんだけど」
「エヘヘ、バレちゃったかな？　そうだよ～、今のは前戯。ここからが本番かな♥」
「前戯……ッ……まぁそうでしょうね……」
「お化けナメクジの秘薬の効果はよくわかったかな？　すっごく痒かったよね～」
「ええ……それで？」
「あっ、そうだ。その前にコレやらないとね♥」
　いきなり話を変えると、今度は背後からセルシアンの正面に回る悪魔幼女。そして、ギンギンに勃起したフタナリ陰茎へ指を伸ばすと、クニュリグニュリと包茎の皮を剥いていく。
　余った皮が幹へ送られ赤黒い亀頭がむき出しになる。カウパー汁で濡れるそれは淫靡にテカっていた。恥垢のすえた匂いが鼻につく。
「んんんっ、や、い、一体なにを……ア、あうううぅうううぅうっ！」
「だから言ったでしょ準備だよ～。あとは……これをつけて～」
「あくっ、それは……！」
　次に取り出したのはピンク色のコンドームだ。エリスの創造物なのか魔力が感じられ、ゴムは薄いが市販の物よりも頑丈そうである。
　セルシアンも使ったことはあるが、実物を見たのは久しぶりである。夫との情事を思い出し場違いにも頬を染めてしまった。
（や、やだ、ヘンなこと考えてるわね……ううん、しっかりしなさい天煌聖姫セルシアン！　企みの正体はなんであろうと私は屈しない！　そうよね誠一郎さん！）

夫の顔を脳裏に浮かべ唇を結ぶ人妻ヒロイン。

一方エリスは包装を破ると裏表を確認し勃起ペニスへ近づけていった。包皮を根元までたぐり寄せ、精液だまりを指で押さえて空気が入らないようにしながらクルクルと下げていく。

瞬く間にピンク色の避妊フタナリチンポが完成した。

「は～い、説明しま～す。お化けナメクジの秘薬を塗った箇所はね～、すっごく痒くなるんだよ。もう痒くて痒くておかしくなっちゃうくらい♥」

「それはさっき聞いたわ。だからなんなの……耐えたわよ？　こんな液体でいまさら私が醜態を晒すとでも？」

「カッコつけるのもいいけど～、そろそろ自分の心配をしたほうがいいと思うよオバサン♥」

「だからなにをっ……」

「このコンドームにはね～、もう秘薬が塗りこまれてるの♥　しかも濃度はさっきの十倍♥」

「!?!?!?　まっ、まさか……っ！」

「ここで問題で～す。包茎おチンチンの敏感カメさんに～、チョー痒くなるお薬を塗ったらどうなるでしょ～か？　キャハハハハハ♥　アッハハハハハ♥」

「――――ッッ!!」

エリスが言い終わると同時に猛烈な痒みがフタナリ陰茎へ襲いかかった。さっきまでの比ではない掻痒感が亀頭を、肉幹を蹂躙する。

まるで蚊の大群に刺されるような強烈で耐えがたい痒みだ。

敏感な男性器を責められ理性の糸が一気に引き千切られる。

「ッ……は、はぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅッッ！　あっ、ふあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！　か……が、痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒い痒いがゆいッ！　がゆぃぃぃぃぃぃぃ～～～～ッ！　い……いやあああああああッ！」

「ね、ヤバイでしょ？　掻いてあげよっか？♥」

「んぐっ……ひぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！　っ……ぅぅ、ぐっ、わ、私は……負け……ない……っ！」

痛烈な痒みを相手にどうにか踏みとどまる美熟女ヒロイン。しかし、アナルとは比較にならない痒さに研ぎ澄まされたメンタルが破壊される。

手を縛られ動かせないことが、これほどもどかしいと思ったことはない。

頭の中にはフタナリちんぽへ爪を立て、ボリボリと掻き毟ることしか残っていなかった。

「そうそう、コンドームには魔界の媚毒も混じってるから。射精しないで放置するとチンポに毒が回って、チンポ狂いになっちゃうよ♥　ほら、ちょっと気持ちよくなってない～？」

「痒いぃぃ……かゆい、ぅぅ……ぅぅ♥　ち、チンポ……や、んんんくっ♥　ひぁっ、あ、く……狂い……？」

「ず～っと勃起状態が続くふたなり変態さんってこと♥　射精を五分ごとにするようなオナニーマシーンって表現のほうが合ってるかな？」

「ひゃ……射精……チンポ狂い……♥　ふたなり変態……おなにー、マシーン……♥」

悪魔幼女の甘言になけなしのプライドが蕩かされていく。発狂しそうな痒み地獄に媚毒という言葉が染み込んでいく。

ふたなり変態になるくらいなら掻いてもらえばいい。ザーメンを射精してしまえばいい。だって、この状況なら仕方がないのではないか？

そして、ダメ押しとばかりにエリスは手袋を取り出し細指を通す。手のひら側にボコボコしたイボが無数についた手袋だ。

これみよがしに見せつけると、

「エッチにお願いしてくれるならコレで掻いてあげる♥　イボイボ手袋で手コキだよ～♥　とっっっても気持ちいいだろうな～♥」

「ひイイグ、ハグ、ングウウウ♥　おぐうううぅうぅうッ♥　か、痒い、痒い、かゆいいいいいッ♥　い、イボ手袋で……手コキぃ……♥　掻いてもらえる……♥　ハァン……や、だ、ダメよ……私は負け……ない……」

「このまま狂ったらエリスに勝てないよ？　悪いデモンコアはみ～んな虚無に帰すんだよね？」

「そ、そうよ……んぅう……天煌聖姫は決して悪魔なんかに屈しないっ……♥　おぉおおおおん♥」

「だったら正直になりなよ。それともくだらないプライドでリタイアするのかな？」

「馬鹿なこと言わないでっ……♥　私たちが負けたら誰がみんなを守るのよっ……♥　んぐっ♥　んはぁあぁあ～～～ん♥　か、かゆいいぃい♥　痒い♥　痒い♥　あひぃぃぃィッ♥」

コンドーム内の痒みはどんどん大きくなり荒れ狂う海のようだ。赤銅色の肉竿は痛いくらいに怒張し、生き地獄からの解放を待っている。やがてセルシアンの脳裏で言い訳が浮かんできた。

そうだ、デモンコアに勝つためなら一時的に折れてもいいのではないか？　いつかスキを見て逆転することには変わりない。そう、これは戦略的撤退だ。天煌聖姫が敗北したわけではない。

ちょっと頭を下げて掻いてもらえばいいだけの話だ。痒みが紛れて媚毒も吐き出せるし一石二鳥ではないか。ここで私がおかしくなったら夫も、愛華も、陽一も悲しむ。

これは正義のためなのだ。

「か……かっ……あ、あの……」

「ん？　どうしたの～？」

都合のよい理屈がブクブクと浮かび上がり、人妻ヒロインは破滅へのロードを進んでいく。痒みで麻痺した頭に弱い気持ちが入り込む。

見た目は年端もいかない子供にボッキした性棒をシ

ゴいてもらう異常事態に気付かない。自分がどれだけ恥ずかしい行為に及ぼうとしているのかわからない。

「その……か、かいて……掻いてほしいわ……」

「へ～どこを？」

「お、……あのその……アソコを……んんっ♥　アソコよぉ……♥」

「え？　なんて～？　アソコってどこかな～？」

「あぐぅう……だ、だから……お、……ンポ……をお願い……」

「ごっめ～～ん、耳が遠くって♥　もっとはっきり言ってくれないとぉ、エリスわかんな～い♥」

「あう、はぐぅぅぅぅぅぅぅぅッ♥　あ、はぁぁぁァァ～～～ン♥　だ、だからオ……ち、ん……をぉ♥」

待たされるたびに痒みが増していく。もはや一刻の猶予もない。二度と痴態は晒さないと誓ったのに、忌々しい男性器の名称を叫びたくて仕方がない。

そして、ついにフタナリ包茎ペニスの耐久力が限界に達した。

セルシアンは下品に最低のおねだりをしてしまう。

「ち、ち……チンポよ！　おチンポ！　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポのことなの！　チンポを掻いてほしいの♥　だって痒くて痒くてもうムリいいぃいいぃ～～～～ッ♥」

「キャハハハハ☆　あ～あ言っちゃったね。そんなにチンチンを掻いてほしいの？　コンドームがぴったりくっついた包茎チンチンを～？♥」

「そうよっ！　掻いて掻いてかきまくってえええぇえええ♥　私の包茎ドスケベマラをそのイボイボ手袋でゴシゴシしてえええええぇえぇっ♥　あなたにテコキしてほしいのおおぉぉッ♥　んほ♥　ほおおおおぉおおおおッ♥」

「へ～、そうなんだ♥　オバサンがチンポ掻いてほしいなんて知らなかったな～♥　だってそんなに恥ずか

しいこと普通は人に頼まないしね♥」

「ぁぅ……うぅうぅううううっ♥　は、はやく……掻いてぇ♥　オバサンの恥ずかしい皮かむりキノコちんぽこを助けてぇ♥　あぐぅうぅうぅう……こ、これでいいでしょ？　エッチにお願いしたじゃない……だ、だから……い、意地悪しないでっ！　かいてかいてかいてぇえぇえぇえぇっ！　かゆいからぁッッッ！」

「エリスどうしようかな～？　まぁ、条件はクリアしてるともいえなくないけど」

「は、早くしてぇ……っ♥　あ、ぐっ、くふうぅ～～ッ♥　ヒーヒー♥　いひいぃぃ～～ッ♥」

この期に及んで焦らしプレイを敢行するあどけないツンテール幼女。金髪を空いた指で弄り、ハートマークの尻尾が愉(たの)しげにくねる。

まるで弱った獲物を弄ぶシャチのようだ。

わざとらしく考えるフリをしながら、深紅の唇を開いた。

「そのおチンポを上下に振ってダンスしたら掻いてあげる♥　チンポ踊りだね♥」

「だ、ダンス……？　チンポ踊……り？」

「は～い、さっさとやってね。痒いままでいいなら別にいいけど」

追い詰められた頭ではまともな思考などできない。蒼髪の美熟女は言われるがままに腰を振り、淫猥なダンスを踊りだした。

ふたなりチンポが上へ下へとフルフル揺れて滑稽だ。

ふる♥　ふる♥　ふるん♥　ぶんぶん♥　ぶんぶんぶん♥

「ち、ち～んぽ、ち～んぽ、ちんぽダンス♥　フ～リフリ♥　フ～リフリ♥　あっは～～ん♥」

「キャハハ、うわっマジでやってる。バカみたいだね～、ちんぽフリフリだって♥」

「ほ、包茎チンポ女の変態ダンスを見てほしいの♥

痒くて臭いチンポダンス見せてあげるわぁ♥　フ～リフリ♥　フ～リフリ♥　ドスケベちんぽのダンシング♥　チンカスフレグランスも振りまいちゃう♥　ほおー♥　ほおー♥　むっふうぅぅ～～っ♥」

「ほかには他には～？」

「お、おち～んぽ、ち～んぽ、おちんぽダンス♥　フ～リフリ♥　フ～リフリ♥　フリフリフリ♥　ん、ぁ、んはあぁぁっ♥　あうううっ♥　こ、このド変態マラは今から上へまいりま～す♥　くっさいくっさいザーメンの方はボタンを押してくださ～い♥　へ、へ～こへこ♥　へ～こへこ♥　こ……このマゾキンタマは下へまいりま～す♥　ち、チン毛の方は気をつけて降りてくださ～い♥」

羞恥セリフを言いながら肉竿をブランブランと上下させる。

強気な双眸も淫欲に蕩け知性など微塵も感じられない。

「キャハハハハ♥　マジでキモイねオバサン♥　さすがにエリスもドン引きだな～♥」

「うぅぅ……ひうぁぁ……へ～こへこ♥」

「うん、でも、けっこう楽しめたよ。じゃあ掻いてあげようかな。オバサンもマジで限界っぽいし♥」

「ち～んぽ、ち～んぽぉ♥　フ～リフリ♥　フ～リフリ♥　ひゃ、んぁぁ……やった……か、感謝するわ♥　だ、だから……か、掻いて♥　掻いて♥　掻いてぇ!!♥」

エリスは悪戯っぽく微笑むと、イボ手袋をはめてフタナリチンポを握った。デコボコとした感触が極薄コンドームの上から肉竿へ伝わる。

幹を乱暴に掴まれただけでもうイッてしまいそうだ。

待ちに待った指触りに背筋が弓なりにのけ反った。

ごしゅ♥　ごしごしごし♥　ごっしゅごっしゅごっしゅ♥

「ほ、お、ほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ♥

ひゃうん♥　へぅぅ♥　ぐん……おっぐ、ンあああぁぁああ～～～ッ♥　ぁぁんッ、キテる♥　イボイボきてるうぅ～～ッ♥」

「カメさんから金玉ちゃんの近くまでシゴいてあげるね♥　ほ～らおチンチンごっしごし♥　ごっしごし♥　ごっしごし♥」

「へぁぁぁぁぁあああああッ♥　しゅ……しゅごいしゅごい♥　手コキしゅごいいぃいいいっ♥　あ、頭パーになる♥　ちんぽ優先のバカになる♥　あへー♥　あへー♥　へほぉおぉおおぉお～～～～ッ♥」

「キャフフ♥　みっともないアヘ顔まで晒しちゃって～、そんなによかった？　ごっしごし♥　ごっしごし♥　ごしごしごし♥　おチンチン気持ちいいでちゅか～♥」

「ほおおぉおおぉ、気持ちいいのぉ♥　チンポ掻いてもらうの最高でちゅうぅうぅうぅうぅうッ♥　イボイボが痒みに効くのおおおぉぉおおおおッ♥　んほ、ほ、ほひーほひー♥　痒い痒いマゾチンポが癒されるぅ♥　スケベ汁溜めながら癒されるぅうぅう～～ッ♥」

敏感な包茎亀頭をやさしくねっとりと愛撫され、どっしりとした肉幹をゴシゴシと擦られる。コンドームと一緒に皮が動くのが心地よくあっという間に射精衝動は限界だ。

元々勃起していたキノコ魔羅に血流が送られ海綿体がパンパンに膨張する。ミミズのような血管が浮かび上がり、さらに硬く太く怒張していく。

いらやしい先走りの水音が薄ゴム内から聞こえはじめ、淫欲のエネルギーを放出しようと猛る。

「ほぉおあぁぁあああ～～～ッ♥　も、もうイクッ♥　イクッ♥　イクッ♥　もうでりゅうぅうぅうぅうぅうッ♥　チンポ汁でる♥　マゾ汁でる♥　アヘアヘしながらでる♥　私の変態ザーメンがでちゃうの

おおおおぉおおおッ♥　むふぅうぅう～～ッ♥」

「あれ、もう射精しちゃうの？　皮オナばっかりしてる包茎チンポは弱いね～♥」

「ァン、はひゃんっ♥　な、情けない包茎チンポコで申し訳ないわ♥　すぐに敗北しちゃうドしゅけべチンポなのぉ♥　でもでも無理ぃ♥　無理なのぉっ♥　痒みと快感が同時に襲ってきてぇ♥　我慢っできにゃいのおおぉおおおおおッ♥　シチュームたいなドロドロザーメンが昇ってきてるのおぉッ♥」

「いいよ～、エリスに手コキされてイッちゃって♥　ご～しごし♥　ご～しごし♥　ごしごしごし♥　あーあ、情けないママだね～♥」

「はいいぃ♥　セルシアンはド変態のチンポママなのお♥　ほぉおー♥　へひー♥　お、い、イクイクもうイクぅうううぅうううッ♥」

　エリスの指がハープを弾くように滑らかにすべり、肉竿が膨れ上がっていく。そして鈴口を二回ほどヒクつかせた後、まっしろな快感液が噴き出した。

　痒みとイボ快美によって生まれたソレは、狭いゴムの中で氾濫を起こす。

　ブブ、ドピュッ♥　ブドピュッ♥　ドピュピュピュピュウウゥゥ～～～～♥　ブピュッ♥　ブボビュビュッ♥　ブビュルルルルゥゥ♥　ビュビュビュビュウウゥゥゥ～～～～ッ♥　ビュピ♥　ルルルゥゥ～～♥

「んほぉおおぉおおおおおッ♥　イクイクイクイクイクッッちんぽシェイクでりゅうぅうぅうぅうぅうッ♥　ほへぇぅぅぅぅぅぅぅぅッ♥　かゆい♥　かゆい♥　かゆい♥　痒いの気持ぢぃぃぃぃぃぃぃッ♥　チンポかゆかゆクセになるうううううッ♥　ほへ♥　ほひ♥　あへぇ♥　私のぉ、天煌聖姫のマゾザーメン無駄打ちするうううううッ♥　変態ママはデロデロ射精するのおおぉおおぉおおお～～～～ッ♥　ひぃー♥　ひぃー♥」

雄叫びを上げながら手コキ射精をしてしまう蒼髪ヒロイン。腰をヘコヘコ振りながらチンポ絶頂する。まったく調教前のプライドとはなんだったのか。

今の姿はふたなり変態そのものだ。

コンドームの中に白濁液を溜め込み、液だめにザーメン水風船を作る始末である。

「い～っぱいだしたね。精液ビュービューってサルみたいに♥」

「ふぁ……はぁあ……♥　へああ……♥」

「も～、コンドームがプクプクだよ。オシッコよりたくさん射精したんじゃない？　どんだけ溜め込んでるんだよって感じだよね～♥　くっさいマゾ汁だしすぎ♥」

「はぁぁ……あ……そ、それは……」

痒みが治まると共に我に返る正義のヒロイン。恐る恐るイチモツを見ると、たしかにコンドームの先端は精液で膨れブランと垂れ下がっていた。中で渦巻く白濁液が卑猥だ。

欲望の証拠にいまさらだがセルシアンの胸がチクリと痛む。幼女の手コキで大量射精するなんて恥ずかしすぎる。

一目で射精量がわかるとあればなおさらだ。

（ま、また私ははしたなく……さ、最低だわ……いくら痒くても快楽に溺れて無様を晒すなんて……）

自分の変態射精に思わず目を伏せる。あれだけ負けないと決めていたのになんてザマだろうか。ヴァーミリオンに合わせる顔がない。

（で、でももう二度とこんなことはしないわよ。そう、今回で終わり。最後だから。今に見ていなさい色欲の夜天、私は必ずあなたを討滅するわ！）

正気に戻り決意を新たにする蒼髪ヒロイン。

そして、その決意はさっそく試されることになる。

なぜなら一度は治まった痒みがぶり返してきたのだ。

赤黒い亀頭に、フタナリ幹に、強烈な痒みが上ってく

る。

しかも先ほどとは比べものにならない掻痒感。

またすぐに掻いてもらわないと痒さで気絶してしまいそうだ。

「ク……くおおおおおおおおおっ♥　か、痒い！　痒い！　痒い！　痒い！　痒い！　痒い！　なっ、なんで!?　なんでなんでどうしてぇ!?　ま、またチンポが痒くてぇ……♥　あぐっ、うぐぅう、か……かきたいいいいいいいッ♥」

「あれ？　秘薬入りコンドームは精液に触れたらもっと痒くなるって言ってなかったっけ？」

「き、聞いてないわよそんなことっ！　ぅぅぐ、んんきゅうぅう〜〜っ♥」

「テヘ☆　忘れてたみたい。エリスうっかり♥」

「い、いいから外しなさい……ッ！　へぇぇえぇぇえぇぇぇえぇえええっ♥　ふぐぅ、やぅぅ……♥　かゆいいい♥　こ、これを早くッ！」

額から脂汗を流し必死にコンドームの撤去を訴える。

ザーメンと薬効成分が混ざり合い、ゴム膜の内側はこの世のモノとは思えない痒さに襲われていた。

一秒でも早く外してほしい。

しかし、当然のようにエリスの答えは、

「もう一回射精しよっか♥　だいじょうぶだよ掻いている間は平気でしょ？」

「そっ、そんな……っ！　ま、待ってまだ射精したばかりで……っ！」

「知りませ〜ん。はい、おチンポしこしこ〜♥」

悪魔幼女の細指が再びフタナリ陰茎を掴み、ザーメンを潤滑剤に肉竿を擦りはじめた。ゴムと皮の間でぐちゅぐちゅと不快音が鳴り、またもや射精快楽を要求される。

萎えたペニスが無理矢理に勃たされる。

「おっっっほおぉおぉおおおおッ♥　らっ……らめらめらめえええぇぇぇッッ♥　今イッたとこ

だから♥　チンポびんかんになってるからぁ♥　あ、ぃ、ふ……ふへあああぁあああぁあああッ♥」

「見てみて～♥　くっさいザーメンがコンドームの中でたぽんったぽんって揺れてるよ♥　チンポみるくのエロ風船が躍ってるね♥」

「あひいいいぃぃぃ～～～ッ♥　み、見ないで♥　言わないでぇ♥　私のチン汁バルーン見ないでぇ♥　うぅううぅううん♥　いやぁ……恥ずかしいぃぃ～～♥」

射精量を嘲笑されさらに辱められる人妻ヒロイン。

エリスはもっと淫辱を加える。

「ん～、まだ勃ちが悪いな。おチンチンお疲れさまかな～？　そうだ、アレやっちゃおう♥」

「へ？　え？　ふ……ふえええぇぇぇっ!?」

突如、蒼髪ヒロインの目が見開かれた。原因はアナルにブチ込まれた触手チンポである。前立腺を刺激し強制的に勃起させようというのだ。

少し痒みの残る直腸内壁をゴリゴリとほじられる。

「おひっ、はぐ、ふごぉおぉおおおおっ♥　や、いやぁ……チンポが無理矢理おっきしちゃううううっ♥　淫乱マゾマラが起きちゃうぅうううう♥　ママちんぽが大きくなるぅううッ♥　ひー♥　はひー♥」

目論見通りフタナリ陰茎は再勃起した。

コンドーム内がみっちりとした淫肉で埋まっていく。

「キャハハ、ま～た勃起しちゃったね♥　は～いもう一回ザーメンぴゅっぴゅっしましょうね～♥」

「やらあっ♥　もう嫌なのおおおぉおおおおっ♥　あぁ……痒くて気持ちよくて射精なんてぇ♥　クセになっちゃう♥　まともなエッチできなくなるからぁっ♥」

「いいじゃんいいじゃん♥　オバサンは変態ペットになっていくんだから♥　本日も弱くて情けないマゾチンポで敗北アクメだよ～♥」

「かっ、かゆいいいいいいいいいいッッ♥　ま、

またイッちゃう♥　淫乱勃起マラからルーザースペルマでりゅぅぅぅぅぅぅぅッ♥」

　快美の業火に焼かれもう何も考えられない。肛門粘膜を擦られるたびに、ケモノのような嬌声が響きわたる。永遠に排泄するような肛悦がセルシアンの矜持を粉砕する。

　さらに触手のせいで空気が撹拌され、尻穴から屁の音までが漏れ出した。

　ぶっ♥　ぶぴぴ♥　ぶぴぴ♥　ぷっ、ぷり、ぶぅぅぅぅぅぅ～～♥　プスゥー♥

「やだオナラまでしてる～、オエ、くっさ、くっさ～～い。オバサンってマジで最悪だね♥」

「いやぁッ、お、オナラが出てる♥　私、屁をこいちゃってるぅ♥　き、聞かないで♥　嗅がないでぇっ♥　ああん♥　やだあぁぁぁ～～ッ♥」

「うげ、しかもチンポ大きくなってんじゃん。オナラで興奮するなんて正真正銘のマゾブタだね。もうお尻で感じてるって言っちゃいなよ♥」

「はいい♥　そうなのお尻で感じる変態、変態、変態、変態牝ブタなのぉぉおおお♥　屁をコキながらボッキする変身ヒロインなのよぉ♥　も、もうダメぇ♥　こ、肛門でイキまくる恥かきオバサンなの♥　おっほ♥　おっほ♥　おほぉおぉおおおおおぉ♥」

　アナルをほじられながらのイボ手袋コキに完全敗北する天煌聖姫セルシアン。ウンコ座りでのけ反り、浅ましく腰を振る。

　新たにした決意は角砂糖のごとく崩れさった。

「も、もぅでる♥　またでる♥　かゆいかゆいかゆいいいいいいッ♥　ザーメンでまた痒くなってるの射精しちゃう♥　ちんぽ掻かれながらオスイキする♥　包茎チンポコがまた負けるぅぅぅぅぅう♥　おおおおおおおおお～～～～ん♥」

「うん、イこうね♥　ケツ穴ほじられて手コキされて惨めにイッちゃおう♥　変態変態へんたいオバサン

♥」

Hカップ巨乳をブルンッと揺らし、二度目の恥辱射精に入る蒼髪ヒロイン。絶倫キンタマがスペルマを大量生産しチンポへ届ける。

痒みで発狂するフタナリ亀頭は心臓のように鼓動を打つ。肛門は貪欲に触手を咥えこみ、皺を伸ばしきったまましゃぶり尽くす。

目の前でチカチカと星が瞬き、己のザーメンで悶えるフタナリ肉竿は性懲りもなくスケベ牡汁を噴出した。

ブブ♥　ブブブブ♥　ブッ、ブッ、ブビュルルルルウゥゥ〜〜〜〜ッ♥　ボビュッ♥　プビュ♥　ビュクビュクドッピュウウゥゥゥゥぅ〜〜ッ♥　ドドプッ♥　ドプンッ♥　プ……プビュルルルルウウゥゥゥ〜〜〜〜ッ♥

「ゾ……んほぉおぉおおおぉおおぉおおおお♥　またでる♥　またでる♥　またでるぅぅうぅうぅう♥　ぁぁぁ、かゆかゆ皮余りチンポからマゾザーメンでるうううぅうぅうぅッ♥　ほひ♥　ほひ♥　ほへー♥　ケツマンコ犯されてぇ♥　強制チン勃起からのゴシゴシアクメぇ♥　ひゃ、ひゃい私は紛れもないド変態なの♥　子供にチンポを掻いてもらうアホアホママさんなのよ♥　ぁっ、ぁっ、ま、まだでる♥　ザーメンまみれのチンポコが風船に濃厚ミルクのおかわりしちゃう♥　ひー♥　いぃびー♥　お、おチンポからまた下品人妻マラ汁でるのおぉおおおおぉおおおッ♥♥」

発情した犬のように舌を出し、白目をむきながら盛大にアクメ顔を晒してイキ狂う人妻ヒロイン。痒みに狂う頭には色欲しか残らない。

「キャハハハハ！　射精したら痒くなるって言ったのにな〜。これでまたチンチン痒くなっちゃうね。どうする？　まだやる？♥」

「ああ……か、痒いぃぃ♥　はい♥　ひゃいい♥　掻いてぇ……エリスさまぁ♥」



セルシアンは再び手コキを懇願する。
キンタマが枯れるまでこのあと十回も射精させられ、
痒みが治まる頃には日付が変わっていた。

第十一話　屈服のコスプレ撮影会！　強制ハイグレ＆メイド姿で尿道イジメ！

「こ、この場所で合っているの……？　私には廃墟にしか見えないけど……」

「そうだよ～、いいから早く入ろうね」

新しいフタナリ調教を思いついたと言われ、冴子はエリスに呼び出されていた。今二人が立っているのはマンションのドアの前だ。

冴子は黒のタートルネックとロングのスカート。エリスはいつものボンデージ姿である。マンションはまるでホラー映画にでも出てきそうな外見で、空き缶などゴミがそこかしこに転がっていた。

内容は事前にコスプレ撮影会と聞いてはいたが、詳しい中身は彼女も知らない。場所を見繕う都合で遠路からやってきたがもう第六感が危険を告げている。

すでに中にはフタナリ好きのオタクたちが集まっているはずだ。一般人相手に痴態を晒したくはないが、やはり淫紋には逆らえない。

（うぅ……もう嫌な予感がするけど……や、やるしかないわね！　女は度胸よ！）

意を決してドアを開く。

窓はカーテンで閉め切られ、蛍光灯が薄ぼんやりと廊下を照らしていた。すっぱい匂いがたちこめお世辞にも片付いているとはいえない。

「この奥で撮影するんだって」

エリスに連れられ先に進む。

突き当たりにある撮影用の部屋だけは少し小奇麗で、フローリングの床には十数人の男性が集まっていた。年齢はバラバラで学生から中年男性までと幅広いが、みな一様に不気味な笑みを浮かべデモンコアと間違え

そうである。
エリスは全員の顔を確認すると、
「お兄ちゃ～ん、約束通り連れてきたよ～」
「エリスちゃん！　来てくれたんだね！」
「おおっ、この人がふたなりママさんですな」
「お、驚きだね……うん……」
口々に感嘆の声を上げるオタクたち。彼らはネットで募集したメンバーだ。もちろんセルシアンを辱めるためだけに呼ばれたのである。
ふたなり好きで調教にためらいのない人間なんてそう多くはいないが、そこは回線ごしに魔力をとばしてピッタリな男性を集めたのであった。
まさか全員がオタクだとは想定していなかったが。
「オバサン自己紹介だよ。これからお世話になるんだからね」
「わ、わかっているわ……神城冴子よ。よろしく」
ギトギトとした欲望の視線を一手に引き受けながら会釈をする。瞳には隠すつもりもない嫌悪の色が浮かんでいた。冴子にとってこのような男性は軽蔑すべき存在だ。
女性を性のはけ口としか思っていない態度。ぶくぶくと醜く膨れ上がった腹や、ガイコツのようにやせ細った身体。
『健全な精神は健全な肉体に宿る』と、自己鍛錬を欠かさない彼女には受け入れがたい。
本来なら全員道場で性根を叩き直してやりたいところだ。
「へー、けっこう美人じゃん」
「そうか？　さすがにババアすぎね？」
「バッカこれくらいがいいんだよ」
「オレロリ専だからパース」
（ぐっ……こ、このっ……下衆たち……）
こちらの気も知らず好き勝手にのたまうオタクたちに、美熟女ヒロインのこめかみへ青筋が浮き上がる。

今ならリンゴも素手で握りつぶせそうだ。
その様子をニマニマと観察しながらエリスが、
「それじゃ、あとは皆で楽しんでね～。バイバ～イ」
「えー、エリスたんもう帰っちゃうでござるか」
「そうだよ。一緒に撮影しようよ」
「ぼ、ぼくもそう思う……」
「ごめんね～エリス忙しくって☆　三日間はヤリたい放題で好きにしていいから許してね～♪　ファイトだよお兄ちゃん♥」
ヒラヒラと手を振り小動物めいた動きで退出する。
本当は匂いのキツイ部屋にいたくないだけなのだが、口には出さない。
利用できる相手にはやさしい悪魔幼女。
あとには冴子とオタクたちだけが残された。
「じゃあ、さっそく冴子さんには変身してもらおうかな」
「そうそう、事情はエリスちゃんから聞いてるし」
「人妻ヒロインを調教できるなんてワクワクするな！」
「ちょ、ちょっと待って！　待ちなさい！」
いきなりフタナリ調教へ入ろうとする彼らに声を荒らげる。エリスがいない今がチャンスだからだ。デモンコアならともかく相手は人間。
説得すれば解放してくれるかもしれない。
「あなたたち、今すぐこんなことはやめなさい。女の子と遊びたいなら自分で努力することね。だいたいデモンコアに利用されて悔しくないの？　奴らは人類の敵なのよ！」
良心に期待して訴えかける。デモンコアと関わりがあるなら天煌聖姫のことも知っているはずだ。人々を守るために闘ってきた自分が陵辱されるなんてありえない。
しかし、その目論見はあっけなく粉砕された。
「どーでもいいよ。そんなの」

「そうそう、ぼくらは変身ヒロインと遊びたいだけだし」
「フタナリ娘ってどんな反応するのかな？　エロゲーみたいな感じなんだよね？　ふふふ、楽しみ。この写真通りだといいな」
　手に持った写真をヒラヒラとかざす。そこにはオナホクイズで絶頂させられた時の姿が映っていた。フタナリちんぽから大量の白濁液を放っている画像だ。
　エリスに隠し撮りされていたのである。
「デカちん生やしちゃってカワイイよね。レオタードから金玉はみだしてるし」
「ぼくもこれで三十回はオナニーしたかな。ありがとうね冴子さん」
「ッ……このクズっ……！」
　わずかな希望を打ち砕かれる人妻ヒロイン。
　思わず声を荒らげ怒りを露わにしてしまう。敵地で反感を買わないほうが得なことは理解しているが、どうしても我慢できなかった。
　オタクたちは反論することもなく、ニヤニヤと薄気味の悪い笑みを浮かべている。これから獲物をどう調理しようかと。やはりデモンコアが集めた人間がまともであるはずがないのだ。
　そして、オタクの一人が杖のような物を握り口を開いた。
「それじゃ、さっそくいつものコスチュームに着替えてもらうね。変身しようか」
「え……は、はあ？　一体なにを――」
　そこで異変が起こった。
　己の意思とは関係なく手がセイクリッドギアを取り出し、起動させたのである。
　神聖粒子が結晶に集約し、強制的に変身がはじまった。
「な、ええっ!?　ど、どうして……!?　せ、セイクリッドギア、セットアップ！」

光のヴェールが身体を包みレオタードスーツを纏う蒼髪ヒロイン、天煌聖姫セルシアンに変身してしまう。おまけにルージュの塗られた唇からは、いつもの口上まで飛び出した。

「光は光に！　闇は闇に！　悪しきデモンコアは虚無の中へ！　蒼き神槍が魔を貫く！　天煌聖姫セルシアンここに参上！　――どっ、どうなっているの!?」

意図しない変身に驚愕するセルシアン。

杖を握ったオタクは得意顔で解説をはじめた。

「これは傀儡の杖。エリスちゃんにもらった呪具でね、淫紋を介して対象を自由に操れるんだよね。便利でしょ？　これで他の女の子とも楽しめたし、デモンコア様々かな」

「そうそう、うちの高慢な委員長もこいつでヤリたい放題。まったくエリスちゃんのおかげですな」

「あっ、あなたたちなんてことを！　デモンコアの魔力を悪用するなんて許さないわよ！　覚悟しなさ……!?　ヒッ……は、ハゥゥウッ！」

蒼髪ヒロインは続きを言うことができなかった。杖から放たれる魔力で身体の自由を奪われたのだ。どうやら言葉にせず念じるだけでも起動できるようである。

そして、杖を持っている男性は目に映る範囲だけでも五人はいた。力技での逆転は不可能だと理解させられる人妻ヒロイン。

美しい容貌に苦悶の色が残り、オタクたちは下劣な調教を開始した。

「ね、これで逆らっても無駄だってわかったでしょ？　オバサンはぼくたちに従っていればいいんだよ」

「くっ……卑劣な……あとで後悔しないことね……っ！　少しでも気を抜けば床を舐めさせてあげるから」

「はいはい、それよりさー天煌聖姫……だっけ？　ぶっちゃけその格好恥ずかしくないの？　いつもそれで

戦っているわけ？」

「へ……？　え、なっ、ええっ!?」

言われて身分の姿を見たセルシアンは赤面した。たしかにレオタードスーツにマイクロスカートという煽情的なコスチュームだが、驚いたのはそこではない。

フタナリちんぽでもなかった。

正解は昨日剃ったはずの腋からジャングルのような腋毛が生え、股間の茂みもスーツからはみ出していたことである。下草のように漆黒の毛が生えそろっているのだ。

特に陰毛はハート型に切り揃えられ、見るのも恥ずかしい有様だ。

原因はここに来る前にエリスがセイクリッドギアへ細工をしていたためなのだが、何も知らないセルシアンは戸惑うことしかできない。

恥毛の処理をしていない羞恥姿を見せてしまう。

「ち、ちがっ、これは違うのよ！　い、いつもはちゃんと処理しているから！」

「でも実際生えてるしねー」

「腋毛ボーボーで戦ってるんですぞ？　うわーないですなー」

「あぅぅ……ち、違うのぉ、ほっ、本当に昨日は剃ってたんだから！　毎日はみ出さないように気をつけているんだから！」

必死に弁解する様子がさらに彼らの嗜虐心に油を注ぐ。腋毛を気にして身をよじるのが滑稽でたまらない。美熟女ヒロインは陵辱者たちにつけ入るスキを与えてしまった。

「変身ヒロインって陰毛とかそういうのはないと思ってたけど……実際は違うんだね。なんか幻滅」

「本当は腋毛見られて興奮してるんだろ？　この変態女！」

「拙者の夢も壊れたでござる。特にマン毛ハートマークはないですな。痴女すぎますなー」

「うぅ……ち、違うのよ……違うって言ってるのに……し、信じなさいよ！　私は変態なんかじゃない！　痴女じゃないわっ！」

どれだけ言っても暖簾（のれん）に腕押し、オタクたちの耳には届かない。今ここで腋毛、マン毛を見せつけているのだから説得力などあるはずもない。

それどころか、フタナリちんぽのことまで辱められてしまう。

「おお、それにキンタマがはみ出しているんだ。へー気色悪いね」

「レオタードが盛り上がってるね。ちょっとグロいかも」

「み、見ないで！　し、仕方ないでしょ！　アイツのせいなんだから！」

細い股生地からまろびでた金玉を観察され、フタナリ陰茎の盛り上がりを嘲笑される。敵ならまだしも知らない男性に言及されるのが屈辱で、天煌聖姫は拳を震わせる

さらにオタクたちは蒼髪美熟女の年齢のことまで嘲りだした。

「だいたいさー、その歳で正義のヒロインってどうなの？　キツいよね。恥ずかしくないの？」

「そ、それは……あの……皆を守るために……」

「ウソつけ。でっかい胸強調して誘ってんじゃねえのか？　いい年してよお！」

「む、胸は生まれつきよ！　ほ、ほっといて！」

「でも実際キツいことには変わりないよな？　レオタードって……ババアのクセに無理しすぎじゃね？」

「で、デモンコアを倒すためだから！　神聖粒子の力を効率的に発揮できるのがこの衣装なのよ！」

「いやないですぞ。十代の女の子が着るならともかく四十こえたオバハンが変身ヒロインって。キモすぎですなー、プップッププ」

「や……やめてぇ！　それ以上言わないで！　言わな

いでよ！　ぶ、ぶっ飛ばすわよ！」

茹でダコのように全身真っ赤にしながら叫ぶ人妻ヒロイン。たしかにこのコスチュームはキワどすぎ、若い女の子でギリギリ成立する衣装だ。

年々歳をとるごとに腹回りや二の腕が怪しくなっていることも知っている。四十すぎてこの格好はキツいと薄々気付いてはいたのだが、人々を守るためと見て見ぬフリをしていたのだ。

普通ならエデンフィールドのおかげで一般人に目撃されることもないのだから。本来ならあるはずのないツッコミにセルシアンは慌てふためく。

「も、もういいでしょ私の衣装のことは！　な、何も知らないクセに……！」

「ぼくたちはキツいものをキツいって言ってるだけだしなー」

「おう、正直者で何が悪いんだよ」

「ほ、ほんと恥ずかしいエロババアだよね。き、決めゼリフも自分で考えたの？」

「ッ――――、い、いい加減にしなさい！」

我慢の限界に達し拳をふり上げる蒼髪美熟女。空手で鍛えた鉄拳を顔面に打ち込もうと迫る。もはや一般人だろうと容赦するつもりはない。

だが杖の効力で拳は空を切り、代わりに変態ポーズをとらされてしまった。

床にM字開脚して股間を見せつけ、髪をかきあげ腋毛を晒す羞恥ポーズを。

「やっ、あ……くぅぅ……こ、このぉ……！　ま、また……こ、こんな格好……ぅぅ……ひ、卑怯者！」

「へー、まだ言うんだ。悪いこと言うお口にはお仕置きしてあげちゃうよ？」

「ン!?　やっ、は、はうむんっ!?」

淫紋から魔力が伝わり、言葉までも取り上げられる正義のヒロイン。

淫猥な笑みを浮かべ恥辱セリフを口ずさむ。

「や、あ、あっは～～ん♥　みてぇ、見てみて私のわ・き・げ♥　もっさもさでしょ♥　うふ～～ん♥」
「アハハ！　マジかよオバサン、変態じゃねえの？」
「そうよぉ、オバサンは変態なの♥　エロポーズとりながら視姦されるのがだ～い好き♥　ほらもっと腋毛を目に焼き付けてぇ♥」
「う、うわ……痴女だね……これ……」
「ええ、痴女でいいわよ♥　ほら、今日はコスプレ撮影会なんでしょ？　四十一歳なのにレオタードで変身ヒロインやってるオバサンを撮ってぇ♥　どんどん撮影してぇ♥」
　セルシアンの言葉で一斉にカメラやスマートフォンを手に取るオタクたち。血走った目でシャッターを切る。腋毛、ハート型マン毛を晒し、キンタマをはみ出したセルシアンの痴態が写真になっていく。
「はーい、こっち見てウインクして」
「こ、こうかしら♥　やん♥　あは～～ん♥」
「こっちにはもっと腋毛を！　指でつまんで！」
「こうね♥　真っ黒腋毛がピーンってなってるわよ♥ン……♥　はう～～ん♥」
「拙者には股間を突き出してほしいですな！　フタナリちんぽと金玉を前に！」
「あんっ♥　あんっ♥　あんっ♥　いやは～～ん♥　はい、これが私のフタナリちんぽよぉ♥　ひぅ……も、もう勃起しちゃってるわ♥　レオタードの上から見えてきちゃう♥」
　リクエストに応えながら官能的なポーズを決めていく。フラッシュとシャッター音が異常な空間を作り、さらに人妻ヒロインの欲情を煽っていく。
　股間の肉竿は早くもビンビンになっていた。
（くっ……こ、こんなの私じゃない！　これじゃ痴女じゃないっ！　い、言いたくない……あんな恥ずかしいこと言いたくないのにっ！）
　マリオネットのごとく操られる己に歯噛みする。意

思とは裏腹に羞恥セリフで最低の痴態を晒す変身ヒロイン。軽蔑しているオタクたちにブザマなショーを提供する。

一通り撮影し終わったところで、今度は女豹のポーズをさせられた。後背位に近い格好で巨尻を突き出し、Hカップ巨乳を床に押し付けアピールする。

肢体をくねらせ、上目づかいで男性に媚びていく。

「にゃ、ニャオ～～ン♥　ニャン♥　ニャン♥　ニャンニャンニャン♥」

「うわー、似合ってないね。誰？　この指示だした人」

「にゃん♥　にゃん♥　はあ～～ん♥　にゃんごろ～ん♥　にゅふ～～ん♥　ゴロゴロ♥」

「いいじゃねえかエロいし。オバサンもっとオッパイ押し付けて！」

「にゃは～い♥　デカパイす～りすり♥　す～りすり♥　どうですにゃん？　おチンポ大きくなってきたかにゃん？　にゃにゅ～～ん♥」

「つ、次はもっと可愛く言ってみて」

「私は、せ……セルシアンにゃんこですぅ♥　趣味はフタナリチンポ弄りのオナニー牝ネコですにゃ♥　よろしくにゃあ♥」

「うげ、キモっ。年考えろよオバサン」

「やぁん♥　ひ、ひどいにゃあ♥　くぅぅ……♥」

ネコの鳴きまねをさせられた挙句罵倒される。恥ずかしくて惨めなのに股間の秘裂は濡れていき、フタナリちんぽもフル勃起状態だ。

マゾヒズムが疼きだし玩具にされる屈辱が心地よくなってしまう。

（ば、馬鹿にして……か、身体さえ自由なら今すぐにでも切り刻んであげるわ！）

心の中で悪態をついても現実は変わらない。

十分間も女豹のポーズをさせられ、その次に待っていたのは――

「次はハイグレやってみてよ。ハイグレ知ってるでし

よ？」

「は、はいぐれ……？　なんなのそれは……？」

聞きなれない単語に疑問符を浮かべるセルシアン。しかし身体は自然に動きだし、本人も知らない羞恥ポーズをとっていく。

直立すると脚をガニ股に開き、マイクロミニスカートを外す。両手のひらを伸ばして股間のラインにそわせるようにする。最後に両腕をV字に引いたらハイグレポーズの完成だ。

滑稽なセリフを言いながら、腕を動かしていく。

「は、ハイグレ！　ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥」

「ギャハハハハハ！　なにそれバカじゃねえのオバサン！　ハハハハ、腹いてえっ！」

「い、言わないで！　ああん♥　ひゃ、は、ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥」

「ねぇ、これギャグじゃない？　ぼくはないなー」

「や、きゃふあ～ん♥　いやぁ♥　くぅぅ……は、恥ずかしい……は、ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥」

股布が割れ目に食い込む感触が甘美で、ますます激しくV字に腕を動かす正義の美熟女。間抜けなポーズで変態動作するのが心地よくなってしまう。

ぴっちりとしたレオタードスーツが肉竿を圧迫し、快美の稲妻が背筋を駆けていく。冗談のようなシチュエーションで射精してしまいそうだ。

「はひゃあああぁぁ～～ん♥　み、見ないでぇ……ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレぇ♥　と、止まらないいいぃぃぃぃ♥　やあああぁぁあああぁぁあああん♥」

「あれ？　オバサンちんぽだけじゃなくて乳首も勃ってきてるじゃん。もしかして感じてる？」

「ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥　か、感

じてなんかっ♥　ん、はぅ、ふぐぅぅぅう〜〜ッ♥　は、ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレぇ♥」

「感じてないなら触ってもいいよな？　イヤだって言っても聞かねえけど……へぇ、これがフタナリちんぽかよオレのと変わんねえな」

「ふあああぁ〜〜ん♥　は、ハイグレ♥　さ……触らないでぇっ♥　い、今チンポ敏感になってるからぁ♥　デリケートだから♥　うぐぅぅぅぅぅう♥　は、ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥」

一人の青年が肉幹に指をそわし、下から上へと撫で上げていく。こぼれでた金玉を揉みほぐし、敏感な包茎ムケ亀頭を爪でピンッと弾く。

淫辱の衝動が腹の底から湧き上がり、セルシアンは望まぬ絶頂を強いられていく。

すり♥　すりすりすり♥　しゅりしゅり♥　つん、つんつん♥

「ハイグレハイグレ♥　んんん、ひぁっ、ち、チンポダメなのぉおおおぉッ♥　イッちゃうから♥　射精我慢できなくなるから♥　は……ハイグレハイグレ♥　んぐぅぅぅぅぅッ♥　触っちゃダメえええぇぇぇ〜〜〜〜ッ♥」

「ほんとにイキそうだな。エリスちゃんから聞いてたがとんでもないマゾ牝だぜ」

「あひ、い、あああぁぁあああぁああんっ♥　ち……チンポいやぁっ♥　は、は、ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥　ハイグレハイグレ♥　イクイクっいっちゃうからあっ♥」

「だったらイケよ。ハイグレで勃起する変態ババア！　オレたち全員で見ててやるよ！」

「ふぁ♥　あぁぁうっ♥　ハイグレハイグレ♥　も、もう抑えきれないっ♥　チンポ汁がでちゃう♥　ハイグっっレハイグレっっ♥　こんなバカなポーズで射精しちゃうぅぅっ♥　み、みんなに見られながらイッち



ゃう♥　は……ハイグレぇえええぇえええええ♥」

さらに激しくシャッターが切られ、光の奔流に飲み込まれていく。頭が快悦で埋め尽くされていき、射精することしか考えられない。

身体の奥底から被虐体質がエールを送り、フタナリちんぽに精液が抽送される。先走り汁でスーツをベトベトに汚しながら青年の指に溺れていく。

そして全員の視線が集まる中、人妻ヒロインは盛大にザーメンを吐き出した。

ブピュッ♥　ドプッ♥　ビュ♥　ヌビュリュリュリュウウゥゥ～～♥　ドプヌプッ♥　ヌチャッ♥　ドピュピュピュウゥウゥゥ～～～♥　ズジュブッ♥　ビュリュリュリュウウゥゥ～～～～～～ッッ♥♥

「は、ハイグレえぇぇぇぇぇ♥　ハイグレぇえええええ♥　んほおぉおおおおおおおッ、イクイクイクイクッ、ちんぽイクううううぅぅ～～～～ッ♥　ハイグレぇハイグレぇ♥　ハイグレぇハイグレぇ♥　は、恥ずかしいのにっ♥　嫌なのにっ♥　変態ハイグレポーズでイクううぅうッ♥　オバサンマゾちんぽがハイグレイキするのおおおぉおおおおッ♥　ほぉ〝お〝おぉおおぉおおおぉおおおおッ♥」

ザーメンをレオタードスーツ内にたっぷり射精する蒼髪ヒロイン。撮影されながらの屈辱アクメに酔いしれてしまう。

変態オナニーで絶頂した自己嫌悪と虚脱感でその場にへたり込む。

（ぐ、くぅぅ……あ、あんなポーズでイクなんて……み、惨めすぎるわ……）

後世に残る淫辱に動けない熟女変身ヒロイン。

だが、恥辱はまだ終わらない。

傀儡の杖に思念が込められると身体が勝手に動きだし、部屋の隅にあったパーテーションへと歩きだしたのだ。突然のことに面食らい抗議する。

「も……もういいでしょっ！　ま、まだ私に何かさせ

るつもり⁉」

「そうだよ。撮影会なんだから色んなコスプレをしてもらわないとね。衣装は用意してあるから着替えてきてね」

「このっ……外道！　ど、どこまで弄べば気がすむの！」

凛々しい細面でキリリとにらむが、オタクたちはニヤニヤと嘲笑うばかりでまったくこたえていない。頭の中はこれからの恥辱展開に対する期待しかなかった。

薄い仕切り板一枚で着替えをさせられるセルシアンは、コスチュームを見て驚愕した。

（な……なによこれ……こ、これを着なくちゃいけないの……？　冗談でしょ⁉）

「おーい、早くしてねー。みんな待ってるからさー」

「わ、わかってるわよっ！　ぐ……くぅう……」

中年男性に急かされイヤイヤながら布地を手にとる。下種の仕込みに辟易しながらも、卑猥な衣装に着替えて登場する蒼髪ヒロイン。

「あの……こ、こんな感じでいいかしら……？　ど、どう……似合ってる？」

両手でスカートの裾をギュッと押さえながら、おずおずと何かを隠すように進み出る。モデルのような美貌は屈辱で赤くなると同時に、不安で青くもなっていた。

その姿を見て周囲からは歓声が上がった。

「すげー、マジで着てるじゃん！」

「お、オレ写真撮っておこう」

「おっほ、こりゃあとでネットに画像上げとかないとな！　お祭りになるぜ！」

セルシアンが着替えた衣装、それはエロティックなメイド服であった。

スザンヌモデルと呼ばれるそれは、へそだしワンピースを細い肩紐で止め、胸の谷間や腋が丸見えになっていた。首に結んだリボンと頭のカチューシャが可愛

らしい。
　引き締まった脚にはソックス。スカートの丈は膝上で、純白のエプロンが腰の辺りで結ばれ、とてもキュートだ。
　可憐さとエロスが同時に存在する素晴らしいメイド服である。
　着ているセルシアンの年齢を考えなければ。
「おおっ、似合ってないねー、おばさん」
「うわっキッツ。やっぱメイドは若い子だね。年増にはムリだなこりゃ」
「おおキツイキツイ。ＢＢＡキツすぎですぞ～。ちゃんと鏡を見てくだされー」
「あっ、あなたたちが命令したんでしょ！　私だって無理があるのはわかるわよ！」
　若い娘にしかできない格好に人妻ヒロインの足が震える。スカートを掴んで離さないのは、下着が簡単に見えてしまうこととともう一つ。
「あれ？　まさかもう勃起してる？　ちょっと手をどけてみて？」
「え……？　や……いやっ、ち……ちょ、ちょっと待って！」
　セルシアンが言い終わる前に手が後ろに回される。すると、スカートとエプロンがもっこり持ち上がっていることがわかった。
　羞恥衣装とオタクたちの視線でマゾちんぽがはしたなく勃起してしまっているのだ。ついさっき射精したばかりだというのに。
　隙間からはフタナリちんぽに着せられた玉ブラジャーも確認できる。今着ているのは黒のレースタイプの玉ブラだ。薔薇の花が左右のキンタマを彩り、大人のエロスを醸し出している。
「アハハハハ！　こいつもう勃ってるよ！　どんだけ溜まってんだよっ！」
「え、ええー、せ、性欲どうなっているの？　まだヌ

キたりないのこの変態は？」

「い、言わないで！　ぐっ、くううぅう……仕方ないのよ……こんな身体にされたら……そ、それに私は変態じゃないわっ！　何度も言うけど……ほ、本当だから！」

金切り声で反論するがもはや誰も聞いていない。

このマンションで美熟女ヒロインの立場は奴隷同然なのだ。

そして、セルシアンは大股開きで椅子に座らせられると、両腕を頭の後ろで組み腋毛公開の恥辱ポーズをとらされる。

スカートもまくり上げられ、卑猥な玉ブラとフタナリちんぽが晒し者だ。

（また……こ、こんな格好……わ、腋毛匂ってないわよね……？）

いまさらながら腋の匂いを心配する。正義のために戦うヒロインといえども一人の女。自分の体臭はかなり気になるのだ。

と、オタクの一人がセルシアンの股座にしゃがみ込み、細いアナルパールを取り出した。棒に数珠のような球体が連なってくっついている。

本来なら肛門を開発する淫具だ。

アナルパールがフタナリ陰茎のすぐ前でブラブラと揺れる。

「な、なにをするつもり……？　ま、まさか……まさかソレって……え……？」

「正解だよ。コレをオバサンの尿道に挿れてあげようかと思ってね。きっと気絶するくらい気持ちいいよ」

「う、嘘よね……？　そんなの入るわけないわ……む、無理よ……！　無理だから！」

「はーい、知りませーん。それと呼び方はご主人様だからね？　セルシアンちゃん」

「あ……い、いやあああぁあああぁあああああッ!!」

冷汗を流しながら挿入を拒否する。
だが、当然のごとくその願いは聞き入れられず、アナルパールが尿道へ侵入した。
ローションで多少はすべりがあったが、前戯も拡張もない侵入に人妻ヒロインの背中がエビめいてのけ反った。
「ひっ、ひぐぅぅぅぅぅぅっ！　ぁ……あがぁあぁぁあああああああっ！　はひぃぃいいいいいっ！　おひいいいぃいいぃ～～～～ッ！」
「もー、大げさだなあ。エリスちゃんにもらったアイテムだからダイジョウブだよ。たぶんね。すぐに気持ちよくなってくるから」
「ぁ、ひ、ほ……ほへぇぇぇぇぇぇ～～～～っ！　こ、これダメぇっ！　ご主人様だめだめですううぅぅ～～～～っ！　ち、チンポ壊れるっ！　壊れちゃうからぁッッ！」
「だからダイジョウブだって。ほ～ら尿道グリグリー、グリグリー」
「ほぉぉおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！　んぐんっ、ぁぁあ、んはぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　へぁぁぁぁアアアァァアアアアッ！」
球が細い尿管を前後するたびに圧倒的な喜悦が全身を襲う。フタナリちんぽという慣れない男性器を責められ、勃起の芯が蕩かされていくようだ。
腹筋に力を入れ陵辱に耐えようとするが、まったく効果が見られない。放尿する時に味わう感覚が連続し、人妻天煌聖姫の理性が焼き切られる。
「ねぇ、チンポびくびくしてるけど、もうイキそうなの？　早漏すぎない？」
「は……はぃぃ♥　お、オバサン早漏なの♥　尿道ほじられてマゾ勃起する変態なのおおぉぉおおおッ♥　んはあああ～～～～ん♥　チンポチンポチンポお♥　チンポ大好きですご主人様ぁ♥」
「あー、それ言っちゃうんだ。本当に弱いねセルシア

ンは。変身ヒロインなのに恥ずかしくないの？」

「ひぐうううぅうううううッ♥　だ、だって尿道責め弱いのよおおぉぉ～～ッ♥　オシッコの穴ほじほじされたらイッちゃうの♥　またマゾ射精したくなるからぁッ♥　んぐ♥　ひー♥　はひー♥　ほぉおおおぉおおぉおおぉおおおおッ♥」

傀儡の杖の効果で卑猥な単語まで強制される。

軽蔑するオタクたちをうっとりとした瞳で、ご主人様と呼んでいく。

目の前で星が瞬き何がなんだかわからない。

「へぇ、もうイキたいんだ。イエスなら首を振ってみて、そうしたらイかせてあげる」

「ふ……ふります♥　ふります♥　ふりましゅからイかせてっ♥　チンポ射精させてぇ♥　こ、これつらいのぉっ……つらいんですご主人様ぁ♥」

コクコクと首を振り射精をおねだりする。もはや天煌聖姫としてのプライドなどどこにもない。どうせ杖で操られて逆らえないのだ。

なら、とっとと降参して快美に溺れたい。決して私が弱いわけじゃない。変身ヒロインとして情けないわけじゃない。

全部杖が悪いのだ。

「いいよ。射精させてあげる。でもその前に……匂いも嗅がせてもらおうかな」

「へぇ……ふぇぇ♥　な、なに……♥　匂い……？」

言葉の意味がわからず呆けるセルシアン。そこへ今まで周りで見ていたオタクたちが集まり、一斉に腋の匂いを嗅ぎだしたのだ。

ふさふさの黒ジャングルに鼻を埋め、美熟女のワキスメルを味わっていく。

全員が嗅ぎ終えた後――

「うわっ、くっせえ！」

「な、なにこれ……鼻が曲がりそう……」

「お前それでも変身ヒロインかよ。ワキの手入れもし

てねえの？」
「臭すぎてヤバいでござるな。吐き気がしますぞ」
同時に腋の匂いを侮辱しはじめたのだ。
実際そこまで臭くもないのだが、マゾ調教されているセルシアンには効果抜群であった。
（も、もうダメ♥　恥ずかしくて惨めでみっともなくてぇ♥　もっとイジメてほしい♥　ご主人様に痴態を晒したいっ♥）
心の中の何かが壊れ、人妻ヒロインは淫辱に堕ちていく。
「は、はあああ～～～ん♥　嗅いで♥　嗅いで♥　もっと嗅いでぇ♥　オバサンのくっさいワキ嗅いでぇ♥　くさいってバカにしてほしいのッ♥」
「なんだよ、『嗅がないで』じゃないのか？　嗅いでほしいかよ、本当にドスケベババアだな」
「そ、そう♥　そうなのぉ♥　天煌聖姫セルシアンの正体はワキ臭嗅がれて勃起する変態マゾメイドなのぉ♥　ボーボー腋毛晒して、尿道オナニーする淫乱なのぉッ♥」
「ま、マジでチンポも硬くなってるね……ドン引きだよ……最悪……」
「あん♥　あぁん♥　ひうううぅ～～ッ♥　もっと言ってぇ♥　バカにしてぇ♥　最低女だって見下してぇ♥　はぅ、んんんんんん♥　ち、チンポもうダメぇ♥　ワキの匂い嗅がれてビンビンになっちゃうぅぅう～～～ッ♥」
「アナルパールもいいでしょ？　ほうら、カウパー汁がどんどん出てきますよ」
「ほぐぅぅうううぅッ♥　ホヘエエェ～～ッ♥　チンポ♥　チンポ♥　フタナリチンポ汁漏れてきてる♥　ほおおおぉおおおおぉッ♥　わ、私の包茎チンポから早漏汁でてるうぅぅ～～ッ♥　オシッコの穴責められて感じてるウウウゥッ♥　へひー♥　んふー♥」

被虐快感に包まれ前後を忘れる人妻ヒロイン。陵辱の余韻が残る肉体を激しい性衝動が駆け抜け、濃厚な牝ミルクを吐き出そうと迫る。

尿道を責められワキ臭を嘲笑される最低シチュエーションに没頭していく。睾丸からマグマのような疼きがせりあがり、アナルパールを引き抜かれた瞬間。

激熱の生ミルクが放たれた。

ドクンッ♥　プピュピュ♥　ブリュリュ♥　ビュ、ビュリュリュリュウウゥ～～～♥　ドチュッ♥　ボビュビュッ♥　ドピュッ♥　ブピュッ♥　ブビュビュッ♥　ブビュリュリュウウウゥゥウゥゥウゥッッッ♥

「んほおおぉおおおおおおおおッ♥　い……イクイクイクうぅぅうぅぅう♥　ご主人様の前でマゾザーメンお漏らししちゃうぅぅぅ～～ッ♥　四十すぎてるババアなのに♥　二人も子供がいるのにメイド服で尿道オナニーしちゃうぅぅ～～ッ♥　ご主人様ご主人様ご主人様ぁ♥　だ、大好きですううぅぅ～～～♥　私を躾けてくれてありがとうございましゅうぅぅぅぅぅう♥　へ、変態熟女メイドのセルシアンはドスケベちんぽアクメしますううぅぅぅぅ♥　どうかこの駄メイドのみっともない粗相をお許しくださいいいぃぃぃぃ～～～～ッ♥　にゃほぉおぉおぉおおおおおおおおおッ♥」

淫語を叫びながら最低は射精をする正義の美熟女ヒロイン。目の前で星が瞬き、すべての感情が快楽に塗りつぶされていく。

もうチンポのことしか考えられない。

（はひゃあぁぁ～～ん♥　ひぅう……♥　へあぁあ♥　で、でもこれは操られているから……私の意思じゃないからいいわよね……ふぁぁ……）

そして、虚脱するセルシアンに残酷な現実が突きつけられた。

杖のせいという最後の砦すらも破壊される。
「そうそう、杖の能力は尿道に挿れた最初しか使ってないよ。あとはオバサンが自分で言ったことだからね」
「そうですぞ。まったくこんな変態ババアがいるなんて驚愕ですな」
「まだまだ時間はあるんだ、たっぷり可愛がってやるぜオバサン」
「え……は、はへえぇ……？　わ、私、自分で……？」
自分の意思で喘いでいたという事実で急速に心が冷めていく。
身体は燃えるように熱いのに魂が凍えそうだ。
「あ、や、違っ、違うのよ？　これ……これは……」
「これは？」
「や……い、い、いやあああぁぁあああぁああああぁああああああッッッ!!」
狭い室内にセルシアンの慟哭が響きわたる。
コスプレ撮影会はあと六十八時間も残っていた。

幕間二　淫欲に満たされる日常、デモンコア墓場に蠢く

天王寺学園の運動場。
体育の授業を終え、愛華と茜はクラスに戻る途中であった。学園ではいまだにブルマを採用しており。二人のブルマヒップでは、桃のような双球がカタチを主張している。
サイドポニーの陸上少女は、汗で湿ったうなじをタオルで拭きながら、
「そういえば知ってる？」
「？　なにをですか？」
「郊外の外人墓地に幽霊がでるんだってウワサだよ。あたしの先輩も見たらしいし、ちょっとした心霊ブームなんだって」

「へー、こわいですねー」
「ちょっと、信じてないだろー。このこの～」
「あんっ、ひゃんっ！　アハハ！　アハハハ！　あ、茜ちゃんくすぐったいですっ」
　こちょこちょとわき腹をくすぐられる愛華。楽しそうに笑いながらも、頭の中では幽霊のことが気になっていた。
　これまでの経験で幽霊や妖怪と名のつく怪奇現象には、十中八九デモンコアが関わっているからだ。エリスがこの街一帯を縄張りにしているため、他の個体たちによる侵攻はないと思っていたが、これは調査する必要がありそうだ。
「クラスのみんなで肝試しに行こうって話もあるんだけど、愛華はどうする？」
「そうですね、わたしは――」
　いいタイミングできっかけができたと思ったその時、愛華の下腹部に熱い疼きが生まれた。それはどんどん大きくなり、肉竿が屹立していく。
　触手制服やオーク輪姦を経て、だんだんフタナリちんぽの制御がきかなくなっているのだ。家でのオナニーだけでは飽き足らず、休み時間にも手淫してしまう。
　最近では同級生の女生徒を見ても興奮してしまい、チンポをシコシコしたくて仕方ない。今回は茜と密着しすぎたことが原因だ。
　汗の匂いとシャンプーの香りでフタナリ陰茎が発情しかかっている。
「わ、わたしちょっとお手洗いに行ってきますね……ま、またあとで……っ！」
「急にどうしたの？　一緒に行くよ。トイレくらい付きあうし」
「じ、時間がかかりそうですから……さ、先に戻っていてください」
「あーそっか、じゃあ先に教室へ帰ってるね」
「は、はい。すぐに行きますからっ！」

前かがみになりながら、足早に立ち去る栗髪美少女。女子トイレの個室に入るとブルマを下ろし、すぐさまチンポを露出した。半勃ちだった肉棒はもうフル勃起してしまっている。

さらにでっぷりとしたキンタマには『美少女』と黒マジックで書かれており、相当に下品で淫猥だ。

正義のヒロインは毎日のようにフタナリちんぽへの落書きを強要されていた。

（うぅぅ……は、恥ずかしい……こ、こんなの見られたらもう登校できません……）

屈辱的な仕打ちに白肌を震わせる愛華。フタナリというだけでも最悪なのに、ちんぽ落書きなんて変態の所業だ。

（は、はやくしないと……誰かが来る前に終わらせないと……っ！）

他に人の気配がないことを確認すると、立ちションベンをする格好で、洋式便座に勃起肉竿をロックオンする。

すでにピンク亀頭からは透明な雫がこぼれ、白く粘ついた精液の放流を心待ちにしていた。

（はぁ……はぁ……もうダメです……♥　ご、ごめんなさい茜ちゃん……♥　わ、わたしオナニー我慢できません……♥　学園で発情しちゃうエッチな女の子なんです……♥）

右手の人差し指と親指で輪っかを作り、根元から亀頭の先端までフタナリちんぽをシゴいていく。空いた左手をお尻から回し、ふにっくにくに、と睾丸愛撫も忘れない。

正義の変身ヒロインヴァーミリオンは学園での淫辱に慣らされていた。しかも調教がはじまった時より歯止めがきかなくなっている。

他の生徒が来ることも考えず、一心不乱に右手を動かし快楽を貪っていく。

（はぁぁぁん♥　気持ちいい♥　おチンポしこしこ

気持ちいい♥　もうチンポのことしか考えられないです♥　茜ちゃんオカズに手淫しちゃう♥　ン、んはあぁぁあああぁああんん♥）

瞳を蕩かせ親友を想いながらフタナリ自慰の快美に埋没する。遠くで聞こえる生徒の声が背徳感を煽り、ますます倒錯した手淫に溺れていく。

（も、もう出ます♥　おチンポ限界です♥　でる♥　でる♥　でる♥　でるうううぅうぅうううう♥　便器に出しちゃうぅうぅうううう♥　茜ちゃんんんっ♥）

そして、場所もわきまえずフタナリ変態女が射精した。

ピュ、ドビュッ、ドビュビュビュビュビュゥウ〜〜〜〜ッ♥　ブピュルルル〜〜〜〜ッ♥　ビュルルルル♥　ヴブブ♥　ビュクビュクビュク〜〜〜〜ッ♥

（はあああ〜〜〜〜ん♥　イクイクイクいきますううぅうぅうぅうう♥　体操服ちんぽオナニーでシコシコ♥　キンタマに落書きしてる変態マゾがイキます♥　ん♥　ああん♥　ひううぅううん♥　あ、茜ちゃんでイッちゃうぅぅ♥　茜ちゃんの体臭でスケベザーメンでますうぅうぅうぅうう♥　はん♥　ううん♥　イクうぅうううぅ♥　ぁ、お、ぁおおお〜〜〜〜ん♥♥」

親友をオカズにして大量の白濁液が便器にぶちまけられた。背徳感と申し訳なさがますます快悦を加速させていく。

声が漏れるのを止められない。

「ひゃふぅぅ♥　あ……ああん♥　ふう……♥　ほおおぉおおぉおおんッ♥　フタナリちんぽ……いいのぉ……♥　うぅ〜〜ん♥」

フタナリ調教十二日経過。

神城愛華の日常は欲望に支配されつつあった。

◆◆◆◆

「ハァァッ！　たぁっ！　やあっ！」

サンドバッグに切れ味鋭い蹴りを叩き込む。神城冴子は門下生の前で空手の技を実演していた。今日は久しぶりの稽古で、子供から大人まで様々な生徒が道場に来ているのだ。

その中の男子生徒が驚いた様子で、冴子に声をかけた。

「さすが神城師範ッス。蹴りっていうかもはや日本刀って感じッスよね。切れ味バツグン！　マジパネぇッス！」

「ん……それ褒めてるの……？　あと、言葉づかいには気をつけなさい。丁寧にね。そういう汚い言葉を使うと技も乱れるわよ」

「はいッス！」

調子のいい返事をしながら生徒は稽古に戻っていった。この男子は愛華の同級生で三か月前から道場に来ている。

筋は悪くないがどこか軽い少年であった。

（まあ、稽古自体はしっかりやってくれるからいいけど……んッ!?　はぅ……ッ……ぅぅ、ぅくぅぅッッ!!）

突如、冴子の股間にビリビリとした快美が走った。原因は生徒たちの体臭だ。道着に染み込んだ匂いが息子を、陽一を思い出させ、パンツオナニーを想起してしまう。

そして、一度火がついたらもう止まらない。もどかしい衝動がフタナリちんぽを這いずりまわり、自慰がしたくて耐えられなくなってしまう。

「す、少し外すわね。みんな気を抜かず励むように！」

「ハイッッ！」と小気味のいい返事を背中に、冴子は男子更衣室へ歩を進めた。全員稽古か走りこみをしているため、部屋の中には誰もいない。

道着を脱ぎ捨て恥ずかしげもなくフタナリ陰茎を露出させる。無造作に脱ぎ捨てられたTシャツをオカズに顔を埋めると、すっぱい男の匂いがした。

（た、たまんないいっ♥　男の子のにおいいぃいいいっ♥　んん……あん♥　ああん♥　はぁぁぁん♥　ツンとして汗臭くてチンポびんびんになっちゃう♥）

教え子の体臭でフル勃起する美熟女ヒロイン。性欲が頭の中を蹂躙し、フタナリちんぽ以外は目に映っていない。

射精をするという一心だけで、淫猥に肉竿をシゴきはじめた。

（アゾ……は、はぁあぁぁあぁぁあああん♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポをしこしこぉ♥　ん、ん、はぅうう〜〜〜ん♥　ほ、包茎ちんぽこをぉ♥　ごっしごっしセンズリいぃ♥　ほおおぉおおぉおおぉおん♥）

はぁはぁと荒い息を吐きながらマスターベーションに耽る神城師範。牡のスメルを嗅いでいると、出張中の夫や、陽一のことが思い出されてさらに捗ってしまう。

（あぁんっ♥　だ、ダメなのに♥　こんな変態オナニーしちゃダメなのに手が止まらない♥　はぅ♥　くぅぅぅ〜〜ん♥　くん♥　くんくんくん♥　に、匂いステキぃ♥　チンポかたくなるぅ♥　くん♥　きゃふん♥）

クンクンと匂いを嗅ぎながら手淫のペースを上げていく。変態行為にハマりながら空いた手は女陰をまさぐり両性の快美に沈んでいく。

人が来れば破滅するということが頭から抜け落ちていく。

（ンンンン……♥　い、イク♥　イク♥　イク♥　もうでるうぅうう♥　汗臭センズリでマラ汁でるっ♥　ドッピュンしちゃう♥　年がいもなくオマンコ弄りながらマラミルクでりゅのおおぉおおぉおおお♥）

目の前が白くなり手淫のペースがさらに増していく。変態的な快美に引き締まった肢体がビクンッと跳ねた。秘口からは淫蜜がとめどなくこぼれてくる。

そして、エクスタシーに手の動きが追いつかなくなり、凄まじい勢いで精液が飛び出した。

ビ、ビビュル♥　び……ビュクビュククククウウウウゥゥ〜〜〜〜ッ♥　ブビュルルルル♥　ドピュ♥　ビュルルルルルルッ♥　ドプルルルルル〜〜〜〜ッ♥　ピュ、ピュ♥

「んほぉお゛お゛ぉぉぉぉぉぉぉぉぉ♥　い……イグッ♥　イグッ♥　イグッ♥　イグうぅぅぅッ♥　へ、ヘンタイの♥　ヘンタイ変態おばさんイクううううぅぅぅぅぅぅぅぅ♥　男の子の匂いでチンポいきするううぅぅ〜〜ッ♥　包茎熟年発情マラからザー汁でまくりゅのおおぉおおぉぉおお♥　ほ、ほぉ゛お゛お〜〜♥　オスの匂い最高ぉ♥　ぱ……パない♥　パない♥　パないのおおおぉおおぉぉお♥　クソ変態射精でおちんぽミルク搾りしゅごいいいぃいいいい♥　マジしゅごいのおおぉおおぉぉおお♥♥」

丁寧な言葉づかいはどこへいったのか、ダミ声で喘ぎながら下品射精するHカップ美熟女。蕩けた表情に理性などまったくなく、心の声がぜんぶ出てしまっている。

道場には防音設備があるが、それでもギリギリの声量だ。

「ほおおん……♥　はぁあああ……ふぅぅ……あへぇえ♥」

うっとりとした様子で余韻に浸る。

そして、一秒後、

「ん……あ……ああ、や……やだ私何をやってるの！すぐにキレイにしないとっ！」

床に精液をぶちまけたことにいまさら気付く。大急ぎで道着を着用し。タオルと消臭スプレーを探しに行く正義の熟女ヒロイン。

フタナリ調教十三日経過。

天煌聖姫セルシアンは自己嫌悪と欲情に戸惑っていた。

◆◆◆◆

郊外にある外人墓地。

ぶ厚い雲が空を覆い星明かり一つ見えない夜に、一組のカップルが墓石の間を歩いていた。懐中電灯を光源にぴったりと肌を寄せ進んでいく。

ここ最近になって幽霊が出るという噂が広まり、肝試しに来ているのだ。女のほうは純粋にシチュエーションを楽しんでいるようだが、男のほうはこのあとのホテルが本命という感じである。

「ふぅん、中々フンイキあるじゃん。これマジで出るかもな」

「もー、怖いこと言うのやめてよぉ。わたしビビりなんだから」

「へへ、ならもっとくっついてもいいんだぜ？」

「ば、バカ……エッチ……♥」

桃色の空気を纏いながら、イチャつく二人。やはり男のほうは幽霊を信じているわけではなく、自分たちの雰囲気づくりに利用したいのが見え見えである。

しかし、楽しい時間は長く続かなかった。

二人の足元から恐竜の骨格標本めいた大口が出現し、トラばさみのようにガブリと飲み込んだからだ。

「へ？　え――」

「は？　は――」

断末魔を上げることもなくカップルは咀嚼（そしゃく）され、闇に飲まれた。あとはガイコツになるまで搾り尽くされ、魔力に還元された後、他の犠牲者と同じく墓石の下へ入るだろう。その後、まったく同じ姿をした使い魔を放ち、怪しまれないよう時間も稼ぐのがここの主（あるじ）のやり方であった。しばらくは誰も異常に気が付かないだろう。

ペスト医師の格好をしたデモンコアは十字架に腰かけ、目の前の光景を眺めていた。表情は仮面で隠され、先ほどの惨劇を楽しんでいるのか、それともデモンコアには珍しく嘆き悲しんでいるのか、内面をうかがう

ことはできない。
「香水とアクセサリーが邪魔ですが……うむ、悪くないですね。もっとも、これだけでは足りませんが」
デモンコアの一員、レートA《骸の馬車》マンシアは一人つぶやく。天煌聖姫やダルルゴアのおかげで長らく立ち入れなかったが、この街は絶好の狩場だと彼は思っているようだ。
（ここは若者が多く肉が美味いですね。なるほど……色欲の夜天が目をつけるのも頷ける）
「エリスはどっちかっていうと魚派だけどね。太るのイヤだし」
「――――ッ!?」
心の中を見透かされ、とっさに頭上を仰ぎ見るマンシア。そこにはコウモリのような翼を羽ばたかせ、金髪ツインテールを弄ぶ悪魔幼女の姿があった。
彼の食事ははじめから監視されていたのだ。
「な、なにか御用でしょうか……エリスさま……」
「ビビらなくてもいいよ～、ちょっと忠告に来ただけ」
「忠告……ですか……？」
「うん、天煌聖姫がここに来るかもしれないから、倒せるなら倒しちゃって。エリスも今回は手出ししないから」
「よろしいのですか？　今調教の最中だと聞いていますが」
「別に好きにしていいよ。これで負けるほど弱くなってたら一か月待つ必要もないし。ヘタレのペットはいらないからね～」
「……かしこまりました」
マンシアは仮面の裏で眉をひそめた。たしかに邪魔者を消すことができるのは願ったりである。通常のデモンコアは敵を生かしたりせず、殺せる相手はその場で殺すのが常なのだ。危険な可能性はなるべく消しておきたい。だが、なにか不気味な予感がするのは気のせいだろうか？　レートSの思考、特にエリスの考え

は掴みにくい。
　先日まで白と言っていたものが、翌日には黒に変わる。
　同胞の中でも異端だ。
「それに新しいペット候補も見つかったしね。だから好きにしていいよ～。キャハハ☆　こっちもおもしろそう♥」
「？」
　意図がわからず首を傾げるマンシア。
　エリスの瞳、深紅の宝石には少年の姿が映っていた。
　神城冴子の息子にして愛華の弟、神城陽一の姿が。

第十二話　這いよる魔手、下着女装で赤面足コキ！園児幼女に犯される少年の尻穴！

「よし、これで終わりっと。あとは起動試験だけだな」

神城陽一は伸びをしながら工具をテーブルに置いた。ここは地下のデモンコア研究施設。日夜、多様なアイテムが生み出され、愛華の弟である彼も深く関わっていた。

今回開発に成功したのは、適正値の低い人間でも使用できる男性用の試作型セイクリッドギアだ。冴子にも解析を手伝ってもらい、一年かけてようやく完成にこぎつけたのである。

これを量産すれば戦いが有利になる。海外で研究している父にも喜んでもらえるだろう。そう思うと自然に口元がニヤけてしまう。

「これでぼくも追いついたぞ。待ってろよデモンコア！」

シュッシュッとシャドーボクシングをしながら敵との戦闘をイメージする。これでもう足手まといとは言わせない。女の子に戦いを任せて部屋に閉じこもっていることはない。

とても晴れ晴れとした気分だ。

ちなみに、今研究施設にいるのは彼だけである。愛華は友達と遊びに出かけ、冴子は『お化けナメクジの秘薬』を分析するため、他の施設に赴いている。

さすがに家族の前で威勢のいいセリフを吐くのは恥ずかしい。

しかし、突然鳴り響いたビープ音により、浮かれた気分は吹き飛んだ。ポケットのスマートフォンが警告を告げている。画面を見ると近くに魔力反応アリと表示されている。

つまりデモンコアが今ここに現れたのだ。
「!?　ど、どこだ！　姿を見せろ！」
できたばかりのセイクリッドギアを握りしめ、辺りを見回す。本来なら侵入されるはずのない研究施設での接敵にどっと汗が噴き出した。
（と、とにかく姉ちゃんと母さんに連絡しないと！　リダイヤルで番号は……）
急いで天煌聖姫へピンチを伝えようとする陽一。だが、その時間はなかった。液晶画面が割れると同時に背後の空間が歪み、魔力の主が現れたのだ。
ごく自然にはじめからそこにいたように。
「こんにちは☆　《色欲の夜天》エリスだよ。よろしくね～」
無邪気に笑う悪魔幼女の格好は、いつものボンデージ姿ではなかった。ピンク色のスモックにチェックの入ったグレーのスカート。胸元には大きな若草色のリボンとチューリップをかたどったワッペン。
幼稚園児にしか見えないコスチュームで現れたのだ。
人類の宿敵とは思えない可愛らしい容姿に一瞬フリーズしかけた陽一だが、
「そ、そんな格好で何を企んでいる!?　いやっ、そうじゃなくてどこから侵入した！　母さんから聞いているぞ！　レートSが何のつもりだ!?」
「何って言われてもな～、今日はキミに会いに来ただけだし。ここのセキュリティは甘いから正面から入ってきたし。服はそっちに合わせてあげたつもりだけど？」
「このっ……ぼくに会いに来た？　合わせる……？　い、意味がわからないな……っ！」
「鈍いな～、エリスの属性が色欲って知ってるなら想像つくでしょ？　変態ペットに調教しに来たってこと。あと、この格好はキミなんて園児レベルって意味かな♥　キャハ☆　キャハハハハッ!!」
「ッ……ふ、ふざけるなっ！」

悪魔幼女の挑発に激高する陽一。小馬鹿にした態度から滲みでる凶悪な魔力。あらかじめデモンコアの知識がなければ、嘔吐してしまいそうだ。

（ぼ、ぼくがやるしかないのか……）

連絡もできず自分で戦うしか道はない。

少年はギアを掲げ叫ぶ。

「セイクリッドギア、セットアップ！」

中央の宝石から光が瞬き、オーロラのヴェールが陽一の右腕を包み変化させていく。光が消えそこに現れたのは、手の甲に銃身をつけたガントレットだ。安い銀紙のように光り、お世辞にも強そうには見えない。

試作型の上に陽一が適合者でないため、全身を変身させられないのである。

「クソッ！　だめか……でも、だからって！」

ドッ！　ガガガガッ！

エリスに照準を合わせ手の甲から銃弾を連射する。しかし、自動小銃と同程度の威力しかない攻撃はあっさりとバリアに阻まれた。六角形の光の壁が鉛の雨を防いでいく。

ヴァーミリオンの光やセルシアンの水のような属性もないため、威力が足りないのだ。

神聖粒子の能力がまだ目覚めていない。

「ダメダメだね～。やっぱり普通の人間なんてこんなものかな～」

「なめるな、お前はぼくが倒す！　母さんや姉ちゃんに褒めてもらうんだ！」

さらに激しくなる銃声。そして、少年の祈りが通じたのか一発の弾がバリアを貫通し、エリスの頬をかすめた。白磁の肌に赤い線が引かれる。

深紅の瞳が少し、興味深そうに揺らいだ。

「ふぅん……そうなんだ。ちょっとはやるのかな？」

「よしっ、このまま――」

はじめてのダメージに息巻くが、少年の攻勢はここまでであった。

悪魔幼女が天井から触手を伸ばし、身体を搦め捕るって吊り上げたのである。

そのまま魔力を流され首筋に淫紋を刻まれてしまう。

「ぐっ、あああぁあああぁあああッ！」

「はい、これで逆らえないね。神聖粒子も大したことないし、このまま操り人形にしちゃおうかな♥」

「が……お前……こ、このくらいで……」

「じゃ、まずはこの命令かな。ン～、エーイ☆」

「――――ッ」

淫紋から流れ込む魔力で悶絶する陽一。天煌聖姫と違って抵抗する力がないため、簡単に身体の自由を奪われてしまう。

床に下ろされると、その足は彼の意思とは関係なしに歩きはじめた。

◆◆◆◆

「まだかな～、まだかな～」

園児服を着た悪魔幼女は退屈な様子で、ベッドの上で足をブラブラと揺らしていた。今いるのは陽一の自室である。部屋の中にはベッドと勉強机、スポーツ選手のポスターと、男子学生らしい簡素な部屋だ。

「お、キタキタ。待ってたよ～」

ドアを開けエリスの『命令』を守った陽一がやってきた。

その頬、いや、全身は紅潮し手足はブルブルと震えている。

「お、お前……ふ、ふざけんなよ……」

抵抗が無意味とわかっていても、怒りを見せずにはいられない。なぜなら命令とは『お姉ちゃんの下着で女装をしてこい』というものだったからだ。

小っちゃなイチゴがプリントされたピンクブラジャーを胸につけ、股間には同じプリントが施されたパンティを穿かされている。

女性の下着を無理に着ているため、サイズが合わずパツンパツンだ。股間の盛り上がりが強調され、全裸

よりも卑猥である。
　姉の下着を身につける変態シチュエーションに恥ずかしくて死んでしまいそうになる。
「キャハハハハハ、アハハハハハ♥　チョーウケル♥　よく似合ってるよマゾ犬くん♥　変態としてって意味だけど♥」
「うっ……うるさい！　だ、だいたいマゾ犬ってなんだよ！　ぼくの名前は陽一だぞ！」
「あれそうだっけ？　じゃあ勝負する？」
「し、勝負？」
「うん、これからエリスがい～～っぱいエッチなことするから～、我慢して『ぼくはマゾ犬です』って言わなかったら解放してあげる♥　制限時間は一時間。キミが勝ったらこの次元からも手を引いてあげようかな～」
「手を引く……ほ、本当だな⁉　それなら勝負だ！　デモンコアなんかに負けるもんか！」
　間髪入れず勝負を受ける陽一。淫紋のせいでどのみちレートSに対抗する手段はないし、そんなことで開放されるなら願ったりだ。
　万が一負けても従順なフリをすればいい。あとで寝首を掻いてやる。
　そんな考えであった。
「へ～、話がわかるね。じゃあ時計の長い針が十二を指したらスタートしよっか。あと少しみたいだし」
「ああ、それでいい」
　二人はベッドに座り勝負のはじまりを待つ。秒針がカチコチと音を立て、一二分後に長針が十二を指した。ここから一時間の淫獄勝負の開始である。
　悪魔幼女はチェックのスカートをふわりと揺らすと、陽一に後ろに回った。小さくプニプニした指先をブラジャーの上から押し当てる。
　まだ童貞の少年は未知の感覚に驚き、ビクンッと身体を震わせた。

「な、なにを……うう……」
「最初はオッパイだよ。エヘ、気持ちよくしてあげるね♥」
ブラの表面をやわらかな指先が這っていき、乳首にたどり着くとつまんで引っ張り上げた。チクリとした痛みが走るが、やがて言いようのない感覚が生まれていく。
倒錯的な快美がジワリジワリと身体に広がる。
さわ♥　さわ♥　さわわ♥　くりくり♥　こりっこりこり♥
「あ……ぐぅ……ぅぅ……」
「気持ちイイ？　女の子みたいに乳首硬くしちゃって、そんなにエリスの指先がうれしいのかな～？」
「そんなわけ……あるか……ぐぅぅ……はぐぅう……」
「でもドンドン乳首勃起してるよ～？　まぁでも、そんなわけないよね、気のせいだよね♥　女の子の下着穿いて、エリスみたいな子供に乳首責めされて感じるなんてないよね～♥　だってそんなヤツがいたらド変態だしね♥」
「あ、当たり前だ！　こんなことで感じるか！　バカにするな！」
羞恥衣装を着せられながらも精一杯強がる陽一。母や姉の戦いを見てきた彼はこの程度では屈しないと決めていた。
たとえ適性がなくとも下着女装の変態プレイに負けるわけにはいかない。
しかし、気持ちとは裏腹に肉体には魔力が回り、魔悦が少しずつ、少しずつ心を取り込もうとしていた。指の感触が心地よく感じだし、どうしても呼吸が荒くなってしまう。
「ハァ……ハァ……あ、ハァ……」
「苦しそうだね♥　どうしたのかな～？」
「な、なんでもない……っ……はぁ……」

誘惑に耐えながら時計を見る。
時間はまだ二分しか経っていなかった。
（クソ……まだこんなに残っているのか……!?　ハ、は、きゅうぅッッ!?）
突然の刺激に背筋をのけ反らせる。エリスが耳に息を吹きかけたのだ。耳穴を通ってゾクゾクとした感覚が身体中を這いずりまわる。
手玉に取られる悦びに脳が蕩けそうだ。
「エヘヘ♥　も～、女の子みたいな声出しちゃって♥　コッチもいってみよっか♥　耐えられるかな～？」
「はぁ……あ……そ、そこはっ……」
胸からイチゴパンティへ手の位置を移動する。人差し指を立て股間の膨らみをなぞっていく。ピクンッピクンッとチンポの反応を弄びながら淫悦を加えていった。
「キミの大事なところを弄ってあげるね♥　ん♥　ここピクンってなるんだ♥　カワイイ♥　す～りすり♥　く～りくり♥」
「やめ……う……ぐぅぅ……っ！」
「ごっしごっし♥　しこしこ♥　ハァ～～ン♥　指にエッチな匂いが残っちゃいそう♥」
あっという間に陽一の陰茎はフル勃起し、パンティを押し上げてしまった。テントを張って、三角形に尖った下着が淫猥だ。
隙間からは恥ずかしい中身が見えてしまっている。
「アレレ～、どうしたのかな～♥　おチンチン大きくしちゃって♥　そんなに興奮したのマゾ犬くん♥」
「ぼ、ぼくは……マゾ犬なんかじゃ……ない……ん……」
「でもでも～、これって感じてる証拠だよね♥　お姉ちゃんのパンツに恥ずかしいシミができてるよ♥　もう射精したいんじゃないのかな～？」
「うるさいっ！　し、しるか！」
「へ～、まだ認められないんだ。マゾ犬だって認めち

ゃえばラクになるのに」

「あ、あたり……まえだ……この……デモンコアめっ……っ！　ま、負けるもんかっ！」

「そっかぁ♥　じゃあ、もっとイジワルしちゃおうかな♥」

「!?　なっ、なに……!?」

言うとエリスは陽一を押し倒し、仰向けで解剖されるカエルのようなポーズをとらせた。自身はベッドの上に立ち、白いソックスでチンポを踏みつける。

淫猥な足コキで一気に理性を崩壊させるつもりなのだ。

きゅ♥　ふみ♥　ふみ♥　ふみ♥　ふみふみふみ♥　ぎゅっぎゅっぎゅっ♥

「はぐぅう……あがぁあぁぁ～～～ッ！　グッ、くぅぅ……！」

「キャハハハ♥　男の子ってコレに弱いよね～♥　ほらほら～、もっと踏んであげるよ～♥」

「ぁっ！　ぐぅう～～～ッ！」

「女の子パンティ持ち上げちゃって恥ずかしいね♥　情けないね～♥　惨めだね～♥　幼女の足でフル勃起なんてプライドはないのかな～♥？」

「だ、黙れ……っぁぁぁぁ～～～ッ！」

「ごめ～ん、あるわけないよね♥　キミってお姉ちゃんの下着着てる変態クンだし♥　こういう変態プレイが大好きなんだよね♥」

「う、うるさい……ア……アァァ……ハグゥゥ……んぐぅうぅ～～」

「ほ～ら、いやらしいお汁が出てきたよ♥　おチンポの先っぽのとこにもっとも～っと滲んできたよ♥　もしかして射精したいのかな？　ねえ、イキたいんだよね？」

「ガ、グウゥゥウゥゥウゥゥウゥゥウッ！　そ、そんなわけ……！」

悪魔幼女の言う通り勃起した亀頭は先走りを垂らし、

イチゴパンティには薄いシミが地図を描いていた。男の象徴を足で踏まれ被虐的な魔悦が神経を昇ってくる。

見た目園児に責められる倒錯行為が悦ばしい。

ふにゅん♥　ふみふみ♥　むにむに♥　しゅこしゅこ♥　しゅこしゅこ♥　す～りすり♥

「そんなわけないよね♥　まさか足で射精なんてしないよね♥　あ、そうだ。だったら～、キンタマ踏まれても平気だよね♥　気持ちよくなるわけないよね♥」

「え……き、金玉……？」

「そうだよ～♥　キンタマも踏み踏みしてあげる♥　精子作ってるとこギュッギュッってしてあげるね♥」

「や、やめろ……あぐぅぅ……」

必死に制止の声をかけるが、もちろん聞き入れられることなく金玉を踏まれてしまう。しわくちゃの陰嚢を伝って、圧倒的な肉悦が心を揺さぶる。

「はい、ギュッギュッ♥　ギュッギュッ♥　どう？　どうかな？　屈辱的だよね～♥」

「はぁあああぁ～～！　うぐ……や、やめ……！」

「キャハハハ♥　キンタマおもちみたいでカワイイ♥　ブニブニもちもちしてる♥」

「あ……あぐうううぅうう～～～～ッ！」

「動いちゃダメだよ～、うっかり踏みつぶしちゃうかもだから♥　キンタマ潰れたらもうオナニーできないよ～♥　一生シコシコできなくなるよ～♥」

「ア、うぐうぅうぅうぅう～～～～ッ！」

「アハ、歯を食いしばってるのかな？　だいじょうぶだよ♥　そんなに怖がらなくても潰したりしないって♥　たぶんね♥　キンタマ踏み踏み♥　ふみふみふみ♥　ふみふみふみ♥」

「ッ――――――」

恐怖と快楽がないまぜとなり少年の理性が削られていく。グニグニと玉袋を愛撫される感触が思考を停止させていく。

足の隙間からはチラチラと白い子供パンツが見え、

それが余計に興奮を煽った。ツインテール幼女の足責めは、ロリコンの気のない者でも虜にし、快楽の沼へ堕としていくのだ。

張り詰めた陰茎には血液が大量流入し、すでに我慢の限界である。

「どう？　もうでそう？　でちゃうかな～？　ザーメンぴゅっぴゅっするのかな～？」

「は……が、だ、で、で……でる！　で、でる……！」

「あれれ？　マジで出しちゃうの？　もうムリなのかな♥」

「でるッッ！　出る……！　もう、む、無理だ……！」

頭の中が乳白色で塗りつぶされ射精めがけて突き進んでいく。本当に足コキでイッてしまう。我慢したかったがもうムリだ。

これがレートSの責めなのか。とても人間には逆らえそうにない。

そして、白濁液が噴出する直前――

「まだダ～メ♥　キヒヒ、まだ出させてあげないよ～♥」

「ぐ、あ、え？　へ……っ!?」

陰茎、陰嚢から足を離す園児服幼女。急に刺激の途切れたチンポは生殺し状態だ。お預けを喰わされ、悲しげに鈴口がヒクつく。

「な、なんで……！　あ……その……や、やめるなよ……！」

「だって～、まだあの言葉を聞いてないし♥　言わないと射精はさせてあげられないな～♥」

「あの言葉って……ま、まさか……！」

「うん♥『ぼくはマゾ犬です』って言わないとダメだね♥　キミは変態じゃないらしいし、言いたくないなら別にいいけどね～♥」

「ぐ、それは……っぐ……ぐぅぅ……」

「このまま射精我慢してもいいんじゃない？『ぼくは変態です。ドMの惨めな負け犬です』って忠誠誓

ってくれないとず～っと苦しいままだけどね♥」
「うぅ……あ、ぐぅう……」
様々な葛藤が心の中で渦巻いていく。たしかに射精はしたいが、その言葉を言った瞬間に少年の負けは決定してしまう。
一体どうすればと神経が千切れそうだ。
（ッ……だ、ダメだ！　も……もう無理だ！　これ以上我慢なんて……できない！　出したい出したい出したい出したい出したい出したい！）
十秒ほどの逡巡の後、陽一は快楽に屈した。実際エリスの淫魔力は凄まじく、天煌聖姫でもない人間が耐えるのは不可能なのだ。
だからこそもちかけた勝負だったわけだが、結果は悪魔幼女の思い通りになってしまった。
「ぼ、ぼくは……あの……」
「何かな♥　どうしたいのかな～？」
「ぼくは……ま、マゾ犬です！　ドMの惨めな負け犬ですっ！」
「あれ～、いいの？　簡単に言っちゃって♥　今なら聞かなかったことにしてあげるよ？」
「マゾ犬マゾ犬マゾ犬です！　だから……だからッ！」
「だから？」
「射精させてください！　エリスさまお願いです！　も……もう限界なんだ！」
屈服の言葉を吐いてしまう。
首筋の淫紋がいっそう強く光り、彼の運命はここで決定した。
「キャハハハハハ♥　アハハハハハ♥　ハハハハハ♥　いいよマゾ犬くん♥　た～くさんおチンチン踏んであげるからぁ、みっともなく射精しなよ♥　ほんとにキミって変態だね♥」
楽しげに笑いながらチンポを足愛撫する色欲の夜天。ソックスを汚しながら肉棒を擦り上げていく。少年の

苦悶と快楽に堕ちる表情がおもしろく、どんどんペースを上げていく。

せつなく震える肉棒が滑稽だ。

ふにゅん♥　ふみふみ♥　むにむに♥　むにゅむにゅん♥　ふにふにふにゅん♥　す～りすり♥

「あ……あ、あぁあああッ！　あああぁあああぁあああぁあああッ！」

「女の子に踏まれてイキたいなんて真性のマゾ犬さんだね～♥　ほら『ぼくのチンポはエリスさま専用です』って言ってみなよ～♥　犬なんだから鳴きまねも忘れずにね♥」

「は、はい！　ぼくのチンポはエリスさま専用です！　専用のマゾ犬です！　マゾ犬です！　マゾ奴隷犬です！　マゾ奴隷犬です！　ワン！　ワンワン！」

「次は～、『下着女装でオナニーするキモ男です』かな～♥　お姉ちゃんにごめんなさいもよろしくね♥」

「はい！　し、下着女装でオナニーするキモ男です！　ね、姉ちゃんごめん！　ぼくは姉ちゃんのパンツとブラジャーを盗んで女装オナニーする変態なんだ！」

「あ～あ、やっぱり変態くんだったね♥　お姉ちゃんの下着でマス掻いてるなんて最ッ低♥　マジでキモいよ♥　キモすぎ～♥　死んで♥」

「あ、ぅぅ……はぁ……はぁ……」

「このソックスも捨てないといけないな♥　チンポ汁でドロドロだしもうサイアク♥」

「ご、ごめんなさい……えぐうぅう……」

「エヘヘ、でもエリスはやさしいからキミが下着ドロのゴミクズでも許してあげる♥　マゾエキスで靴下汚すM男でも見捨てない♥　よかったね、普通の女の子だったらもう相手にされないよ♥」

「あ、ありがとうございます……エリスさま……！　あ、も、もう……！」

「そうだよ～、感謝してねマゾ犬くん♥　おっと、もう出ちゃうかな？　いいよ～いいよ～、許可してあげ

る♥　いっぱいザーメン出していいよ♥　園児に足コキされるロリコンになって、ド変態射精しちゃえ～♥」

「ぁあ、ぁあ、ぁあッッ、あぁあ～～～～ッ！　で、でるッッ！」

園児コスプレの錯乱快美とプニプニとした足の感触、幼い肢体から漂う魔性の色香で、ついに陽一のペニスが暴発した。

テントを高く張り詰めさせ、イチゴパンティに向かってスペルマが噴き出していく。

ビュク！　ビュク！　ビュククククウウウウゥゥゥ～～～～ッ！　ブビュルルル！　ブビュル！

「は、ぁあ、んあああぁあああぁぁ～～～～ッ！　で、でるッ！　あああぁあああぁぁあああぁああッ！」

「うわ～♥　でたでたでたでた♥　足コキでい～～っぱい出ちゃったね♥　マゾ犬くんのきったない負け犬ザーメン♥　下着女装で興奮しちゃったのかな？　それともエリスの足コキに興奮しちゃったのかな？　もしかして園児パンツかな？　きっとぜんぶだね♥」

「はぁ、ぅぅ、アアアア～～～～ッ！」

「マジでキミって最低だね♥　この変態、変態、変態、変態、変態、ド変態♥　ゴミ♥　クズ♥　カス♥　キモイ、キモイ、キモイ、キモイ、キモイんだよこの下着女装野郎♥」

「うぐ……ぐうううぅうううぅうううッ！」

悪魔幼女の罵倒がさらなる魔悦を与えていく。一度でも被虐快感に屈すればもう元には戻れない。寝首を掻こうという少年の考えは甘かったのだ。

淫紋から伝わる魔力で意識が書き換えられる。これまでの記憶が奥底に押し込められ、悪魔幼女への忠誠だけが残される。

デモンコアに従うことが自分の使命だと思わされ、神城陽一は完全に下僕と化したのだ。

陵辱者は堕ちたことを確かめると、

「エリスの命令聞いてもらおうかな。マゾ犬くん、ご

主人様に返事は？」

「はい……エリスさま。何でも命令してください……」

虚ろな瞳で頷く陽一。通常ならこれでもう絶対に逆らうことはできない。だが、相手は神聖粒子に関わりのある人物である。

ツインテール幼女は忠誠心を試すためもう一つの命令を出した。

淫猥で屈辱にまみれた命令を。

「エリスのパンツを被ってくれないかな？　ちゃんとお股のところが鼻に当たるようにして、『変態仮面参上』って言ってみて♥」

「は、はい……」

「あと、ガニ股でWピースもよろしく♥　あ、カメラ持ってきてるんだけど撮っちゃっていいかな？　人生最低の撮影会はじめちゃっていいかな？♥」

「お、お願いします……ぼくの恥ずかしい姿を撮影してください……一生の思い出にしてください……」

「キャハハ、オッケー♥　キミのスケベな姿を記念に残してあげるね♥」

エリスはするすると下着を降ろすと少年に渡した。白地にウサギのキャラクターがプリントされた、モコモコの子供パンツだ。クロッチの部分に薄黄色のシミがあり、ツンとした匂いが漂う。正常な人間でも犯罪に走ってしまいそうな妖しい雰囲気があった。

それを少年はためらうことなく頭に被ると、言われるがままにガニ股Wピースで変態セリフを述べた。

「へ、変態仮面参上！　ぼ、ぼくは下着女装して幼女のパンツを被るのが大好きな変態仮面だぞ！　みんな応援よろしく！」

「キャハハハハハ♥　うわっ、マジでやってる♥　キモ♥　キンモッ♥　気持ちワルッ♥　変態さいて～い♥　いいよ～、マジでキモくてブザマすぎ♥」

「あ、ありがとうございましゅ……あはは……」

「そうだよ笑って♥　マゾ犬くんこっち見てはい、チ

ーズ♥」

カシャ！　パシャ！　パシャ！　パシャ！

少年の痴態がデジタルカメラの中に収められ、変態だという決定的証拠が残ってしまった。子供パンツを顔に被るという最低の事実がレンズに刻み込まれる。

「う、はあぁぁぁぁん……あ、ああ……」

「あ～あ、これで人間終了だね♥　もしこの格好をママやお姉ちゃんに見られたらどうなるかな♥？」

「に、二度と顔合わせられないです……」

「そうだね～、ド変態決定だね♥　それにエリスに逆らったらキミの学校に写真バラまいちゃうから♥　同級生にドン引きされたくなかったら、よく覚えておいてね♥」

「は、はいい！」

完全に堕ちたことを確認すると、エリスは次なる調教に入った。すでに目的は達したが、このままでは自分の疼きが治まらない。

「じゃあ、さっそく試してみようかな。身体も熱くなっちゃったし、責任とってもらうよ♥」

触手チンポを一本に、人間のモノのように変化させスカートをめくりあげた。

陽一へ淫靡に微笑みながら禁断の関係を迫る。

「エリスとセックスできるかな？　このフタナリちんぽをマゾ犬くんのおケツマンコに挿入してもいい？」

「よろしくお願いします……お尻でセックスさせてください……」

バックのポーズで腰を突き出し、パンティをずらして肛門を露出する。腰を振りながらご主人様に許しを請う。

もはや完全に下僕状態だ。

（うん、ちゃんと効いてるみたいだね。ペットばっかり気持ちよくなるのも悔しいし……エリスも楽しませてもらおうかなっ！）

挿入前に肛門をほぐすことにする。

白魚のような細指が菊門を押し広げ、腸内壁へ侵入していった。

「はっ、うぐぅうううぅうッ！」

「キャハハ、おケツマンコにずっぷり入ってるよ～♥　ほら、逃げないでもっとお尻突き出してね♥」

「うぐ、ぐっ、は、あぐうぅぅ～～ッ！」

「そんなにお尻振って気持ちイイのかな～？　マゾ犬くんって貪欲だね～♥　エヘヘ、もっとマゾダンスを躍らせてあげるね♥」

指の感触に悶え乱れフリフリと腰フリダンスをしてしまう陽一。

幼女の手のひらで踊らされて情けない限りだが、左右に動く尻の動きを止められない。

「あれ～？　ひょっとしてまた勃起してるの？　チンポ勃ってるよね？」

「は、はい……あ、あの……」

「はっきりいいなよマゾ犬くん。ご主人様に逆らうつもり？」

「ぼ、勃起してます！　指でお尻弄られて勃起してます……っ！」

「やっぱりね♥　エリスのチンポ奴隷は最悪変態のマゾだってよくわかったよ♥　も～、気持ち悪いなぁ♥　ホントなんで生きてるの？」

「あぅぅ……へ、変態でごめんなさい！　ぼくは……お、女の子さまにイジメられて勃起する最低マゾペットです！　劣等M男でごめんなさい！」

屈辱的な言葉を言いながらさらにマゾ快楽に浸っていく。

さらに、脳内にエリスの淫乱知識が流れ込み、恥ずかしいマゾワードをどんどんしゃべってしまうのだ。

ぐちょぐちょになった肛門からはマゾ液が漏れ、あっという間に挿入準備は万端である。

「それじゃ、変態童貞のマゾ犬くんにエリスの極太ふたなりチンポを挿入してあげるね♥　自分より大きい

ロリ巨根に感謝してね～♥　短小チンポさん♥」
「はい……ぼくのような、ど、童貞アナル奴隷にチンポを突っ込んでいただきありがとうございます……神城陽一は肛門処女を捧げます！　短小ポークビッツのマゾ犬になります！」
「は～い、よく言えました♥」
舌なめずりをすると股間を露出させる。そこにあるのは毛の生えていないスベスベの恥丘、ではなく凶悪なフタナリちんぽだ。
触手を束ね一本の陰茎にしたソレは、長さ二十七センチもある大業物で、キンタマこそついていないが、かなり立派である。
エリスは指につばをまぶし肛門を拡張すると、グググッと悪魔勃起を押し入れた。肉が押しのけられる音が響き、ケダモノのような声が少年から発せられた。
ミチ♥　ミチミチ♥　グジュ♥　ジュブジュブ♥
「ア、あぐぅうううぅぅ～～～～ッ！」
「キャハハ♥　ん……あぁん♥　はあぁぁぁぁん♥　久しぶりのおケツマンコ気持ちイイ♥　あはぁん♥　トロける♥　トロけちゃう♥」
「く、ゥウウウゥウウウ～～～～ッ！」
菊門の痛みに耐える陽一に、悪魔幼女は容赦なく抽送を開始する。凶悪なカリの部分で腸内壁をこそげるように、ゴリゴリと擦っていく。
久方ぶりの挿入なので手加減する気がまったくない。
「あ、はくうぅぅん♥　アン♥　アン♥　アン♥　アン♥　アン♥　アン♥　ハァ～～ン♥　アナルセックス最高ぉ♥　うん♥　おチンチンも喜んじゃってるよ♥　きゃはあ～～ん♥」
「ウゥ～～～～～、ングウウゥゥ～～～～～～ン」
「はぁ♥　はぁ♥　はぁ♥　はぁ♥　ああん♥　どうかなマゾ犬くんも楽しんでる？　ケツ穴で交尾気持ちイイよね？」
「ひ、ひゃい……き、気持ちいいです……」

息も絶え絶えに答える少年。その様子が惨めで可愛らしくて、さらに嗜虐の炎が燃え上がってしまう。悪魔幼女はニンマリと笑うと、男のプライドを引き裂きにかかった。

「これで童貞なのに肛門処女喪失だね♥　おめでとう、拍手してあ～げる♥」

パチ♥　パチ♥　パチパチパチ～～♥

「ぱちぱち～♥　どう、うれしい？　うれしいかな？　感想どうぞ♥」

「う、オオォ……う、うれひいです……は、ぁぁ……っ！」

「はい、ありがとう♥　以上フタナリちんぽにハメハメされて喘ぐ変態ペットのコメントでした♥　これでもうお尻マンコじゃないとイケないね♥　チンポの虜になっちゃったね♥　もうホモになるしかないかも♥　キャハハ♥　マゾ犬くんの人生終わってる～～♥」

「ッ～～～～～～～～～～～～」

もはや声も出せない陽一へ、絶え間なく屈辱の言葉がとぶ。男としてのプライドを粉砕され、何も考えられなくなっていく。

意識は擦り切れ、もはやオナホールと変わらない状態だ。

「ジ……アアン♥　そろそろ限界かも♥　んん……出すねマゾ犬くん♥　エリスのおチンポ汁を注ぎ込んであげる♥」

「は、ひゃいい……っ！」

「あ～あ、泣きそうな顔なのにチンポは勃起しちゃってるんだ♥　マジでキミってみっともないね♥　アナルレイプされながら射精したいんだ？」

「ご、ごめんなひゃい……しゃ、射精したいです……」

「いいよ、エリスと一緒にピュッピュッさせてあげる♥　その代わりチンポ汁おケツマンコでしっかり飲み込んでね♥　ザーメンミルク注ぎ込んであげるから♥」

「は……はぃぃ……っ！」

「でも先に出すのは禁止だからね♥　タイミング合わせないと、その小っちゃいおチンチン引き千切っちゃうから♥」

さらっと恐ろしいことを言いながら、エリスは腰を振るスピードを上げていく。肉竿がムクムクと膨れ肛内壁をさらに押し上げた。

少年のペニスも動きに合わせて鮮魚のように跳ねまわり、前立腺を刺激されながらエクスタシーへと向かっていく。飼い主の命令がなければとても耐えられない快楽だ。

そして、凶悪なフタナリ肉棒が風船のように張り詰め、ドッと弾けた。

ド……ドビュッ♥　ドビュッ♥　ブピュル、ピュ、ピュ、ドビュビュビュビュゥゥ～～～～ッ♥　ブピュルルル～～～～ッ♥　ドブブ、ブブブ♥　ビュクビュクビュクビュクビュク～～～～ッ♥　ブププゥ♥

悪魔幼女は歓喜の声を上げながらアナルへ大量注精する。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん♥　出す出す出すチンポ汁出すうぅぅぅぅぅっ♥　変態マゾ犬のケツマンコにザーメン排泄するうぅぅぅぅぅっ♥　ぁー♥　ぁー♥　ぁぁぁぁぁぁんっ♥　は～♥　感謝してよねこのゴミ虫♥　この変態♥　変態♥　変態♥　下着女装でケツマンコ掘られるド変態♥　パンツ被った変態仮面の肛門マゾ犬くん♥　エリスの特濃ちんぽこミルクしっかり飲み干してね♥　ケツアクメの虜になっちゃえ♥　お……ふぅぅん♥　ほ……ほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ♥　イク♥　イク♥　またイク♥　ふたなりおチンポイッックぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ♥♥」

同時に情けない音を立てながら、少年の陰茎からも精液が迸った。もっとも濁流のようなエリスの射精爆音で、音はかき消されてしまっていたが。

アナルに精液を大量注入された陽一はそのまま気を失ってしまう。彼の心は奥底に封印され、デモンコアの眷属となり果てた。

「キャハハ、これで完全に堕ちちゃったね。天煌聖姫とどんなシチュエーションで対面させてあげようかな♥　お姉ちゃんとオバサンの顔を見るのが楽しみすぎるよ♥　キャハハハハハ♥　アハハハハハハアハハハハハハハハハハハハ♥」

目的を達成し、終わることなく笑い続ける悪魔幼女。

さらに、ヴァーミリオン、セルシアンに新たな敵が出現した。陽一という眷属相手に正義のヒロインは勝利することができるのか!?

第十三話　外人墓地の決闘、そして新たなる調教の幕開け

日が沈み闇が世界が支配する。

外人墓地は郊外にあり、苔むした教会が一軒と古い十字架の彫像がいくつも立ち並んでいた。管理を放棄され、近づく者は滅多にいない。

と、そこにゆらゆらと揺蕩（たゆた）う光りがあった。夜闇をぽつぽつと照らすチョウチンアンコウのようなそれは、懐中電灯の照明だ。

こんな時間に、いや、こんな時間だからなのか、肝試しをしている者がいるのである。今夜足を運んでいるのは年若い学生ばかり。

天王寺学園の生徒たちだった。十人ほどのグループが固まって進み、各々怖がったりおしゃべりに花を咲かせている。これだけ大人数だと本来の肝を試す意味がなさそうだ。

その中には天煌聖姫ヴァーミリオンこと神城愛華と友人の四木茜の姿もあった。

「へ、へー、思ったより大したことな、ないね……オバケも、で、でないみたいだし……」

「茜ちゃん怖いんですか……？」

「べ、別に怖くねーし！　ほ、ホントは嫌だけど断れなかったわけじゃないからっ！」

「……かなりダメみたいですね」

声を上ずらせる親友に苦笑する栗髪美少女。どうやら茜はかなり幽霊が苦手なようで、足が震えさっきからずっと愛華の手を握っている。

集団の最後尾にいるのもそれが原因である。

「心配しなくてもわたしがそばにいますから。安心してください」

「うぅ……ど、どうもこういうのはアレなんだよな…

…生きてる奴ならブン殴れるのに」

力技で解決しようとする体育会系少女を支える。デモンコアのことを知らなければ、自分も同じようなリアクションをしていたのだろうかと愛華は考えた。

日夜モンスターと戦っていたせいで、すっかりそういう感情はなくなっていたけれども。

そうして、教会の前に到着した。ここから先には何もなく、扉も瓦礫で塞がれ中に立ち入ることはできない。はじめは楽しんでいた生徒たちもだんだん飽きていた。

「なー、お前らどうする？　なんにも出ねえけど」

「まぁ、所詮ウワサだしなー。もういいんじゃねえか？」

「そろそろ帰ろうよ。わたしお風呂入りたいし」

先頭のクラスメイトたちが好き勝手に感想を言い合っている。明日は休日だが、さすがに夜更かししすぎた。教会の前まで来たのだし、引き返すという意見が多数だ。

（本当に噂だけなのでしょうか……？　先ほどから何か違和感が……）

どうにもすっきりしないモヤモヤとした違和感を覚える愛華。天煌聖姫としての第六感が何かを感じ取っていた。

（でも、幽霊も出ないなら帰ったほうがいいですね。また後日しらべに来ましょう……）

自らも来た道を戻ろうとする。そして、事件は起こった。グループ最前列の前方に、前触れもなくガイコツの群れが現れたのである。

百体以上はいるだろうか。手には錆びた剣を持ち、ファンタジーに出てくるクリーチャーそのものだ。

「うわあああああああ！　な、ど、どうなってんだ!?」

「おいおいマジかよっ！　冗談だろっ!?」

「キャアアア！　ちょ、ちょっと男子なんとかしなさ

いよ！」

「バカ！　無理言うなって！」

悲鳴と怒号が外人墓地に響きわたり、男女問わず蜘蛛の子を散らすように駆けだしていく。懐中電灯がなければ足元もよく見えないのに、凄まじい勢いで走っていく。

完全にパニック状態だ。

「愛華あたしたちも逃げよう！　しゃれになんないって！」

「はい、茜ちゃん。手を離さないでください！」

二人は懐中電灯を頼りに出口を目指す。だが、下草に足をとられ中々思うように進めない。みんなの悲鳴や骨のきしむ音が恐怖を煽り、余計に歩みを鈍くする。

そして、ようやく出口にたどり着いたところで茜は気付いた。

「愛華……？」

たしかに手を握ったはずの親友の姿がどこにもないことに。

◆◆◆◆

「ふむ……今宵の獲物は活きがいいですね。これなら楽しめそうだ」

慌てふためく人間たちを観察しながら、仮面の下でマンシアは口元を歪めた。十字架の上に腰かけ阿鼻叫喚の様を観覧している。

ただ喰らうだけならすぐにでもできるが、毎度同じパターンではつまらない。叫び声を上げさせ恐怖で搦め捕ってから味わいたい。これが今夜のディナープランであった。

どのみちエデンフィールドでここから逃れることはできないのだから。

「我が下僕たちよ、もっともっと絶望のハーモニーを奏でるのです。そして――」

マンシアは最後まで言葉を紡ぐことができなかった。なぜなら、激しい破壊音と共に座っていた十字架が砕

かれたからだ。粉々に散らばった石くれの中心には一人の少女がいた。

天煌聖姫ヴァーミリオンが。

「光は光に！　闇は闇に！　悪いデモンコアは星屑に！　魔を討つは正義の拳！　天煌聖姫ヴァーミリオンここに参上！」

紅髪を夜風になびかせ名乗りを決める。両腕のガントレットがキラキラと星の輝きを見せた。淫紋の効果はエリスにしかないため、全力で戦えるのだ。

神聖粒子が身体を太陽フレアのように包み、デモンコアさえ上回るスペックを引き出す。並の相手なら対峙しただけで、裸足になって逃げ出すだろう。

しかし、マンシアは指をさしながら、

「なるほど獲物の中に紛れていましたか、中々やりますね。ですが、調教で弱ったその身体で戦えますかな？」

「ッ――――あ、あなたには関係ありません！」

指摘されたのは股間のフタナリちんぽだ。レオタードスーツの上から陰茎と陰嚢がもっこり浮き上がっているのがわかる。

これでは股布に擦れて力が出せないとマンシアは指摘していた。度重なる調教で体力も低下し、コンディションが万全には程遠いことも知られているようだ。

魔力量から敵の力量がレートAだということもわかる。

苦戦の気配にぎゅっと拳を握る紅髪ヒロイン。

「フフ、せっかくなので、わたくしにも調教させてくれませんかねぇ。そうしたらお友達は見逃してあげてもいいですよ？　天煌聖姫さん」

「ふざけないでください！　どんな身体になっても……わたしは……わたしは負けません！」

悪魔の甘言には乗らず拳を握り突進する正義の天煌聖姫。だが、ガイコツの群れが進行方向に立ち塞がり、マンシアまでの道を阻んだ。

「クッ、このォッ！　邪魔です！」
「グルル！　ガアアアア！」「グオオオオオ！」「ハァアアア……！」
「せ……セイクリッド・シャイン・バーストッッ!!」
手のひらに太陽のようなエネルギーが集束し放出される。
（ン、くぅぅ……な、長い時間は活動できません……ここですぐに決めないと！）
股の疼きに耐えながら必殺技を使う。一瞬、真昼のように墓地が照らされた。衝撃で突風が吹き荒れ、砂埃が舞い散る。
しかし、土煙が晴れた後に現れたのはほとんど無傷のガイコツたちだった。数も全体の六分の一くらいしか減らせていない。
切り札の不発に青ざめる正義のヒロイン。
「そ、そんな……これでもダメなんですか……？」
「ハハハハ、これはイイ！　傑作だ！　ダルルゴアを倒した実力もその身体では出せないようですね！　さあ下僕たちよ天煌聖姫を捕らえるのです！　グチャグチャに陵辱してやりましょう！」
「ぐぅ……で、でも……それでも勝ってみせます！　どんなに負けても情けなくても！　わたしは正義のヒロイン、天煌聖姫ヴァーミリオンなんですから！」
敵がどんなに圧倒的でもあきらめない。残る力を振り絞って突撃する。ガイコツたちは剣や槍を構え迎え撃ち、マンシアは少し離れた場所でほくそ笑んでいた。仮面の下で自分の勝利を確信している様子だ。
そして少女が陵辱の危機に晒されようとした時、
「よく言ったわ。それでこそ天煌聖姫よ」
水でできた無数の鎖がガイコツの群れを拘束した。
「ギ!?　ガアアアア!?」「ギア！　ウゴオオオ!?」
うろたえるガイコツたち。
天煌聖姫セルシアンのスキル、アクアバインドが決まったのだ。娘のピンチに蒼髪を煌めかせる人妻ヒロ

インが間に合ったのである。
「ママ、じゃなくて……セルシアン！　来てくれたんですね！」
「まったく手間のかかる後輩ね。さっさと倒しなさいヴァーミリオン」
「はいっ！」
大きくジャンプし敵の群れを乗り越える。頼りになる母の登場に身体の底から勇気が沸いてくる。心を覆っていた暗雲が晴れていく。
これで形勢は一気に逆転した。
「ば、馬鹿な……こうも簡単にエデンフィールド内へ侵入を許すとは……」
驚いたのはマンシアだ。二人同時に戦うことも想定していたが、よもやここまでセルシアンが強いとは思わなかったのだ。レオタードスーツ、股間の膨らみからフタナリ調教されていたのは事実のようだが、技のキレを考えればとても弱っているとは思えない。
鎖のせいで自分の手駒はすべて役立たずである。
（落ち着くのです……わたくしの相手はヴァーミリオン一人。適当に痛めつけて離脱しましょう。母親はともかく小娘だけなら大して問題ありません）
紅髪ヒロインは正面に降り立ち、疾風のように間合いを詰める。マンシアは骨のナイフを逆手に構え迎撃態勢に入った。
（さあ、来なさい！　骸の馬車の実力ご覧に入れましょう！）
仮面の奥で漆黒の瞳が妖しく光る。鳥めいたくちばしが小刻みに上下する。必殺技の威力が減衰しているのは先ほどのやりとりで理解している。まさか殴り合いで自分が負けるはずもないのだ。
だが、彼は気付いていなかった。
ヴァーミリオンには光の放出だけでなく技巧、母に習った格闘術があるということを。
「ハァァ！　シャインパンチ！　シャインエルボ

ー！」

「ご……っ!?　なっ……!?　ぐ、ぐへぁッ！」

「シャインキック！　シャインチョップ！」

「ぼおおおぉぉおおお!?　げほぁッ!!　おおおおッ！」

「シャインコンビネーション!!」

「ブグ！　ごうっ!?　はがッ！　ドブッ！　ぶ……ぶぼらあああぁッ！！！！」

神聖粒子で強化された打撃が突き刺さる。あまりの速さにナイフで反撃する間もなく、吹き飛ばされ木の幹に叩きつけられる。

彼は忘れていたのだ。エリスがどれだけ彼女たちを陵辱しても弱らせていても、自分の実力が向上するわけではないということに。

レートAとS、そして天煌聖姫の間には海溝のごとき隔たりがあることに。

「こ、これが人間の……技術……ワ、ザ……ですか…あ、侮りました……ね……」

「これでトドメです！　セイクリッド・シャイン・ハンド！」

ゴオオオオオオオオオンッ!!

ヴァーミリオンの右手のひらに光が集まると巨大な球体に変化し、そのままマンシアの身体を押しつぶし消滅させた。レートAのデモンコアは逃げる暇もなく敗北する。

主人を失ったガイコツたちも崩れ落ち土に還る。エデンフィールドも解除された。これでクラスメイトたちも家に帰ることができるだろう。

勝利を確認した紅髪美少女はそのまま母の元へと駆け寄った。

「やりました！　わたし勝ちました！」

「ええ、よくやったわ。見事な勝利ね」

そこで二人はお互いに股間が盛り上がっていることを知った。同時にエリスにフタナリ調教されていること

とを知った。
　互いに何があったのか察し、気まずい沈黙が流れる。
「……」
「……」
　やがてセルシアンが口を開いた。
「ごめんなさい……私が不甲斐ないせいで……あなたにはつらい思いをさせたわね」
「そんな……ママのせいじゃありません！　わたしが油断しちゃったから……」
「でも、もう大丈夫よ。淫紋を消す薬を開発したの。今度こそアイツを倒しましょう」
　蒼髪ヒロインの手には空色の液体が入った小瓶があった。痒み調教のあとお化けナメクジの秘薬を分析し、その中に淫紋を打ち消す成分があることを発見、抽出したのだ。
　これでもう悪魔幼女の言いなりにはならない。
「やった、これで戦えますね！　もうあんな目にはあいません！」
　フタナリ調教からの解放の喜びに浮かれるヴァーミリオン。ようやく逆転の目がでてきた。淫紋が消えれば正々堂々と戦うこともできる。
　これまでの恥辱を万倍にして返す番だ。
「キャハハハ☆　それはどうかな～？」
　しかし、目ざといデモンコアが、エリスがそれを見逃すわけもなかった。コウモリの翼を羽ばたかせ、墓石の上に舞い降りる。
　片手には二人の家族、神城陽一を携えて。
　ヴァーミリオン、セルシアンは突然のことに叫ぶことしかできない。
「ど、どういうつもりですか⁉　か、家族には手を出さないって約束したじゃないですか！」
「今すぐその汚い手を陽一から離しなさい！　この世界から消滅させるわよ！」
「やるならやってみれば？　エリスのマゾ犬くんと戦

えるなら、だ・け・ど」

陽一はガントレットを二人に向けると、手の甲にある銃口の照準を合わせた。目は虚ろで明らかに正気ではない。

家族の顔もよくわかっていない様子で、

「エリスさまの敵……タオス……」

言葉もカタコトのマリオネット状態だ。

家族を人質にとられ二人のヒロインは唇を噛む。

「こ、このぉ……こんなの卑怯ですっ！」

「本当に最悪のクズねあなた……絶対に許さないわよ……っ！」

「ちゃ～～んとゲーム終了まで我慢できたら解放してあげるよ。でも、バレちゃったから～、これからは二人一緒に調教しようかな♥　今までよりキッツイ内容になるけど、せいぜいがんばってね～♥」

「うぅ……うぅぅ……そんなぁ……」

「クッ……この下種……っ！」

母娘ヒロインの同時調教を宣言しながら触手で小瓶を回収する。そして、ゴブリンを呼ぶと研究施設に向かわせ、同じ薬品を破棄するように命じた。

逆転の目は徹底的に潰し、万に一つの可能性も許さない。

（淫紋を打ち消す薬なんて危ないところだったね。油断ならないな～、これは本気だしたほうがいいかも☆）

天煌聖姫の脅威を再確認し、次なる陵辱プランを練る悪魔幼女。もっとひどいことをしてやろうと嗜虐的な笑みを浮かべながら、金髪を指で撫でる。

フタナリ調教二十日経過。

紅髪ヒロインと蒼髪ヒロインは同時に、さらなる淫辱の門をくぐった。

第十四話　学園でブタ鼻綱渡り！　鼻フック羞恥制服で歩く母娘ヒロイン！

フタナリ調教二十三日経過。

天王寺学園では今日も変わらず、多くの生徒が登校していた。今の時間は授業中で各クラスでは真面目に勉強したり、早弁を食べたりみんな思い思いに過ごしている。

それは天煌聖姫ヴァーミリオンこと神城愛華のクラスでも同じであった。

「あれ？　愛華は今日休み？」

「うん、なんか風邪気味だってさ。心配だよな」

クラスメイトに訊かれた茜が唇を尖らせて答える。

親友の不在につき、いつもより若干テンションが低めだ。やがてチャイムが鳴ると担任も到着し、生徒たちは各々の席についた。

当然、教室に繋がる廊下に人影はなく、いくつも大窓が並ぶ通路は閑散としている。マンモス学園だけあって、美術の一点透視図法のように奥行きが広く、ある意味感動を覚える光景だ。

いや、しかし、無人のように見えるそこにはたしかに魔力と神聖粒子の反応があった。

天煌聖姫とデモンコアの。

「うぅ……こ、こんな姿……だ、誰かに見られたら……」

「このっ……ど、どこまで私たちを馬鹿にすれば気がすむの……」

透明な肌着、インナータイプのエデンフィールドを纏い、ヴァーミリオンとセルシアンは廊下にいた。この状態なら認識阻害が働き、幽霊のように他の人間から気付かれることはない。

そして、二人は絶対に他の生徒たちに見られるわけ

にはいかなかったのだ。着ている衣装があまりにもハレンチで卑猥だからである。

素肌を隠すのは天王寺学園の学生服、いつも着ているブレザー制服である。ただし、サイズは二回りも小さくおヘソが丸出しで、胸もDカップ美乳とHカップ巨乳がパツンパツンに強調されていた。ブラジャーをつけていないので、乳首の形も浮き出てしまっている。

さらにスカートも短くヴァーミリオンはピンクのクマさんパンツ、セルシアンは水色と白の縞々パンツが露出し、下着の間からはフタナリちんぽがコンニチワしていた。

特にセルシアンは年齢とのギャップが激しく、コスプレ風俗のようだ。とんでもない羞恥制服に美少女と美熟女ヒロインは唇を噛む。

「キャハハ☆　ぜんっぜんっ似合ってないし、マジでみっともないよね～。それに服装もヤバいけどその顔どうしたの？　ひょっとしてブタさんになっちゃったのかな～？」

隣から悪魔幼女がニンマリと笑って指をさす。もちろん彼女の姿もフィールドで見えることはない。金髪ツインテールが窓から風を受けふわりと揺れた。

指摘したのは二人の鼻についてだ。整った鼻梁は鼻フックを引っ掛けられブタのように歪んでしまっている。人に絶対見られたくない二つの洞窟が丸見えである。

「わかってるくせにっ……くぅぅ……は、恥ずかしいです……ふぐぅ……」

「フゴ……ほ、ほんといい趣味しているわね……」

紅髪と蒼髪の天煌聖姫は醜くひしゃげた豚鼻をフゴフゴと鳴らす。フックがきつくどうしても上ずったしゃべり方になってしまい、それがいっそう羞恥心を煽るのだ。

もし誰かに見られたら最悪である。

確実に変態女だと思われるだろう。

「何かするなら早くしてください。あの……こ、この格好じゃ落ち着きません！」

「そうね。さっさとしなさい」

人には見えないとわかっていても、モジモジと太腿をすり合わせる正義のヒロイン。やはり変態コスプレ姿では気が気でない。

扉を隔てたすぐ近くには見知った学友や、道場の門下生がいるのだから。

「はいはい、せっかちだな～」

エリスはプリプリとハート型尻尾を振ると、今回の調教アイテムを出現させた。長い廊下に二本、触手でできたロープが張られる。

二人の股座に合うよう高さが調整され、表面にはデコボコとした突起がある。

「このロープをお股に擦りつけながら歩いてもらおうかな。端から端まで射精せずにゴールできたら三日間は解放してあげる。もちろん失敗したら罰ゲームだからね」

「わかりました……この上を通ればいいんですね……」

「また反吐がでる内容ね。いいわ、こんなの簡単にクリアしてあげるから」

触手ロープの長さは五十メートルといったところだろうか。距離はあるがアクシデントでもなければ、完走できそうである。

二人はそれぞれ自分のロープに跨ると開始の合図を待つ。触手のヌメヌメとした感触と、突起のイボイボが鼠蹊部とチンポに当たりかなり不快だ。

やはり媚薬効果もあるのか熱く身体も火照ってくる。

「それじゃいっくね～、『鼻フックドスケベ綱渡り』スタート！」

屈辱的な競技名を告げ、ついに淫辱にまみれた遊戯がはじまった。

「い、いきます！」

「下劣な触手ごときに何度も屈しないわ！」

ヴァーミリオン、セルシアンはゆっくりとしたペースで触手ロープの上を進んでいく。今までの経験から、速く動けばそれだけ感じやすくなることを知っているのだ。

羞恥制服の恥ずかしさにも負けず、慎重にゴールを目指す。

「ん……思ったより大したことなさそうですね。これなら平気そうです」

「んくっ、そうね……この程度なら……」

順調な滑り出しで一メートル、二メートルと前進していく。しかし、序盤は問題なかったが、四、五メートル付近に差し掛かったところで異変が起こりはじめた。

ランダムにある突起がフタナリちんぽや割れ目を刺激し、ジワリジワリと甘い疼きが湧き上がりだしたのである。露出したおヘソの奥から快楽の雫が漏れ出ているようだ。

「んん、くぅ……はぅ、ああん……っ！　お、おチンポがしびれる……♥　ふくううぅぅん♥」

「やっ……はくぅううぅうんっ……ぁ、ぐんぐん♥　んん♥　くぅぅ♥　あ、アソコが擦れてぇ……♥　んくぅぅ……♥」

「どう？　ゾクゾクしちゃうでしょ♥　これでもまだチンポ射精を我慢できるかな～？」

「ば、バカにしないでください……っ！　これくらいで射精なんて……絶対にしません……っ！」

「そ、そうよ。こんなロープごときに……ぐん、あ、くうぅぅ～～、ま、負けるもんですかっ！」

強気に天煌聖姫は敵をにらむ。

だが身体は確実に火照り、熱に浮かされたように目の焦点がブレだした。子宮が法悦に蕩かされ、トクントクン鼓動を打つ。肉竿も怒張を開始し、ムクムクと勃起が上を向く。

膣孔からは淫蜜がこぼれ出て、密着したキンタマを淫猥にテカらせる。波が打ち寄せるように性衝動が押しては引き、歯を食いしばらなければ理性が蒸発してしまいそうだ。

「あ、あ、あああん♥　く、や……あ、ふぐぅううぅぅううっ♥　へぅ♥　んあ……ぐ、くきゅぅううう～～～ん♥　やはぁあああああん♥」

「や、は……はあぁあああぁあああぁあああん♥　う、ぁ……くううぅううっ♥　ぐ……はぅ♥　ひ、んん、ンむあぁぁ～～～んっ♥」

自らの動きで股座を濡らし、快楽に身悶えする紅髪、蒼髪ヒロイン。媚薬が身体に回り余計に触手突起を意識させられてしまう。

さらに、美貌を歪める鼻フックにも変化が起こった。フタナリちんぽが屹立する動きに合わせて、フックを繋いでいる革紐が上に引っ張られだしたのである。

グイグイとブタ鼻が縦に伸ばされ、呼吸が苦しくなる。

鼻腔内壁も御開帳状態だ。

「ふぐっ！　ふぐっ！　ふご、ほ……ほごおおおぉおおぉ～～～ッ！　な、なんで……は、鼻が引っ張られてぇ……はぐぅうぅぅうううッ！」

「ふぎ！　ふご！　ふぐうぅぅうううぅうううぅうううッ！　ほご、ほご、ほっごおおおぉおぉ～～～ッ！　フガ、鼻が伸びるぅうううッ！　ング、く、苦ひいいいいぃッ！」

「エヘへ、その鼻フックはおチンポの動きと連動してるんだよ。勃起すればするほど吊り上がってブタ鼻になるようにね。イヤならチンチンを躾けないといけないな～♥」

「そんな……ふぐっ！　フン、フン、ふんごおおおおぉおぉ～～～ッ！　はぐ、ひぐ、うぅ……つ、つらいぃい……ふごっ！　ふぐあああぁあああああっ！」

「ふぐ、ほごほごご……おごおおぉおぉおおおおぉ

おおおッ！　ち、チンポ治まってぇ……勃起しないでぇ……ん、ぶはあああぁああ～～～ん！　フゴ！　ブホ！」

フゴフゴと豚の鳴き声めいた声を出しながら、恥辱に耐える正義のヒロイン。吊り上げられた鼻穴の痛みでまともに進めない。

まだ五分の一も進んでいないのに足止めを食らってしまう。

そして、必死に勃起を鎮めようとする彼女たちに、悪魔幼女はさらなる辱めを加えた。ターゲットはもちろん醜く歪んだブタ鼻だ。

「あ～あ、ぶっさいくなブタ顔晒しちゃってみっともないなぁ。女の子が絶対しちゃいけない顔してるよね～。ホント恥ずかしくないの？」

「ふぐぅうううぅうう～～～ッ！　は、恥ずかしいです……こ、こんな顔……いやぁ……だ、誰にも見せられませんっ！」

「お姉ちゃんって学園で人気者だったよね。このお顔を男子たちに知られたらどうなるかな。ププ、もう言い寄ってくる男子もいなくなっちゃうかも♥」

「ひゃうぅうぅうううッ！　ふご、ふごぉ！　い、言わないでください……ぶ、ブタ顔見られたら幻滅されちゃいます……へ、変態ブタ女だって思われてしまいますからぁっ！　フギィィ～～ッ！」

顔を真っ赤にして首を横に振るヴァーミリオン。変身しているおかげで神城愛華だとバレる恐れはないが、それでもやっぱり恥ずかしい。

サイズの合わない制服だけでもキツイのに、ぶひぶひ言っている豚女だとは思われたくない。

続けてエリスはセルシアンに照準を合わせた。

フタナリ美熟女のプライドをギタギタにしていく。

「キャハハ、オバサンの鼻穴もすごいよね～、ちょ～ブッサイクだよ♥　それに、ねえねえさっきから気付いてる？」

「ふぐ、ぶくうううぅ……ほぐうううぅうううう……な、何の話よ……？」

「お鼻毛が見えてるってこと♥　うわ～、中ってこんな感じになってるんだね。美人でも鼻の穴はおじさんと変わらないんじゃない？　ちゃんと手入れしないとダメだよ鼻毛チョロリンのお母さん♥」

「ひっ、い、いやあああぁあああぁあああああッ！　み、見ないで見ないで見ないでえっ！　は、鼻毛なんて見ないでぇえええええッ！」

「エリスだってそんな汚いモノ見たくないけどね～、気持ち悪いし。でもオバサンが見せてくるんだからしょうがないじゃん。チンチン勃起させながらブタ鼻洞窟見て見て～って♥」

「ふぐうぅぅ……ぅぅ……は、早く治まってぇ……鼻穴のぞかれてるからぁ……っ！　お手入れしてない鼻毛丸見えになってるからぁ……この……あ、あとで覚えておきなさいよ！」

恥辱に身体を震わせて抗議するセルシアン。こんなことならもっと丁寧に処理しておけばよかったと、後悔が頭をよぎる。

チンポを下げて事態を打開したいがそれも上手くいかず、情けない黒毛双窟を見せつけてしまう。道場で指導している門下生たちには百パーセント公開できない姿だ。

「どうするどうする～？　そのままじゃ歩けないよね？　またエリスにお願いしてくれるなら、鼻フックを緩めてあげてもいいけど♥」

甘い言葉で変身ヒロインの心を折りにかかる悪魔幼女。また変態セリフを言わせることによって、ペット化を促進しようとしているのだ。

現実にヴァーミリオンは言おうかどうか迷っていた。誘いに乗ることは危険だとわかっていても、深層マゾヒズムが主張してしまう。

（い、言うだけなら……逆らうとエデンフィールドを

解除されるかもしれませんし……ここは従うフリをして……）

都合のよい言い訳をしながら、自らを貶めるラビリンスへ迷い込もうとする紅髪ヒロイン。フタナリ調教の影響で少しずつ常識が改変されはじめる。

しかし、淫辱に堕ちる一歩手前でセルシアンが断言した。

「いいえ、けっこうよ。自分たちでなんとかするわ。ヴァーミリオン、あなたも見てなさい」

誘惑を突っぱねフタナリちんぽを鎮めようとする人妻ヒロイン。瞳を閉じて神聖粒子を股間に集中させる。すると、勃起が治まってきたのだ。

媚薬に混じる魔力へ干渉し、一時的に効果を減退させる。

エリスに危害を加えるわけではないので淫紋も作動しない。

「これで大丈夫よ。さあゴールを目指しましょう」

「はいっ！　さすがセルシアンです！」

同じようにチンポの疼きを抑える紅髪ヒロイン。鼻フックも緩み痛みがやわらいでいく。二人は再びロープを進んでいく。

「へ～、がんばるね。やっぱり親子揃ったほうが強いのかな？」

「そうです！　わたしとセルシアン、二人揃えば最強なんですから！」

「私たちは一人で戦っているわけじゃない。信頼できる仲間がいれば負けないわ」

「ふ～ん。そうなんだ。エリスにはわかんないけど、美しい家族愛だね」

悪魔幼女はつまらなそうな様子で天煌聖姫親子に目をやる。基本的にデモンコアは単独で行動する者が多く、必要な時に格の低い者を使うくらいだ。

互いを思いやる彼女たちの姿はルビーめいた瞳に奇異に映った。

（ま、調子に乗っているといいよ。お楽しみはこれからだから♥）

心の中で唇を歪める。

そう、エリスのフタナリちんぽ調教がこれだけで終わるはずがないのだ。順調に距離を稼ぐ正義のヒロインにさらなる恥辱が待ち受けていた。

スタートから十五メートルの地点。

またもや異変が起こった。スタートした時には気付かなかったが、先に進むにつれだんだんと突起が大きくなってきたのである。

しかも、ナマコのようにウネウネとくねり、乙女の敏感な箇所を狙っているようだ。

触手ロープの新たな動きに紅髪、蒼髪ヒロインは抗議の声を上げた。

「ちょっとこれなんですか！　こ、こんなの……進めません！」

「……そうね。今回の内容はロープを渡るだけじゃなかったの？　ここまでやるとは聞いてないけど」

「ブブー、違いま～す。ロープじゃなくて触手ロープだよ。動かない触手なんていないでしょ？」

あまりに勝手な言い分に二人は声を荒らげる。

「そ、そんな……卑怯です！　はじめと言っていることが違います！」

「文句言うなら媚薬の効果を百倍にしちゃうよ～？　それにこれってエリスの身体の一部だからもっとヤバいカタチにもできるんだよ？　トゲトゲの武器触手に変えてあげようかな～？」

「ッ……あなたって本当にクズね……いいわ、この大きさでやるから」

怒りの視線を向けながらナマコ触手に挑む人妻ヒロイン。エリスに逆らってもいいことがないくらいは、いい加減察していた。

ここはひとまず言うことを聞いておいたほうがいいだろう。

（うぅ……くっ……ぶよぶよして気持ち悪いわね……）

ヴァーミリオンに手本を示すためにも先陣を切る。半勃起したフタナリ肉竿を揺らし、生い茂る触手の草原を進んでいく。

「ん、はぅ……あくぅう……んん……ん、ひっ!?　や、はひゃあぁぁぁ～～ん!?」

三歩も歩かずにセルシアンは悲鳴を上げた。極太触手の突端が山のように連なり、股間の下でスタンバイしていたのである。これでは進むたびに触手ペニスを膣孔へ挿入することになってしまう。

ピッタリと動きに合わせてくるため、躱すこともできない状況だ。

「は、はひぃいいいいいいいいいい♥　こ……これだめぇ、ふぐぅうううぅぅうううぅぅ♥　ま、マンコに触手チンポがズボズボってぇ♥　あん、は、入ってくる♥　はぐぅうううぅううん♥」

「キャハハハハ、名付けて触手チンポウェーブだよ♥　ほ～らほらゴールするんでしょ？　がんばれ♥　がんばれ♥」

「が、がんばれって……む、無理イィイィィイイイィィッ♥　マンコがマンコが、マンコに挿れられてるのぉおおおおぉおおお♥　触手チンポがずぶずぶって♥　わ、私のマンコが連続で喜んじゃってる♥　ひ、ひぃい～～♥」

ガニ股でスクワットでもするように、挿入されながら前進させられる人妻ヒロイン。触手が波のようにうねるため。後退することもできず、絶頂ウォークを強要させてしまう。

「せ、セルシアンしっかりしてください！　こんな触手に負けないで！」

「わ、わかってるわよぉ♥　で、でも……でもでもマンコに挿入されて……な、中がすごいのおおおぉおおおおお♥　子宮にズンズンきてぇ……メスイキし

ちゃう♥　ほおおおぉおおおぉおおお♥　ひー♥　はひー♥　ふひー♥」

先ほどまでとまったく違う母の姿に紅髪ヒロインは困惑する。自分もこんなことをしなければならないのだろうかと考えると、思わず足がすくんでしまう。

（ま、ママがあんなにエッチな顔してる……本当にわたしみたいな調教されてたんだ……それと同じことを今からするの……？　うぅぅ……ひどいです……ッ！）

頼りになる母親にして先輩がフタナリ調教されていたという事実に、いまさらながら驚愕するヴァーミリオン。尊敬する人の痴態を見せつけられ心が折れそうになる。

しかし、逡巡している時間は当然のように皆無。

「いつまでボーとしてるのかな？　ほら、お姉ちゃんも行くんだよ♥」

「ま、待って！　まだこころの準備が……ヒッ、や、は……ハグウゥゥゥッッ♥　はひ♥　へひ♥　ふ……ふやあ♥　へごおおぉぉ～～～ッ♥　おおおぉぉおおおおぉッ♥」

背中をポンと押されて入り込んだのは触手草原のチンポ地獄。正義の変身ヒロインはケダモノのような声を上げながら進まされてしまう。

目の前で火花が飛び散り意識が真っ白になる。そのあとにやってくるのは暴力的な快楽だ。ゴリゴリと膣肉に挿された触手陰茎が心地よく、気を抜けばフタナリちんぽまで射精してしまいそうである。

「ジ……んふううぅぅ～～～～ッ♥　ぁ゛ぁ゛ぁ♥　はぐ♥　おぐ♥　ひ……ひぎいいいぃぃ～～～～ッ♥　お、おお～～♥　あ、アソコがこすれてぇ♥　すスゴいですううぅうううぅ♥　へあああぁぁあぁぁあああ♥」

「うわ～、ヤバい顔♥　どうかな～、もうイッちゃいそう？　惨めに射精しちゃいそうかな～？」

「ッ……ぅぅぅぅ～～♥　んんんん……っ♥　ふー♥　はふー♥　だ、出しません！　射精なんて絶対にしませんからっ！　ハグウウゥゥゥッッ♥　んんん♥　あふぅぅ～～ッ♥」

もはや一刻の猶予もない紅髪、蒼髪ヒロイン。ジュッポジュッポと膣肉を擦られ、天に昇るような快美が身体中を駆け抜ける。

フタナリちんぽも再び硬さを取り戻しつつあり、連動して鼻フックが鼻腔を苛む。白玉のような陰嚢がブリブリと精子を生産し、射精衝動が一歩踏み出すごとに高まってくる。

このペースではゴールする前に確実に射精してしまうだろう。

（はっぐ、ぅぅぅ……が、我慢がぁ……できなくなります……おマンコもお鼻も苦しくてぇ……余計におチンポ元気になっちゃいます……っ！）

（私がこの程度で……んぐぅぅ～～ッ♥　む、はぐうううぅぅぅぅぅぅ♥　ち、チンポがせつないのぉ……しゃ、射精……射精したいぃ……っ！）

そして、弱った心につけこむようにエリスが囁く。悪魔らしく人間の心を操り意のままにするために。エデンフィールドの内側からはヘドロのような魔力が噴き出していた。

「ねぇ二人とも、ゴールまでの距離を短くしてあげてもいいよ。具体的に言うとあと十メートルくらいにサービスしてあげる♥」

「ん……ど、どういうつもりですか……？」

「な、何を企んでいるの？」

「別に何もないよ～。このままだとすぐに射精しちゃってつまんないから♥」

そう言って触手ロープのコースを変更する。新たなコースは教室の入り口を通って出口に伸びていた。つまり授業中のクラスに入室し、退室できればクリアということだ。

「これなら簡単でしょ？　どうせ姿は見えないんだし、中に入ってもバレないよ」
「それはそうですけど……ここは……その……うくぅぅ♥　あん……はぅぅ♥」
「どうしたのヴァーミリオン。あくぅぅ♥　ひぃ……うふぅぅ～～♥　こ、このチャンスにかけるしかないと思うけど……んんん♥」
「わ、わたしのクラスなんです……な、中には茜ちゃんも……」
　卑劣なやりくちに手を震わせるヴァーミリオン。たとえ見えないとしても、変身中で正体がバレなくても、親友やクラスのみんなに変態衣装で近づきたくない。
　もし気付かれたらもう立ち直れない。
（他に方法はないけど……こ、ここを通ってゴールなんて……）
　すでにセルシアンは入ることを決意している。あとはヴァーミリオンが決めるだけである。正義の紅髪ヒロインは目をつむり逡巡の後、ようやく口を開いた。
「わかりました……ここを通ります……でも約束は必ず守ってくださいね。わたしたちを解放してください！」
「もちろんだよ。でもその前にやってもらうことがあるかな～」
「な、なんですか……？」
「また嫌な予感がするわね……」
　やはりそうきたかと眉根を寄せる美熟女聖姫。要求される前から鳥肌が立ってしまう。そして、セルシアンの予感は大当たりであった。
　悪魔幼女が二人に要求したのは、ケダモノと同等になることだったからだ。
「ブタみたいに鳴いてみて♥　ていうか、ここからブタの鳴きまねしながら歩いてもらおうかな♥」
「そ、そんな……い、イヤです！　イヤです！　恥ずかしすぎます……っ！」

「できるわけないでしょっ！　そんなみっともないことっ！　侮辱するのもいい加減にしなさい！」
「じゃあ今の話はナシだね～。毎日ここで射精させてあげてもいいんだよ？」
最悪の提案に拳を強く握り震わせる天煌聖姫。
ひどい恥辱で涙が出そうになる。
（く、屈辱です……でもこれをやらないと……ま、ママのすぐそばで……）
（ぐッ……や、やるしかないの!?　うぅ……ぐぅぅ……あ、愛華の前でそんなの……恥ずかしいわ……）
だが、背に腹は代えられない。二人はしぶしぶ要求を飲み、はじめにヴァーミリオンがブタの真似をした。可憐な紅髪美少女が鼻フックで述べる口上は滑稽でしかない。
「ぶ……ぶ、ぶ、ぶひっ♥　ぶひ♥　ぶひ♥　ぶひいいいいっ♥　わ、わたし天煌聖姫ヴァーミリオンは変態牝ブタですぶひ♥　ブタチンポを浅ましく勃起させながら露出プレイをするマゾブタヒロインですぶひ♥」
「キャハハハッ、いいよ～最ッッッ高にブザマで♥へ～、お姉ちゃんはみっともない牝ブタなんだ♥」
「ぶひいいいいん♥　そうですぶひぃ♥　お、お褒めいただきうれしいですぶひ♥　ぶひ♥　ぶひ♥　ブギイイィィィッ♥　この変態メス家畜に濃厚なブタザーメン出させてブヒィ♥」
「ん～、どうしよっかな～、イマイチ似てない気もするしな～」
「ぶひ♥　ぶひ♥　ふぉご♥　ふぉお♥　ろ……露出狂の淫乱聖姫にブタ真似しながら行進させてほしいぶひ♥　ぶひ♥　ぶひ♥　エリスさまお願いぶひいいいいいいいいいいいいい♥」
「キャハハハハハ♪　アハハハ、お姉ちゃんもうプライドも何もないって感じだね。いいよ、許可してあげる。でも入るのは二人同時だからね。オバサンがちゃ

んとブタ真似してくれないと、今やったことも無駄になっちゃうけど♥」

女の子としてのすべてをかなぐり捨ててブタになりきる正義のヒロイン。心を切り刻まれるような惨めさに膝が痙攣する。母の前で痴態を演じるのも屈辱だ。

「わかっているわよ！　物真似くらいしてあげるわ！」

お次はセルシアンの番である。

蒼髪ヒロインは大きく息を吸うと、淫靡な口上を垂れた。

「ぶひ♥　ぶひ♥　ぶほおおおぉおおん♥　わ、私、て、天煌聖姫セルシアンの正体はぁ♥　淫乱牝ブタ熟女なのぉ♥　ぶひ♥　ぶひ♥　ぶひん♥　恥ずかしい包茎ブタでちんぽをおっ立ててぇ♥　ロープでチンズリする変態人妻なの♥　ぶひ♥　ぷぎ♥　ピギイイイィィィッ♥」

「は～い、よく言えました。オバサンらしい変態発言ありがとう。うん、いつもと変わらずキモいね♥」

「ぶひ♥　ふご♥　ふごおおん♥　はいいい、私はみっともないマラ豚ぶひいっ♥　変態マゾちんぽから汚物ザーメンひり出す豚妻なのぉ♥　ぶひ♥　ぶひ♥　ぶほおおぉおおん♥」

「ところで～、お姉ちゃんと同じ制服着てるけど、オバサンっていくつだっけ女子学生だっけ？」

「ぶひ♥　ぶひ♥　え？　な、なにを……？」

唐突な話題の切り替えに戸惑うセルシアン。

今はブタの鳴きまねをする時ではなかったのか？

「学生服着てるってことは女子学生だよね♥　次はそのつもりで鳴きまねしてみて♥」

「う、……わ、わかったわ……ブヒぃ……」

悪魔幼女の意図に気付き血が出るほどに唇を噛む。

人妻ヒロインが一番気にしている年齢をオモチャにしようというのだ。

美貌を赤らめながら羞恥セリフを言ってしまう。

「きゃ、きゃる～～ん♥　天煌聖姫セルシアンはピッチピチの女子学生ぶひ♥　制服がとっても似合う美少女ぶひ～～ん♥　ぶひ♥　ぶひ♥　ぶひん♥」

「キャハハハハハ！　アッハハハハハハ！　ハハハハハ！　お、お腹いたい……♥　へ～、女子学生なんだ。エリスにはとてもそうは見えないけどな～」

「ほ、ほんとうブヒ♥　嘘ついてないぶひぃ♥　ほ、ほら縞々パンツも穿いてるぶひ♥　オバサンだったらこんなの絶対に穿けないぶひん♥　エヘヘ、わ、私は若くてモテモテの学園アイドルぶぅ♥　ピース♥　ピース♥　きゅる～～ん♥」

「も、もうダメ、笑い死にそう♥　二人とも合格にしてあげるよ、ププ♥」

ピースサインで目元のシワを隠しながら必死で媚を売る熟女ヒロイン。二回りもサバ読みしながら片足上げてチンポを振りながら、ブリッ子ポーズまでやってしまう。

（うぅ……愛華もいるのにみっともなさすぎるわ……で、でもこれであと少しよ……必ずゴールしてみせる……っ！）

お許しをもらい再びゴールを目指す牝ブタヒロイン。二人は意を決してドアを開き、同時に教室の中に入る。触れた物体の認識も阻害されるため、ドアの動きや音に気が付く生徒はいない。

教室の中ではみんな真面目に授業を受けており、特に障害にはならなそうだ。一方、触手ロープは机の間を縫うようにU字型に張られていた。

大きな突起もなく見た目スムーズに進めそうである。

「速攻で決着をつけますぶひ！」

「そうね、あとたったこれだけ。すぐにすむぶひ！」

心臓の鼓動を抑え黒板の前を進んでいく。当然誰も、すぐ近くで教鞭を振るう教師でさえも反応することはない。メガネを掛けた女性教師は気にせず教科書をめくっていた。

と、カーブに差し掛かったところで、エリスが二人の近くに寄ると愉しげに囁いた。

わざわざ今の状況を説明するように。

「ね～ね～、この格好ってみんなが見たらどう思うだろうね♥」

「え？　なんですかぶひ……？」

「い、いまさらそんなこと……どうだっていいぶひ……」

「ピッチピチの制服着てフタナリちんぽ丸出しで、鼻フックまでつけちゃって、これってクラスのみんなにどう映るのかな～♥」

「うぅ……そ、それは……ぶひぃ……」

「気にしないでヴァーミリオン。相手の思う壺ぶひよ！」

ゴールを目指すことに必死で働いていなかった頭が動き出す。

そう、この恥ずかしい格好はどう考えても最低最悪の変態そのものだ。警察のお世話になるタイプの。

自覚した途端に羞恥心がこみあげてくる。顔が真っ赤になり、心臓が早鐘を打つ。勃起肉竿がさらに大きくなり、オマンコからは淫らな雫がしたたり落ちた。

そこへ悪魔幼女は最後の切り札を使う。

正義のヒロインを恥辱の奈落へ突き落とすために。

「それじゃあさ～、今の最高に恥ずかしい格好をみんなにも見てもらおっか♥　は～い、エデンフィールド解除♥」

「へ？　ええッ!?　ぶひ、ぶひぃッ!?」

「え？　なに言ってるの……？　ブ……ぶひひんッ!?」

二人の天煌聖姫が間抜けな声を出した直後、認識阻害が無効化されブタ顔エロ制服フタナリちんぽの痴態が白日の下に晒される。

生徒たちは変態女二人を発見し呆けたように口を開ける。

一拍置いて、教室から悲鳴が上がった。
「キャアアアア！　なに!?　なに!?　なに!?　え、なんなの!?」
「うわあああああああっ！　え？　ええ!?　はあああああ!?」
「!?!?!?!?　や、あ？　だ、誰!?」
「な……え、あ……あ、あなたたちここをどこだと思っているんですか!?」
一秒前までの静寂は跡形もなく消え失せ、学び舎が悲鳴と怒号に包まれる。ヴァーミリオンとセルシアンは自らに向けられた視線を痛いほどに感じ取っていた。
「ち、これは違うぶひっ！　あの……そ、その……とにかく違うぶひ！」
「こ、これは誤解なのぶひよっ！　私たちは変態じゃないぶぅっ！」
どうにか弁明しようとするが鼻フック顔では説得力などありはしない。律儀にブタ語で話しているのがさらに頭のオカシイ変質者だと思わせる。
気の強い茜や門下生も侮蔑の言葉を投げかけた。
「何言ってんのよこの変態！　はやく教室から出てけ！」
「そうッスよこの変質者！　警察呼ぶッスよ！」
「そ、そんな……ぶひい……」
「い、いやぁああ……あ……ぁぁ……ほごぉお……」
親しい人間にまで罵倒され身体中の血液が沸騰しそうだ。頭の中の整理がつかない。しかし、身体だけは正直で、マゾボディは罵倒に反応し、快美の稲妻が神経を駆ける。
フタナリちんぽがフル勃起し、鼻フックが最大限に吊り上げられた。
「キャハハ☆　もうサイアク、人間として終わってるね♥　ここまできたらもうどうなってもいいよね？　ザーメンもピュッピュッしちゃおうか♥」
「や、あああぁあああぁああ♥　い……ぃだぃぃ

いいいいいいいい♥　で、でちゃうぶひいいぃぃ～～♥　おチンポがビクンってして射精したくなってるぶひ♥　あ……だ、ダメダメダメぶひ！　ここでザーメンお漏らしなんてできないぶひぃっ！」

「と、とにかくゴールしないとぶひ！　はやく進まないと……ぶひ、お……おごぉおぉおぉおぉおおおおおおお♥　鼻フックきついぶううぅうぅうぅぅ♥　鼻穴ぐいぐいされたらチンポも勃起しちゃうぶひ♥　痛くて気持ちよくなっちゃうからぶひいいいいいいぃぃ♥」

ダメ押しとばかりに触手ロープが肉竿を擦り上げる。フェザータッチでちょっと触れただけだが、限界のマゾチンポにはそれで十分だった。

床や机に向けてヴァーミリオンの精液が大量に噴出する。

ブ……ブピュル♥　ドビュッ♥　ドビュッ♥　ドビュッ♥　ボピュルル♥　ピュ……プピュ♥　ブ……ブピュルルルウウウゥゥゥゥ～～～～～～ッ♥　ドビュビュビュビュウウウゥゥゥゥッッ♥

「ぶひ♥　ぶひ♥　ブヒイイイィィィィィッ♥　ち、ちんぽイク♥　ブタちんぽイクうぅぅぅうッ♥　スケベ丸出しのエロ衣装でイッちゃいますぶひいいいぃぃッ♥　ほー♥　ぶほー♥　ぶひひん♥　み、みんなの前で鼻フック変態射精しながらイクゥゥゥッ♥　ロープでチンズリしながら射精するうううぅぅッッぶひ♥　ぶひぶひぶひ♥　ぶッッッひいいいいいいいいぃぃッ♥　ザーメン排泄♥　ザーメン排泄♥　ザーメン排泄♥　イクイクイクイクぶほおぉおおおぉお♥　ドスケベ家畜マゾアクメするぶひいいいいいいいッッ♥♥」

遅れてセルシアンもロープに勃起チンポ、キンタマを擦りつけながら絶叫した。ヴァーミリオンと遜色ない白濁液が噴水のように噴き上がる。

ビ……ドピュッ♥　ドプッ♥　ドプッ♥　ドプッ♥

ドビュリュリュウウゥゥ～～♥　ドプヌプッ♥
ヌチャッ♥　ドピュピュウゥウゥゥ～～～～♥　ブブブッ♥　ビュリュリュウウゥゥ～～～～ッ♥
「お……ほお、ぶ、ぶほおおぉおおぉおおおん♥
ぶひ♥　ぶひ♥　ぶひイィイィ♥　ぶほおおおぉおおおッ♥　イクイクイクイックうううぅうぅうう♥
オバサンのくせにピチピチ制服でイク♥　学生みたいな格好して豚マラ擦りながらイッちゃうぅうぅうう♥　ぷぎ♥　ぷぎ♥　ぷぎいいいいいいいい♥　ふごごおおおぉおおぉおおおお♥　イク♥　イグ♥
イグうぅうぅうぅうッ♥　メス豚巨玉揺らしながらイグッ♥　まっ黄色なブタ精子でりゅうううぅうぅうぅう♥　豚オバサンの下品マラ汁でるのおおおぉおおおお♥　ぶひー♥　ぷぎー♥　ぶひー♥　変態露出狂のケダモノ精液噴き出すのぉ♥　二回りもサバ読んだオバサン女子学生の生搾りチンポ汁でりゅブヒいいいぃいい♥　ぶほー♥　プギぃ♥　ぶほおおおおおぉおおぉおおおんッ♥　ブタ顔ババアアクメしゅりゅうぅうぅうぅうぅッ♥♥」

最低なブタ嬌声で鼻フックアクメする正義のヒロイン母娘。

生徒たちは呆然とし、フタナリ痴女の様子を遠巻きに見守っている。誰一人として関わりたくないといったそぶりだ。

「キャハハハハ！　アハハハハハ！　ハハハハハ！　あーもう立ってらんない♥　キャハハハハハ、おかしすぎて♥　豚ヅラでぶひー、ぶひーってこいつらどんだけキモイんだよ♥　あったまパーだよね♥　ザーメンもくっさいし汚いし最ッ低♥　それで人類のために戦うとか笑わせちゃうな♥　あ～、キモイキモイ♥」

「ぶひ……ああ……ぶひいい……♥」

「はひい……ふぁ……ぷぎ……ぶほ、ぶほぉ……♥」

気の狂うような恥辱にまともにしゃべることもでき



ない。呆然と虚空を見つめるヴァーミリオンとセルシアンの前で、エリスは教師や生徒たちに事情を説明していた。

もちろん魔法の実演つきで。

デモンコアなど信じていなかった者もこれで信じざるを得なくなるだろう。どのみちすぐにエデンフィールドでこの教室も隔離されるのだから。

だが、真の苦難はここからである。

逃げ場のない世界で悪意に満ちた罰ゲームが母娘ヒロインに忍びよっていた。

閑話　恥辱のザーメンクッキング

「よし、もう一球いくぞ！」
「そこー、サボらないでよねー」
天王寺学園の放課後。本日も初等部から上等部まで、様々な学園生たちが部活に励んでいた。
グラウンドや各教室に学生が集まり、年相応な快活さが心地よい音色の声を奏でている。
だが、その教室の中にまったく人気のないところが一か所あった。
中等部の一番に隅にある家庭科室である。無論ここを使っている部活もあるはずなのだが、今日に限っていえばわずかな物音さえしない。
まるでこの世界から切り離されてしまったように。
「こ、こんなところに呼び出して何のつもりですか…
…変身までさせて……」
「も～、お姉ちゃんは相変わらずだね。これからエリスの変態ペットになるんだから、もっと愛想よくしないと」
「お断りです！　あなたのペットになんて絶対になりませんから！」
「はいはい。今日もエッチにフタナリ調教してあげるね♥」
エデンフィールドで隔絶された世界でヴァーミリオンが悪魔幼女に怒気をはらんだ声を上げる。
すでに変身は完了し、服装はブレザー制服からレオタードスーツに移り変わっていた。
炎のように紅いロングヘアーは鮮やかな輝きを放っており、しなやかな肢体は一流の芸術品のようである。
周囲には規則正しく机が並べられ、取り付けられた蛇口やコンロで調理ができるようになっていた。素材の詰まった冷蔵庫や調理器具も完備されている。

（部活をサボってしまいました……それにここで一体何をするのでしょうか？　すごく嫌な予感がします……）

学園での調教に凛とした変身ヒロインも困惑を隠せない。

外部からは認識できないとはいえ、フィールドを解除されたら一巻のお終いだ。

自分の痴態を生徒の誰かに見られてしまうかもしれない。言いしれない不安が少女を苛む。

「で、どうするのですか？　あなたのことだからどうせまた悪趣味な内容だと思いますけど……」

「エヘヘ♪　よくわかってるね。これからはエリスが食べるものを管理してあげようと思って」

「食べ物……管理……？」

「そうだよ～。こっちで決めたもの以外は食べちゃダメってこと」

またエッチなことをされると予想していたヴァーミリオンは、きょとんと瞳を丸くする。相手の意図がよくわからない。

（食事制限……ということでしょうか？　ダイエットならしたことだってありますし、これなら大丈夫かもしれません！）

ついに変態プレイとは違う展開になるかもしれないと、期待に胸を膨らませる。だが、当然のように淡い願望は打ち砕かれた。

エリスはニコリと微笑むと、

「お姉ちゃんにはこれから毎日ザーメンを飲んでもらいま～す。おチンポ汁なしでは生きられないようにしてあげるね♥」

「ええっ!?　ざ、その……ザーメンって……な、なにを言っているのですか!?」

最悪の提案に上手く言葉が出てこない。あんなに汚くて臭いモノを毎日飲むなんて正気とは思えない。

「無理ですそんなこと！　あなた本気で言っているの

ですか！」

「本気も何もマジに決まってるじゃん。淫紋くっつけたマゾ牝のくせにその態度は気にいらないな～」

「んっ！　はううぅうん……んく、あ、あ、あああぁああああああああん！」

エリスが魔力を込めると左胸のハートマーク淫紋が疼きだし、膝から崩れ落ちそうになってしまう。

身体が熱せられた石のように火照り、フタナリ肉竿が硬直、蜜壺がじんわりと湿ってくる。

見た目子供のデモンコア一人に、口答えすることもできない正義の天煌聖姫。悔しそうに目を伏せるばかりだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……ッ、わ、わかりました……い、言う通りにします……」

「自分の立場は思い出せたかな？　はじめはエリスのおチンチンで練習してみよっか♥」

言うと同時にエナメル質のボンデージスーツ、その股間部分に切れ込みが走る。

そして、中からナマコのような触手チンポが何本も現れた。以前見た時とは違いどれもこれも太くたくましく、ぶつぶつとしたイボと紫色の粘液を纏っており、見るだけで鳥肌が立つ。

「くぅぅ……ま、また触手が……」

「まず味に慣れてもらわないとね。握ってペロペロしてもらうよ♥」

「う、うぅぅぅ……ブヨブヨして気持ち悪いです……に、匂いも生臭くて……」

ぎこちない手つきでナマコ陰茎に指を伸ばす。手のひらで左右から包み込むように持つと、何とも言えない感触が手のひらに広がった。

「や、あ、っうぅうぅ……」

「あれあれあれ～？　まさかエリスのおチンチンがイヤなわけじゃないよね？　もう一度立場を教えてあげよっか？　エデンフィールドを解除してお友達を呼ん

できてもいいんだよ？」

「そ、それだけは許してくださいっ！　す、好きです！　わたしはおチンポさまのことが大好きですからぁっ！　他のみんなを巻き込まないで！」

「うんうん、最初からそう言えばいいのにね。まっ、今回はグズなお姉ちゃんのことも許してあげるよ♥」

「あ、ありがとうございます……」

子犬のように怯えツインテール幼女にお礼を言う。人類の敵を前にして媚を売ることしかできない事実が、情けなくて仕方ない。

（よ、弱気になってはいけません！　わたしが屈したらママや陽一だってひどいことをされてしまいます。今はチャンスを待つんです！）

ネガディブな思いを振り払い、眼前の触手に集中する正義のヒロイン。大切な家族のためにも負けるわけにはいかないのだ。

「これを舐めればいいんですね……？」

「うん、お口に含んでチュッチュッ、ぺろぺろしてね。もちろん吐き出したら……わかってるよね♥」

「っ……はい……」

恐る恐る唇を近づけて、鈴口の部分にキスをする。触手チンポとキスをするのはこれで二度目だが、一生慣れることはなさそうだ。

「んちゅ……ぷ、ぐん……はぐ……うぐぅぅっ……ふぐぅぅ……っ！」

鼻腔から生臭い体臭が押し入り、とっさに吐き出してしまいそうになる。

（な、なんて臭いのですか……んぐぅぅ……と、とにかく我慢しないと……）

悪臭に耐えながら動かしてナマコ陰茎を口内に招き入れる。

胃袋が裏返るような汚辱を堪えて、少しずつ舌を這わせる。

「チュ、ちゅく……あむ……ん、んちゅん……くん…

…はうむ……」

「そうそう、そうやって丁寧に舐めてね♥　いつも言ってるように痛くしちゃダメだよ♥」

「ふぁい……ちゅぐ、むちゅる……ちゅ、ちゅ、ちゅく……ぴす、ぷすぷす……」

　コミカルな鼻息を鳴らして触手チンポにご奉仕する紅髪ヒロイン。極太の肉竿はヴァーミリオンのお口には大きすぎて、上手く息ができないのだ。

「ちゅく……んじゅく……ぺちょ、ぴちょ、ちゅぷるん……ぷすん……」

「カリ首の裏まできっちりきれいにしてね。チンカスも残さずに♥」

「ひゃいぃ……ちゅぐ、ちゅぐ、んぐうくぅぅ……はぐ……ジ……ふぐぅぅう……んんん～～～ッ！」

　赤黒い恥垢を舐めとるたびに、ピリピリとした痺れが舌先を襲う。恋人相手でもしないような変態行為で、乙女のハートがボロボロになっていく。

（ひ、ひどい匂いです……うげ、うぐぅぅ……さ、最低です……！）

　雄々しくそそり立ったエラを舌全体で愛撫していく。幹に無数に生えた肉イボにも口づけをし、口内をオナホールのごとく使用する。

「ん♥　やっ、あ……は、はあああぁぁ～～ん♥　ン……お姉ちゃん上手になってきたね♥　そうやっておチンポの感触を覚えるんだよ♥」

「ちゅぶ、んちゅぶ……うぐ、ちゅく……ジ……うくぅぅぅうん……」

「ひゃうぅ……♥　血管のとこもっと舐めてぇ……♥　んひゅん……そう、そうだよ♥　女の子にはやさしくね♥」

「はぐ……んぐく……んく……ちゅぐくん、ちゅぷ……ぷちゅ、ぷす……ぷすん……ちゅみ、はちゅ……んぐちゅちゅちゅう……」

　以前イラマチオをされた時とは違い、積極的に口淫

愛撫に没頭する正義の美少女ヒロイン。
その時にはわからなかった肉竿の快美を味わわされる。頭の中が霧でもかかったようにぼんやりとし、瞳が恍惚に蕩けていく。おヘソの奥からむず痒いものがこみあげ、だんだんと身体が熱くなっていく。
「うぐぅ……んむぅぅぅぅ……っ！　ぺちゅ、はくぅぅぅ～～、ひゅぐ……んふむ……」
「そろそろ気持ちよくなってきたんじゃない？　ほら、お姉ちゃんのフタナリおチンポが大っきくなってるよ」
「フ、ふぐぅぅぅぅう!?　ちゅぶん……はぁぐぅぅ……そ、そんな……ちゅぷ、ちゅっぷん！」
指摘されて股間に目を落とすと、そこにあったのは立派な勃起肉。ヴァーミリオンのフタナリちんぽがレオタードスーツの上からでもはっきりとわかるくらいに怒張していたのだ。
自分が発情している証をまざまざと見せつけられ、細面がカッと赤くなる。
「ひゃうぐぅぅ……っ！　こ、これはその……そんな……感じてるなんて……ちゅく……んちゅくく……ちゅ、ちゅ、ふぅぅぅ～～～～ッ！」
「真面目そうな顔してほんとにドスケベだよね～♥　ん、ひゃあぁぁあああん♥　ん、はぅぅぅぅぅぅ、ふぅ……♥　そんなにフェラチオが気持ちよかったのかな？」
「き、気持ちよくなんか……ちゅぷ……んくるん……ふぐぅぅ～～ッ！」
肉棒の盛り上がりを否定するが、淫悦に慣らされつつある唇はナマコ触手にぴったりとくっついてしまう。屈辱的で惨めなのに、もっともっとと触手肉棒を求めていく自分がいる。
（こんなことって……じ、自分から勃起するなんて恥ずかしすぎます……わ、わたしはエッチな女の子じゃないのに……）

心の中でどれだけ反論しても射精の記憶が理性を蝕んでいく。奉仕を受けている触手チンポが羨ましく、自分のフタナリ肉竿も扱きたい。

悪魔幼女の嬌声に混じり、ヴァーミリオンの吐息も甘くせつなく音色を変える。

「ちゅく♥　んちゅふ♥　あぁ……ひゃうぁあ……♥　んちゅぶ……あ、ん、れろ♥　れろれろ♥　ふひゅうううぅ～～ッ♥」

「ふむぁ……んふあぁぁあ……♥　んん……ふぅ、チンポおしゃぶりが上手になってきたね♥　それに牝ネコみたいに発情しちゃってる♥　舐めるだけじゃなくて射精もしたいのかな？」

「へぅ……ふ、う、ふぐぅうううぅう……♥　しゃ……射精なんて……んはぁあああぁあああああ♥　し、したくありませんっ！　んちゅ……んちゅ、ちゅぷん♥　んふぁぁぁ……♥」

「強がっても無駄だよ～。エリスには全部お見通しだからね♥　先に触手チンポをイカせないとお姉ちゃんもイッちゃダメだから♥」

「だ、だから違います……ひ、ひぐ……ひうあぁああぁ♥　ぺろ、ちゅろ……はうむ……ひゅうぅうぅうぅうぅうぅん♥」

フタナリ肉棒を我慢汁まみれにしながらも、甘美に耐えるフェラチオ聖姫。

海綿体を膨張させ今にも射精しそうな肉竿を、気力で抑え込む。

（わたしも射精……射精したい……っ！　だ、だめなのに……いけないのに……おチンポ扱きたくなってしまいます♥　んふぁ……お、おチンポせつないいいいいいいいいいいいいい♥）

黒き欲情に苛まれながらナマコ触手に舌を這わせていく。蜜壺からも愛液が糸を引いてこぼれだし、もじもじと太腿をすり合わせる。

そして、エリスの触手肉棒も限界を迎えつつあった。

亀頭部分が何度も痙攣し、牡の煮えたぎった欲望を吐き出そうと膨張する。

「んはあああぁあああ～～～ッ♥　いいよぉ……すっごくいい♥　もうザーメンでちゃいそう♥」

「ちゅぷ、ちゅぷ……ちゅひあうん♥　ひゃふ……あふ……アアァアアアアン♥　ふぁぁ……ザーメン……♥」

「あは♥　あはは♥　ハアァアアアアン♥　そうだねもう出してもいいよね♥　おチンチンミルクぴゅっぴゅっしてもいいよね♥」

「ふぐ……ふぐうぅぅうぅう……!?　んぐ、ぷう……はうぅうぅうぅうぅぅ……!?」

ついに訪れた決壊に目を見開く紅髪美少女。口内を汚濁で占領される恐怖がよみがえってくる。

（また前みたいに……触手おチンポがパンパンになってぇ……♥　お口の中ドロドロに……はう♥　ん♥　んんん♥）

自分がフタナリになったことで相手が我慢できないことも察せてしまう。どうせ避けられないのならと、ヴァーミリオンは舌の動きを加速させた。

「ジ、ジ、んくぅうぅうぅうぅっ♥　ちゅぶ……ちゅぶ♥　ちゅく、ちゅりゅん♥　ぺろ……はぶちゅううん♥」

「キャハ♥　アハ♥　キャハアアン♥　んふぅ……あはぁ、とってもいやらしいよお姉ちゃん♥　もうイクね♥　チンポ汁中毒にしてあげちゃう♥」

「じゅぶ……じゅぶ……んちゅちゅちゅちゅちゅう♥　あん♥　ふうん♥　じゅぼじゅぼ……じゅっぼ♥　じゅっぼ♥　じゅっぼ♥　じゅっぼ♥」

タコのごとく唇をすぼめて触手勃起に涎をまぶす。正義のヒロインとは思えないアホ顔を晒しながら、フタナリちんぽを熱くする。

そして、ナマコ型の触手ペニスは溜めに溜め込んだスペルマを口内へ解き放った。

ビュク♥　ブビュク♥　ドボ♥　ドッボ♥　ドブルルウウウウウウウウウゥ♥　ブビ♥　ブビュクビュク♥　ブブボビュルウゥウゥウウゥウウウウ～～～～～～～ッ♥

「キャハ♥　キャハハ♥　ハアアァアアアアン♥　イク♥　イク♥　イクイク♥　イッくうぅうううううぅうううう♥　きゃはあぁ～～ん♥　ナマコおチンチンからザーメン出まくる♥　イキマラミルク注入しちゃう♥　お姉ちゃんしっかり覚えてね♥　これが毎日飲むザーメンのお味だよ♥　はふう♥　ひふう♥　はおおぉおおおん♥　生臭いチンポ汁ごちそうしちゃうぅうぅうぅうぅん♥」

「ん!?　ん!?　ジジジジ～～～～～ッ♥　ぶふ……ごふッ！　ぶふうぅうぅうぅうぅうううう♥」

紅髪ヒロインは圧倒的なザーメンの濁流を飲み込んでいく。口内がイカの腐ったような匂いで満たされ、相当に気持ち悪い。

「じゅぶ……♥　じゅぶ……♥　ちゅぶぶんっ♥　んじゅくうううぅ～～～～ッ♥」

「アハぁ……口マンコさいこう……♥」

「ゴク……♥　ゴク……♥　ぐぷっ♥　ゴックン……♥　ぶぐぐぅ……♥」

吐き出すわけにもいかず、ドロドロとした煮詰め汁をイヤイヤながら食道に送っていく。

（ふぐぅぅ……き、汚くて……生臭いのに……感じてしまいます……っ！　やあ……あ、あああぁあぁあああああん♥）

お口を陵辱される激悦に可憐な紅髪聖姫は身悶えた。悔しいはずなのにどこか感じてしまっている自分が恐ろしい。ザーメンを嚥下するたびに何か大切な物が失われていくようだ。

「あ～すっきりした♥　ご苦労さま♥」

「あ、ひゃ、は……はい……んく♥　こく……こくん

ん、ゴクン♥」

「あ、でも一気に飲み干しちゃダメだよ？　うがいをするみたいによ～～く味わってね♥」

「っ……んく……くぅぅ……♥」

命令通りに精液を喉で泡立て、舌で歯茎にすり込んでいく。プチプチとした食感が不快で仕方ない。

「がらっ♥　がらがらっ♥　がらがらふぁらっ♥　ちゅぐ……ん、ぐちゅんっ♥　じゅる……んじゅりゅうう……♥　はぶ……ザーメンがらふぁらあぁ……ちゅううん♥　んぐ……こく、ングン♥　ちゅぶくくん～～♥」

「はい、よくできました♥　えらいね♥」

「はい……けふぅぅ……」

ようやく白濁地獄から解放されたと思い、生臭いゲップを出す。

だが、エリスの淫辱はここからが本番であった。

「次はフタナリおチンチンをすっきりさせてあげるね。もう我慢できないみたいだし♥」

「ん、コクン……え？　あ、やっ……こ、これって……！」

再び股間に目をやり驚愕する正義のヒロイン。なんと、フタナリ肉棒から滲みでた先走り汁がレオタードスーツを汚していたのである。

うっすらと、しかしたしかにできたシミは、ヴァーミリオンが感じていることを如実に物語っていた。

「隠したっておチンチンのせいで丸わかりだね♥　キャハハ、はずかし～～い♥」

「あ、あぅぅ……い、言わないでください……！　見ないでください……！」

「照れ屋さんだね。ほら、おチンチンぽろ～ん♥」

「キャ、キャアアアアアアアアッ！」

触手ペニスの形状がナマコからイソギンチャクに変貌し、器用にぴっちりスーツの股生地をずらしていく。

あっという間に勃起したフタナリ肉棒が顔を見せ、興

奮している様を露わにする。
「いつものことだけど立派なデカチンだね。クラスでも一番大きいチンポだと思うよ。男の子も顔負けだね♥」
「ひ、ひどいですっ！　大きさなんてほっといてください！　うぅ……気にしているのに……」
同級生のペニスについて想像してしまい、頬を紅潮させるフタナリ美少女。
褒められれば褒められるほどに恥ずかしさと、惨めさが膨らんでいく。
「そ、それよりスッキリさせるなら手短にお願いします！　茜ちゃんと帰る約束をしているんですから！」
「え～と、茜ちゃんって友達だっけ？　ま、いいや。それじゃ本題に入ろうかな」
「最初からそうしてくださいっ！」
嗜虐心をみなぎらせ、ヘビのように尻尾をくねらせる陵辱少女。腰に手を当てフリフリとダンスしながら、恥辱命令を下す。
「お姉ちゃんにはザーメンドリンクを作ってもらいま～す♥」
「ざ、ザーメンドリンク……？」
「そうだよ～♪　毎日飲むのにエリスがわざわざ用意するわけないじゃん。自分のことは自分でやってね♥」
「ま、まさか……わたしはこれからずっと自分のザーメンを飲むという……こ、ことですか……？」
「正解～、おチンチンオナニーしてザーメンを溜めてね。手伝ってほしかったらいつでも言って。エリスも協力してあげるから♥」
「うぅぅ……ひ、ひどすぎます……！」
恐ろしい提案に心がへし折れそうになる。自分で自分の精液を飲むなんて正気の沙汰とは思えない。
だが、この悪魔幼女の言っていることは冗談や戯れではないのだ。
「ここにペットボトルがあるから好きなだけ射精して

ね。いっぱいになったら帰してあげる」
「っ……この外道……！」
眉を吊り上げるヴァーミリオンの前に、透明な五百ミリペットボトルが手品のように現れた。
飲み口には漏斗が刺さっており、精液の受け入れ態勢は万全だ。
（こ、これをいっぱいにするなんてどれだけ射精したらいいのですか……い、いえためらっていても仕方ありません！　がんばります！）
不安を振り払いペットボトルを手に取る。床に置いて立ち小便をするような格好になると、正義のヒロインは肉竿を扱きはじめた。
こしゅ♥　ごしゅ♥　ごっしゅごっしゅ♥　しゅこ♥　しゅここ♥
「ん♥　ふ、ふぅぅ……♥　んはぁぁ……♥　あぁぁあああん♥　あふぁ……ふひゃいぃいぃい♥　んふぅうううぅう♥」
細指を肉幹に絡め根元から先端まで丹念に愛撫していく。
敵の目もあるというのに甘い声を抑えられない。
「あっ♥　あっ♥　あひいぃ～～～ッ♥　んあぁ……んぅ……ううぅぅ～～～ん♥　こ、ここいいですぅ……♥」
人差し指と親指で何度もカリ首を撫でる変身ヒロイン。陰嚢からも熱っぽいものがこみあげてくる。
「ん、く、く、くうぅうぅうん♥　んひぃぃ……はん♥　はぁぁあああぁあああん♥　はあああぁぁんん♥」
すでにフル勃起していたフタナリ陰茎に血液が送られ、ドクンドクンッと脈動する。ピンク亀頭の先端からは、続けざまにカウパー汁が漏れ出した。
「は、はう♥　あうぅぅうう♥　んむうううぅ～～～ッ♥　先っぽのところ熱くなってぇ……♥　ひゃあああぁああん♥　もっともっと感じてしまいます

……♥　んくぅぅう～～～♥」

カウパーを潤滑剤にして丹念に亀頭をマッサージする。汗でうなじが湿り濃厚な牝臭が発せられた。

「ん、んん♥　きゅふぅぅう～～～～ん♥　あぁ……おチンポがビクビクってぇ……♥　ンアアアアアアアアアア♥」

ヴァーミリオンは可憐な美貌をうっとりとさせ、フタナリ肉竿の魔悦に溺れていく。エデンフィールドがなければ隣の教室にまで聞こえる嬌声で喘いでしまう。

そして、この痴態を見逃す悪魔幼女ではなかった。ハート型の尻尾を楽し気にくねらせ、翻弄する。

「へ～、いつもそんなふうにシコッてるんだ♥　やっぱり淫乱なんだね～♥」

「や♥　あ♥　うふあぁあぁあ……♥　そ、それは……あの……っ！」

「エリスのことだって忘れてたでしょ？　マジでオナニー狂いのドスケベだね♥　このこの～♥　変態ヒロインさん♥」

「あ、ふぁ……ふあぁぁぁあああぁあ～～～～ん♥　ひゃうぅぅう……だ、だってだってぇ♥」

「だって？」

「これはザーメンドリンクを作るためだからしょうがないんです♥　い、いつもはこんなにエッチじゃないですから！　はぅぅ……んっ、あぁぁ、んはあぁぁぁ……♥」

否定しながらもゴシゴシと肉竿を扱き、蕩けるような牡悦に没頭する。

嘲笑されても手の動きを止めることができない。

「別に隠さなくてもいいよ～。変態さんには慣れてるし♥」

「だ、だから……っ！」

「そんなことよりもオナニーするならオッパイも使ったほうがいいと思うな。乳首をつまんでシコシコしたらもっと気持ちよくなれるよ♥」

「ち、乳首なんてそんな……は、ハレンチです！」

いまさらという感じだが、Dカップ美乳で自慰をすることに抵抗を見せるフタナリ聖姫。

わずかに残った理性がこれ以上の快楽を求めることを阻んだ。

（いくら射精するためでも見られながらオッパイ触るなんて……うぅ、で、でもちょっとだけなら……い、いえやっぱりダメですっ！　あ、あ、ふあぁぁぁあああぁあん♥）

心の中で快美の悪魔と理性の天使が激突する。今よりも気持ちよくなってしまったら、取り返しがつかないかもしれない。

「お姉ちゃんは真面目だな～。今はザーメンドリンクを作っているんだからいいんだよ♥　だって好きでやってるわけじゃないもんね♥」

「ふぇぇ……も、もちろんそうです……っ！　あ、あ、あはあぁぁぁあああぁあああああん♥　ふあああああああんん♥」

「ならいいじゃん♪　エリスに命令されたから仕方なくおっぱいオナニーするってことで♥」

「仕方なく……あぁ……んん♥　んんくうぅぅううぅうう♥」

「そうだよ～、だからお姉ちゃんは全然悪くないの。ね？　これは自分の意思じゃないんだからへ～きへ～き♥」

「平気……そうですよね……わたしの気持ちとは関係ないんですから……オッパイくらい触っても……問題ないですよね……」

肉悦の誘惑に高貴なメンタルが浸食されていく。黒い愉悦が毒めいて身体に回っていく。

「んぁぁ……そうです……これはザーメンドリンクのためだからいいんです♥　おチンポからたくさん精液を搾りとるために必要なんですっ♥」

「キャハハハ♥　うん、だからエリスの言うことを聞

こうね♥　そうすればもっとも～～っと気持ちよくなれるから♥」

「あん♥　あん♥　あふぁぁあああああん♥　ひゃい……♥　はぃぃ……♥」

そして、紅髪ヒロインは夢遊病のように胸へ左手を伸ばし、レオタードスーツの上から揉みしだいた。

むにゅ♥　むにゅ♥　むにゅにゅ♥　ふにゅ♥　ふにゅ♥　ぷにゅにゅ♥

「あ♥　はあ♥　あぁぁあああん♥　ふぁ……ひぁ……ふあぁぁあああぁあああん♥　ほおおぉおおぉおおおおおん♥」

「すっご～～い♥　まさに牝豚って感じだね♥　これならザーメンもたくさん出せそう♥」

「ひあぁ、あ、あうぅぅうぅぅうン♥　おっぱい……すごいです……♥　はぁ……はぁ……♥　んはあああぁぁあああ♥」

やわらかな膨らみを指でなぞると、言いようのない淫悦が肌を震わせる。唇から漏れ出る甘声がさらに大きくなった。

「くぁぁ……あああああぁぁあああ♥　ひぅ、ハア、ハアアァアアアン♥　ひゅう……へう、ほうううぅぅうぅぅん♥」

「アンアン喘いでカワイイよ～♥　乳首も触ってみたらどうかな？　もっとイキたくなるかも♥」

「うあぁぁ……っくあぁあ～～～ッ♥　んぁ……乳首……♥　んふん♥」

エリスの言葉通り乳首をつまむ淫乱ヒロイン。指の間に挟んでコリコリと扱くと、鮮烈な快美電流が背筋を走り抜けた。

「ひぐ♥　ひぐ♥　ヒ……ひゃあああぁぁあああああああん♥　うひぃぃぃぃぃん♥　へ、へあああああぁぁあ♥」

「ね？　ヤバいでしょ？」

桃色の突起をつねり、指で弾くたびに心地よい痛み

が脳天を刺激する。鋭敏になった勃起乳頭に興奮してしまう。

「ん♥　ん♥　んふあああぁあああああ♥　乳首オナニーすごい♥　すごいです……♥　ひうぅうぅうぅうぅうん♥」

「あ～あ、嫌がってたのに乱れまくってるじゃん♥　これだから牝豚はしょうがないな～♥」

「め、牝豚じゃない……です♥　でも……これ、すごい♥　すごい♥　しゅごいですぅうぅうぅうぅうう♥　乳首クリクリしながらおチンポオナニー♥　しゅごくてクセになっちゃいますうぅうぅうぅうぅう♥」

すごいすごいと連呼しながら美乳快感に没頭する正義のヒロイン。フタナリ肉竿を扱く手も速さを増し、濃厚な精液を溜めてしまう。

「エヘヘ、こっちも触ってあげるね♥　うわ～、すっごく硬くなってる♥」

「んあああぁ～～ッ♥　そ、そこはぁ……♥　はぁ、はうぐうぅう～～～～ッ♥」

エリスが目を付けたのは、白玉のように弾力のある陰嚢だ。腰の動きに合わせてプルプルと揺れるそれに、細い触手を伸ばしていく。

「い、いけません……っ！　き、キンタマまで触られたらわたし……わたし……本当におかしくなってしまいますっ！」

「だってお姉ちゃん手が塞がってるんだもん♥　だから手伝ってあげるよ♥　大丈夫。これもザーメンドリンクのためだから♥」

「ザーメンドリンク……こ、これもセーフなんですよね……？」

「うん、もっちろん♥　だから……ね？」

「はい♥　キンタマ触ってください♥　もっと子種汁を作らせて♥」

黒い欲望に飲み込まれ、陰嚢まで弄ってほしいと頼

んでいく。もう抑えがきかない牝豚聖姫。
　そして、触手が二つの球体に届くと、丁寧に揉みだした。精子製造器官が魔悦に犯される。
　ふに♥　ふにに♥　ぷに♥　ぷに♥　ぷにぷに♥　くにゅくにゅん♥
「ジ、ン……んひィィィィィィィィィィ♥　キンタマ♥　キンタマ♥　キンタマ♥　オオオオっ♥　あはぁぁぁぁぁあ～～～～ッ♥」
「アハハ、ケダモノみたい～♥　おもしろ～い♥」
「ぁひ♥　ぁひ♥　ら、らってキンタマもみもみ感じちゃうんですうぅぅぅぅぅぅ♥　ザーメンタンクやさしくされて気持ちよくなってしまいますぅぅぅぅぅぅぅ♥」
　陰嚢を性感マッサージされ、はしたない声を出してしまう。勃起肉竿がさらに脈動し、意識が桃色の霧で覆われていく。
「ひぅ、ああぅぅう♥　ひ、あ、はひいいいいい～～～～ん♥　だ、だめ♥　だめだめだめだめダメですうぅぅぅう♥　も、もう射精ちゃいます♥　おチンポ汁漏れちゃいます♥　ザーメンびゅーびゅーってしちゃいますうぅぅぅぅう♥」
「ありゃりゃ、もう限界なの？　早漏すぎな～い？」
「ごめんなさいいいぃぃ♥　で、でももうムリです♥　おっぱいもおチンポもキンタマもすごくてぇ……♥　射精したいんです♥　射精♥　射精♥　射精♥　しゃせえぇぇえええええ♥」
「キャハハ、オッケー♥　くっさいザーメン出しちゃえ♥　白いオシッコ排泄しちゃえ♥」
「は、あ♥　はぃぃいいいいいいいい♥　わたし射精します♥　ペットボトルにザーメン排泄♥　イキます♥　もうイキます♥　イッちゃいますううぅぅうう♥　ほおぉおぉおぉおお♥」
　指の動きを加速させ、気が狂うほどに身体を痙攣させる天煌聖姫ヴァーミリオン。

三か所を同時に弄り、責めながら男根淫悦に嬌声を上げる。

（そ、そうです……これはザーメンドリンクのため♥　ドリンクのためだから……♥　ンハアアァアアアアン♥）

心が男根の快感に支配され、オルガスムスが股間の奥から昇ってくる。変態的な淫悦に魂さえも捧げたくなる。

フタナリ少女は鈴口をヒクつかせながら――

「おっほぉおぉおぉぉおぉおおお♥　おっ♥　しゃ……しゃせいします♥　イふうぅぅぅ……♥　い……イッちゃうぅぅぅぅぅぅぅぅう♥」

白く濁ったミルクを排泄する。

ビュク♥　ビュク♥　ビュクッ……ビュククク♥　ボビュル……ビュウウゥウウゥウゥウウッ♥　ブビッ♥　ボビッ♥　ゴッビュウウウウウゥウウウウウウウウ♥

「んほっ♥　おっ♥　おっ♥　おオオおォオォオオン♥　チンポチンポチンポおチンポいっくぅうぅぅぅぅう♥　特濃ザーメンミルクを大噴射♥　おチンポでイキながらオッパイでイッて、オッパイでイキながらキンタマでイキます♥　トリプル♥　トリプル♥　トリプル肉勃起アクメしましゅぅぅぅぅぅぅう♥　あっ♥　あっ♥　あぁあぁぁあぁあん♥　ザーメン排泄止まりませんっ♥　オシッコみたいにザーメン出りゅうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅう♥」

舌を出しながらハァハァと発情射精するフタナリ美少女。

漏斗を伝ってペットボトルに白濁液が流れ込む。栗の花に似た匂いが家庭科室に充満した。

「あはぁ……♥　あはぁぁあん……♥　い、いっぱい射精（で）ましたぁ♥　ンンン……♥」

恍惚の表情で右手を前後させ、残った精液を搾り出していく。

だが、彼女は余韻に浸るあまり気付いていなかった。まだ半分ほどしか容器に注いでいないということに。一般男性と比べれば何十倍も多い量だが、目的を達成していないのではしょうがない。

「あれあれ？　これじゃ全然足りないな～。もう一回射精しないとダメだね♥」

「そんな……う、ウソですよね……？」

「ウソじゃないよ♥　おチンチン再開だね♥」

「ま、待ってください！　イッたばかりで力が……」

泣きそうになりながらフタナリ絶頂を拒絶する。今射精したばかりの肉竿は水から上がった白魚のように痙攣していた。

だが当然、それで手心を加える悪魔幼女ではない。

「言い訳しない♥　次もエリスが手伝ってあげるから♥」

「や……いや……やあぁあああああぁああっ！」

外の世界には決して届くことのない悲鳴。ヴァーミリオンは再びフタナリ射精地獄に落とされる。

「今度はコレでイカせてあげちゃうね」

「ッ……それは……！」

エリスの手に握られているのはニンジンとキュウリである。冷蔵庫に入っていたものをいつの間にか拝借していたのだ。

「まさか……こ、これを……？」

「もっちろん♥　野菜でアクメさせてあげるね♥　キャハハ♥　アハハハハハ♥」

言うと同時に触手が蠢き膣穴にニンジンが、菊門にキュウリが挿入された。

淫紋の効力で抵抗することもできず、発情した牝穴はあっさりと異物を受け入れた。

「ひあぁ、あ、ぁ、んくぅぅうぅうぅうっ！　はあぁぁ……あ、アソコもお尻も擦れてぇ……！　ひ♥　あ♥　ほぉおおぉお♥　ひゃほぉおおぉおおおおおぉ♥」

「これで強制勃起させてあげるね♥　エリスってアタマいい♥」

「あ、あぁぁ、ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん♥　お……おチンポが無理矢理大きく……勃起してしまいます♥　んぅっウウウゥゥ～～～ッ♥」

膣内壁と前立腺を責められ再びフタナリちんぽを硬くするマゾヒロイン。

触手に肉幹を扱かれ、またもや射精の魔悦に陵辱される。

「はうっ♥　あ、ハアアアアン♥　は、激しい……♥　さっき射精したばかりなのに……また……♥」

「どうしたの？　え、まさかホントに野菜で感じてるわけないよね？　こんなので感じる奴なんて変態しかいないと思うんだけど♥」

「ふぁぁ……それはぁ……♥　ぉ♥　おぉおぅぅぅぅぅぅぅぅ♥」

ニンジンのとんがりがGスポットを責め、キュウリのイボイボが肛門粘膜を擦り上げる。女性の弱いところを熟知した淫辱にまたもや窮地に追い込まれる。

「か、感じてるわけ……！　んくぐぅぅぅぅぅぅ♥」

「ん～、よく聞こえないからもっと激しくしちゃおう♥　は～い、マゾマンコぐりぐり～♥　ウンコ穴ずぼずぼ～♥」

さらに苛烈になる二穴陵辱。肉竿も快悦に震え射精疲れを感じさせない怒張を見せつけた。

学園のアイドルは淫らな本性をさらけ出してしまう。

「ほっ♥　ほっおぉおぉオォオォオォ♥　おマンコ♥　アナル♥　おマンコ♥　アナル♥　おマンコアナルうぅぅぅぅぅ～～～♥　ンおぉおおおぉぉ～～♥」

「答えは聞くまでもないみたい♥　プププ、野菜でヨガるなんてこのへんた～い♥　食べ物に申し訳ないと思わないの～？」

「ひ、ひ、ひ、ひいぃぃいいいい♥　や、やめてください♥　わたしは変態なんかじゃ……！」

「どこか変態じゃないのかなこの牝豚！　白状しちゃえ！」

「あぁぁぁ……♥　アッひぃいいぃいいい♥　ふ、深いぃいいぃいいい♥　奥までゴリゴリするのイヤあぁぁあああ～～～ッ♥　ふあぁぁ……んんうぅぅうぅぅうう♥」

デリケートな部分を蹂躙され、先ほどよりも激しく悶える正義のヒロイン。官能を暴風が乙女心を苛んでいく。

（あ、あひぃぃ……♥　らめ♥　らめ♥　らめですぅぅ……♥　も、もうムリでしゅう……♥　わたし逆らえません……♥）

一度目の絶頂で心折れたヴァーミリオンはエリスの命令のままに口を開く。

中から飛び出したのは聞くに堪えない淫語たちだ。

「ゾ、んごぉおおおお～～♥　そ、そうです……♥　わたしは変態の牝豚です♥　お野菜でおマンコとアナルほじられてアへる罰当たりヒロインですぅぅぅうう♥　ほへぇぇぇえええ～～～ん♥」

「キャッハハハハ♥　ついに認めちゃったね変態お姉ちゃん♥」

「くひぃいぃ……♥　ほぉお♥　ぁあ……あひぃいいぃいいぃいん♥　ち、チンポも勃起しますぅ♥　お野菜バイブで勃起元気になるぅぅぅうう♥」

休む間もなくフタナリ調教され、最後に残ったプライドまでが破壊される。

最低の淫悦を享受しながらエクスタシーの頂へ昇っていく。

「イ、イ、イキたいですぅぅぅうう♥　野菜ハメられながら下品アクメしたいです♥　ぉー♥　ぉほー♥　エリスさまぁ……イカせてイカせてイカせてください♥」

「どうぞご自由に♥　好きなだけ射精すれば？　ド変態ヒロインヴァーミリオンちゃん♥」

「はいぃぃぃぃぃぃぃぃ♥　チンポ♥　チンポ♥　おチンポまたイキます♥　キュウリのイボイボでアナル擦られてイキます♥　ニンジンにおマンコズボズボされて勃起します♥　おひぃぃぃぃぃぃ♥　マゾチンポからまたザーメンミルクでますぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥」

人に聞かれたら人生終了なアホ声を上げて天煌聖姫は絶頂する。

変態ペット調教中のフタナリ肉棒は、せわしなく二射目を放った。

ビ、ビュク……ビュク♥　ビュ、ビルルルルルウゥウウウウウッ♥　ビュリュリュリュウウゥゥ～～～♥　ジュプ♥　ヌプッ♥　ドピュピュウゥウゥゥ～～～～♥　ビュブ♥　ブュリュリュリュウウウゥウウウ♥

「ほ♥　ほ♥　ぐんほ♥　ぐんほおぉおぉおぉおぉおお♥　イッちゃう♥　イッちゃう♥　またイッちゃいますぅぅぅぅぅ♥　汚いザーメン汁とばしながらおチンポアクメ♥　ニンジンさんとキュウリさんに生ハメされながら変態アクメ♥　マンコと尻アナも感じちゃってますぅぅぅぅぅ♥　ほお♥　ほお♥　ぐオぐオぐオん♥　ベジタブルパワーでチンボッキ射精♥　わたしはザーメンドリンクのためならどんな変態オナニーでもする最低チンポ女です♥　お……ぐオウ♥　ぐオウ♥　またイクぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥♥」

視線をそらしたくなるようなアヘ顔で、ペットボトルにド下品射精する正義の天煌聖姫。

濃厚なスペルマミルクで中身を満たしていく。

「ふ、ふあぁ……はあぁあん……♥」

「キャハハ、いっぱい出たね♥　ザーメンドリンク完成♥　毎日飲んでねお姉ちゃん♥」

「ひゃはいぃ……♥」

快楽に蕩け虚ろな視線を向けるザーメン聖姫。明日にはそのザーメンドリンクを、親友の前で飲まされることを彼女はまだ知らない。

「せっかくだから味見してよ」

「んぁぁ……はぅぅ……え、えー!?」

「ザーメンだって新鮮なほうが美味しいと思うし～、実況しながら飲んでほしいな♥」

「わかりました……」

射精直後で頭が回らず、もはや抵抗する気さえ起きない。今出したばかりのザーメンまで飲まされてしまう。

「ゴク……♥　ゴク……♥　じゅぷううんっ♥　ゴブブ……んぐぅぅ……♥」

「お味はどうかな？　正直にね♪」

「に、苦くて……くさいです……♥　わたしのチンポ汁は最低の味です……♥　吐き気がしてしまいますぅぅ……♥」

自分を貶めながら味や香りをコメントする。精液は匂いこそキツイが、粘つきは少なく、飲みやすかったのは不幸中の幸いであった。

「それからそれから？」

「天煌聖姫なのに生ゴミのようなザーメンでごめんなさい♥　正義のヒロインを気取っていてもフタナリチンポには悪臭ザーメンが詰まっているんです……♥　うぅ……最低です……」

「キャハハ！　マゾの上におチンチンミルクまでまずいとか終わってるね。ほら、もっと飲んで。お口直しにエリスのミルクも飲ませてあげる♥」

「そ、そんな……！　も、もうイヤです……」

泣きそうな悪臭ヒロインを無視して、ペットボトルの蓋を手に取ると、魔力で茶碗のサイズまで巨大化させる。そこへペットボトルが傾けられ、触手ペニスから追加のザーメンも注がれた。

「んん♥　っ……はあぁぁ……♥　ふううん……♥

おチンチンミルクいっぱい出るううんっ♥」

ヴァーミリオンとは打って変わってネバネバの白濁が湯気を立て、器を満たしていく。

むせかえるような精臭が漂い、表面にはチンカスまで浮いている始末だ。

紅髪美少女は恥辱にまみれながら、大きくなった蓋に口をつけさせられた。

「サービスだよお姉ちゃん♥　舌でよくミックスして味わってね♥」

「くっ……コク……ゴク……ゴクゴク……ゴクンッ♥」

口内を二種類の汚濁に蹂躙される正義のヒロイン。

また違った味、エリスの絡みつくようなチンポミルクが身体を蕩けさせる。

（はう……♥　さっきよりも濃ゆいです……♥　チンカスもキツぃい♥　で、でも……気持ちいい♥　わたしのザーメンと混ざって美味しく思えてきちゃいます♥　汚いのに……嫌なはずなのに……ザーメン好きになっちゃうぅ……♥）

味も匂いも強烈なのに、恥垢まで口にさせられているのに、再び危険な恍惚を感じてしまう。

節操のないフタナリチンポはまたまた勃起してしまっていた。

「あれ？　また大きくなってるじゃん。ホントどうしようもない変態だねお姉ちゃん♥」

「やっ……そ、それは……！」

「もう一回シコシコしてあげるよ♥　また射精したいんでしょ～♥」

お人形のように小さな指が肉幹を擦っていく。白濁ドリンクの快美と合わさり、吐精の悦びを求めてしまう。

「も、もうイヤアアァアっ！　またでちゃうぅうう♥　ザーメン飲みながらまたザーメン射精しちゃいますううぅうう♥」



何度も敗北した雑魚チンポが抵抗できるはずもなく、あっけなく生臭いものが飛び出す。

白濁ミックスジュースを完飲しながら、正義のヒロインはマゾ射精する。

ビュク♥　ビュククウウウゥゥウウウウ♥　ドブッ♥　ブブッ♥　ドバッ♥　ドバッ♥　ドバババババババッ♥

「くちゅウウゥゥウウゥ〜〜ン♥　んちゅっ♥　じゅぱっ♥　い……イキますッ♥　ちゅうんっ♥　イッちゃいますッ♥　またチンポイッちゃいましゅうぅううう♥　ザーメンドリンク飲みながりゃド下品射精♥　チンカス生ミルクごっくんしながらマゾ射精♥　ゴクッ♥　ゴクッ♥　〝ンっくうぅうぅうっ♥　お口からフタナリチンポまで直通しちゃってるんでふううぅうぅう♥　せーし飲んでせーし射精してるんでしゅううぅうぅうぅう♥　ほ〝おっ♥　じゅぽっ♥　ぐじゅっぽ〝お〝お〝おオオォオオオォオオン♥♥」

猛烈な勢いでスペルマが噴出し、濁流のように床を汚していく。

「ひ〝うっ♥　う〝う〝っ♥　イクの止まらないいいぃいい♥　ザーメン止まらない♥　食ザーチンポアクメいいのおおぉおおお♥」

快感の叫びを上げ、紅髪ヒロインは恥を何十にも上塗りする。膨張した肉竿と睾丸はリズミカルに弾みながら、煮えたぎった欲望を解き放つ。

精の奔流はエリスが追加で注いでいたペットボトルが空になった頃、ようやく治まった。

「ハァ……ハァ……んああ♥　も、もうらめですぅ……♥」

「キャハハハ！　いくら精液いっぱい飲んだからって、もう出さなくてもいいのに♥　信じらんないド変態だねお姉ちゃん♥　デモンコアにだってこんなチンポ狂いはいないな〜♥」

「い、言わないでください……」

あまりに情けなくて、涙ぐむヴァーミリオン。自分の下半身が淫乱だと徹底的に思い知らされる。

そして、フタナリ地獄はまだ終わらない。悪魔幼女は空になったペットボトルを指さすと、

「ほら、空になっちゃったから、また一からザーメン搾りのやり直しだね♥　がんばってね正義のヒロインさん♥」

「う、うそですよね……？　あぁ……やああ……も、もう出ないです……」

「し～らないっと。満タンになるまで帰れないからそのつもりで♥　キャハハハ♥　アッハハハハハ♥」

夕陽の差し込む教室に悪魔の毀笑（きしょう）が響きわたる。

親友との約束はとても守れそうになかった。

閑話　ゴブリン輪姦と夫の写真にぶっかけ

「あなた、おはようございます」

子供たちを見送ったとあと、いつもと変わらない朝の風景。神城冴子はリビングに飾られた写真にあいさつする。印画紙に写った夫、神城誠一郎は昨日と同じ笑みをたたえていた。

海外に出張中の彼を想い、さびしさを紛らわせるため、自身に気合いを入れるために、冴子は写真に話しかけるのだ。

「よし、今日もがんばるわよ！　変態プレイになんか屈しないわ！」

サファイアのような容貌に少し影を落としながら己を鼓舞する。浮かない表情の理由は、もうすぐここでフタナリ調教が行われるからだ。

エリスの眷属が自宅にやってくるというのである。

「セイクリッドギア、セットアップ」

事前に言われた通りに変身を終える。悪魔幼女に天煌聖姫の姿になるように命令されているのだ。

他にもエデンフィールドの使用禁止や彼らに逆らわないなど、いくつかの指示を与えられている。

そして、眷属たちデモンコアを追い返すには、

『お隣さんに気付かれちゃうかもしれないし、三十分射精を我慢すれば今日は終わりにしてあげる♥　ただし、できなかった場合は一日中レイプされちゃうかも♥　愛華ちゃんや陽一くんにもバレないように気をつけて♥』

ということであった。あまりにも身勝手な言い分だが、淫紋を刻まれたセルシアンは従うしかない。

（三十分……三十分射精を我慢すればいいのよね……それで今日の調教は終わり……大丈夫。私ならできるわ）

その時、無遠慮にドアが開けられた。ずかずかと入ってきたのは、小猿ほどの大きさで尖った長い鼻と薄緑色の肌をした邪悪な精霊、ゴブリンたちであった。数は十数匹といったところだろうか。

「ギシシ、こいつはまた活きのいい牝豚だな！」

「ああ、ちょっとトウがたってるがな」

「ゲヘヘヘ、堕としがいがあるぜ」

「ふんっ、言ってなさい。下等なあなたたちと天煌聖姫のレベルの違いを教えてあげるわ」

レートD、下位デモンコアに氷のような視線を投げかける。普段なら何百体いようが一秒もかからずに瞬殺している相手だ。

（こんな弱敵に負けるもんですか！　調子に乗りすぎたわね色欲の夜天！）

セルシアンの身体に神聖粒子がみなぎっていく。

「好きなようにしなさい。抵抗はしないわ。ただし……あなたたちの粗末なテクニックでわたしをイカせられるのならだけど」

「いいぜ、さっそくゲームスタートだ」

そして、セルシアンとゴブリンたちとの射精我慢ゲームがはじまった。

「へへ、覚悟してもらうぜ」

「んっ、んん……」

ゴブリンたちは人妻ヒロインをソファーに押し倒すと、ロープを取り出し両手を頭の上で縛った。足も大股開きに開脚させて器用に固定する。

「身動きできない相手にしか興奮できないわけ？　情けない男ね」

「言ってな。オレたちの恐ろしさ見せてやるぜ」

すべすべの腋を御開帳し、レオタードスーツの股間部分を盛り上がらせる熟女聖姫に、小さな陵辱者は群がる。

「ふうんっ……んく……うぅぅ……」

せつない媚声を上げる蒼髪聖姫。何匹かが腋に顔を

近づけると、舌でペロペロと舐め出したのだ。
　生暖かいベロの感触にセルシアンは嫌悪の声を漏らす。
「っ……ど、どこを舐めているのよ……！　そんなところを責めたって……射精なんかしないわよ！」
「ゲヘヘ、そう焦るなよ。物事には準備ってヤツがいるのさ」
「おう、そうだぜ」
「そのデカチンもすぐに可愛がってやるさ」
　他のメンバーは動かず両脇に張りついたゴブリンだけが舌を動かす。
　くすぐったさともどかしい愛撫に少しずつ快美の火種が生まれていく。
　はじめは動じていなかったセルシアンも徐々に甘い声を漏らしてしまう。
　ぺろ♥　ぺろ♥　ちゅく♥　ちゅぽちゅぽ♥　ぺろぺろん♥　ぺちゅろん♥
「あ……んぁ……はぁぁ……ぁ、ふぁぁ……んんくぅぅ……」
「こうやってワキだけ愛撫されるのも悪くないだろ？　キキキキ」
「ふぐ……んっ……！　ひぅぅ……こんなのもの気持ち悪いだけよ……調子に……乗らないでっ！」
　双眸をキリリと吊り上げ強気な態度を崩さないが、心の奥に不安を覚える蒼髪ヒロイン。
　マゾ奴隷に調教されきった肉体は、どの部分を責められても感じてしまうのだ。
（それでも腋なんかで……腋なんかで気持ちよくなるはずがないわよ！　しっかりしなさいセルシアン！）
　どうにかして不安を振り払おうとするが、見られているという羞恥も相まって、どんどん身体が火照ってくる。
　甘い疼きが両腋のくぼみから伝播していく。
「は、あ、はくぅぅぅぅぅ……っ！　あはは…

…ははぁあん！　ふく……ん、あぅぅ……ふひゃあぁぁあああん！」

「どうした？　感じないんじゃなかったのかよ？」

「く、んくぅぅうぅぅうぅッ！　あ、は、ははぁ～～～ん！　か、感じてなんかいないわよ！　ちょ、ちょっとくすぐったいだけ……ひぅ……あう、ひゃあああぁああん！」

くすぐったさが淫悦に変わるのにそう時間はかからなかった。

官能的に開け放たれた腋口からは牝の色香が漂い、周囲にいる者を魅了していく。

「ううぅあ……あ、う、っく、くぅぅうぅっぅうう！　はぐ……んぐ、んはぁあああぁあああ！　ひゃうぐぅう、っうぅぅう～～！」

「ギヒヒ、またずいぶんな乱れようだな。ワキだけでイッちまいそうな勢いだぜ」

「だ、誰がそんなこと……ひゃぐ、っぐ！　くふぅうぅぅうぅん！　きゃはは……あははぁあああん！　な、なんでこんなので……ふひひ……ひふうぅうぅぅうう！」

「いやらしい匂いをプンプンさせてなんでもクソもねえよ。ダンナがいなくてご無沙汰なんだろ？　イヒヒ、天国へ連れていってやるぜ！」

「あの人のことは関係ないでしょ……や、あははぁ～～～ん！　ん、あ、だ、ダメなのに……いやなのに……くふふん！　ひぐ、へはあぁあああ～～～ッ！　あふふうぅうん！」

スーツに守られていない敏感くぼみを舐められ、泣き笑い状態で身悶える正義の天煌聖姫。

こそばゆい痒さからみっともない笑い声を堪えることができない。

「ひあぁあああぁん！　あはは！　あはははは！　あはははぁ～～～ん！　も、もうやめて！　くすぐったくて……変になっちゃうぅうぅうぅう！

んくぅうぅう！」
「ちょっとすっぱいが美味いぜあんたのワキ。ほら、ここのくぼみがいいんだろう？」
「あひゃ、ひゃう！　ひゃあああぁあああん！　ふぁ……んはぁあああぁあああ！　あひひ……く、くすぐるのダメえぇえぇえええ！」
濃密なフェロモンをまき散らしながら、くすぐり快感に翻弄される。
両手両足にも力が入らず、万全の状態だったとしても拘束を断ち切れないだろう。
「んひゃあぁ……っ！　あぁぁぁ、こ、この程度……耐えてみせる……っ！　ひゃあぐ、ぅ、うあああぁあああああん！」
「ハッ、どの口が言ってんだよ。そんなにペロペロされるのがよかったのか？」
「まったくとんでもねえ好色ババアだぜ」
「エリスさまが言う通りの変態だな」
「ち、ちがっ……腋なんかで……んふぎ、うぅぅ……やあぁあああああぁあああッ！　変態なんかじゃ……ないぃいいぃい！　はうぅうぅうぅう！」
生臭くザラザラとした舌で神経の集まっているところを弄られる。
声に混じる甘さの量がどんどん増えていく。
（うぅ……こ、これ……感じすぎるわよぉ……くすぐったくて気持ちよくて……腋だけでイキたくなっちゃう……んぐぅうぅぅ～～ッ！）
牝の媚声を上げながら淫辱に耐える人妻ヒロイン。
だが、彼らの調教はここからが本番であった。
一匹がレオタードスーツの股間部分に顔を寄せると、生地をずらしたのだ。
「ヒゥウッ！　そ、そこは……やめなさいっ！　あはぁあああぁあああッ！」
「すいぶんと立派なチンポだな。それにキンタマの奥にあるオマンコは……ギャハハハ！　もう濡れてんじ

ゃねえか！」

「だ、黙りなさい！　汚い手で触らないで！」

包茎フタナリ肉棒に巨大陰嚢、夫以外には見せるつもりもなかった熟成蜜壺を見世物にされ、セルシアンの全身が燃えるように熱くなる。

（くっ……こんな……下衆に……っ！）

邪悪なデモンコアにいいようにされるなど、たまったものではないが、肉門は魔の手から逃れられない。

ゴブリンは人差し指と中指を立てると、淫裂に挿入した。

「ひっ……や、イヤあぁぁあああッ！　やめて……うぅ……離しなさいッ！」

「こんなにグチョグチョにしといていまさらおせーよ。ほうら、指が根元まで入っていくぜ」

「んくぅぅ……ひぐ、うっく、ひぅぅぅぅうううんッ！　や、やめてって言っているでしょ……んく、……はうぅう～～～ッ！」

すでに愛蜜でドロドロになっていた膣壁は、易々と指を受け入れた。かき混ぜるように動かされると、ビリビリと痺れるような快楽が迸っていく。

じゅぷ♥　じゅぷ♥　ぐじゅぷ♥　じゅぷじゅぷ♥　ぐちゅちゅちゅ♥

「い、い、いひぃいいいいいいッ！　か、かき回さないでぇッ！　うぐ……ひぐ！　はぅぅ……んひぐううぅううッ！　んあぁ……ハウッ！　そ、そこはダメだからあぁあああッ！」

「なんだここが弱いのか？　ほれほれ、どうだよ？」

「あぁあぁあんッ！　す、すごい……すごいのお！　や、違うのよ！　あうぅ……そこは敏感だからッ！　触らないでエエェエエエエッ！」

Gスポットを執拗に責められはしたなく嬌声を上げる人妻ヒロイン。

長らく性交していなかった淫裂は、指でも愛撫だけで濡れそぼつ。声にも牝ネコめいたせつなさが混じる

ようになってきた。
「ひゃふ、ふぅぅ……んんうぅぅぅぅぅう♥　あ、アソコがグチュグチュになっちゃうぅぅ……♥　イヤなのにっ……感じたくないのにいぃいぃいぃい♥」
「ケッ、ようやく牝声出しやがったぜ。いい加減淫乱だって認めたらどうだよ！」
「う、うるさいわね……っ！　あぅぅ……♥　時間、時間はまだなの……!?」
あまりの辱悦に耐えかねて掛け時計を見る。しかし、時間はまだ十分ほどしか経っていない。
（そんな……まだたったのそれだけなの!?　あと二十分もこんな状態で……）
絶望的な現実がセルシアンを苦しめる。清流のように澄んだ心が蕩けそうになる。
「ああ、ううぅぅう♥　身体熱くてぇ……へ、変になるぅう♥　んんく……ふく、ひぐぅぅぅう～～～～～ッ♥」
「おい、見てみろよ。この女チンポまで勃起させてやがるぜ！」
「マジじゃねえか！　どんだけ淫乱なんだよ！」
「チンポ……？　あ、やあぁ……こんなに大きく……はぅぅ……♥」
「射精したいならさせてやるぜ？　なあお前ら！」「おう！」「そうだぜ」「その下品フタナリちんぽを扱いてやる！」
「ま、待ってぇ！　イッちゃう♥　イッちゃう♥　い、今シゴかれたら我慢できなくなっちゃうからっ♥　ザーメン射精しちゃうからっ！」
肉付きのよい太腿を揺らして、必死に抵抗する熟女ヒロイン。
腋と膣穴だけでも気が狂うほど気持ちいいのだ。これ以上の快楽を与えられたら射精しない自信がない。
「ほ、本当にダメだからっ！　チンポは……チンポはいやあッ！」

「フンッ、聞こえねえなあ！」

しかし、涙ながらの抵抗もむなしく、ゴブリンの一匹がフタナリ肉竿に手を伸ばした。

そして、そのまま五本の指で掴み、乱暴に扱きあげる。

ごっしゅごっしゅ♥　じゅぷ♥　じゅっぷ♥

「お……おほぉおおおおぉ♥　チンポチンポチンポぉ♥　チンポ触っちゃダメだって言ってるのにいぃいいぃいい♥　ひぐぅぅぅぅぅぅう♥　お、お、おぉおおおおお♥」

「ギシシシ、下品な声出しやがって。センズリこいてる時もそんな声出してんのかよ？」

「お、お、違うのぉおぉおおお♥　い、いつもはこんな声出してないから♥　センズリしてる時はもっと静かに……おっほ♥　ひほ……にゃほぉおぉおおぉおおぉおおおん♥」

説得力ゼロのアホ声でフタナリ快楽に溺れる正義の蒼髪ヒロイン。

我慢汁を潤滑剤に包茎の皮が淫猥な音色を奏でる。

じゅぐ♥　じゅぐ♥　じゅぐじゅぐじゅぐ♥　ぐちゅぐ……じゅぐぐぐぐ♥

「皮がだるんだるんだぜオバサン。皮オナニーばっかりしてたみたいだな」

「そ、そんなこと言えないぃぃ……ひぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥」

「ぁ、なんだって？」

「いぐ♥　おぐぅ♥　い、言います言います♥　私は家で皮オナニーばかりしているフタナリのチンポ狂いなの♥　一日三回はシコッてるセンズリ中毒なのぉおおおおぉ♥　ほお♥　ほお♥　おぉおぉおおおおぉおおおおん♥」

羞恥告白をさせられ何度も身体を跳ねさせる。蜜壺からは愛液が、フタナリ肉竿からは我慢汁がとめどなくこぼれ、絶頂の階段を昇らされる。

「ほっおおぉおおぉお♥　む、むり♥　もうムリなのお♥　イク♥　イク♥　チンポイク♥　んあああぁあぁあ♥」

「おう、いいぜ。イッちまいな変態ババア！」

「まだ十五分も経ってないけどな！　ギャハハハ！」

「はうぅうぅ……♥　でも……でももう我慢できないからぁっ♥　ち、チンポ汁出ちゃうから♥　敗北ザーメン漏らしちゃうからあああああ♥　おぉおおおぉおおん♥」

腋、膣穴、勃起肉竿を同時に責められ、堕ちきった媚声を放つマゾヒロイン。

制限時間の半分もいかない内から射精する。

ビュク♥　ビュク♥　ビュクビュクビュククウウウウウウウウッウ♥　ビュ、ブビュリュリュリュリュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ♥　ブビュルルルルウウウウウウウウウウ♥

「ホ、ほおおぉおおぉおおおん♥　イクイクイクイクイクちんぽイクううううぅううう♥　腋マンコ舐められていく♥　おばさんマンコ手マンされてイク♥　フタナリちんぽゴシゴシされてイク♥　ザコゴブリンの手コキでイッちゃうのおおおぉおおおお♥　イク♥　イクイク♥　スケベザーメン出してイックうぅうぅうぅうぅう♥　はひぃいいいいいいいいん♥」

びゅくびゅくと勃起肉を震わせスペルマをまき散らすフタナリ聖姫。

フローリングの床に白い汚泥が飛び散っていく。

「はひ……あは……あぁぁ♥　ふぁぁ……はうぅうぅう……♥」

「ギヒヒ、よく出したじゃねえか正義の天煌聖姫さまよお」

「オスのオレたちが恥ずかしくなるくらいの射精だったぜ」

「あっ、う、うぅぅ……しゃ、射精……しちゃったの……？　くぅぅ……」

ゲームに負けてしまったことにいまさら気付き、沈痛な面持ちで唇を噛む。

（たった三十分も我慢できないなんて……私はなんて情けないの……愛華に合わせる顔がないわ……）

娘と共に厳しい訓練をしてきたのに、あっさり射精してしまった。

惨めで情けなくて涙が出そうになる。

「どうする？　もう一回勝負するか？」

「おう、オレたちはいつでも相手になるぜ」

「このままあきらめてオナホールってのも悪くないけどな！　ゲヘヘヘ！」

「こ、このっ……低級デモンコアが調子にのって……！」

怒りを気力に変え自分を奮い立たせる天煌聖姫セルシアン。

一度負けたくらいで心を折る彼女ではない。

「もちろんやるに決まっているでしょ！　次こそ耐えてやるわ！」

「そうかいなら今からスタートだ。丁度いいところにお客が来たみたいだしな」

「えっ？」

疑問を覚える前にインターホンが鳴らされ、見知った声が聞こえてくる。

「冴子さーん、こんにちわー」

どうやら近所の主婦友達が遊びに来たようである。

いきなり意識を日常に戻され、射精直後のセルシアンは困惑する。

「た、田宮（たみや）さんの奥さん!?　こんな時に……!?」

「居留守はなしだぜ。早く行ってやれよ」

「でっ、でもっ！」

「ドアを少しだけ開けて話せばいいじゃねえか。せいぜい変態行為に気付かれないように注意するんだな」

「っ……わ、わかったわよ……！」

拘束を解かれ、おぼつかない足取りで立ち上がる蒼

髪ヒロイン。どうにか玄関まで進むと、慎重にドアチェーンを解除する。いつも通りを取り繕い、少しだけドアを開いた。

変身を解除している時間はないため、エデンフィールドの応用で見た目を神城冴子と誤認させる。近くにいるゴブリンたちの姿も見えないように調整した。

「お、遅れてごめんなさい。なにか用かしら」

「煮物を多く作りすぎたからおすそ分けにと思ったのだけど……冴子さんどうしたの……？」

「い、今大掃除の真っ最中なの。中を見せるのはお見苦しくって」

「そうなの。じゃあわたし帰ったほうがいいかしら？」

「ええ、申し訳ないのだけれど……今度またお茶しましょう」

「はい」

田宮夫人はのんびりとした動きで煮物が詰まった鍋をドアの前に置く。全体的におっとりとした雰囲気の女性だ。セルシアンの異常に気付いている様子もない。

（よ、よかった……フタナリちんぽを丸出しにしてる姿なんて見られたらお終いだわ。近所中に変態だと思われちゃう）

変態プレイがバレなかったことにホッと胸を撫で下ろす主婦ヒロイン。

だが、邪悪なゴブリンたちがこれですますわけもなかった。話を引き延ばすように念話をとばす。

【おい、なんか雑談しろ。もちろんコッチには気付かれるなよ】

【い、一体どうしたのよ……なんでそんなことを……】

【いいからやれ。それともその女も調教してやろうか？】

【このっ……わかったわよ……本当に最低ね……！】

命令に従い踵（きびす）を返そうとする夫人を呼び止める。それが自らをさらに貶めることになるとも知らずに。

「あ、あのもう少しだけ話していかないかしら？」

「いいの？　お忙しそうだったけど」
「ええ、立ち話で悪いけどお宅の息子さんには陽一もお世話になってるし――、ヒ、ひぅぅうぅッ」
突然、淫声を上げる蒼髪ヒロイン。その蜜壺には極太の肉棒が挿入されていた。
ゴブリンの中でも特に大きな男根をもつ者が、バックから膣穴を蹂躙しているのだ。
【な、何してるのよ……ぅぅう……ひあうううぅうぅ～～～～ッ！　んくぅぅ♥】
【いいから適当にしゃべってろ。牝豚ヒロインさんよぉ。ハメてるところを見られてもいいのか？】
【ぐっ……く、クズ……っ！】
小声で話しながらゴブリンに羞恥調教される。目の前に知り合いがいるというのに。
（こ、こんなのもしバレたら……うく、さ、最悪だわ……っ！　絶対に色狂いだと思われちゃう……）
冷汗を流しながらぎこちなく会話する。膣内をまさぐられた影響で、フタナリ陰茎もフル勃起状態だ。
「ど、どうかしら、陽一がそちらで迷惑かけてない？　あ、あの子ワンパクだから……」
「全然平気ですよー。うちの子ともよくしてくれて――」
話の内容はほとんど頭に入っていないが、どうにか場をつなぐ。脳裏に浮かぶのは蜜壺快楽と勃起ペニスの恥辱だけだ。
ラブジュースとカウパー汁が止まらない。
【ふあぁぁ……あう♥　あぅぅ……んくぅぅう～～～ッ♥　お、奥に入れないでっ……オマンコ擦れてぇ……苦しいぃ……♥】
【へへ、こいつは名器だな。いい身体してるぜ奥さん】
【だ、黙りなさい……あの人以外に身体を許すなんて……ゾ、ひぐうぅぅうぅう♥　屈辱だわ……はうぐぅぅ♥　いやらしいことなんかしないで……ッ！　くぅう♥　ひうぅぅうぅ♥】

【ちんぽビンビンにしながらじゃ説得力がねえな。オラッ、もっと突いてほしいんだろうが！】

【は、はう……はぐぅう♥　うあぁぁ……このっ……ひぅ♥　ふうぅうぅうぅ♥】

開ききった肉壺を強引にこじ開けられ、激悦に悶えていく。感じてはいけないと理解していても、調教されたマゾボディが反応し喘ぎを堪えきれない。

目の前のママ友にバレてはいけないというシチュエーションも、黒い期待感を加速させていく。

「ど、どうしたの冴子さん？　顔色が悪いけど……平気なの？」

「ちょっと風邪気味なだけで……んんくぅ♥　へ、平気よ……心配しないで」

「そうなの？　わたし風邪に効くお料理もってくるわね」

「あ、ありがとう……」

気遣われていることが申し訳なく、自己嫌悪に陥っていく蒼髪美熟女。

まさかデモンコアとセックスしているとは相手も思わないだろう。

（ご、ごめんなさい……私、お、オマンコ犯されてるのぉ……♥　チンポでグリグリされてふたなりチンポまで勃起させてるのぉ……うぅぅ……ごめんなさい……）

恥ずかしくて情けなくて思わず涙が出そうになる。レオタードスーツを着て膣穴を犯されながらフタナリ勃起を見せているなんてできれば夢だと思いたい。

【さっきよりもチンポがデカくなってるぜ。ったく……とんでもないドマゾのババアだな。恥ずかしくないのか？】

【う、うるさいわね……ひっ、お、押し込まないで……っ！　ぎいぃいぃっいいいいい♥　オマンコ壊れちゃうからあ……っ♥】

【マン汁垂れ流してるくせに甘えんな！　オラオラオ

ラッ！】

【ほごおおぉおおおぉ♥　んごぉおぉおおお♥　し、子宮のとこゴリゴリってぇ……♥　だ、だめになる♥　また射精したくなるからあぁぁあああ♥　ひうぐうぅぅうう♥】

太い男根で膣最奥まで嬲られる。目くるめく淫悦に大声を出してしまいそうだ。

フタナリ肉竿にも血液が送られ、海綿体がスポンジのごとく膨らんでいく。

つい先ほど射精したばかりだというのに、また白濁液を吐き出したくて仕方ない。

「病気の時には首にネギを巻くといいそうよ」

「へ、へえそうなの……んふぅぅ……♥」

（は、はやく終わってぇ……！　こんなこといつまで続けるつもりなの！）

ぎゅっと股間を押さえなんとか会話を合わせようとする子持ちの主婦ヒロイン。

蜜壺を通って勃起肉棒に雷のような快美が送り込まれ、演技を続けるのも限界だ。

できるならこの場でよがり狂いたいというのに。

【い、いい加減にしなさいよ……っの……調子に乗らないで……！】

【おいおい、まだ立場がわかってないな？　お前らやっちまえ！】

【オウ！】【了解だぜ】

【な、何をするつもり……!?】

足元のゴブリンたちが太腿を伝ってセルシアンの身体を昇ってくる。

そして、股座に到達すると陰嚢に紐を結び付け、グイグイと引っ張った。敏感な精子タンクを責められセルシアンの眼前に火花が飛び散る。

もにゅ♥　もにゅ♥　むにゅ♥　ぐにゅむにゅ♥　ぐにゅむにゅ♥　ぐにゅぐにゅりん♥

【ほおぉおぉおぉおおお♥　き、金玉下に引かれ

てえええええ♥　おぐ♥　いぐ♥　はぐううううぅうううう♥】

【偉そうなこと言うテメエが悪いんだぜ？　嫌ならちゃんと謝りな】

【お、ほえええええ♥　あああぁぁ……あぁぁあぁぁあああ♥】

鮮烈な痛みでまともにしゃべることもできない。

【金玉引かれておかしくなるぅぅ……♥　痛くて気持ちよくてぇ……♥　ぎぃいいいいい♥】

【だから、謝れば許してやるぜ】【躾のなってない牝豚は調教しなきゃな】

【わ、わかったわ！　謝る！　謝るから！】

陰嚢をオモチャにされ気の狂いそうな激悦が身体を支配する。痛みから逃れるためなら何でもできそうだ。気高い天煌聖姫は田宮夫人には気付かれないように、必死で謝罪をさせられる。

【す、すみません……調子にのっていました♥　私はマンコ弄られてチンボッキする変態ドマゾです♥　正義の味方を気取っているクセに金玉イジメで感じるスケベでごめんなさい♥　だ、だから金玉引っ張らないでえぇえええ♥　ちぎれる♥　金玉とれちゃうからあぁぁあああっ♥】

【ケケケ、はじめからそう言っていればいいんだよ】

【ふぐううぅぅ……ひゃ……ひゃい……♥】

【雑談もういいぜ。部屋に戻りな】

「そ、それじゃ今日はこのへんで……」

「あ、話しすぎちゃったかしら？　またね冴子さん」

許しを得てようやく淫辱から解放される人妻ヒロイン。可能ならばその場にへたり込みたいところだが、陵辱者たちがそれを許さない。

再びリビングに戻ると、今度はテーブルの上でしゃがむように命じられる。

手は後ろに縛られ、和式便器で用を足すような格好だ。金玉に括りつけられた紐はそのままで、股間が窮

屈だ。

「はぁ……はぁ……はぁ……つ、次は何をするつもり？　何でもかまわないけど、もう二十分は経っているわよ」

残る気力を総動員させ、表面上だけでも冷静な姿を取り繕う。

実際に残り時間は少なく、勝機があるように思えた。

（あと十分だけ我慢できれば勝てるわ！　覚えておきなさいエリス。いつもあなたの思い通りになるとは限らないのよ！）

この状況を作り出した元凶を思い出し、射精衝動を我慢する。

だが、二児の変身ヒロインを待っていたのは、想像もつかない恥辱であった。

「たしかに残り時間は少ないな。だがあんたに耐えられるのかよ？」

「そうだぜ。あれだけビュービュー射精しといてよお！」

「うるさいわね！　耐えてみせるわよ！」

「そうかい。ならあんたが我慢できるようにこっちからもサービスしてやろう」

そう言ってセルシアンの目の前に差し出されたのは、夫の写真が入った写真立てであった。

笑顔の誠一郎が写っている。ゴブリンはそれを股間の前、フタナリペニスの射線上に置いた。

「や、やめなさい！　それは大切な物なのっ！　ま……ま、まさか……っ！」

「ああ、知ってるぜ。いくらフタナリ変態でもダンナの写真は汚せないだろう？　オレたちからのサービスさ」

「ギャハハハハ！　そりゃあいいぜ！　よかったなセルシアンちゃんよぉ！」

「このっ……ふざけないで……！　絶対にあとで消滅させてやるから……！」

「やれるもんならな。オラッ、まだゲームは終わってないんだぜ！」

そして、ゴブリンたちがセルシアンに群がっていく。数匹が頬にヌルついた舌を這わせ、数匹がHカップ巨乳にむしゃぶりつき、数匹が勃起肉竿に手コキを敢行する。

そして、一番大きなペニスを持っている一匹、先ほどバックから挿入していたゴブリンが背後から蜜壺に亀頭をあてがった。

「ヒッ、ま、また……そ、そんな汚いものくっつけないで！　い、今すぐどきなさい！」

「遅えよ。正義の天煌聖姫だっていうなら、せいぜい耐えてみな！」

「い、イヤァアアアァアア！」

牝の香りが漂うリビングに絹を裂いたような悲鳴が響きわたる。成熟した媚肉をかき分け、再びゴブリンの勃起巨根が挿入された。

じゅぶ♥　ぐじゅぶ♥　めり♥　めりめりめり♥　ぐちゅぐちゅう♥

「ぎ、ひぎいいいいいいいい♥　や、あ、ぬ、抜きなさい……っ！　抜いてってば！　んぐうううぅぅうぅう♥」

「ギシシ、ババアのくせによく締まるマンコだな。偉いぜえ……へへへ」

「ほ、褒められたってうれしくないわよ……！　はうう♥　うぅ♥　つ、突かないで……♥　オマンコ突かないでえええええ♥　んあうぅうううう♥　はぐうぅぅ～～ゥ♥」

一突きごとに身体がバラバラになるような快悦がセルシアンを襲う。

蜜壺が極太の化け物ペニスで無理矢理にこじ開けられる。

「牝ネコみたいに感じているクセにウルセエな。ホントはこうやって犯されたかったんだろ？」

「ち、違うわ……！　感じてなんか……ひゃう……うぅ……ほううぅぅうぅぅ♥　ほぐうぅぅうぅぅうぅぅ♥　ふー♥　ひふー♥」

愛情の欠片もないレイプ。そのはずなのに感じている自分をセルシアンは恐ろしく思う。

（な、なんでこんなのが気持ちいいのぉ……おマンコもチンポも蕩けそうで……あ、あなた助けて……）

どれだけ心の中で拒否しても、変態ペットに調教中のマゾ肉体は乱暴なピストンさえも悦んでしまう。

焦らされきった熟淫裂は泉のように愛液を垂れ流した。

「ほら、マンコもグチョグチョじゃねえか。感じてるんだろ？　オレのチンポが気持ちいいんだろ？」

「だ、だから違うって……んぐ⁉　ぃ……ひぅぅぅ……はぐぅぅぅぅうぅぅ♥　ンあぁぁあぁああ♥」

「オレたちのことも忘れてもらっちゃ困るぜ」

「ああ……このデカ乳たまんねえ……」

「チンポもドクドクいってやがるぜ！」

「あぅ♥　ひぐ♥　んひぃぃぃいいい

「すげえマシュマロみたいに伸びるぜ。ダンナだけに楽しませとくのはもったいねえな」
「はぁ、はぁ、んはぁあぁああ♥　だ、黙りなさい……♥　はぅ……ンンン～～ッ♥」
九十八センチ、Hカップ巨乳を弄ばれ声を荒らげる蒼髪ヒロイン。
紡錘形に伸ばされた双球がいやらしい。
（た、耐えないと……しっかりしなさいセルシアン！　あの人を汚すわけにはいかないのよ！）
夫の写真に視線をやり、奥歯を噛みしめて射精を耐える。清楚な美貌を真っ赤にしながら、全身を襲う快楽の波に抗う。
だが、その様子はゴブリンたちの嗜虐心をさらに煽ってしまう。
一匹が近くの戸棚に目を向けると、
「おい、おもしろい物があったぜ。ゲヘヘヘ」
「ふぐぅうぅ……そ、それは……！」
陵辱者が手に取ったのはコケシだ。どこにでもあるような土産の一品だが、セルシアンにとっては夫と旅行中に二人で選んだ大切な思い出の品である。
「それは……あなたたちなんかが触っていい物じゃないのよ……ジ、ひぎぃいいぃいいい♥」
「どうせこのコケシをダンナのチンポだと思って、マンコに突っ込んでオナニーしてたんだろ？　色情狂のあんたらしいぜ」
「し、してないわよっ！　いい加減にしなさいっ」
「ああ、するわけねぇよな？　コイツは変態だからダンナのチンポだと思って、てめぇのフタナリチンポに擦りつけてるんだぜ」
「ギヒヒ、そうに違いねえぜこのセンズリ牝イヌが！」
「このっ……あの人をダシにするなんて……！　あなたたち絶対に許さないわよっ！」
思わず怒りの声を上げるが、勃起肉幹は淫らにそそり立ち、次の辱悦を期待してしまっていた。

メモリーを陵辱する虐悦プレイを。

「フンッ。コケシとそのスケベマラを兜合わせしてやるぜ。覚悟しな」

「や、やめて……それだけは……ああ、あぁあああぁぁあああ――♥」

コケシの頭とフタナリ肉棒の先端がすり合わせられる。皮を剥かれた包茎亀頭はヴァーミリオンのもの以上の敏感さで快楽を感じ取ってしまう。

ぐり♥　ぐり♥　ぐりぐりぐり♥　ぐりぐり♥　ごりごり♥

「ひっ……や、おごぉおぉおぉおお♥　ち、チンポがグリグリってぇえぇえええ♥　は、激しい……ひうううぅ～～～ッ♥」

「ずいぶんと気持ちよさそうじゃねえか。そんなに包茎チンポをイジメられるのがよかったのか？」

「い、いいわけない……ふぐっ♥　んぐっ♥　ふ……ふあぁぁあああぁああん♥　かっ、カリ首は禁止ぃいいいい♥　昨日お風呂で掃除したばかりなのぉおおぉお♥　恥垢を掃除したばかりで感じやすいからあああぁあぁぁあああ♥」

「ったく……いつもはチンカスためてんのかよ汚ねえなあ」

「これで人類のためとか言ってんだから笑わせるぜ！」

「や、やめてぇ……♥　だって包茎チンポだから……チンカス溜まりやすいのぉ……♥　性欲マシマシのザーメンマゾだからしょうがないのよぉっ♥」

自らを卑下するセリフを吐きながらコケシ淫辱に侵されていく。

マゾヒズムに目覚めさせられた敗北ヒロインは、進んで痴態を晒してしまう。

「いい加減射精したらどうだ？　ギシシ、もうあきらめていいんだぜ？」

「はうぐぅぅうぅぅう♥　あぅぅ♥　しゃ……射精な

んて……絶対にしない……！　あきらめるもんですか……うぅぅ……ふぐぅぅぅぅぅぅぅう♥　んひぃぃぃぃぃぃ♥」

圧倒的な快楽の監獄。だが、夫の写真を瞳に映しセルシアンは射精衝動に抗う。

大切な思い出をこの手で汚すことなどできるはずもない。

「わたしは負けない……！　耐えきってみせる……！　んふうぅぅぅ～～♥　あ、あ、あああん♥」

「たしかに残り時間も五分を切ったな。やるじゃねえか」

「当然……よ……！　正義の天煌聖姫はあなたたちになんか屈しない……！」

蜜壺を犯しているゴブリンに強気な笑みを投げかける。ゲーム終了まであと少しだ。

「こんな……弱小チンポに負けるわけ……んん♥　な、ないでしょう……！」

「へえ、じゃあこっちも本気でやろうじゃねぇか」

「……え？」

その瞬間セルシアンの時が止まった。まさか今までの陵辱は本気ではなかったというのか？

（う、嘘しょ……？　そ、そうよね……？　まだ全力じゃないなんて……）

口先だけの強がりだとわずかな希望にかけるが、当たり前のように薄い希望は打ち砕かれた。

「金玉を縛ってる紐のことを忘れたのか？　コレが根元でてめぇの輸精管をせき止めていたんだぜ？」

「輸精管をせき止める……？　なっ!?　まっ、まさか……!?」

「ここまで我慢できたのはそのおかげってわけだ。そうでもなけりゃ、その弱小フタナリチンポコが耐えられるわきゃねぇだろっ！　ギャハハハ！」

「うそ……うそでしょ……？」

驚愕の事実に青ざめるセルシアン。激しい陵辱プレ

イで気付いていなかったが、途中から彼女の我慢は紐のおかげだったのだ。

「そんな……じょ、冗談よね……？　からかっているんでしょ？　そんなことって……！」

「現実を見な包茎ドエロババア！　ヒヒッ、そらよっ！」

下卑た笑いと共に、しゅるりと管を塞いでいた紐がほどかれる。間を置かずに深悦の快楽がフタナリ肉竿へ浸透した。

「んっ♥　んんッ♥　んひぃぃぃイィィ～～～～ッ♥　チンポチンポチンポチンポがおかしくなりゅうううううぅ♥　どんどん大きくなって射精感が昇ってくるのおおぉおおお♥　ザーメン♥　ザーメン♥　ザーメン出したいいいぃいいいい♥　へおおぉおおお～～～～ッ♥」

極彩色の射精欲求に目の前がチカチカする。とめどない肉欲で全身が支配され、ザーメンを排泄すること以外考えられない。

しかし、これは序の口で、彼女が味わう辱淫はここからが本番であった。

「こっちのチンポも負けないようにしねぇとな」

言うと挿入された肉棒が一・五倍ほども膨らみ、膣内壁を強烈に圧迫する。

巨根のゴブリンは全力で、ケダモノめいた衝動に身をまかせ、ピストンを開始した。

ずちゅ♥　ずちゅ♥　ずちゅずちゅずちゅずちゅ♥　ぱんぱんぱんぱん♥

「あひイイィィィィィイ♥　こ、これしゅごい♥　しゅごい♥　しゅごいのおおぉおおおお♥　マンコもチンポもおかしくなりゅ♥　イキたくなっちゃううぅううぅう♥　にゃほおぉおおお♥　ほ、ほへエエエエエエ♥」

一秒前とは比較にならない快美がセルシアンを襲う。夫への想いが飴細工のように蕩けていく。

「んひぃいいいい♥　こ、こんなの耐えられないっ♥　耐えられるわけないっ♥　ず、ずるいわよぉおぉおお♥　んひぃっ♥　ふひぃっ♥　あ、あ、あ、アッヒイイィィイィィイイイイ♥　ち……チンポもオマンコも気持ちイイのオオォオォオオ♥　気持ちよすぎて狂っちゃうううぅうう♥」

喉をのけ反らせ、舌を垂らしながら悶える人妻ヒロイン。淫裂の奥底を突かれながら、コケシに敏感亀頭を嬲られる。戦うためのコスチュームは恥汗でベトベトだ。

「オラ、いけっ！　変態ババア！　淫乱マンコ犯されながらイッちまいな！」

「はぃいいいいい♥　イキます♥　イキます♥　私イクのおぉおぉお♥　マンコでイクにょおおぉお♥　あぁ……あなたごめんなさいぃ♥　も、もう我慢できないのおぉおぉおお♥　チンポハメられながらマゾチンポ射精したいのおおぉおお♥」

凄まじい男根の暴力で理性のガラスが粉々に砕け散る。貞淑だった人妻ヒロインは全身を陵辱されながら、肉悦に踊る。

そして、充血した勃起フタナリペニスが持ち上がると、夫の写真に鈴口をロックオンし、敗北の証を立てるように白濁液を噴き出した。

残り時間はあと一分であった。

ブ、ブビュル♥　ビュルルルウウウゥゥゥ～～～♥　ドビュビュビュブ……ビュバ♥　ビュクブビビ♥　プピ♥　ボビュビュ……ズピュ♥　ゴッボビュウウウウゥゥゥウゥウウ♥

「んほぉおぉおぉおお♥　ちちちちチンポイックううぅうう♥　スケベミルクぶびゅぶびゅ出りゅのおぉおおぉおおぉ♥　誠一郎さんの写真に顔射♥　顔射♥　顔射しちゃうのおぉおぉお♥　くっさいザーメンオシッコかけちゃうのぉおぉお♥　あぁ……あなたぁ……♥　許してえ……♥　あ、あ、ま



たイク♥　イクイク♥　ダメダメ主婦ちんぽこイッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥♥」

白濁液で夫の写真をベトベトにする人妻ヒロイン。敗北感に包まれながら絶頂し続ける。

「ダンナの顔が汚れちまったぞ。キレイにしてやりな」

「ふぇ……？　ひゃ、ひゃい♥」

ゴブリンの一匹が汚れた写真を手に取ると、顔の前に近づけた。敗北感を植え付けるように、ザーメンを舐めを強要する。

「舐めるわ……♥　ペロペロするのぉ……♥」

もちろん今のセルシアンに抗う気力などない。夫婦で愛し合う時のようにお口で精液を掃除する。

「ぺろ♥　ぺろ♥　ぺろりゅんっ♥　ちゅく……ちゅうん♥」

「一滴も残すんじゃねぇぞ。汚えザーメンぶちまけやがって」

「ぺろ……ちゅぷ♥　んちゅうぅ……♥　じゅぶ、はむ♥　ちゅぶ♥　ちゅぶ♥　じゅうんっ♥」

「こんなド変態が嫁なんてオレなら自殺してるぜ。ちゃんと謝っとけよ」

白濁ゼラチンで美貌を汚す彼女は、夫への謝罪までさせられる。

背筋がブルリと震え、また妖しい疼きが沸き上がってしまう。

「ちゅぶ♥　じゅぷぷ♥　あ……あなた申し訳ないわぁ……♥　ま、また負けちゃったのぉ……♥　みっともない奥さんでごめんなさい……♥　ちゅうぅうう～～ん♥」

「まったくだぜ。このフタナリマゾ牝が」

「じゅぷ♥　ちゅう♥　ぺろりゅううん♥　そうなの私はフタナリマゾ牝なのぉ♥　あなたがお仕事がんばってるのにハメハメされて射精しちゃう淫乱ビッチなの♥　じゅぶ……ちゅうむ、はぁぁん♥　股の緩いお嫁さんでごめんなひゃいいぃ♥　許して……許してえ

えぇ……♥　んちゅ♥　くちゅ♥　じゅむうううくうん♥　はむっ♥　じゅっぷううぅ～～～～ん♥」

うっとりとした表情で写真に舌を這わせる。ザーメン掃除のはずが、唇は久しくしていなかったキスを思い出し、淫蕩に溺れる牝豚ヒロイン。

倒錯的な快悦にムクムクとまたペニスが大きくなってしまう。

「おい、こいつまた勃起してるぜ。どうしようもねえ淫乱だな」

「はぁ……ここまでくると呆れちまうぜ。オレたちだってもうちょっと節操があるぞ」

「いやぁ見ないでぇ……うぅ……私は淫乱なんかじゃあ……♥」

口づけするたびに幸福感が増し、否定にも力が入らない。自分のザーメンすらも美味に感じられ、包茎巨根を元気にしてしまう。

そして、魔辱の遊戯は終わらない。

「お楽しみのところ悪いがどうだ？　もう一ゲームやるか？　挑戦はいくらでも受けつけているぜ？」

「ふえぇ……そ、そうよ♥　わ、わらひは……負けないのぉ……♥　正義の天煌聖姫だもの♥　しょ……勝負よぉ……♥　次こそ勝利してみせるんだから♥」

フタナリ肉幹から残り汁を噴き出し、うわ言のようにつぶやく。セルシアンへの陵辱は日が沈むまで続けられ、夫婦の思い出は白濁に汚され続けた。

あとがき

皆様はじめまして有機企画です。この度は拙作を読んでいただき誠にありがとうございます。ノクターンノベルズでフタナリ小説を書いていましたが、今回キルタイムコミュニケーション様に書籍化していただくことになりました。

自分の作品が単行本になるのは初めてで緊張していますが、この本に興味をもってくれた方々、ネット小説の時から応援してくれた読者作者の方々、本当ありがとうございます。イラストレーターの火愚夜様にも素敵な挿絵をいただき感無量です。

そして、本編の内容ですが、ご覧の通り全編フタナリ調教となっております。

正義の変身ヒロインがひたすら射精して淫語を言いまくりです。ハートマークも乱舞する下品を煮詰めたようなプレイのフルコースです。

特殊なエッチの連続で読者様を戸惑わせてしまったかもしれませんが、そこはお許しください。

最後に、フタナリ好きの方もそうでない方もヴァーミリオンとセルシアンの痴態を楽しんでいただければ嬉しいです。

これからも様々な調教を書いていきますので、応援していただければ幸いです。


ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！
妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！
正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱！ ヒロインのピンチ満載!!
【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月
【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月
【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売！
まるまる1本収録
変身ヒロイン
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
コミックUNREAL
アンリアル
正義のヒロイン
姦獄ファイル
あなたのキモチイイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
電子書籍版も好評発売中
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!
KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

二次元ドリームノベルズ



戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！



フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキ★ラノベ！

日常に密着したエロス。
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！



女刑事美優

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

脱調喰らい師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？





異世界でデキる妹はいかがでしょうか？

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

二次元ぷち文庫



ハルキ

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチノベル！



「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」
から書籍化！

姫騎士クラスメート！

ビギニングノベルズ

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▸最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

二次元ドリームノベルズ401

天煌聖姫ヴァーミリオン
フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン
【電子書籍版】

著　者
有機企画

装　丁
マイクロハウス

発　行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル１Ｆ
●編集部TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Yuukikikaku 2016
当ファイルは、二次元ドリームノベルズ『天煌聖姫ヴァーミリオン　フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン』
（2016年11月18日　初版発行）に基づいて作成しております。

http://ktcom.jp/

本作品のご意見、ご感想をお待ちしております

本作品のご意見、ご感想、読んでみたいお話、ジャンルなど
どしどしお書きください！　読者の皆様の声を参考にさせていただきたいと思います。
手紙・ハガキの場合は裏面に作品タイトルを明記の上、お寄せください。

◎アンケートフォーム◎ **http://ktcom.jp/goiken/**

◎手紙・ハガキの宛先◎
〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
(株)キルタイムコミュニケーション　二次元ドリームノベルズ感想係